

茨城県教育財団文化財調査報告第258集

<sup>おお</sup>大 <sup>つか</sup>塚 遺 跡 2  
<sup>き</sup>木 <sup>ど</sup>戸 遺 跡

主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内  
埋 蔵 文 化 財 調 査 報 告 書 V

平 成 18 年 3 月

茨 城 県 水 戸 土 木 事 務 所  
財 団 法 人 茨 城 県 教 育 財 団



平成16年度調査区遠景（西から）



木戸遺跡第5号住居跡出土遺物

## 序

茨城県は、保険・医療・福祉サービスや世代間交流などの機能を備えたまちづくりのモデルとして、茨城町において、やさしさのまち「桜の郷」整備事業を推進し、一般国道6号から桜の郷へのアクセス道路として主要地方道内原塩崎線道路改良工事が計画されました。その事業地内には多くの埋蔵文化財包蔵地が存在しており、大塚遺跡及び木戸遺跡もその一つであります。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県水戸土木事務所から主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内の埋蔵文化財の発掘調査について委託を受け、平成16年11月から平成17年3月まで大塚遺跡及び木戸遺跡の発掘調査を実施しました。

本書は、大塚遺跡及び木戸遺跡の調査成果を収録したもので、本書が学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県水戸土木事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、茨城町教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、感謝申し上げます。

平成18年3月

財団法人 茨城県教育財団  
理事長 稲葉節生

## 例 言

- 1 本書は、茨城県水戸土木事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成16年度に発掘調査を実施した、茨城県東茨城郡茨城町大戸3035番地の3ほかに所在する大塚遺跡<sup>オホツツ</sup>2、同町大戸2775番地の5ほかに所在する木戸遺跡<sup>キド</sup>の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。  
調 査 平成16年11月1日～平成17年3月31日  
整 理 平成17年10月1日～平成18年3月31日
- 3 発掘調査は、調査課長川井正一のもと、以下の者が担当した。  
首席調査員兼班長 荒井 保雄  
主任調査員 後藤 一成  
主任調査員 井上 琢哉  
調 査 員 小林 健太郎 平成17年1月1日～平成17年3月31日
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理第二課長大森雅之のもと、主任調査員井上琢哉、調査員小林健太郎が担当した。執筆分担は、以下の通りである。  
井上 第1章、第2章、第3章第1節、第2節、第3節2・3・4、第4章、第5章1・5・6  
小林 第3章第3節1・5・6、第5章2・3・4
- 5 本書の作成にあたり、石器・石製品の石材についてミュージアムパーク茨城県自然博物館副主任学芸員の  
小池渉氏にご指導いただいた。

## 凡 例

- 1 地区設定は、それぞれ日本平面直角座標第Ⅹ系座標に準拠した。なお、抄録には世界測地系に基づく緯度・経度を( )を付して併記した。

大塚遺跡 2はX軸=+35,400m, Y軸=+51,640mの交点, 木戸遺跡はX軸=+35,520m, Y軸=+51,480mの交点を基準点(A1a1)とした。2遺跡それぞれの基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し, さらにこの大調査区を東西・南北に各々10等分し, 4m四方の小調査区を設定した。大調査区の名称は, アルファベットと算用数字を用い, 北から南へA, B, C…、西から東へ1, 2, 3…とし, 「A1区」, 「B2区」のように呼称した。さらに小調査区は, 北から南へa, b, c…j, 西から東へ1, 2, 3…0とし, 名称は, 大調査区の名称を冠して「A1a1区」, 「B2b2区」のように呼称した。

- 2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 SI-住居跡 SB-掘立柱建物跡 SA-柵跡 SD-溝跡 SE-井戸跡 SF-道路跡  
SK-土坑 P-ピット PG-ピット群 K-攪乱  
遺物 DP-土製品 Q-石器・石製品 M-金属製品 TP-拓本記録土器  
土層 K-攪乱

- 3 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。

- 4 遺構及び遺物実測図の掲載方法については次のとおりである。

- (1) 遺構全体図は400分の1, 各遺構の実測図は60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。
- (2) 遺物は3分の1の縮尺で掲載した。
- (3) 遺構・遺物実測図中の表示は, 次のとおりである。

■ 焼土, 火床面, 施軸・赤彩

■ 炉

■ 竈部材, 粘土, 炭化材, 炭化物, 黒色処理

■ 柱痕, 煤, 油煙

● 土器 ○ 土製品 □ 石器・石製品 △ 金属器・金属製品

- 5 遺物観察表・遺構一覧表の表記については次のとおりである。

- (1) 現存値は( )で, 推定値は[ ]を付して示した。計測値の単位はm, cm, gで示した。
- (2) 遺物観察表の備考欄は, 残存率, 写真図版番号等, その他必要と思われる事項を記した。

- 6 「主軸」は, 炉又は竈と出入口施設を結ぶ軸線あるいは長軸(径)を通る軸線を主軸と見なした。「主軸・長軸(径)方向」は, 主軸が座標北からみて, どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した(例 N-10°-E)。なお, 推定値は[ ]を付して示した。

## 抄 録

ふりがな	おつかいせき きどいせき							
書名	大塚遺跡 木戸遺跡							
副書名	主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書							
巻次	Ⅴ							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第258集							
著者名	井上 琢哉 小林 健太郎							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL029 (225) 6587							
発行年月日	2006 (平成18) 年3月24日							
ふりがな	ふりがな所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
大塚遺跡	茨城県東茨城郡茨城町大戸3035番地の3ほか	08302 - 107	36度 19分 00秒 (36度 19分 11秒)	140度 24分 37秒 (140度 24分 25秒)	23m ~ 30m	20041101 ~ 20050331	7,663㎡	主要地方道内原塩崎線道路改良工事に伴う事前調査
木戸遺跡	茨城県東茨城郡茨城町大戸2775番地の5ほか	08302 - 184	36度 19分 06秒 (36度 19分 17秒)	140度 24分 27秒 (140度 24分 16秒)	28m ~ 29m		3,326㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大塚遺跡	集落跡	弥生時代	竪穴住居跡		1軒 弥生土器			
		弥生時代～古墳時代	竪穴住居跡		5軒 弥生土器, 土師器, 土製品(球状土錘)			
		古墳時代	竪穴住居跡		8軒 土師器, 土製品(球状土錘), 石器(砥石・磨石・砥石), 鉄器・鉄製品(刀子・釘)			
		奈良・平安時代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 井戸跡 欄跡 土坑		32軒 10棟 1基 1列 5基		土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 土製品(支脚・紡錘車), 石器・石製品(磨石・砥石・鉈尾), 鉄器・鉄製品(鎌・刀子・鎌・釘・鏝), 銅製品(丸鋸), 鉄滓	
	その他	縄文時代	陥し穴		2基			
		時期不明	竪穴住居跡 溝跡 井戸跡 土坑 ピット群		1軒 5条 1基 64基 9か所		縄文土器, 弥生土器, 土師器, 須恵器, 土師質土器(内耳鍋), 灰釉陶器, 石器(砥石), 鉄器(鎌)	
	木戸遺跡	集落跡	弥生時代	竪穴住居跡		2軒 弥生土器		
奈良・平安時代			竪穴住居跡 溝跡 土坑		3軒 1条 7基		土師器, 須恵器, 土製品(支脚・紡錘車・球状土錘), 石器(砥石), 鉄器・鉄製品(紡錘車・刀子・鎌・釘)	
その他			時期不明	道路跡 溝跡 土坑 ピット群		1条 5条 10基 1か所		土師器, 須恵器, 陶器片
要約		縄文時代から平安時代にかけての複合遺跡で、奈良・平安時代の集落が中心である。様々な産地の土器や墨書土器が出土していることから、物資や文化の交流が盛んに行われた地域と考えられる。						

# 目 次

序		
例	言	
凡	例	
抄	録	
目	次	
第1章	調査経緯	1
第1節	調査に至る経過	1
第2節	調査経過	1
第2章	位置と環境	3
第1節	地理的環境	3
第2節	歴史的環境	3
第3章	大塚遺跡	7
第1節	遺跡の概要	7
第2節	基本層序	7
第3節	遺構と遺物	8
1	縄文時代の遺構と遺物	8
	陥し穴	8
2	弥生時代の遺構と遺物	10
	竪穴住居跡	10
3	弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の遺構と遺物	12
	竪穴住居跡	12
4	古墳時代の遺構と遺物	24
	竪穴住居跡	24
5	奈良・平安時代の遺構と遺物	39
(1)	竪穴住居跡	39
(2)	掘立柱建物跡	121
(3)	井戸跡	134
(4)	溝跡	136
(5)	土坑	136
6	その他の遺構と遺物	139
(1)	住居跡	139
(2)	溝跡	139
(3)	井戸跡	142
(4)	土坑	143
(5)	ピット群	152
(6)	遺構外出土遺物	160
第4章	木戸遺跡	163
第1節	遺跡の概要	163
第2節	基本層序	163
第3節	遺構と遺物	164
1	弥生時代の遺構と遺物	164
	竪穴住居跡	164
2	奈良・平安時代の遺構と遺物	168
(1)	竪穴住居跡	168
(2)	溝跡	180
(3)	土坑	182
3	その他の遺構と遺物	186
(1)	道路跡	186
(2)	溝跡	186
(3)	土坑	189
(4)	ピット群	191
(5)	遺構外出土遺物	192
第5章	まとめ	193
	写真図版	

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経緯

茨城県水戸土木事務所は、茨城県東茨城郡茨城町大戸地区において、一般国道6号から「桜の郷」へのアクセス道路として主要地方道内原塩崎線の道路改良工事業を進めている。

平成8年9月17日、茨城県水戸土木事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、主要地方道内原塩崎線道路改良工事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成12年10月10日に現地踏査を、平成15年1月20～22日、27日・28日に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。

平成15年2月20日、茨城県教育委員会教育長は茨城県水戸土木事務所長あてに、事業地内に大塚遺跡及び木戸遺跡が所在する旨、回答した。なお、木戸遺跡については、茨城県教育委員会は平成15年10月30日にも試掘調査を実施し、平成15年11月12日、茨城県教育委員会教育長は茨城県水戸土木事務所長あてに、遺跡範囲が西側に広がる旨、回答した。

平成15年11月27日、茨城県水戸土木事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、平成15年12月4日、茨城県水戸土木事務所長に対して、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成16年1月16日、茨城県水戸土木事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、主要地方道内原塩崎線道路改良工事業地内に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議した。平成16年1月30日、茨城県教育委員会教育長は茨城県水戸土木事務所長に対して、大塚遺跡及び木戸遺跡についての発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

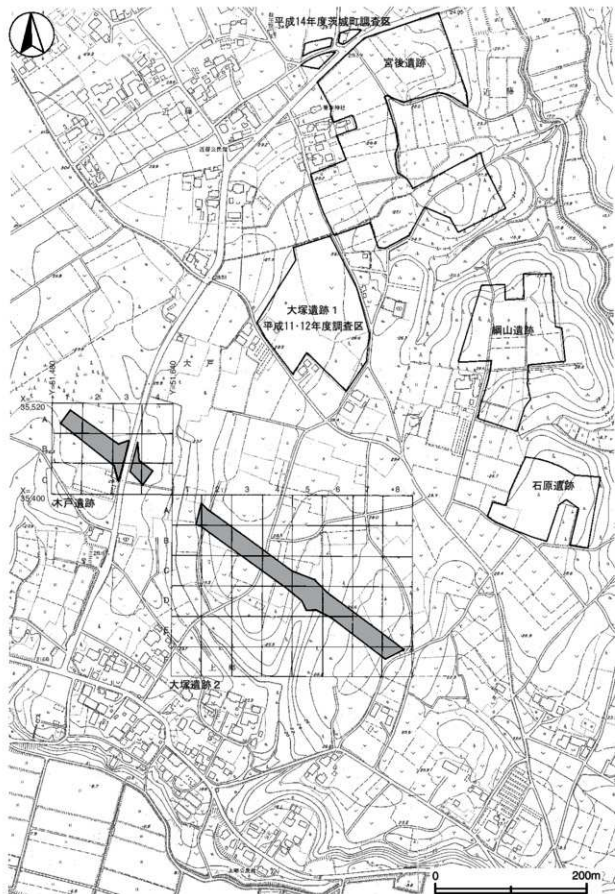
財団法人茨城県教育財団は、茨城県水戸土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成16年11月1日から平成17年3月31日まで大塚遺跡及び木戸遺跡の発掘調査をすることとなった。

## 第2節 調査経過

大塚遺跡・木戸遺跡の調査は、平成16年11月1日から平成17年3月31日まで実施した。以下、調査の経緯については概要を表で記載する。

工程	期間	11月	12月	1月	2月	3月
調査準備 表土除去 遺構確認						
遺構調査						
遺物洗浄 注記作業 写真整理						
補足調査 取						





第1図 大塚遺跡2・水戸遺跡調査区設定図

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

大塚遺跡2は茨城県東茨城郡茨城町大戸3035番地の3ほか、木戸遺跡は茨城県東茨城郡茨城町大戸2775番地の5ほかそれぞれ所在している。

茨城町は茨城県のほぼ中央部に位置している。町域の中央部を西から東に向かって涸沼川が流れ、町域の東に広がる涸沼に流入している。涸沼川の北岸には標高25～30mの東茨城台地が、南岸には鹿島台地へと続く標高25～30mほどの台地が、それぞれ広がっている。東茨城台地は、涸沼川の支流で北西から南東に向かって流れる涸沼前川とその支流である多くの小河川によって開析されており、谷津や低地が複雑に入り組んでいる。大塚遺跡及び木戸遺跡は、この東茨城台地の南部に位置している。

東茨城台地を形成している最も古い地層は、水戸層と呼ばれる新生代第三紀の地層である。水戸層は化石を含み、岩質は泥岩である。水戸層の上には、粘土・砂からなり貝化石を含む見和層、礫からなる上市層、灰白色の常総粘土層、関東ローム層の順にほぼ水平に重なっている<sup>1)</sup>。

大塚遺跡2及び木戸遺跡は、茨城町北西部の大戸地区に位置し、東茨城台地の南側、涸沼前川とその支流である小橋川によって開析された富士谷津と呼ばれる谷津に挟まれた、標高23～30mの南東に延びる舌状台地上に立地している。両遺跡の現況は、ともに畑地及び山林である。

### 第2節 歴史的環境

遺跡の分布調査や発掘調査により、涸沼川及び涸沼前川とその支流を臨む台地の縁辺部には、多くの遺跡の存在が確認されている。これは、涸沼や涸沼川流域を利用した水運の便が良かったこと、あるいは、魚介類などの食糧が確保しやすかったことが理由として考えられる。また、複数の時代の遺構・遺物が確認されている遺跡が多いことから、この地域は、古代から近代までの長い期間にわたって人々の生活の舞台となってきたことがうかがえる。

当遺跡が立地している涸沼前川と小橋川に挟まれた台地上には、宮後遺跡<3>、石原遺跡<4>、綱山遺跡<5>が所在している。これら3遺跡と大塚遺跡1は、平成10年度から12年度にかけて発掘調査が行われている。その調査結果から、これらの遺跡は深い関連性を持っていると推測することができる様相を呈している（桜の郷遺跡群<sup>2)</sup>）。ここでは、当遺跡が立地している涸沼前川流域の遺跡を中心に述べることにする。

縄文時代の遺跡は22か所で、早期から晩期の土器が確認されている。ほとんどの遺跡が、涸沼前川及びその支流に沿った標高29mほどの台地縁辺部に立地している。蔵作遺跡<31>では早期・後期、上の前遺跡<28>では前期から後期、シタ畑遺跡<25>、笹崎遺跡<6>では中期の土器片が出土している。シッペイ沢遺跡<24>では、竪穴住居跡の床面から、前期の土器とともにヤマトシジミ、イソシジミガイ、マガキなどの貝殻が検出されている<sup>3)</sup>。このことから、当時涸沼前川流域は現在の茨城町と水戸市の境付近まで汽水域であったことが示唆される。また、宮後遺跡では平成10・11年度の発掘調査の結果、中期中葉から後葉にかけての竪穴住居跡が104件確認され、環状集落が形成されていたことが確認されている。

弥生時代の遺跡は19か所で、出土土器などから後期と考えられる遺跡が多い。小鶴遺跡<32>では、長岡式土



第2図 大塚遺跡2・木戸遺跡周辺遺跡分布図(国土地理院「小鶴」) 1:25,000

表1 大塚遺跡・木戸遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代					
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	中近世			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	中近世
①	大塚遺跡		○	○	○	○	○	17	寺坪遺跡		○	○	○	○	
②	木戸遺跡			○	○	○	○	18	大戸神宮寺遺跡		○	○	○	○	
3	宮後遺跡	○	○	○	○	○	○	19	神宮前古墳				○		
4	石原遺跡		○	○	○	○	○	20	坪戸遺跡		○	○	○	○	
5	綱山遺跡		○	○	○	○	○	21	矢倉遺跡		○	○	○	○	
6	雲崎遺跡		○	○	○			22	平須館跡					○	
7	岡田古墳群		○	○		○	○	23	ドンドン塚古墳				○		
8	福宵宮遺跡			○	○	○	○	24	シッペイ沢遺跡		○		○		
9	近藤前遺跡		○			○	○	25	シタ畑遺跡		○		○	○	
10	八幡山遺跡		○		○	○		26	東畑遺跡		○	○	○	○	
11	李山遺跡			○		○		27	東山遺跡		○	○	○	○	
12	清峯古墳群				○			28	上の前遺跡				○	○	
13	近藤前古墳				○			29	大畑遺跡	○	○	○	○	○	
14	殿畑遺跡					○		30	大畑古墳				○		
15	羽黒山遺跡	○	○	○	○	○	○	31	蔵作遺跡		○				
16	大戸下郷遺跡		○	○	○	○	○	32	小鶴遺跡		○				

器が出土しており、後期前半に比定されている<sup>1)</sup>。後期後半の遺跡としては、<sup>矢倉遺跡</sup>(21)、<sup>大畑遺跡</sup>(29)、<sup>大戸下郷遺跡</sup>(16)が挙げられる。当遺跡と同じ台地上にある石原遺跡、宮後遺跡、綱山遺跡及び大塚遺跡1でも、後期後半の土器が出土している。これらの遺跡からは、十玉台式土器に混じって樽式土器や二軒屋式土器も確認されている。このことから、酒沼前川流域を利用した水運による他地域との文化の交流が、古くから行われていたことが想定される。

古墳時代の遺跡は、26か所が確認されている。<sup>寺坪遺跡</sup>(17)では五領式期、<sup>大戸神宮寺遺跡</sup>(18)では和泉式期の土師器が出土している。古墳は、酒沼前川沿いの台地上に分布している。大畑古墳(30)、近藤前古墳(13)、神宮前古墳(19)、ドンドン塚古墳(23)では円墳が1基、清峯古墳群(12)では径10～15m、高さが1～1.5mの円墳3基が確認されている。住居跡については、<sup>坪戸遺跡</sup>(20)の平成15年度の調査で、6世紀初頭と比定される竪穴住居跡が確認されている<sup>1)</sup>。石原遺跡、宮後遺跡、綱山遺跡、大塚遺跡でも前期の住居跡が多く確認されている。大戸下郷遺跡では、後期の住居跡の比率が高くなることから、時代が新しくなるにつれて、より河川に近く標高の低い場所に集落が形成されるようになったことが考えられる。また、これらの5遺跡では、弥生土器と土師器が併存する、弥生時代から古墳時代への移行期にあたると思われる住居跡も確認されている。

奈良・平安時代の遺跡は、22か所が確認されている。当遺跡の所在する大戸地区は当時、常陸国那珂郡八部郷に属している。八部郷は現在の茨城町北部及び水戸市南部に比定されている<sup>3)</sup>。当遺跡の所在している台地上には、8世紀から9世紀にかけて継続して集落が形成され、10世紀に入ると減少する傾向が見られる。大塚遺跡1では、48棟の掘立柱建物跡が確認され、この建物跡が「口」の字状の配置又は1件の竪穴住居跡と関連して建てられていることが確認されている。検出された竪穴住居跡は61軒で、墨書土器も「南主」「南」「奥」「在」などが確認されている。宮後遺跡では、竪穴住居跡が17軒、掘立柱建物跡が63棟検出されている。墨書土器も119点出土し、「在」「南主」など大塚遺跡出土の墨書土器と共通の文字のほか、「日奉部」「益」「家」なども確認されている。また、石原遺跡では竪穴住居跡が48軒と「日奉部」と書かれた墨書土器が、綱山遺跡では、竪穴住居跡62軒、掘立柱建物跡40棟、「在」「厨」「矢川部志得」などの墨書土器が確認されている。さら

に、各遺跡からは、灰陶器や腰帯具、硯なども出土している。当遺跡と同じ台地上の、近藤前遺跡<9>、八幡山遺跡<10>、李山遺跡<11>、殿畑遺跡<14>の各遺跡からも、土師器や須恵器が出土していることから、これらの遺跡周辺にもこの時代の集落が形成されていたと推測される。また、小橋川を挟んだ対岸の羽黒山遺跡<15>では倉庫群と考えられる掘立柱建物群<sup>10)</sup>が、涸沼前川を挟んだ対岸に立地する東郷遺跡<26>では多数の土師器や須恵器の坏などが、東山遺跡<27>では、「南寺」の墨書土器がそれぞれ検出されている。

このころ、涸沼前川上流の笠間市(旧友部町)小原付近と下流の茨城町奥谷付近及び涸沼川下流の水戸市平戸町付近には河川港があり、水運の重要拠点になっていたと考えられている。平戸町には平津の駅があったとされており、小原から茨城町奥谷の河川港を経て平津の駅までの水運は活発であったと考えられる。このことは、8世紀初頭に小原付近に茨城郡衙が置かれた<sup>11)</sup> ことから想定できる。当遺跡の所在する大戸地区は、茨城郡嶋田郷に属していた奥谷の河川港に近い位置にあることから、那珂郡あるいは八部郷の重要な場所であったと考えられる。

中世に入ると大戸地区は、吉田社の神郡として10世紀頃に那珂郡から分離した吉田郡に属する<sup>12)</sup>。当初、吉田郷は常陸平氏一族の吉田氏によって統治されていたが、その後、大掾氏、江戸氏、佐竹氏と統治者が変わる。この時期の遺跡は、涸沼前川沿いには少なく8か所が確認されているのみである。平須館跡<22>は、常陸大掾氏一族の谷田部氏の居館と考えられており、戦国時代の遺跡である<sup>13)</sup>。また、大戸下郷遺跡では井戸跡1基、岡田古墳群<7>では地下式坑4基と溝跡2条、稲荷宮遺跡<8>では地下式坑1基<sup>14)</sup>が、これまでの調査でそれぞれ確認されている。

慶長7(1602)年5月の佐竹氏の秋田転封後、大戸地区は徳川家康の庶子である武田信吉や徳川頼宣の藩領を経て、慶長14(1609)年以後、大戸地区は水戸藩領となり、幕末まで続いた。

※文中の〈 〉内の番号は、第2図及び周辺遺跡一覧表の該当番号と同じである。

註

1) 藤原紀夫『地学のガイド』コロナ社 1986年11月

2) 川又諒明・野田貞直・吹野宣美夫・浅野和久『宮後遺跡Ⅰ やさしさのまち「板」の郷』整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅰ『茨城県教育財団文化財調査報告』第188集 2002年3月

戸田哲也・吉田浩明・麻生剛司『宮後遺跡 発掘調査報告書 14回補遺公開1号-51宮後遺跡発掘調査』茨城県教育委員会・玉川文化財研究所 2003年3月  
和田清典・吹野宣美夫・浅野和久・奥野克一郎・駒澤悦郎『宮後遺跡Ⅱ やさしさのまち「板」の郷』整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ『茨城県教育財団文化財調査報告』第240集 2005年3月

川又諒明・浅野和久『宮後遺跡Ⅲ やさしさのまち「板」の郷』整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅲ『茨城県教育財団文化財調査報告』第241集 2005年3月  
村上和彦『やさしさのまち「板」の郷』整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅳ 石塚遺跡『茨城県教育財団文化財調査報告』第363集 2009年3月

田中幸夫・奥野克一郎『やさしさのまち「板」の郷』整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅴ 綱山遺跡『茨城県教育財団文化財調査報告』第243集 2005年3月  
長谷田聡・田中幸夫・小野克敏『大塚遺跡Ⅰ やさしさのまち「板」の郷』整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅵ『茨城県教育財団文化財調査報告』第242集 2005年3月

3) 茨城町史編さん委員会『茨城町史 通史編』茨城町 1995年2月

4) 整済和彦『一般国道6号改築工事地内埋蔵文化財調査報告書 奥谷遺跡・小橋遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告Ⅱ第50集 1989年3月

5) 飯島一生『北関東自動車道(友部-水戸)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 矢倉遺跡・後口原遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告Ⅱ第135集 1986年3月

6) 長谷田聡『北関東自動車道(友部-水戸)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 大作遺跡・大畑遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告Ⅱ第136集 1986年3月

7) 近藤利重『主要地方道内原塩崎道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 大戸下郷遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告Ⅱ第216集 2004年3月

8) 藤引英樹『主要地方道内原塩崎道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 坪戸遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告Ⅱ第237集 2005年3月

9) 茨城町史編さん委員会『茨城町史 地誌編』茨城町 1993年3月

10) 財団法人茨城県教育財団『年報20<平成15年度>』2004年10月

11) 友部町史編さん委員会『友部町史』友部町 1990年3月

12) 茨城県史編纂委員会『茨城県史-中世編』茨城県 1986年3月

13) 水戸市教育委員会『水戸市埋蔵文化財分布調査報告書 平成10年度版』水戸市 1996年3月

14) 藤引英樹『主要地方道内原塩崎道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 岡田古墳群・稲荷宮遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告Ⅲ第238集 2005年3月

## 第3章 大塚遺跡

### 第1節 遺跡の概要

大塚遺跡は、平成11・12年度の一次調査で奈良・平安時代を中心とした、縄文時代から近世までの複合遺跡であることが確認されている。一次調査区から南側に約200mの場所に位置している今回の調査区でも、奈良・平安時代を中心とした複合遺跡であることが確認できた。

検出された遺構は、縄文時代の陥し穴2基、弥生時代の竪穴住居跡1軒、弥生時代後期後半から古墳時代前期前葉の竪穴住居跡5軒、古墳時代の竪穴住居跡8軒、奈良・平安時代の竪穴住居跡32軒、掘立柱建物跡10棟、井戸跡1基、欄柵1列、土坑5基のほか、時期不明の溝跡5条、土坑64基、ピット群9か所である。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に37箱出土している。主な出土遺物は、縄文土器（深鉢）、弥生土器（壺）、土師器（坏・椀・埴・器台・高台付坏・高坏・壺・甕・甔）、須恵器（坏・高台付坏・蓋・盤・高盤・壺・甕・円面硯）、陶器片（碗カ）、土製品（球状土錘・支脚・紡錘車）、石器（敲石・磨石・砥石）、石製品（鈍尾）、鉄器・鉄製品（鏃・鎌・刀子・釘・鋸）、鉄滓などである。

### 第2節 基本層序

調査区北部のB319区にテストピットを設定し、基本土層の観察を行った。テストピットの地表面の標高は

29.3mで、地表から約2.4m掘り下げた。土層は13層に分層された。土層の観察結果は、以下のとおりである。

第1層は、ローム粒子を中量含む黒褐色の耕作土で、粘性・締まりともに弱い。層厚は50cm前後である。

第2層は、ロームブロックを中量含む褐色のローム層で、耕作の影響を受けている。粘性は普通で締まりは強い。層厚は15～30cmである。

第3層は、黒色粒子を微量含む褐色のローム層で、粘性は普通で締まりは強い。層厚は10～25cmである。

第4層は、鹿沼バミスを少量、黒色粒子を微量含む褐色のローム層で、粘性は普通で締まりは強い。層厚は14～50cmである。

第5層は、鹿沼バミスを中量含むにぶい褐色のローム層で、鹿沼層純層への漸移層である。粘性・締まりともに強い。層厚は10～35cmである。

第6層は、明黄褐色の鹿沼層純層で、粘性は弱く締まりは強い。層厚は20～40cmである。

第7層は、鹿沼バミスを微量含む褐色のローム層で、粘性は強く締まりは普通である。層厚は15～30cmである。

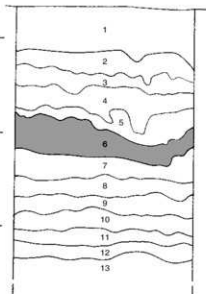
第8層は、黒色粒子を少量含む褐色のローム層で、粘性・締まりともに強い。層厚は15～25cmである。

30.0m —

29.0m —

28.0m —

27.0m —



第3図 基本土層図

第9層は、黒色粒子を微量含む褐色のローム層で、粘性・締まりはともに強い。層厚は10～25cmである。

第10層は、黒色粒子を微量含む褐色のローム層で、粘性は強く締まりは普通である。層厚は15～25cmである。

第11層は、赤色粒子を中量、黒色粒子を微量含む褐色のローム層で、鉄分を含み、粘性・締まりはともに強い。層厚は10～20cmである。

第12層は、粘土粒子を中量、赤色粒子・黒色粒子を少量含む褐色のローム層で、粘性・締まりともに特に強い。層厚は15cm前後である。常総粘土層の漸移層と考えられる。

第13層は、鉄分を含んだ灰黄褐色の粘土層で、常総粘土層と考えられる。未掘のため層厚は不明である。

なお、遺構の多くは第2層上面で確認され、第2～4層にかけて掘り込まれている。

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 縄文時代の遺構と遺物

陥し穴2基が確認された。以下、遺構と遺物について記述する。

##### 第14号陥し穴（第4図）

**位置** 調査区北部のC3b6区で、平坦な台地上に位置している。

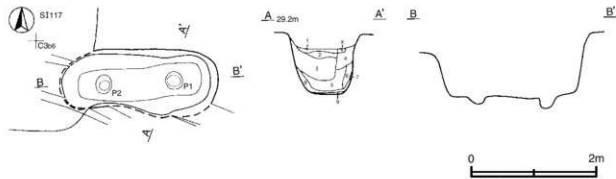
**重複関係** 第117号住居に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸2.5m、短軸1.0mほどの隅丸長方形で、長軸方向はN-87°-Eである。深さは100cmで、壁は外傾して立ち上がっている。底面は平坦で、深さ15cmほどの逆茂木跡と考えられるビット2か所が確認されている。

**覆土** 9層に分層される。ロームブロックが多く含まれ、不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

##### 土層解説

1 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	5 暗褐色	ロームブロック少量、鹿沼パミス微量
2 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・鹿沼パミス微量	6 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 黒暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	7 褐色	ロームブロック多量、炭化粒子微量
4 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・鹿沼パミス微量	8 褐色	ロームブロック中量、炭化粒子・鹿沼パミス微量
		9 黒褐色	ローム粒子・鹿沼パミス微量



第4図 第14号陥し穴実測図

**遺物出土状況** 重複関係により混入した土師器片1点(坏), 須恵器片3点(坏)が出土している。

**所見** 時期は, 縄文時代であること以外不明である。

#### 第15号陥し穴 (第5図)

**位置** 調査区南部のE 6 h0区で, 平坦な台地上に位置している。

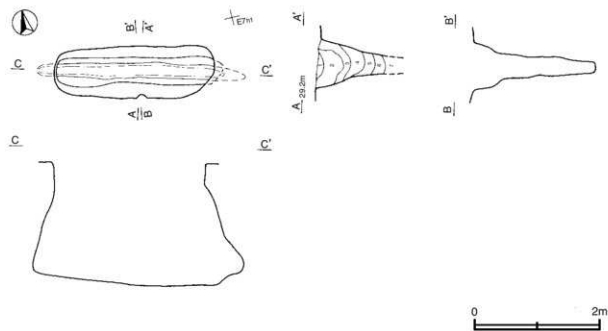
**規模と形状** 長軸2.5m, 短軸0.8mほどの隅丸長方形で, 長軸方向はN-75°-Wである。深さは196cmで, 東西壁はオーバーハングしている。底面は皿状である。

**覆土** 7層に分層される。各層にロームブロックが多く含まれていることから, 人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

- |       |                   |         |                    |
|-------|-------------------|---------|--------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量      | 5 褐色    | ロームブロック少量          |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 6 明褐色   | ロームブロック中量          |
| 3 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量      | 7 にぶい褐色 | ロームブロック中量, 鹿沼パミス微量 |
| 4 褐色  | ロームブロック中量         |         |                    |

**所見** 時期は, 縄文時代であること以外不明である。



第5図 第15号陥し穴実測図

表2 縄文時代陥し穴一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	覆土	主な出土遺物	備考(時期)	重複関係(旧→新)
				長径(■)×短径(■)(m)	深さ(m)					
14	C 3 b6	N-87°-E	[隅丸長方形]	[2.5]×[1.0]	100	平坦	人為	-	縄文時代	本跡→SI117
15	E 6 h0	N-75°-W	隅丸長方形	2.5×0.8	196	皿状	人為	-	縄文時代	



## 2 弥生時代の遺構と遺物

竪穴住居跡1軒が確認された。以下、確認された遺構と遺物について記述する。

### 第115号住居跡（第6・7図）

**位置** 調査区南部のE79区で、平坦な台地上に位置している。

**規模と形状** 長軸3.25m、短軸3.17mの隅丸方形で、主軸方向はN-15°-Eである。壁高は35~49cmで、外傾して立ち上がっている。

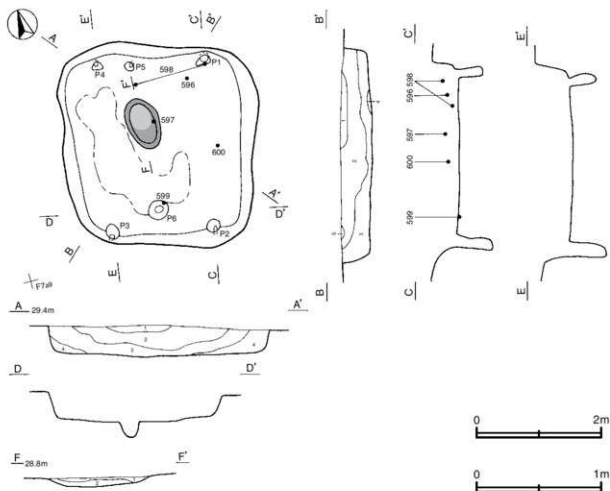
**床** はほぼ平坦で、南部から西部にかけて踏み固められている。

**炉** 中央部やや北寄りに位置し、長径85cm、短径53cmの楕円形を呈し、床面を8cm掘りくぼめた地床炉である。炉床は中央部から北側にかけて火熱を受け、赤変硬化している。

#### 炉土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量 2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量

**ピット** 6か所。P1~P4は深さ44~60cmで、位置と形状から主柱穴と考えられる。P5は深さ30cmで、P1とP4の間に位置し、形状から柱穴と推測される。P6は深さ25cmで、炉と向かい合う位置にあり、出入り口施設に伴うピットと考えられる。



第6図 第115号住居跡実測図

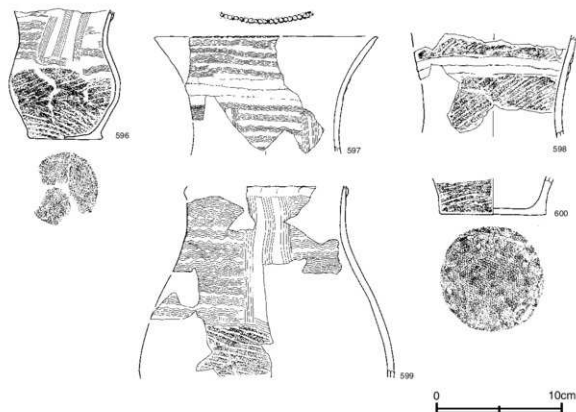
覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示していることから自然堆積と考えられる。

## 土層解説

- |       |                       |       |                  |
|-------|-----------------------|-------|------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・炭化物微量         | 5 黒褐色 | 炭化粒子中量、ロームブロック微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量  |       |                  |

遺物出土状況 弥生土器片257点（壺類，高坏），粘土塊3点のほか，混入と考えられる須恵器片1点（甕類），鉄製品2点（不明）が出土している。599は南部の床面から斜位で出土している。596～598・600は中央部から北部にかけての覆土中層からの出土であり，住居廃絶後の埋没途中に，住居跡の北側から流れ込み又は投棄されたものと考えられる。

所見 時期は，出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第7図 第115号住居跡出土遺物実測図

第115号住居跡出土遺物観察表（第7図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
596	弥生土器	壺	—	(10.4)	5.8	石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	胴部、上位に軽い押圧のある隆帯 甕底状工具(6本)による環区画(3分層)内に充塞状状況 胴部、附加金一種焼文による羽状焼成 底面を注意	中層	70%
597	弥生土器	壺	[17.6]	(9.5)	—	長石・雲母	灰褐色	普通	口唇部、焼成工具による弱み 口唇部輪状工具(5本)による環状文 胴部、上位に軽い押圧のある3本の隆帯 輪状工具による環区画(4分層)内に充塞状状況	中層	10%
598	弥生土器	壺	—	(8.2)	—	長石・石英	にぶい橙	普通	胴部、上位に軽い押圧のある3本の隆帯 附加金一種焼文による焼文、羽状焼成	中層	5%
599	弥生土器	壺	—	(15.4)	—	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	胴部、上位に軽い押圧のある隆帯 輪状工具(5本)による環区画(4区画)内に充塞状状況 胴部、附加金二種焼文による焼文	床面	20%
600	弥生土器	壺	—	(2.9)	8.5	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい褐色	普通	胴部、附加金二種焼文による羽状焼成 底部を注意	中層	10%

### 3 弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の遺構と遺物

竪穴住居跡5軒が確認された。以下、確認された遺構と遺物について記述する。

#### 第110号住居跡（第8・9図）

**位置** 調査区南部のE7d3区で、平坦な台地上に位置している。

**規模と形状** 長軸4.62m、短軸4.44mの隅丸方形で、主軸方向はN-32°-Eである。壁高は25~34cmで、外傾して立ち上がっている。

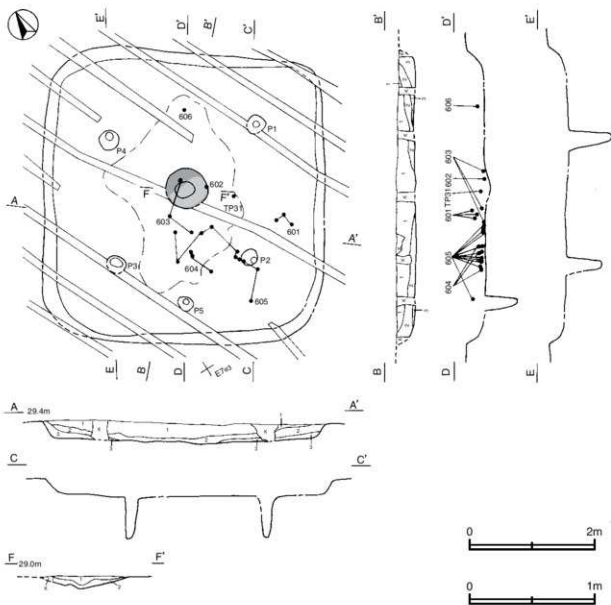
**床** ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

**炉** ほぼ中央部に位置し、径70cmほどの円形を呈し、床面を10cm掘りくぼめた地床炉である。炉床は中央部から南部にかけて火熱を受け、赤変硬化している。

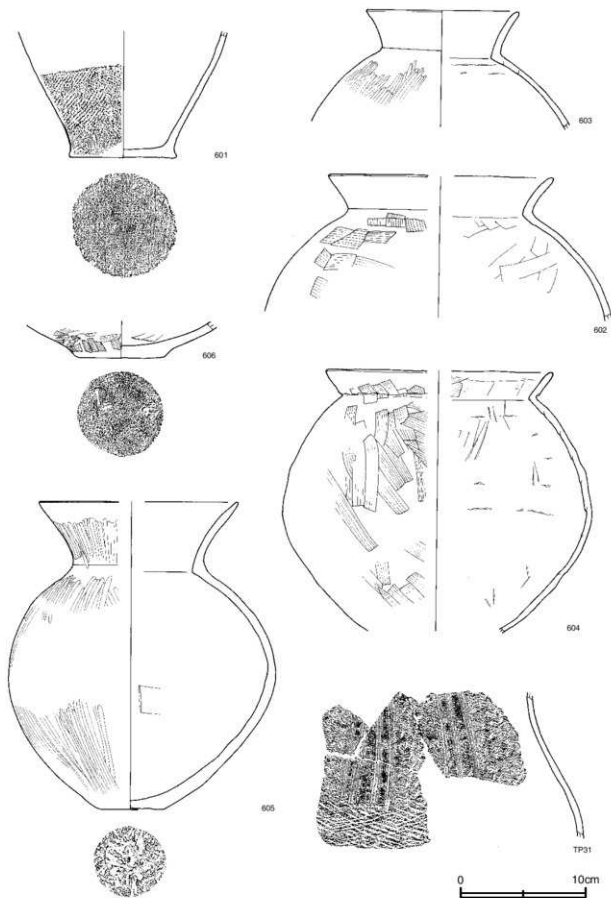
#### 炉土層解説

1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量

2 褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量



第8図 第110号住居跡実測図



第9図 第110号住居跡出土遺物実測図

ピット 5か所。P1～P4は深さ57～70cmで、位置と形状から主柱穴と考えられる。P5は深さ52cmで、炉と向かい合う位置にあることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を呈していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量 3 褐色 ローム粒子・炭化粒子微量  
2 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片109点（壺類）、土師器片509点（坏2、甕類507）、石器2点（敲石、磨石）のほか、混入と考えられる須恵器片4点（坏3、甕1）、陶器片1点、鉄製品1点（不明）が出土している。603・604は床面から出土した破片、605は覆土中層から床面に掛けて出土した破片が接合したものである。TP31は床面から出土している。ほとんどの遺物は破片で、広範囲に散らばっている状況から、住居の廃絶時に投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭と考えられる。

第110号住居跡出土遺物観察表（第9図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
601	弥生土器	壺	—	(10.1)	8.5	長石・石英	にぶい橙	普通	胴部、縄文による縞文・羽状溝底キ 底部布目織	覆土中層	15%
602	土師器	甕	[17.6]	(11.3)	—	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口辺部織子デ 体部外面刷毛目調整 内面ヘラナデ	床面	15%
603	土師器	甕	11.9	(9.2)	—	長石・石英	明赤褐色	普通	口縁部内外面織子デ 体部外面ヘラナデ 内面ナデ	床面	15%
604	土師器	甕	[17.8]	(20.8)	—	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内外面刷毛目調整織子デ 体部外面刷毛目調整 内面ヘラナデ 胎底み丸	床面	35%
605	土師器	甕	[15.4]	24.6	5.5	長石・雲母	橙	普通	口辺部外面ヘラナデ 内面織子デ 体部外面刷毛目調整ヘラナデ 内面ヘラナデ	中層～床面	60% PL14
606	土師器	甕	—	(3.0)	6.9	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	体部外面刷毛目調整 内面ヘラナデ 底部多方向織子デ	覆土中層	10%
TP31	弥生土器	壺	—	(11.6)	—	長石・雲母	にぶい橙	普通	胴部、刷毛状工具（5本）による縦区画内に老朽痕状文 胴部、附加糸一種縄文による羽状溝底	床面	5%

第111号住居跡（第10・11図）

位置 調査区南部のE7g3区で、平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長軸4.80m、短軸3.84mの隅丸長方形で、主軸方向はN-16°-Eである。壁高は16～29cmで、外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で、中央部及びP5の北側が踏み固められている。

炉 はほぼ中央部に位置し、長径78cm、短径55cmの楕円形で、床面を15cm掘りくぼめた地床炉である。炉床は、中央部が火熱を受け赤変硬化している。

土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量 2 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量

ピット 11か所。P1は深さ70cm、P2～P4は深さ40～42cmで、位置と形状から主柱穴と考えられる。P5は深さ36cmで、炉と向かい合う位置にあることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。P6～P11は深さ13～41cmで、壁に沿うように検出されていることから壁柱穴の可能性が考えられる。

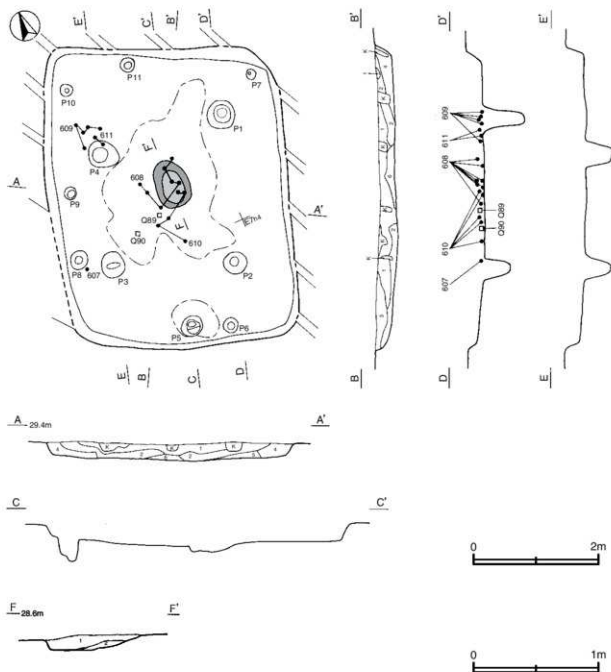
覆土 6層に分層される。不規則な堆積状況を示していることから人為堆積と考えられる。

## 土層解説

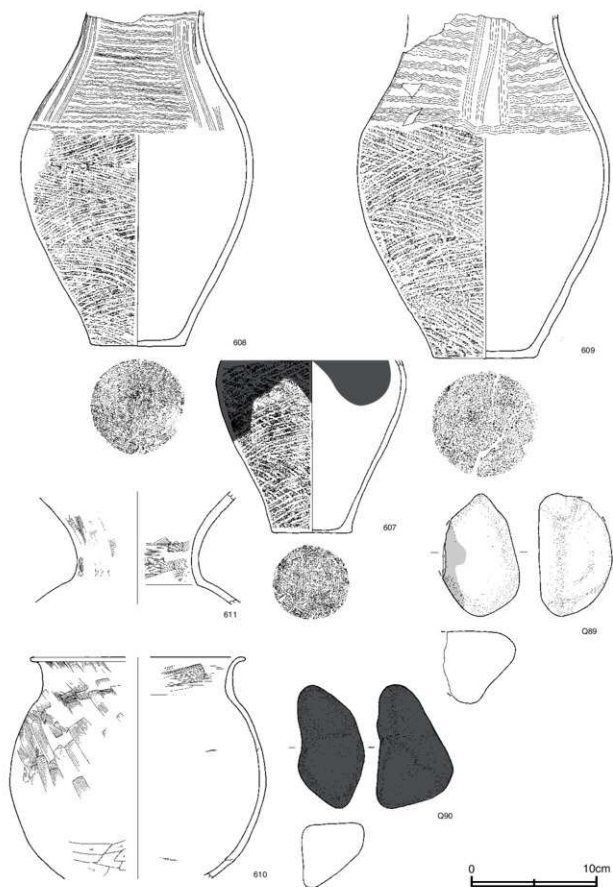
- |        |                     |       |                       |
|--------|---------------------|-------|-----------------------|
| 1 黒色   | 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 4 褐色  | ロームブロック・炭化粒子微量        |
| 2 黒褐色  | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量   | 5 暗褐色 | ローム粒子微量               |
| 3 極暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量    | 6 黒色  | 焼土ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量 |

**遺物出土状況** 弥生土器片212点(壺類), 土師器片75点(甕類), 石器5点(炉石2, 不明3)のほか, 混入と考えられる須恵器片5点(坏3, 甕2), 陶器片1点(播鉢)が出土している。607は南西コーナー部の床面から逆位で出土している。608-611は, 床面から出土した破片が接合したものである。Q89・Q90は中央部の床面から出土し, 火熱による赤変部や煤の付着があることから炉石と考えられる。中央部を中心に遺物の破片が床面に散らばっている状況から, 住居の廃絶時に投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は, 出土土器から弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭と考えられる。



第10図 第111号住居跡実測図



第11图 第111号住居跡出土遺物実測図

第111号住居跡出土遺物観察表 (第11図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
607	弥生土器	壺	—	(13.8)	6.4	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	胴部、下方輪郭工具による流状文で区画。胴部、附加糸一種織文による羽状構成。底部布目肌	床面	40%
608	弥生土器	壺	—	(27.0)	7.6	長石	にぶい橙	普通	胴部、柳舟状工具(4本)による縦区画(4分目)内に光線流状文。胴部、附加糸二種織文による羽状構成。底部布目肌	床面	60% PL13
609	弥生土器	壺	—	(27.6)	8.5	長石・石英	にぶい黄橙	普通	胴部、柳舟状工具(4本)による縦区画(4分目)内に光線流状文。胴部、附加糸二種織文による羽状構成。底部布目肌	床面	80% PL13
610	土師器	甕	[16.8]	[17.8]	—	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	口縁部・体部外面刷毛目調整。体部外面下伏へ少張り	床面	20%
611	土師器	甕	—	(9.1)	—	長石・石英	橙	普通	口辺部内外面刷毛目調整後ナデ	床面	5%

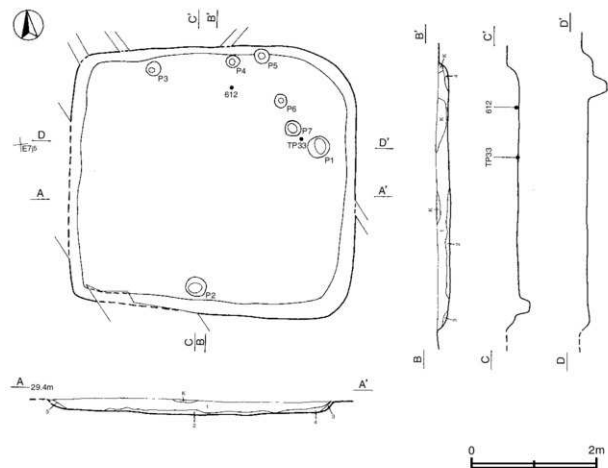
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q89	炉石	9.8	(6.1)	5.8	(430.0)	砂岩	被熱赤変 砥石からの転用か	床面	
Q90	炉石	9.8	5.4	5.2	377.0	砂岩	羅付着 砥石からの転用か	床面	

第112号住居跡 (第12・13図)

位置 調査区南部のE7J5区で、平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長軸4.49m、短軸4.24mの隅丸方形で、主軸方向はN-79°-Wである。壁高は12~18cmで、外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦である。



第12図 第112号住居跡実測図



ピット 7か所。P1・P2は深さ20cmで、位置と形状から柱穴と考えられる。P3～P7は深さ11～22cmで、性格は不明である。

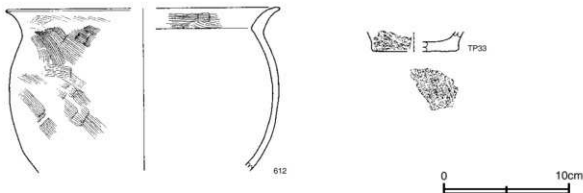
覆土 4層に分層される。不規則な堆積状況を示していることから人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量  
 2 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量  
 3 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量  
 4 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片16点(壺類)、土師器片30点(甕類)のほか、混入と考えられる須恵器片1点(坏)、陶器片1点が出土している。612は床面と覆土下層から出土した破片が接合したものである。TP33は床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭と考えられる。



第13図 第112号住居跡出土遺物実測図

第112号住居跡出土遺物観察表(第13図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
612	土師器	甕	[21.4]	(13.0)	—	長石・石英	明赤褐	普通	口辺部内外面・体部外面刷毛目調整	下層～床面	5%
TP33	弥生土器	壺	—	(1.6)	[6.8]	炭石・石英・雲母	にぶい橙	普通	底部布目痕	床面	5%

第113号住居跡(第14～17図)

位置 調査区南部のF7d8区で、平坦な台地上に位置している。

規模と形状 南側が調査区域外に延びているため、長軸5.61m、短軸5.23mが確認され、隅丸方形の形状と推測される。主軸方向はN-24°-Eである。壁高は28～38cmで、外傾して立ち上がっている。

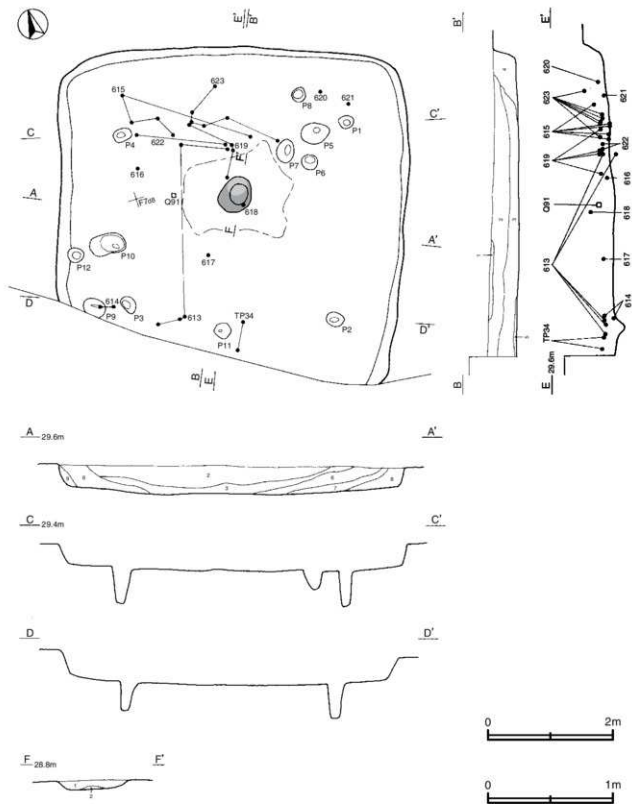
床 ほほ平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 ほほ中央部に位置し、長径58cm、短径52cmの楕円形を呈し、床面を15cm掘りくぼめた地床炉である。炉床は、中央部から北部にかけて火熱を受け赤変硬化している。

土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック・炭化物少量、ロームブロック微量  
 2 暗赤褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量

ピット 12か所。P1～P4は深さ47～57cmで、位置と形状から主柱穴と考えられる。P11は深さ23cmで、炉と向かい合う位置にあることから、出入口施設に伴うピットの可能性がある。P5～P10・P12は深さ17～72cmで、性格は不明である。



第14図 第113号住居跡実測図

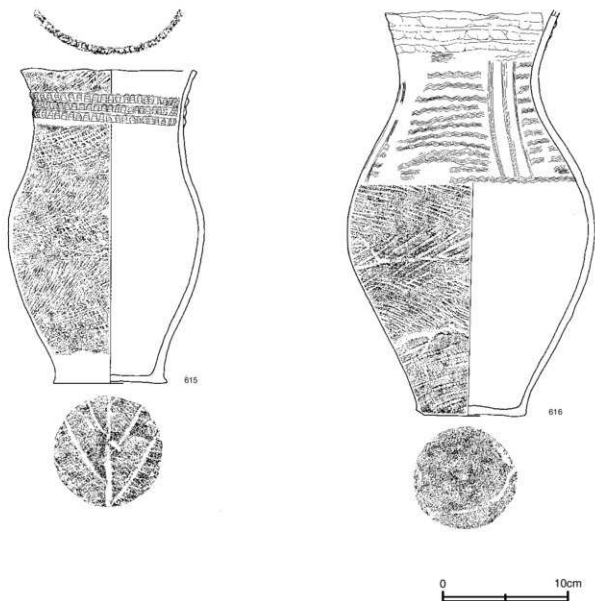
**覆土** 9層に分層される。レンズ状の堆積状況を示していることから自然堆積と考えられる。

**土層解題**

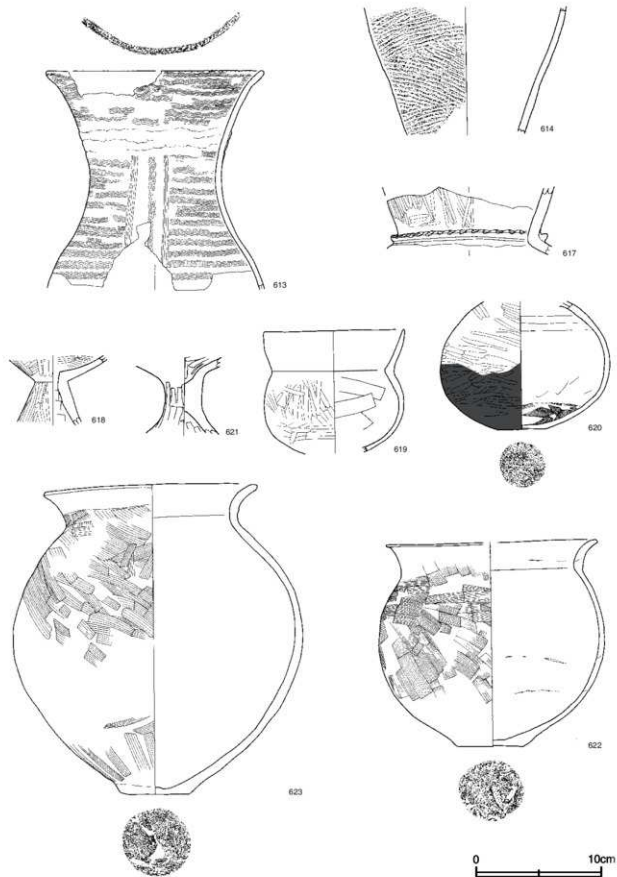
1 黒色	ローム粒子微量	6 明褐色	ローム粒子中量
2 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	7 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
3 黒褐色	焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量	8 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック微量	9 褐色	ローム粒子少量
5 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量		

**遺物出土状況** 弥生土器片282点(壺), 土師器片309点(甕類284, 器台4, 埴16, 高坏3, 甌2), 石器19点が出土している。遺物の多くは, 北部から北西部にかけて出土している。616は西部, 621は北東コーナー部の床面からそれぞれ出土している。617・620・Q91は覆土中層, 618は覆土上層からそれぞれ出土している。613~615は覆土中層から床面にかけて出土した破片が接合したものである。接合した遺物の破片が広範囲に散乱していることから, ほとんどの遺物は住居の廃絶時に北側から投棄されたと考えられる。

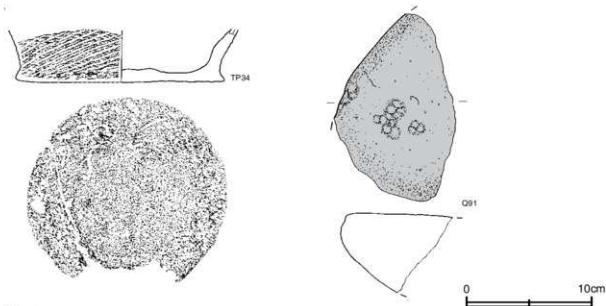
**所見** 時期は, 出土土器から弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭と考えられる。



第15図 第113号住居跡出土遺物実測図(1)



第16図 第113号住居跡出土遺物実測図(2)



第17図 第113号住居跡出土遺物実測図(3)

第113号住居跡出土遺物観察表 (第15～17図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
613	弥生土器	壺	17.2	(17.6)	—	長石・石英・赤色粘土	浅黄橙	普通	口唇部、ヘラ状工具による磨み、腰部、上位に軽い彫印のある3本の帯形磨製工具(5本)による縦区画(3分劃)内に充満状文	中層～床面	30%
614	弥生土器	壺	—	(10.2)	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	胴部、附加条二種縄文による羽状構成	中層～床面	20%
615	弥生土器	壺	13.8	25.2	9.0	長石・石英・雲母	橙	普通	口唇部、縄文彫印、口辺部、縄文による施文、腰部、上位に縄文彫印のある3本の帯形磨製工具(5本)による縦区画(3分劃)内に充満状文、胴部、数種の縄文による施文、底部砂目痕	中層～床面	70% PL13
616	弥生土器	壺	—	(32.8)	8.3	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	胴部、上位に軽い彫印のある3本の帯形磨製工具(4本)による縦区画(4分劃)内に充満状文、胴部、数種の縄文による施文、底部砂目痕	床面	80% PL13
617	弥生土器	壺	—	(5.5)	—	長石・石英	にぶい褐	普通	胴部、ヘラ磨き、胴部下段、縄文彫印のある1本の帯形	中層	10%
618	土師器	器台	—	(5.6)	—	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	坏部内外面ヘラ磨き、脚部外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ	上層	30%
619	土師器	埴	11.3	(9.9)	—	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部内外面横ナデ、体部外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ	中層	80% PL14
620	土師器	埴	—	(10.3)	3.8	長石・石英・赤色粘土	明赤褐	普通	体部外面ヘラ磨き、内面上段横ナデ・下段縦毛目磨製、外面縦位置	中層	70% PL14
621	土師器	高坏	—	(6.2)	—	長石・石英	橙	普通	脚部内外面ヘラナデ、坏部内面ナデ	床面	10%
622	土師器	甕	[16.8]	16.5	5.3	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部内外面横ナデ、体部外面縦毛目磨製、内面ナデ	中層	55% PL13
623	土師器	甕	16.7	24.9	5.6	長石・石英	橙	普通	口唇部内外面横ナデ、体部外面縦毛目磨製、一帯形磨製、内面ナデ	上層～中層	80% PL13
TP34	弥生土器	壺	—	(4.1)	16.5	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	胴部、附加条二種縄文による施文、底部砂目痕	中層	20%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考
Q91	炉石	(15.0)	(9.6)	(6.3)	(70.0)	礫岩	被熱赤変	中央部と側面に段打痕	敷石からの転用か	中層	

#### 第114号住居跡 (第18・19図)

位置 調査区南部のF7d0区で、平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長軸4.68m、短軸3.77mの隅丸長方形で、主軸方向はN-30°-Eである。壁高は13～20cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、中央部から南部にかけて踏み固められている。

ピット 10か所。P1～P4は深さ13～24cmで、位置と形状から主柱穴と考えられる。P5は深さ17cmで、P2とP3の間の南壁際にあることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。P6～P10は深さ10～34cm

で、性格は不明である。

**覆土** 3層に分層される。レンズ状の堆積を示していることから自然堆積と考えられる。

**土層解説**

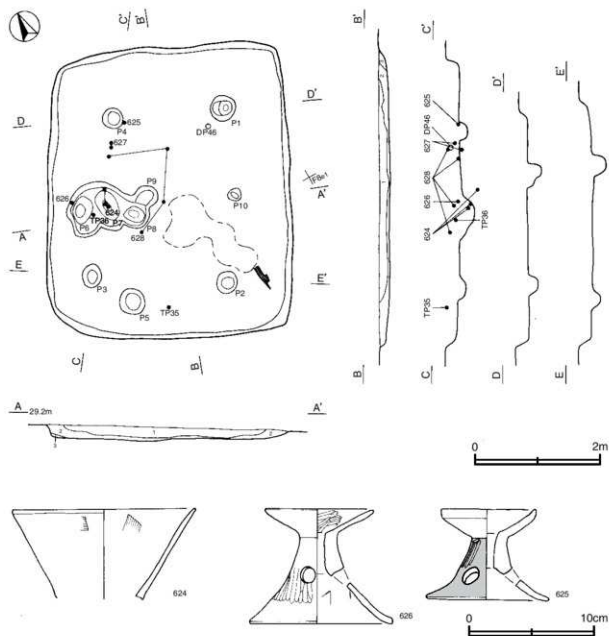
1 黒褐色 ローム粒子・炭土粒子・炭化粒子微量

3 褐色 ローム粒子中量

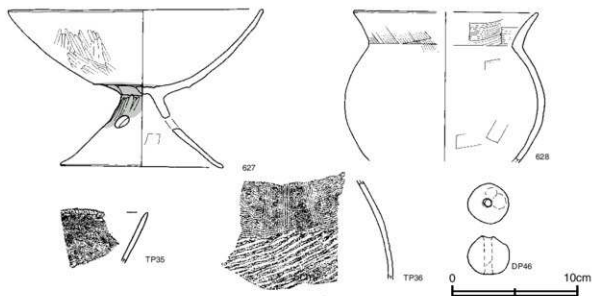
2 暗褐色 ローム粒子微量

**遺物出土状況** 弥生土器片41点(壺), 土師器片95点(甕類63, 器台25, 埴7)が出土している。624はP7の覆土中層から出土した破片が接合したものである。625は北部, 626・627・TP36は西部の床面からそれぞれ出土している。628は覆土中層から床面にかけて, TP35・DP46は覆土中層から出土していることから, 埋没の途中で投棄された可能性が考えられる。南東コーナー部の床面からは炭化物が出土しているが, 性格は不明である。

**所見** 時期は, 出土土器から弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭と考えられる。



第18図 第114号住居跡実測図



第19図 第114号住居跡出土遺物実測図

第114号住居跡出土遺物観察表 (第18・19図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
624	土師器	埴	14.4	(7.2)	—	長石・石英	橙	普通	口縁部内外面ヘラナデ後、丁家ナナデ	P7上層	40%
625	土師器	器台	7.4	7.2	9.5	長石・石英・雲母・赤鉄粉	橙	普通	器受部横方向ナデ 脚部外面ヘラ磨き 赤彩	床面	95% PL14
626	土師器	器台	8.5	9.1	11.2	石英・長石・雲母・赤鉄粉	にぶい橙	普通	器受部外面横ナデ 西面ヘラ磨き 脚部外面ヘラ磨き 内面ナデ	床面	90% PL14
627	土師器	高坏	20.2	12.6	12.8	長石・石英・雑	にぶい黄橙	普通	坏部・脚部外面ヘラ磨き 赤彩	床面	80% PL13
628	土師器	甕	[14.6]	(11.8)	—	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口辺部内外面刷毛目調整	中層～床面	40%
TP35	弥生土器	壺	—	(4.0)	—	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部、縄文遺体押定 口辺部、縄曲状工具(5本)による溝状文	中層	5%
TP36	弥生土器	壺	—	(7.8)	—	長石・石英	橙	普通	肩部、縄曲状工具(5本)による縦区画内に丸頭溝状文 脚部、附加糸・縄溝文による溝状文	床面	5%

番号	器種	最大径	口径	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP46	球状土鉢	3.3	0.8	3.0	28.2	長石・石英	指頭圧痕を残すナデ 一方向からの穿孔	中層	PL20

表3 弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	面積(m <sup>2</sup> ) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	内部施設				覆土	主な出土遺物	備考 重複関係 (旧→新)		
							壁溝	主柱穴	出入口	ピット				貯蔵穴	炉
110	E7d3	N-32°E	隅丸方形	4.82×4.44	25~34	平坦	—	4	1	—	炉	自然	弥生土器 土師器 石器		
111	E7d3	N-16°E	隅丸長方形	4.80×3.84	16~29	平坦	—	4	1	6	—	炉	人為	弥生土器 土師器 石器	
112	E7d5	N-79°W	隅丸方形	4.49×4.24	12~18	平坦	—	2	—	5	—	—	人為	弥生土器 土師器	
113	F7d8	N-24°E	[隅丸方形]	5.61×(5.23)	28~38	平坦	—	4	1	7	—	炉	自然	弥生土器 土師器 石器	
114	F7d9	N-30°E	隅丸長方形	4.68×3.77	13~20	平坦	—	4	1	5	—	—	自然	弥生土器 土師器	

#### 4 古墳時代の遺構と遺物

堅穴住居跡8軒が確認された。以下、確認された遺構と遺物について記述する。

##### 第108号住居跡 (第20図)

位置 調査区北部のB2 b0区で、平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第55号掘立柱建物と第6ピット群に掘り込まれている。

**規模と形状** 削平されているため、長軸3.7m、短軸3.0mほどの長方形と推測される。主軸方向は $N-8^{\circ}-E$ で、壁は遺存していない。

**床** 平坦で、炉の周囲から南部にかけて踏み固められている。

**炉** 中央部やや北寄りに位置し、長径90cm、短径77cmの楕円形で、床面を7cm掘りくぼめた地床炉である。

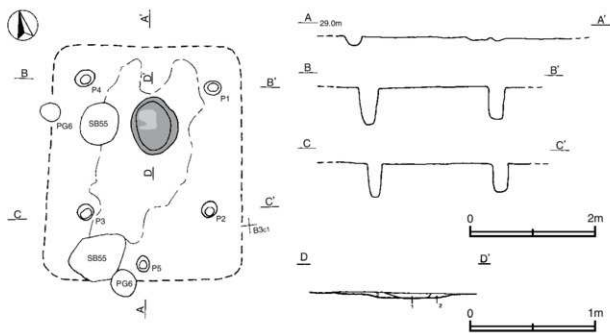
**伊土層解説**

- 1 に白い赤褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量      2 に白い赤褐色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量

**ピット** 5か所。P1～P4は深さ47～57cmで、位置と形状から主柱穴と考えられる。P5は深さ15cmで、炉と向かい合う位置にあり、出入口施設に伴うピットと考えられる。

**遺物出土状況** 土師器片5点（甕類）、石器1点（燧石カ）のほか、混入と考えられる弥生土器片2点（壺）、須恵器片6点（坏類3、甕類3）が出土している。いずれも細片のため図示できなかったが、細片の土師器1点がP3の覆土中層から出土しており、本跡に伴うと考えられる。

**所見** 炉と柱穴及び床の一部が確認されたことから、住居跡と考えた。時期は、出土土器や形状から古墳時代中期以降と考えられる。



第20図 第108号住居跡実測図

**第109号住居跡** (第21図)

**位置** 調査区南部のE6c8区で、平坦な台地上に位置している。

**規模と形状** 長軸3.11m、短軸2.75mの隅丸長方形で、主軸方向は $N-65^{\circ}-W$ である。壁高は6～18cmで外傾して立ち上がっているが、東コーナー部の壁は緩やかである。

**床** ほぼ平坦で、西部がわずかに高くなっている。

**炉** 中央部やや北寄りに位置している。地床炉で、火床面のみの検出のため規模及び形状は不明である。



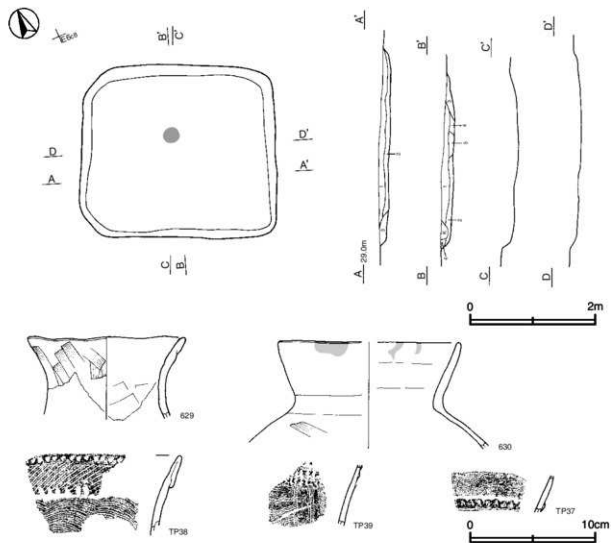
覆土 5層に分層される。ブロック状の不自然な堆積状況の層があることから人為堆積と考えられる。

土層解説

- |       |                   |       |                     |
|-------|-------------------|-------|---------------------|
| 1 黒色  | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量        |
| 2 褐色  | ローム粒子微量           | 5 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子微量           |       |                     |

遺物出土状況 土師器片42点(甕類)、石器1点(砥石カ)のほか、混入と考えられる弥生土器片6点(壺類)、陶器片1点が出土している。629・630は東部覆土中から出土した破片が接合したもので、埋没の途中に投棄されたと考えられる。

所見 時期は、出土土器から4世紀代と考えられる。



第21図 第109号住居跡・出土遺物実測図

第109号住居跡出土遺物観察表(第21図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
629	土師器	甕	[12.4]	(6.5)	—	長石・石英	橙	普通	外面刷毛目調整 内面ヘラナデ	覆土中	5%
630	土師器	甕	[14.2]	(8.4)	—	長石・石英・赤色粒子	にふい貴橙	普通	口辺部内外面磨ナデ 体部外面刷毛目調整 赤彩	覆土中	10%
TP37	弥生土器	壺	—	(2.9)	—	長石・石英・雲母	にふい貴橙	普通	頸部、軽い押圧のある隆帯	覆土中	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TF38	弥生土器	壺	—	(6.3)	—	長石・石灰・雲母	にぶい赤褐色	普通	口縁部、縄文取体押圧(口辺部、附加金一様縄文による縄文、下位早期縄文押圧による縄文、上部磨輪状工具(6本)による滑風文	覆土中	5%
TF39	弥生土器	壺	—	(4.8)	—	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	器部、上位縄文取体押圧のある灰帯、磨輪状工具(5本)による磨風文内に光道状文	覆土中	5%

## 第116号住居跡 (第22・23図)

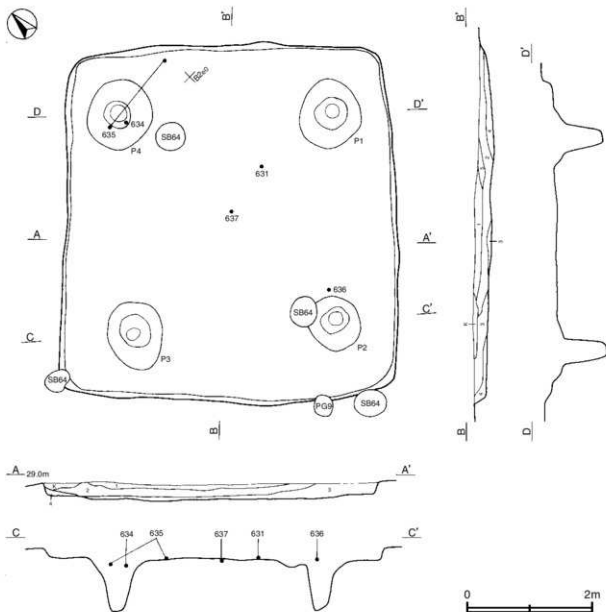
位置 調査区北部のB 2 e9区で、平坦な台地上に位置している。

重複関係 第64号掘立柱建物と第9ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.70m、短軸5.33mの隅丸方形で、主軸方向はN-45°-Eである。壁高は12~20cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

ピット 4か所。深さ76~84cmで、位置と形状から主柱穴と考えられる。



第22図 第116号住居跡実測図

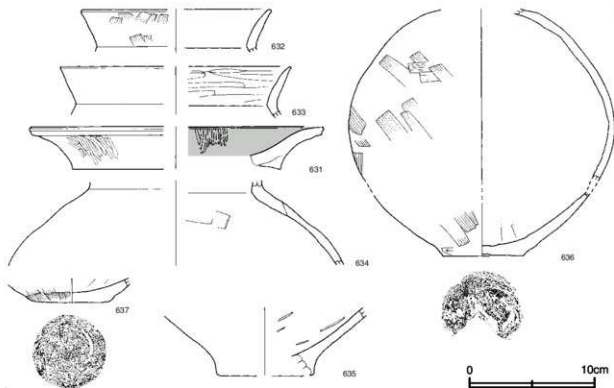
覆土 5層に分層される。不規則な堆積状況から、人為堆積と考えられる。

土層解説

- |       |                       |       |                        |
|-------|-----------------------|-------|------------------------|
| 1 灰褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量   | 4 褐色  | ロームブロック少量、炭化粒子・炭沼バミス微量 |
| 2 灰褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量、ロームブロック微量 | 5 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量    |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量        |       |                        |

遺物出土状況 土師器片476点(坏類1, 甕類459, 埴1, 器台2)のほか, 混入と考えられる縄文土器片22点, 弥生土器片88点, 須恵器片7点(坏類4, 蓋1, 甕類2)が出土している。土師器片は, 全域の覆土上層から床面にかけて出土している。631・637は中央部の床面, 634は覆土下層とP4の覆土上層, 635は北壁際とP4の覆土上層, 636は南東部覆土中層から床面にかけて出土した破片が接合したものである。

所見 時期は, 出土土器から4世紀前半と考えられる。



第23図 第116号住居跡出土遺物実測図

第116号住居跡出土遺物観察表(第23図)

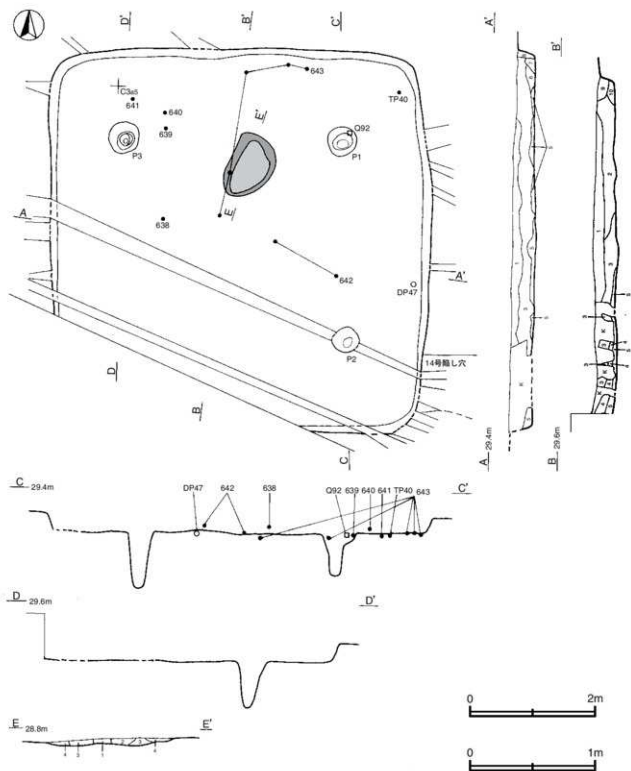
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
631	土師器	壺	[23.2]	(3.3)	—	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部内外面ヘラ磨き 内面赤彩	床面	5%
632	土師器	甕	[14.8]	(3.5)	—	長石・雲母	灰褐色	普通	口辺部外面刷毛目調整後横ナデ 内面横ナデ	覆土中	5%
633	土師器	甕	[18.4]	(4.1)	—	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部外面ナデ 内面横ヘラナデ	覆土中	10%
634	土師器	甕	—	(6.7)	—	長石・石英・雲母	浅黄橙	普通	体部内面ヘラナデ 外面摩滅により調整不明	下層~P4上層	5%
635	土師器	甕	—	(5.4)	[7.8]	長石・石英・雲母	浅黄橙	普通	体部外面横ナデ 内面ヘラナデ	床面~P4上層	634と同一 20%
636	土師器	甕	—	[19.6]	6.4	長石・雲母	にぶい橙	普通	体部外面刷毛目調整後ナデ 下段ヘラ削り	中層~床面	50%
637	土師器	甕	—	(2.0)	6.0	長石・石英・雲母・ 炭化粒子	にぶい橙	普通	体部外面下段刷毛目調整	床面	5%

## 第117号住居跡 (第24・25図)

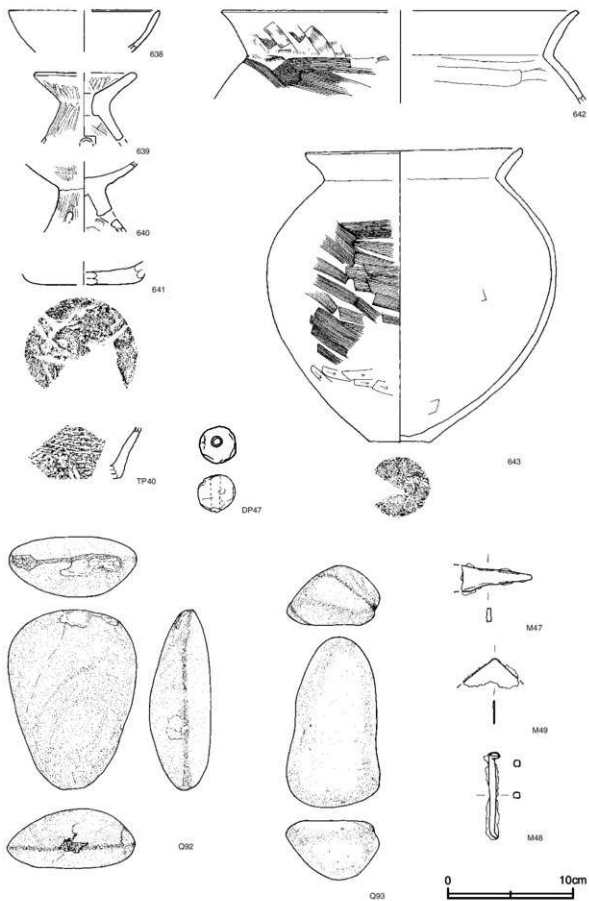
位置 調査区北部のC3a5区で、平坦な台地上に位置している。

重複関係 第14号陥し穴を掘り込んでいる。

規模と形状 南西部は調査区域外に延びているため、長軸6.05m、短軸6.02mが確認され、隅丸方形又は隅丸長方形と推測される。主軸方向はN-1°-Wである。壁高は24~26cmで、外傾して立ち上がっている。



第24図 第117号住居跡実測図



第25图 第117号住居跡出土遺物実測図

床 はほぼ平坦である。

炉 中央部からやや北寄りに位置している。長径104cm, 短径72cmの楕円形で、床面を7cm掘りくぼめた地床炉である。炉床は、全面が火熱を受け赤変硬化している。また、炉の中央部には粘土粒子を多く含んでいる。

炉土層解説

- 1 オリーブ褐色 粘土粒子多量, 焼土粒子少量, ローム粒子・炭化  
3 暗赤褐色 焼土ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子少量  
2 暗褐色 炭化粒子少量, ロームブロック・焼土ブロック微量 4 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量

ピット 3か所。深さが96~86cmで、位置と形状から主柱穴と考えられる。

覆土 10層に分層される。ブロック状の不規則な堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量 6 褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量  
2 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 7 褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量  
3 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 8 褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子少量  
4 褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量 9 ぶい褐色 ロームブロック・炭化粒子微量  
5 褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 10 褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片344点(坏類38, 高台付坏4, 甕類295, 器台2, 埴1, 不明4), 土製品1点(球状土鍾), 石器2点(礫石, 磨石), 鉄製品3点(釘, 火打金, 不明)のほか, 混入と考えられる弥生土器片18点, 須恵器片16点(坏類11, 高台付坏1, 蓋3, 壺類1)が出土している。南部は擾乱を受けており, 床面の遺物は中央部から北部に偏って出土している。643は中央部と北部の床面から出土した破片が接合したものである。639・641は北西部の床面, DP47は東壁際の床面から出土している。642は覆土中層から床面にかけて出土した破片が接合したもので, 埋没時に混入又は投棄されたものと考えられる。TP40は北東コーナー部の床面, Q92はP1の上層, M48は南西部の覆土下層, M47・M49は北西部の覆土中層から出土している。

所見 時期は, 出土した土器から4世紀前半と考えられる。

第117号住居跡出土遺物観察表(第25図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
638	土師器	埴	[12.0]	(3.3)	—	石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部内外面丁寧ナゲ	中層	5%
639	土師器	器台	[7.9]	(5.6)	—	長石・雲母	橙	普通	器受部内外面, 脚部外面へラ磨き 内面砥目調整	床面	60%
640	土師器	器台	—	(5.6)	—	長石・石英・雲母	ぶい橙	普通	器受部外面, 脚部外面へラ磨き	中層	60%
641	土師器	甕	—	(1.8)	[9.0]	長石・石英	明赤褐	普通	底部内面ナゲ	床面	5%
642	土師器	甕	[28.2]	(7.4)	—	長石・石英	明赤褐	普通	外面砥目調整 内面ナゲ	中層~床面	5%
643	土師器	甕	17.0	23.2	4.7	赤色粒子	橙	普通	口蓋部横ナゲ 器部外面砥目調整 下位へラ磨き	床面	70%
TP40	弥生土器	壺	—	(4.1)	—	長石・石英	ぶい黄橙	普通	胴部, 脚部加条二種縄文による施文	床面	5%
番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	胎土	特徴			出土位置	備考
DP47	球状土鍾	2.9	0.8	3.0	24.8	石英	指頭圧痕を残すナゲ 一方向からの穿孔			床面	PL20
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考
Q92	礫石	14.3	10.1	4.8	839.5	珉瑯	全側面を使用			P1上層	PL20
Q93	磨石	13.6	7.4	4.7	618.0	砂岩	全側面を使用			上層	
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考
M47	刀子	(5.6)	2.1	0.4	(11.1)	鉄	刃部欠損			中層	
M48	釘	6.7	1.0	0.5	7.2	鉄	頭部屈曲 断面方形			下層	
M49	火打金	(2.4)	(4.4)	0.1	(3.1)	鉄	頭部遺存 断面扁平			中層	

第118号住居跡 (第26図)

位置 調査区南部のE 6c4区で、なだらかに傾斜する台地の縁辺部に位置している。

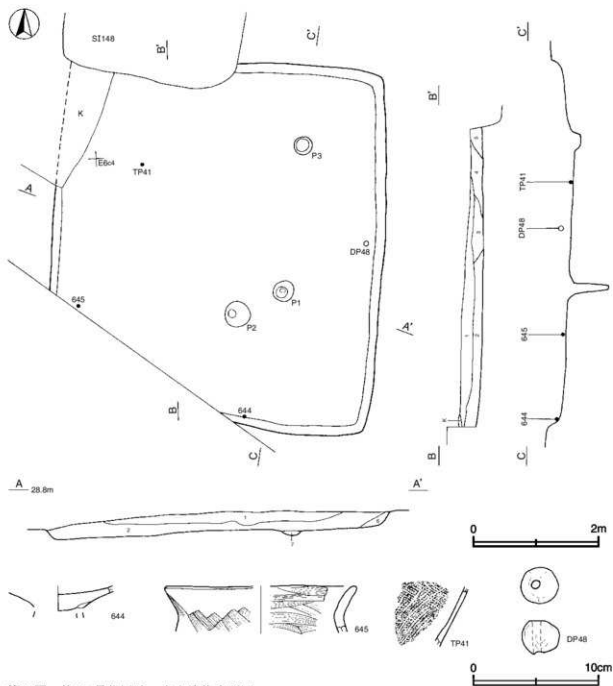
重複関係 第148号住居に掘り込まれている。

規模と形状 南西コーナー部が調査区域外に延びているため、長軸5.88m、短軸5.24mが確認され、長方形又は方形と推測される。主軸方向は $N-7^{\circ}-E$ である。壁高は18~22cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

ピット 3か所。P1は深さ68cmで、位置と形状から柱穴と考えられる。P2・P3は深さ37・12cmで、性格は不明である。

覆土 7層に分層される。レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。



第26図 第118号住居跡・出土遺物実測図

## 土層解説

1	黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子・焼土粒子微量	5	暗褐色	ロームブロック微量
2	褐色	ロームブロック微量	6	褐色	ローム粒子多量
3	褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量	7	暗褐色	ローム粒子微量
4	褐色	ローム粒子多量			

**遺物出土状況** 土師器片120点（甕類119、高坏1）、土製品1点（土玉）、石器2点（磨石）、鉄製品1点（鎌）のほか、流れ込んだ弥生土器片12点、混入した須恵器片1点（甕類）が出土している。644は南壁際の床面、645は西部の床面から出土している。いずれも破片であることから、住居の廃絶時に投棄されたと考えられる。TP41は覆土下層、DP48は覆土中層から出土しており、埋没途中で混入又は投棄されたと考えられる。

**所見** 時期は、出土した土器から4世紀代と考えられる。

## 第118号住居跡出土遺物観察表（第26図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
644	土師器	高坏	—	(2.0)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	坏部内外面ナデ 坏部成形後、脚部彫り付け	床面	5%
645	土師器	甕	[14.8]	(3.8)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	口辺部内外面刷毛目調整 口唇部ナデ	床面	5%
TP41	弥生土器	壺	—	(4.8)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	胴部附加条二種縄文による羽状構成	下層	5%

番号	器種	最大径	口径	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP48	球状土師	2.9	0.6	2.6	22.3	長石・雲母	指頭圧痕を残すナデ 一方向からの穿孔	中層	PL20

## 第119号住居跡（第27・28図）

**位置** 調査区南部のE7i0区で、平坦な台地上に位置している。

**規模と形状** 北東側が調査区域外に延びているため、長軸4.40m、短軸3.75mが確認され、長方形又は方形と推測される。主軸方向はN-28°-Eである。壁高は25-28cmで、外傾して立ち上がっている。

**床** はほぼ平坦である。

**炉** 中央部からやや北西寄りに位置している。長径40cm、短径34cmの楕円形で、床面をわずかに掘りくぼめた地床炉である。炉床は、中央部から西側が火熱を受け赤変硬化している。

## 土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量

**ピット** 8か所。P1～P4は深さ14～29cmで、位置と形状から主柱穴と考えられる。P5は深さ14cm、P2とP3の間で、炉と向かい合う位置にあり、出入口施設に伴うピットと考えられる。P6～P8は深さ16～53cmで、性格は不明である。

**覆土** 5層に分層される。レンズ状の堆積状況であることから、自然堆積と考えられる。

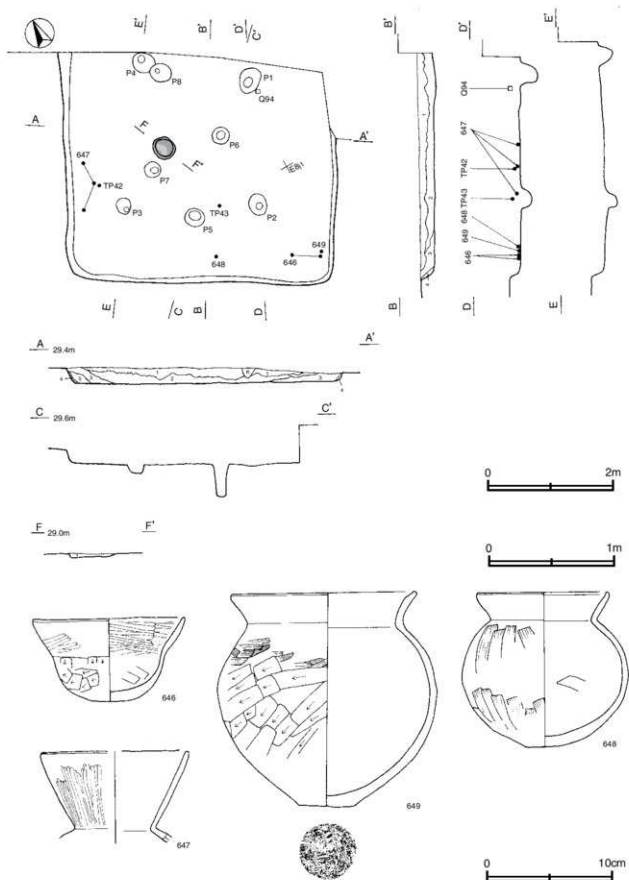
## 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量  
 2 黒暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量  
 3 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量  
 4 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量  
 5 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

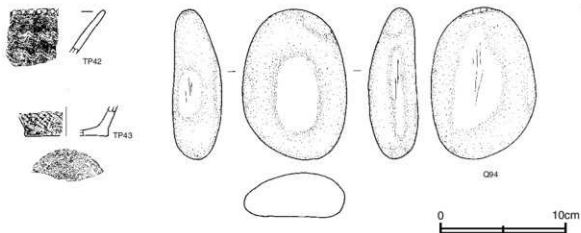
**遺物出土状況** 土師器片281点（坏類33、高坏3、甕類137、埴108）、石器1点（磨石）のほか流れ込んだ弥生土器片27点と混入した須恵器片2点（坏類）が出土している。遺物は南東コーナー部から多く出土している。646・649は正位で南東コーナー部の床面、647は西部の床面、648は南部の床面から出土している。Q94は覆土中層から出土しており、埋没の途中で投棄されたと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から4世紀後半と考えられる。





第27图 第119号住居跡・出土遺物実測図



第28図 第119号住居跡出土遺物実測図

第119号住居跡出土遺物観察表 (第27・28図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
646	土師器	埴	12.2	6.7	—	長石・石英・雲母・ 金灰粒子	にぶい橙	普通	口辺部内外面ヘラ磨き 体部外面ヘラ削り	床面	95% PL14
647	土師器	埴	[11.8]	(7.4)	—	長石・石英	にぶい橙	普通	口辺部外面ヘラ磨き 内面丁寧なナデ	床面	20%
648	土師器	小形甕	10.4	12.5	2.2	長石・石英・雲母・ 金灰粒子	橙	普通	体部外面刷毛目調整 内面ヘラナデ	床面	85%
649	土師器	甕	14.3	17.4	4.6	長石・石英・雲母	橙	普通	体部外面刷毛目調整後ヘラ削り	床面	70%
TP42	弥生土器	壺	—	(3.4)	—	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口唇部、穂状工具による面目 口辺部刷毛状工具(5本)による透状文	中層	5%
TP43	弥生土器	壺	—	(2.4)	[6.6]	長石・石英	橙	普通	胴部、附加条一種織文による施文 底部布目痕	中層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q94	磨石	11.9	8.4	3.9	552.3	砂岩	全側面を使用	中層	

## 第120号住居跡 (第29図)

**位置** 調査区南部のF 8e3区で、平坦な台地上に位置している。

**規模と形状** 南側が調査区域外に延びているため、長軸4.45m、短軸2.26mが確認され、方形又は長方形と推測される。主軸方向はN-33°-Eである。北コーナー部の壁は削平されており、残存している壁高は2-6cmで、外傾して立ち上がっている。

**床** ほぼ平坦である。

**ピット** 3か所。P1・P2は深さが30・46cmで、位置と形状から柱穴と考えられる。P3は深さが16cmで、性格は不明である。

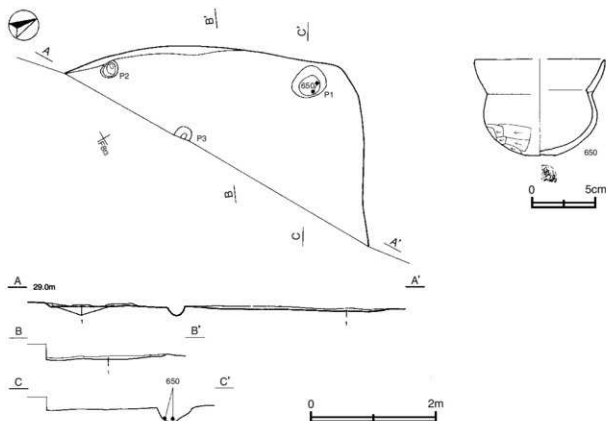
**覆土** 単一層である。層厚が薄く、堆積状況は不明である。

## 土層解説

1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片8点(甕類)と混入した弥生土器片1点(壺)が出土している。650はP1内の底面と覆土下層から出土した破片が接合したもので、廃絶時に投棄されたと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から4世紀代と考えられる。



第29図 第120号住居跡出土遺物実測図

第120号住居跡出土遺物観察表 (第29図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
650	土師器	埴	[10.4]	7.7	2.4	灰石・石英・雲母	橙	普通	体外外面下位へタ削り 内面ナデ	底面-P1下層	50%

### 第150号住居跡 (第30～33図)

**位置** 調査区南部のE7c1区で、平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第237号土坑を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長軸4.78m, 短軸4.61mの方形で、主軸方向はN-8°-Eである。壁高は47～65cmで、外傾して立ち上がっている。

**床** はほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が全周している。

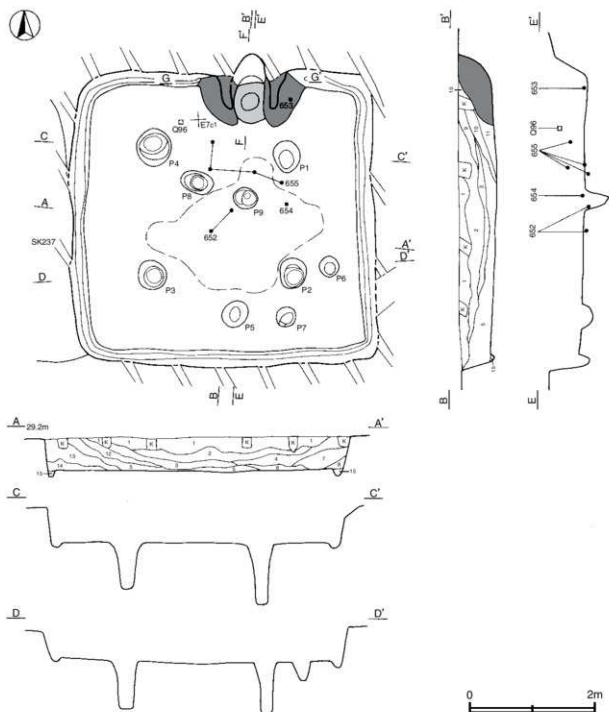
**竈** 北壁の中央部やや東寄りに付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで1.12m, 袖部幅は1.68mである。袖部は地山の高まりを基部として、砂質粘土を混ぜたローム土で構築されている。火床部は床面を皿状に掘りくはめており、火床面は全体が火熱により赤変硬化している。煙道部は壁外に28cmほど三角形に掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。第3・4層は天井部の崩落層である。

#### 竈土層解説

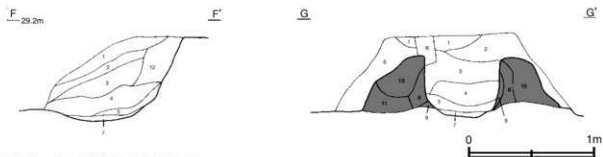
1 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	5 じぶい赤褐色	焼土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子微量
2 褐色	ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子・粘土粒子微量	6 暗褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化物微量
3 じぶい褐色	焼土ブロック・粘土粒子少量, ローム粒子微量	7 褐色	ローム粒子・焼土粒子中量, 炭化粒子微量
4 暗赤褐色	焼土ブロック中量, 炭化粒子少量, ローム粒子微量	8 明褐色	粘土粒子中量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

- |        |                              |         |                          |
|--------|------------------------------|---------|--------------------------|
| 9 赤褐色  | 焼土粒子・粘土粒子中量, 炭化粒子少量, ローム粒子微量 | 11 褐色   | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 |
| 10 暗褐色 | ローム粒子・粘土粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量    | 12 暗赤褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量, ロームブロック微量   |

ピット 9か所。P1～P4は深さ75～98cmで、位置と形状から主柱穴と考えられる。P5は深さ19cmで、竈と向かい合う位置にあり、出入口施設に伴うピットと考えられる。P6～P9は深さ23～39cmで、性格は不明である。



第30図 第150号住居跡実測図(1)



第31図 第150号住居跡実測図(2)

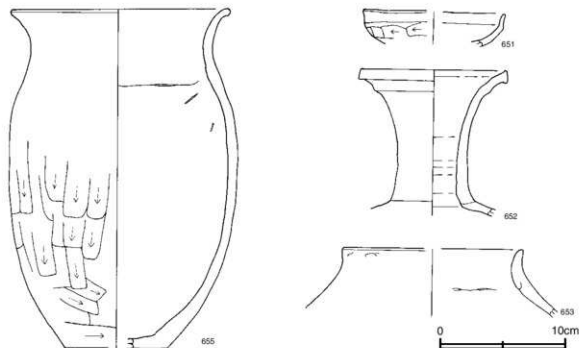
**覆土** 15層に分離される。レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

**土層解説**

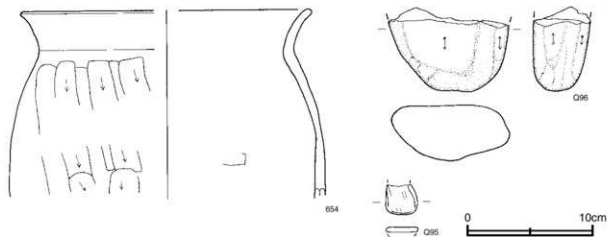
- |       |                     |        |                            |
|-------|---------------------|--------|----------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量      | 10 褐色  | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量    | 11 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子・粘土粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量 | 12 褐色  | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量      |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 13 褐色  | ロームブロック・炭化粒子微量             |
| 5 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量  | 14 暗褐色 | ロームブロック・炭屑パミス少量、炭化粒子微量     |
| 6 褐色  | ロームブロック少量、炭化粒子微量    | 15 褐色  | ロームブロック少量、炭化粒子微量           |
| 7 褐色  | ロームブロック・炭化粒子微量      |        |                            |
| 8 褐色  | ローム粒子中量、炭化粒子微量      |        |                            |
| 9 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量 |        |                            |

**遺物出土状況** 土師器片58点(坏類1, 甕類57), 須恵器片14点(坏類9, 甕類2, 壺類3), 陶器片1点(不明), 石器2点(砥石, 不明), 鉄製品2点(釘カ)のほか, 流れ込んだ縄文土器片2点, 弥生土器片7点が出土している。遺物は中央部から北部にかけて多く出土している。653は甕の右袖部の基部から出土しており, 甕の構築材にしたと考えられる。652・654は床面から出土している。655は覆土中層から床面にかけて出土した破片が接合したものである。Q95・Q96は覆土上層から出土している。ともに, 埋没の途中に投棄されたと考えられる。

**所見** 時期は, 出土土器から7世紀後半と考えられる。



第32図 第150号住居跡出土遺物実測図(1)



第33図 第150号住居跡出土遺物実測図(2)

第150号住居跡出土遺物観察表 (第32・33図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
651	土師器	坏	[11.2]	(2.6)	—	長石・石英	明黄褐色	普通	口縁部内外面横ナデ 体部外面へウ削り	覆土中	10%
652	須恵器	長頸壺	11.5	(11.5)	—	長石	灰ナリベ	普通	頸部成形後胴部貼り付け	床面	25% 自然物 PL14
653	土師器	甕	[14.1]	(5.4)	—	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	口辺部内外面横ナデ	甕袖部内	5%
654	土師器	甕	[22.6]	(15.0)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	口辺部横ナデ 体部外面へウ削り	床面	20%
655	土師器	甕	17.0	27.2	[8.0]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口辺部横ナデ 体部外面へウ削り	中層～床面	70% PL14

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考
Q95	不明	(2.4)	2.5	(0.4)	(4.8)	凝灰岩	表面と側面に擦痕	裏面は剥離面 砥石の破片*	上層	
Q96	砥石	(6.8)	(9.6)	4.6	(313.8)	砂岩	砥面3面		上層	

表4 古墳時代住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	内部施設						覆土	主な出土遺物	備考 重複関係 (旧→新)
							壁溝	土柱	出入口	ピット	貯蔵穴	炉・竈			
108	B2b0	N-8°E	[長方形]	[3.7]×[3.0]	—	平坦	—	4	1	—	—	炉	—	土師器 石器	本跡→SB55
109	E6e8	N-65°W	長方形	3.11×2.75	6~18	平坦	—	—	—	—	—	炉	人為	土師器 石器	
116	B2e9	N-45°E	方形	5.70×5.33	12~20	平坦	—	4	—	—	—	—	人為	土師器	本跡→SB64・ PG9
117	C3a5	N-1°W	[方形]	6.05×6.02	24~26	平坦	—	3	—	—	—	炉	人為	土師器 土製品 石器 鉄製品	TP14→本跡
118	E6e4	N-7°E	[長方形]	5.88×5.34	18~22	平坦	—	1	—	2	—	—	自然	土師器 土製品 石器 鉄製品	本跡→SI148
119	E7f0	N-28°E	[方形]	4.40×3.75	25~28	平坦	—	4	1	3	—	炉	自然	土師器 石器	
120	F8e3	N-33°E	[長方形]	(4.6)×(2.26)	2~6	平坦	—	2	—	1	—	—	不明	土師器	
150	E7c1	N-8°E	方形	4.78×4.61	47~65	平坦	全周	4	1	4	—	竈	自然	土師器 須恵器 陶器 石器 鉄製品	SK237→本跡

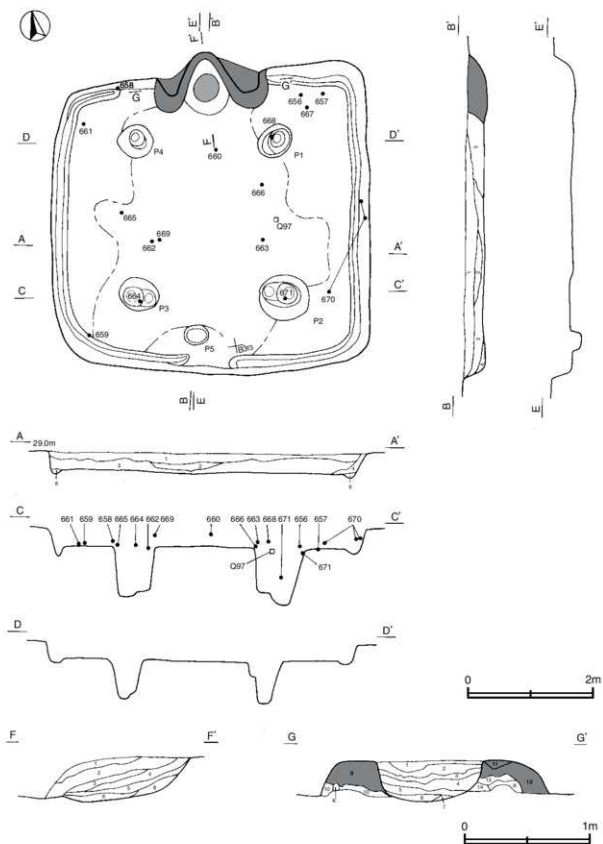
## 5 奈良・平安時代の遺構と遺物

奈良・平安時代の遺構は、竅穴住居跡32軒、掘立柱建物跡10棟、井戸跡1基、欄跡1列、土坑5基が確認された。以下、遺構と遺物について記述する。

## (1) 竅穴住居跡

第121号住居跡 (第34～37図)

位置 調査区北部のB3e2区で、平坦な台地上に位置している。



第34図 第121号住居跡実測図

**規模と形状** 長軸5.02m、短軸4.80mの方形で、主軸方向はN-12°-Eである。壁高は28~30cmで、外傾して立ち上がっている。

**床** 平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が、ほぼ全周している。

**竈** 北壁中央部に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで1.00m、袖部幅は1.80mである。袖部は床面と同じ高さの地山面の上に、ロームブロック主体の褐色土を基部として、その上に砂質粘土を含む土を用いて構築されている。火床部は皿状に掘りくぼめられ、燃焼部全体が火熱により赤変硬化している。とくに火床面は赤変硬化が顕著である。煙道部は壁外に34cm掘り込まれ、火床面から緩やかに立ち上がっている。

#### 竈土層解説

1 暗褐色	焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量	7 褐色	砂質粘土ブロック中量、ロームブロック少量
2 黄褐色	砂質粘土ブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量	8 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
3 赤褐色	焼土ブロック多量、炭化粒子少量、砂質粘土ブロック・ローム粒子微量	9 に近い黄褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量
4 暗赤褐色	焼土ブロック・炭化粒子中量、砂質粘土ブロック・ローム粒子微量	10 褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
5 褐色	砂質粘土ブロック中量、炭化物・ローム粒子少量、焼土粒子微量	11 暗褐色	砂質粘土粒子中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量
6 暗赤褐色	焼土ブロック多量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量	12 に近い黄褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量
		13 暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量、砂質粘土粒子微量
		14 褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック微量

**ピット** 5か所。P1~P4は深さ62~88cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ15cmで、竈と向かい合う位置にあり、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

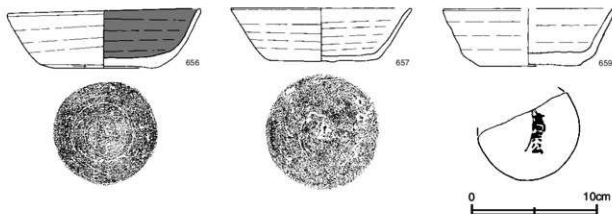
**覆土** 6層に分層される。ロームブロックが多く含まれている状況から、人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量	5 褐色	ロームブロック多量、焼土ブロック・炭化物・粘土粒子少量
2 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量	6 褐色	ロームブロック多量、炭化粒子微量
3 褐色	ロームブロック多量、焼土ブロック・炭化粒子少量		
4 褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量		

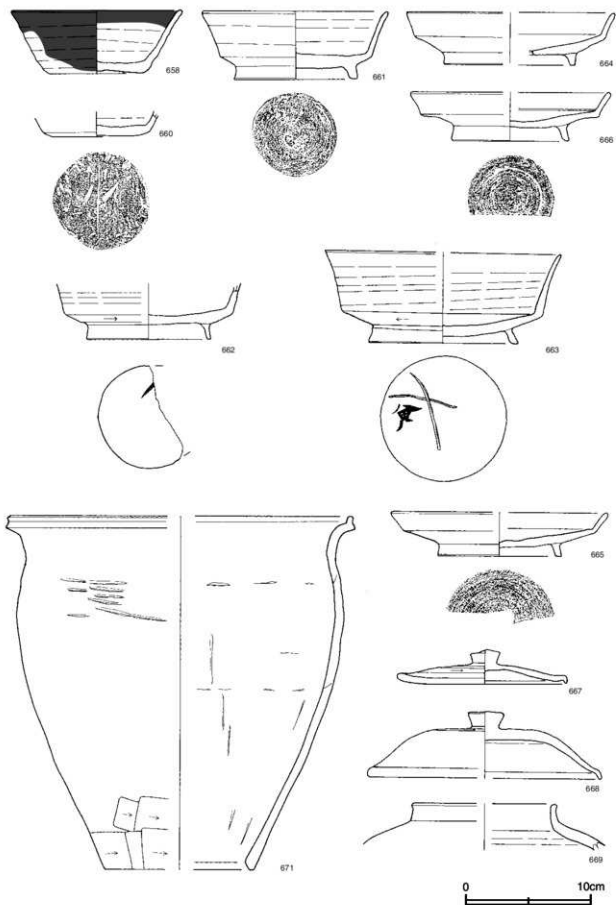
**遺物出土状況** 土師器片398点（坏類4、甕類386、瓶8）、須恵器片165点（坏類111、高台付坏19、蓋12、盤13、短頸壺1、甕類9）、石器1点（砥石）、流れ込んだ弥生土器片17点が全域の覆土上層から床面にかけて出土している。656・657・667は北東コーナー部の覆土下層から床面にかけて、660・662・663・665・666・669は中央部の覆土上層から床面にかけて、671はP2の覆土中層から立位の状態、Q97は中央部の床面からそれぞれ出土している。いずれも住居の廃絶時に投棄又は遺棄されたものと考えられる。

**所見** 竈の使用痕跡や8世紀後葉から9世紀前葉にかけての土器が出土していることから、比較的長期間の居住が考えられる。廃絶時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。

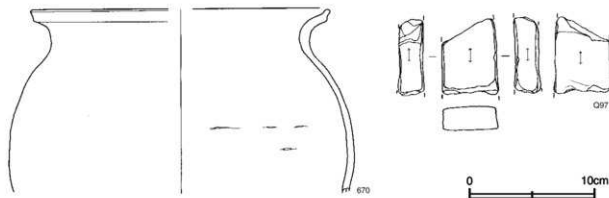


第35図 第121号住居跡出土遺物実測図(1)





第36图 第121号住居跡出土遺物実測図(2)



第37図 第121号住居跡出土遺物実測図(3)

第121号住居跡出土遺物観察表(第35~37図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
656	土師器	坏	15.1	4.7	8.1	長石・石英・黒 雲母	浅黄橙	普通	内面ヘラ磨き後ナデ 体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	下層	100% PL15
657	須恵器	坏	14.4	4.2	8.8	長石・石英・針 状鉱物	オリブ灰	普通	底部回転ヘラ削り後ナデ	床面直上	100% PL15
658	須恵器	坏	13.2	5.0	7.2	長石・石英	灰黄	普通	底部回転ヘラ削り後ナデ	下層	80% 底面磨き PL15
659	須恵器	坏	[13.4]	4.5	8.0	長石・針状鉱 物・黒曜	黄灰	普通	底部一方向のヘラ削り	下層	40% 底面磨き [真六公]ヘラ 磨き PL19
660	須恵器	坏	—	(2.1)	7.2	石英・針状鉱物	灰	普通	底部ナデ	上層	20% 底面磨き
661	須恵器	高台付坏	14.7	5.3	9.8	長石・石英・針 状鉱物	灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	床面直上	90% PL17
662	須恵器	高台付坏	—	(4.4)	[10.0]	長石・石英・針 状鉱物	灰白	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	床面	30% 底面磨き [□]
663	須恵器	高台付坏	[18.4]	7.2	11.9	長石・石英	灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	中層	80% 底面ヘ ラ磨き 黒書 [八面□]
664	須恵器	盤	[16.2]	4.2	10.3	長石・石英・針 状鉱物	灰白	普通	底部回転ヘラ削り	P3上層	40%
665	須恵器	盤	[17.0]	3.5	[9.8]	長石・石英・針 状鉱物	灰	普通	底部回転ヘラ削り	床面	30%
666	須恵器	盤	[15.6]	3.8	[9.3]	長石・石英・針 状鉱物	暗灰黄	普通	底部回転ヘラ削り	下層	40%
667	須恵器	蓋	13.6	2.7	—	長石・石英・針 状鉱物	灰	良好	天井部回転ヘラ削り	床面	100% PL17
668	須恵器	蓋	[18.6]	5.3	—	長石・石英・黒 雲母	にぶい黄	普通	天井部回転ヘラ削り	中層	50%
669	須恵器	短頸壺	[11.2]	(3.7)	—	長石・石英・針 状鉱物	灰	普通	ロクロ成形	上層	5% 外面自然焼
670	土師器	甕	[23.6]	(14.6)	—	長石・石英・雲母・ 金剛砂	にぶい橙	普通	口縁部内外面ナデ 内面ヘラナデ	中層	10%
671	土師器	甕	[26.8]	28.2	[11.8]	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部内外面ナデ 内面ヘラナデ 輪郭本底 外面上端ヘラナデ 下底ヘラ削り 黒書	P2中層	40%

## 第122号住居跡(第38・39図)

位置 調査区北部のB3f4区で、平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長軸3.41m、短軸2.87mの長方形で、主軸方向はN-27°-Wである。壁高は26~30cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が、全周している。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで0.82m、袖部幅は1.05mである。袖部は床面と同じ高さの地山面の上に、ロームブロック主体の褐色土を基部として、その上に細礫と砂質粘土を混ぜた土を用いて構築されている。火床部は皿状に掘りくぼめられ、火床面が火熱により赤変硬化している。煙道部は壁外へ23cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。第2・6層は天井部の崩落層である。

**覆土層解説**

- |         |                              |         |                                    |
|---------|------------------------------|---------|------------------------------------|
| 1 黒褐色   | ロームブロック・炭化粒子少量、焼土ブロック微量      | 6 濃い黄褐色 | 砂質粘土粒子中量、焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量       |
| 2 濃い黄褐色 | 砂質粘土粒子中量、焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量 | 7 明褐色   | 砂質粘土ブロック多量、ローム粒子・細礫少量、焼土ブロック・炭化物微量 |
| 3 暗赤褐色  | 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 | 8 褐色    | 砂質粘土ブロック多量、炭化物・焼土粒子微量              |
| 4 褐色    | ロームブロック・砂質粘土粒子少量、炭化物焼土粒子微量   | 9 褐色    | ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子微量            |
| 5 暗赤褐色  | 焼土粒子中量、ロームブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子少量 | 10 暗褐色  | ロームブロック少量、炭化粒子微量                   |
|         |                              | 11 明黄褐色 | 砂質粘土ブロック多量、炭化粒子微量                  |

**ピット** 3か所。P1は深さ27cmで、竈と向かい合う位置にあり、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

P2・P3は性格不明である。

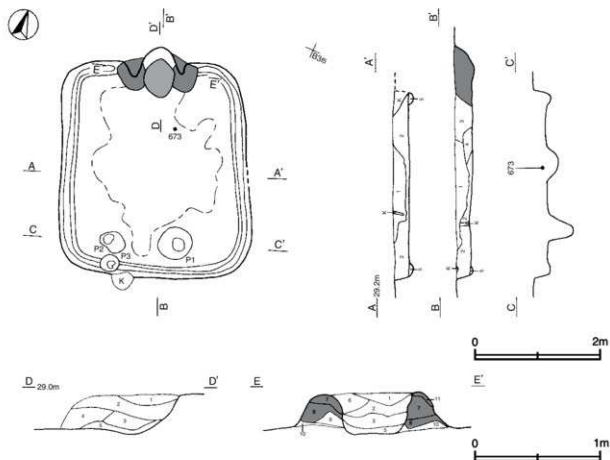
**覆土** 5層に分層される。ロームブロックを含み、不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

**土層解説**

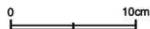
- |       |                           |         |                                  |
|-------|---------------------------|---------|----------------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量     | 4 オリーブ色 | ロームブロック・砂質粘土ブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量            | 5 褐色    | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量            |
| 3 褐色  | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子粘土粒子微量 |         |                                  |

**遺物出土状況** 土師器片12点(堿類)、須恵器片9点(坏類4、蓋3、高盤1、堿類1)、流れ込んだ弥生土器片1点が出土している。672は覆土中、673は中央部の覆土中層からそれぞれ出土している。

**所見** 時期は、出土土器から8世紀後半と考えられる。



第38図 第122号住居跡実測図



第39図 第122号住居跡出土遺物実測図

第122号住居跡出土遺物観察表 (第39図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
672	須恵器	坏	—	(3.8)	[7.1]	長石・石英	黄灰	普通	底部回転ヘラ切り	覆土中	10%
673	須恵器	蓋	[14.2]	2.7	—	長石・石英・珪 状鉱物	黄灰	普通	天井部回転ヘラ削り	中層	30%

## 第123号住居跡 (第40・41図)

位置 調査区北部のB3h5区で、平坦な台地上に位置している。

重複関係 第60号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.08mで、短軸3.62mの方形で、主軸方向はN-12°-Eである。壁高は25~38cmで、直立している。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が、全周している。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで0.96m、袖部幅は1.80mほどである。袖部は床面と同じ高さの地山面の上に、砂質粘土主体の褐色土を用いて構築されている。火床部は皿状に掘りくぼめられ、焼成部全体が火熱により赤変硬化している。とくに火床面は赤変硬化が顕著である。煙道部は壁外に37cm掘り込まれ、火床面から緩やかに立ち上がっている。第2層は、天井部の崩落層である。

## 竈土層解説

1 暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量、粘土粒子微量	6 褐色	砂質粘土ブロック多量、炭化物少量、ローム粒子微量
2 オリーブ色	粘土ブロック多量、ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子微量	7 暗褐色	砂質粘土ブロック多量、焼土ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量
3 暗褐色	焼土ブロック・炭化物・ローム粒子少量、粘土粒子微量	8 褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量
4 暗赤褐色	焼土ブロック中量、炭化物・ローム粒子・粘土粒子少量	9 にぶい褐色	砂質粘土ブロック多量、ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
5 黒褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量	10 黄褐色	砂質粘土ブロック多量、炭化粒子中量、ローム粒子・焼土粒子微量
		11 明褐色	砂質粘土ブロック多量、焼土粒子少量、ロームブロック微量

ピット 3か所。P1は深さ15cmで、竈に向かい合う位置にあり、出入り口施設に伴うピットと考えられる。その他のピットは性格不明である。

覆土 3層に分層される。各層にロームブロックが多く含まれている状況から、人為堆積と考えられる。

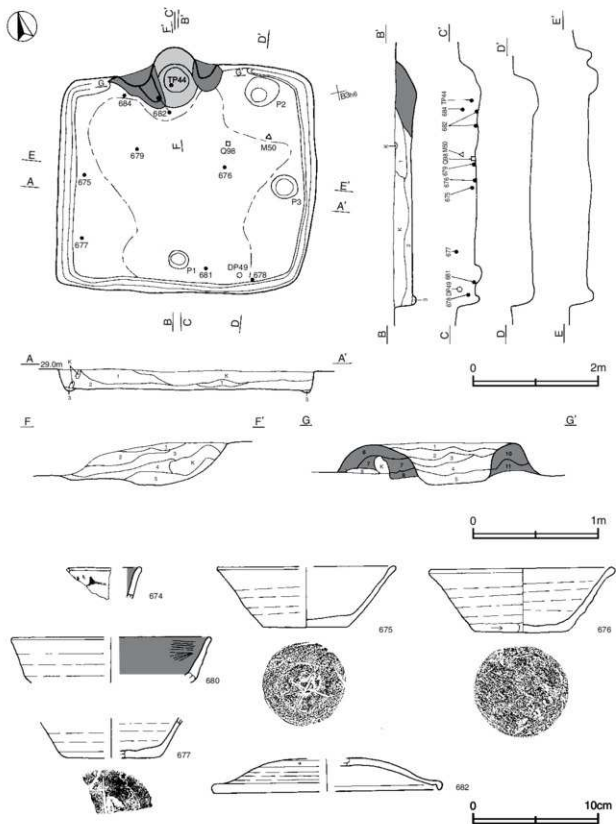
## 土層解説

1 褐色	ロームブロック多量、炭化粒子・粘土粒子少量、焼土粒子微量	2 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
		3 褐色	ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量

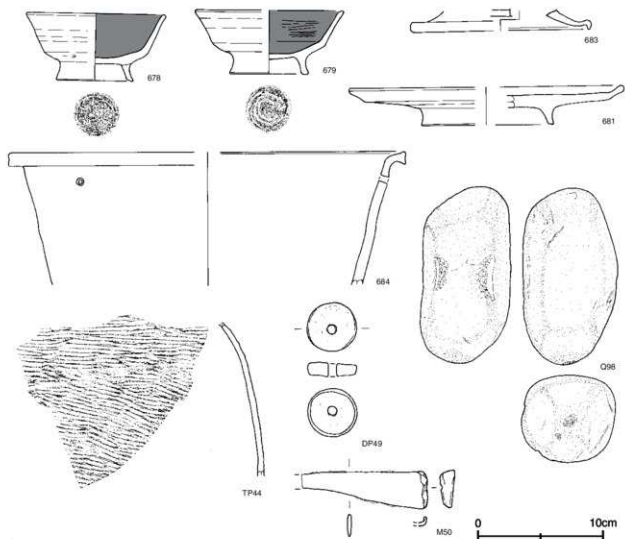
遺物出土状況 土師器片196点(坏類13, 高台付坏2, 甕類181), 須恵器片109点(坏類50, 高台付坏1, 蓋10, 甕3, 甕類45), 土製品1点(紡錘車), 石器1点(磨石), 鉄器1点(鎌), 流れ込んだ弥生土器片5点が全域の覆土上層から床面にかけて出土している。674・680・683は覆土中, 676・679・Q98は中央部の床面, 678・681・DP49は南部壁際の覆土上層から下層, 675・677は西壁際の覆土上層から下層にかけて, TP44は竈内, M50は北東部の覆土上層からそれぞれ出土している。682は竈内と竈前から出土した破片が接合している。火熱

は受けていない。いずれも住居の廃絶時に投棄又は遺棄されたものと考えられる。

所見 廃絶時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。



第40図 第123号住居跡出土遺物実測図



第41図 第123号住居跡出土遺物実測図

第123号住居跡出土遺物観察表 (第40・41図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
674	土師器	坏類	—	(2.3)	—	余雲母・黒雲母・片位雲母	橙	普通	内面へラ磨き	覆土中	5% 底面磨き口
675	須恵器	坏	[14.0]	4.8	6.7	長石・石英・針状鉄鉱物	灰	普通	底部回転へラ切り後へラナデ	下層	80% 底面へラ磨き
676	須恵器	坏	14.3	5.2	7.3	長石・石英・雲母	暗灰黄	普通	体部下端・底部手持ちへラ削り	床面	70% PL15
677	須恵器	坏	—	(3.2)	[7.7]	長石・石英	橙	不良	底部回転へラ削り	上層	10% 底面へラ磨き
678	土師器	高台付坏	[10.9]	5.3	[6.1]	長石・石英・雲母	橙	普通	内面磨耗 体部下端へラ削り 底部回転へラ削り	中層	80% PL15
679	土師器	高台付坏	[11.6]	5.1	6.3	長石・石英・雲母	橙	普通	内面へラ磨き 底部回転へラ削り	床面	70%
680	土師器	高台付坏	[15.6]	(3.6)	—	長石・石英・黒雲母	橙	普通	内面へラ磨き	覆土中	10%
681	須恵器	甕	[21.5]	3.0	[10.4]	長石・石英・雲母	明赤褐	不良	底部回転へラ削り	床面直上	40%
682	須恵器	蓋	[18.4]	2.6	—	長石・石英・針状鉄鉱物	黒褐	良好	天井部回転へラ削り	甕内～床面	30%
683	須恵器	高盤	—	(1.6)	[14.4]	長石・石英・針状鉄鉱物	黒褐	良好	口クロナデ 透かし有り	覆土中	5%
684	須恵器	瓶	[31.3]	(10.6)	—	長石・石英・針状鉄鉱物	灰	普通	口クロナデ 焼成後穿孔	上層	5%
TP44	須恵器	甕	—	(12.0)	—	長石・雲母	橙	普通	内面ナデ 外面横位の叩き	甕内	5%
番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	胎土	特徴			出土位置	備考
DP49	紡錘車	3.9	0.7	1.1	18.4	石英・雲母	ナデ			上層	PL20

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q98	磨石	14.0	7.5	7.0	1,120	石英	全面使用	床面	
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M50	鎌	(10.0)	3.0	0.3	(30.9)	鉄	刃先部欠損 基部は全体を折り返す	上層	PL21

#### 第124号住居跡 (第42・43図)

**位置** 調査区北部のB 2 a2区で、緩やかな傾斜地に位置している。

**規模と形状** 南西部は調査区域外に延びている。確認できた範囲は長軸5.70m、短軸5.03mの不定方形で、主軸方向はN-22°-Wである。壁高は44~50cmで、ほぼ直立している。

**床** はほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が、東壁下を巡っている。

**竈** 北壁中央部に付設されている。規模は、焚き口から煙道部まで0.95m、袖部幅は1.52mである。袖部は床面と同じ高さの地山面の上に、砂質粘土主体の土を用いて構築されている。火床部は皿状に掘りくぼめられ、燃焼部全体が火熱により赤変硬化している。とくに火床面は赤変硬化が顕著である。煙道部は壁外に12cm掘り込まれ、火床面から緩やかに立ち上がっている。第1層は、天井部の崩落層である。第15層以下は、竈の掘り方の埋土である。

#### 竈土層解説

1	にぶい黄褐色	砂質粘土ブロック多量、焼土ブロック・炭化物少量	10	にぶい褐色	粘土粒子多量、ローム粒子微量
2	暗赤褐色	焼土粒子多量、ローム粒子少量	11	明褐色	粘土粒子少量、ローム粒子微量
3	黒褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物・砂質粘土粒子微量	12	褐色	粘土粒子多量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・鹿沼パミス微量
4	暗褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	13	明褐色	砂質粘土粒子中量、焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
5	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・砂質粘土粒子少量	14	褐色	砂質粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
6	黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土ブロック・炭化粒子少量	15	赤褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子少量、ローム粒子・粘土粒子微量
7	褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	16	暗赤褐色	焼土ブロック多量、炭化粒子少量、ローム粒子・砂質粘土粒子微量
8	暗褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子微量	17	暗褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子・鹿沼パミス微量
9	にぶい褐色	焼土ブロック・砂質粘土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子微量			

**ピット** 5か所。P 1~P 3は深さ52~67cmで、配置から支柱穴と考えられる。P 4・P 5は深さ24~26cmで、性格は不明である。

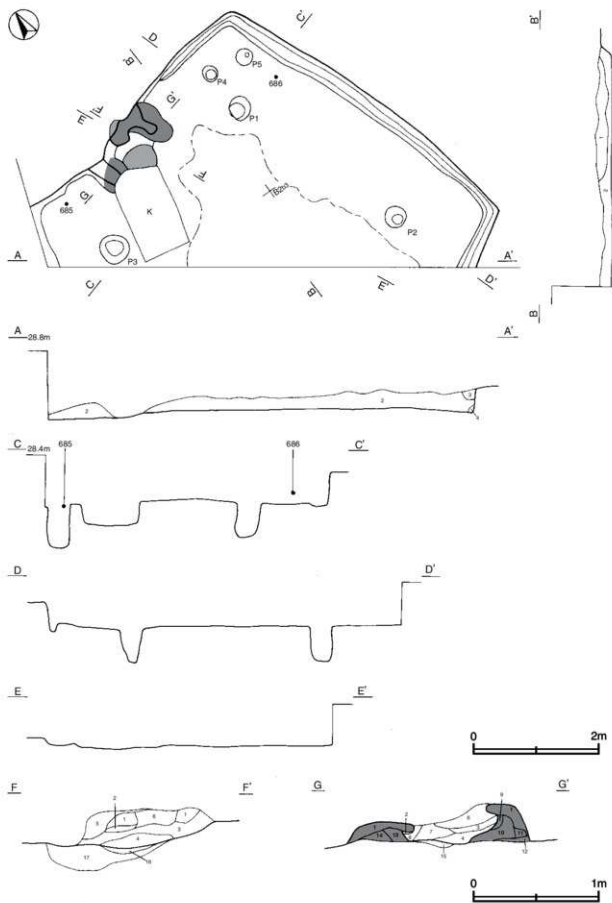
**覆土** 4層に分層される。各層にロームブロックが多く含まれている状況から、人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

1	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物少量	3	褐色	ロームブロック中量
2	黒褐色	炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量	4	褐色	ロームブロック多量、炭化粒子微量

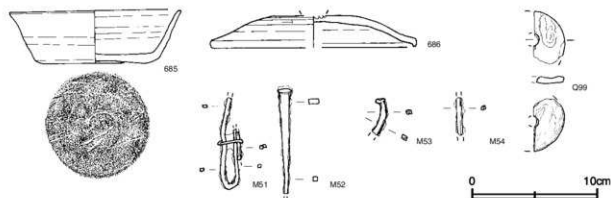
**遺物出土状況** 土師器片199点(坏類6, 甕類193), 須恵器片58点(坏類26, 高台付坏10, 蓋4, 甕類17, 円面碗1), 石製品1点(紡錘車), 鉄製品4点(釘3, 不明1), 流れ込んだ弥生土器片3点が東部の覆土上層から床面にかけて多く出土している。685は北西部の床面, 686は北東部の覆土中層, Q 99・M51~M54は覆土中からそれぞれ出土している。

**所見** 時期は、出土土器から8世紀後葉と考えられる。



第42図 第124号住居跡実測図





第43図 第124号住居跡出土遺物実測図

第124号住居跡出土遺物観察表（第43図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
685	須恵器	坏	13.6	4.2	8.2	長石・石英・針生産物	灰	普通	底部回転ヘラ削り	床面	60% PL15
686	須恵器	蓋	[16.2]	(2.5)	—	長石・石英	オリーブ灰	普通	天井部回転ヘラ削り	中層	30%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
Q99	紡錘車	(4.2)	(2.6)	0.6	(7.2)	泥岩	全面摩耗		覆土中		
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
M51	不明	(7.3)	2.0	0.3	(4.7)	鉄	断面方形		覆土中	PL21	
M52	釘	(8.4)	1.1	0.4	(9.8)	鉄	頭部断面長方形 先端部断面方形		覆土中	PL21	
M53	釘	(3.0)	0.8	0.4	(2.6)	鉄	断面方形 先端欠損		覆土中		
M54	釘	(3.2)	0.4	0.4	(2.4)	鉄	断面方形 両端欠損		覆土中		

#### 第125号住居跡（第44・45図）

**位置** 調査区北部のA 2 3区で、緩やかな傾斜地に位置している。

**重複関係** 第137号住居に掘り込まれている。

**規模と形状** 西側を第137号住居に掘り込まれているため、南北軸2.89m、東西軸は3.0mほどの方形または長方形と推測される。主軸方向はN-4°-Eである。壁高は14cmで、外傾して立ち上がっている。

**床** はほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が、北東コーナー部を巡っている。

**竈** 北壁に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで0.91m、火床面は皿状に掘りくぼめられている。煙道部は壁外に71cm掘り込まれ、火床面から緩やかに立ち上がっている。第2層は、天井部の崩落層である。

#### 竈土層解説

- 1 暗褐色 焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物少量、ローム粒子微量
- 2 濃い黄褐色 粘土粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化材少量
- 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

**ピット** 1か所。深さ29cmで、竈と向かい合う位置にあり、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

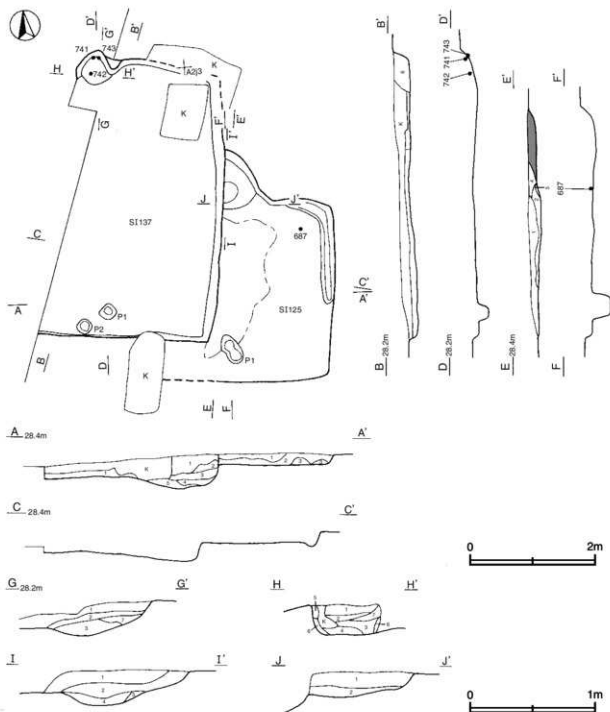
**覆土** 5層に分層される。壁際から土砂が流れ込んだ堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

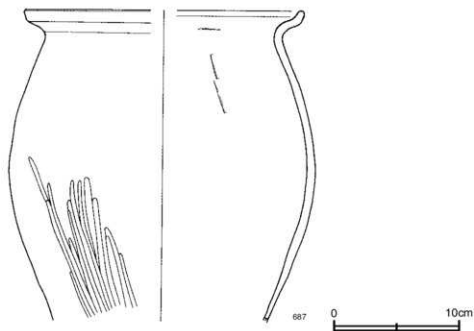
- |       |                 |       |                           |
|-------|-----------------|-------|---------------------------|
| 1 褐色  | ローム粒子中量, 焼土粒子微量 | 4 褐色  | 焼土ブロック・粘土粒子少量, ローム粒子微量    |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・炭化物少量   | 5 明褐色 | 粘土粒子中量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 褐色  | ロームブロック中量       |       |                           |

遺物出土状況 土師器片64点(坏類6, 壳類58), 須恵器片20点(坏類18, 蓋2), 流れ込んだ弥生土器片1点, 混入した瓦片1点が出土している。687は北東部の床面から, つぶれた状態で出土している。

所見 時期は, 出土土器と重複関係から, 8世紀後半と考えられる。



第44図 第125・137号住居跡実測図



第45図 第125号住居跡出土遺物実測図

第125号住居跡出土遺物観察表 (第45図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
687	土師器	甕	[21.8]	(24.7)	—	石英・雲母	にぶい褐	普通	口縁部懸ナデ 内面ヘラナデ 外面下直ヘラ巻き	床面	40%

#### 第126号住居跡 (第46・47図)

**位置** 調査区北部のA24区で、緩やかな傾斜地に位置している。

**重複関係** 第127号住居跡を掘り込み、第184号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸4.30m、短軸4.27mの方形で、主軸方向はN-8°-Eである。壁高は4~21cmで、外傾して立ち上がっている。

**床** はほぼ平坦で、中央部と西壁際の中央部が踏み固められている。壁溝が、北部を除いて巡っている。中央部には粘土と焼土の範囲が確認されている。床面が火熱により赤変しているため、竈部材の流れ込みとは考えにくく、炉の可能性が考えられる。

**竈** 北壁中央部に付設されている。覆乱を受けているため、残存部分で、焚口部から煙道部まで0.75mである。右袖部は床面と同じ高さの地山面の上に、粘土で構築されている。火床部は皿状に掘りくぼめられ、燃焼部は火熱により赤変している。とくに火床面は赤変硬化が顕著である。煙道部は壁外に49cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。

#### 竈土層解説

- 1 明褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 2 暗赤褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 にぶい黄褐色 粘土ブロック中量、ローム粒子・焼土粒子微量

**貯蔵穴** 北西コーナー部に位置し、長径89cm、短径73cmの楕円形で、深さ51cmである。東壁は段を持ち、外傾して立ち上がっている。

## 貯蔵穴土層解説

- |       |                         |      |                 |
|-------|-------------------------|------|-----------------|
| 1 黒褐色 | 焼土ブロック少量、粘土ブロック・ローム粒子微量 | 3 褐色 | 底辺バミス多量、ローム粒子微量 |
| 2 暗褐色 | 粘土ブロック少量、ローム粒子・焼土粒子微量   | 4 褐色 | ロームブロック中量       |

**ピット** 6か所。P3・P5は竈と向かい合う位置にあり、出入り口施設に伴うピットと考えられる。その他のピットは性格不明である。

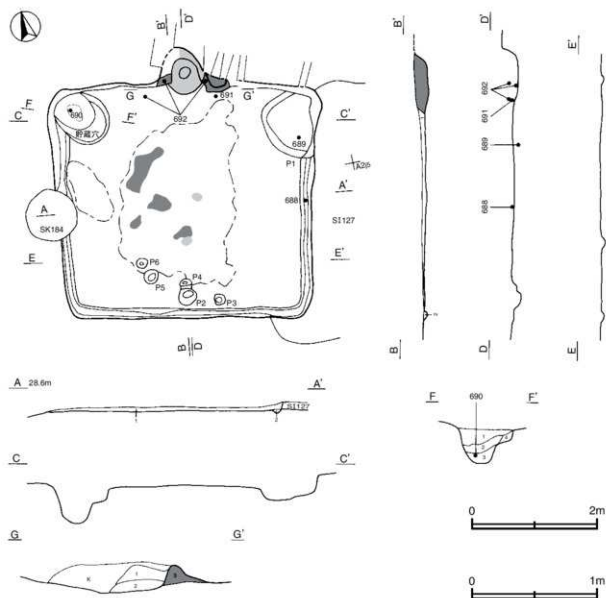
**覆土** 2層に分層される。層厚が薄いため、堆積状況は不明である。

## 土層解説

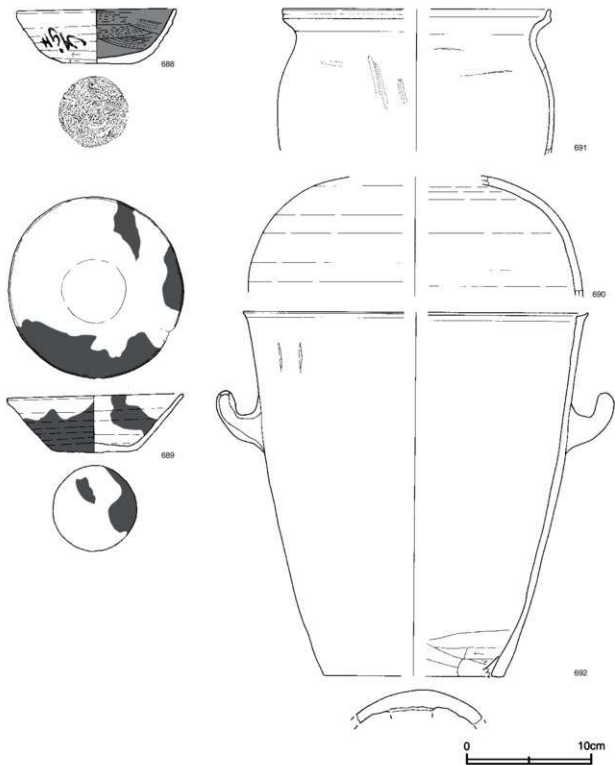
- |      |                       |       |         |
|------|-----------------------|-------|---------|
| 1 褐色 | ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 | 2 暗褐色 | ローム粒子微量 |
|------|-----------------------|-------|---------|

**遺物出土状況** 土師器片135点（坏類15，高台付坏1，甕類119），須恵器片26点（坏類5，蓋2，甕類1，甌18），流れ込んだ弥生土器片1点が出土している。688は東壁際の壁溝中から斜位で、689はP1の覆土上層から正位で、690は貯蔵穴の覆土下層、691は竈右袖跡の覆土下層から出土している。692は竈の補強材として用いられており、縦に半割した破片を、それぞれ口縁部が逆位の状態で両袖に貼り付けられて出土している。

**所見** 時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第46図 第126号住居跡実測図



第47図 第126号住居跡出土遺物実測図

第126号住居跡出土遺物観察表 (第47図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
688	土師器	坏	12.6	4.5	5.5	長石・石英	橙	普通	内面ヘラ巻き 体部下端・底部回転ヘラ削り	壇溝内	90% 灰草器 10% 赤瓦 PG5-2
689	須恵器	坏	14.1	4.7	6.8	石英・雲母・針状炭素物	灰	普通	底部回転ヘラ切り	P1上層	100% 須恵器 片基
690	須恵器	瓶罎壺	—	(9.6)	—	長石・石英・黒色 粘土・針状炭素物	灰黄	普通	ロケロ成形	貯蔵穴下層	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
691	土師器	甕	[21.2]	[11.6]	—	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部横ナデ 内面ヘラナデ 外面ヘラ磨き	竈前下層	10%
692	須恵器	瓶	[27.3]	29.1	[14.4]	長石・石英・雲母・緑泥石	黄灰	普通	ロウロ成形 内面ヘラナデ 下縁ヘラ磨り 外面ヘラナデ	竈袖部	約6%

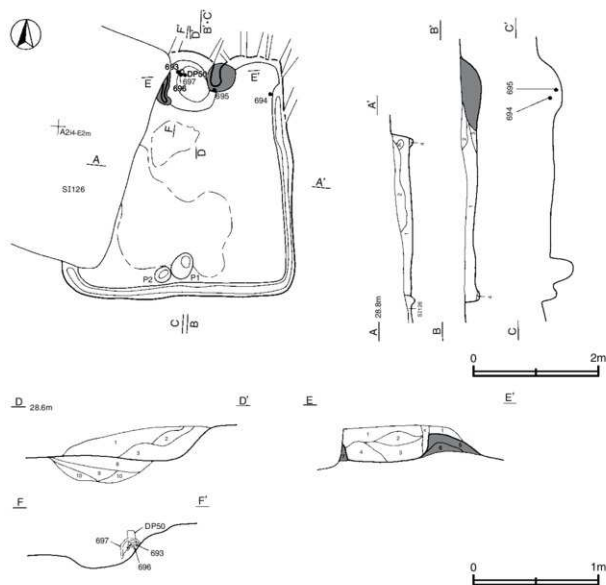
## 第127号住居跡 (第48・49図)

位置 調査区北部のA 214区で、緩やかな傾斜地に位置している。

重複関係 第126号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.78m、短軸3.67mの方形で、主軸方向はN-6°-Eである。壁高は14~30cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が、北東部の壁下を除いて巡っている。

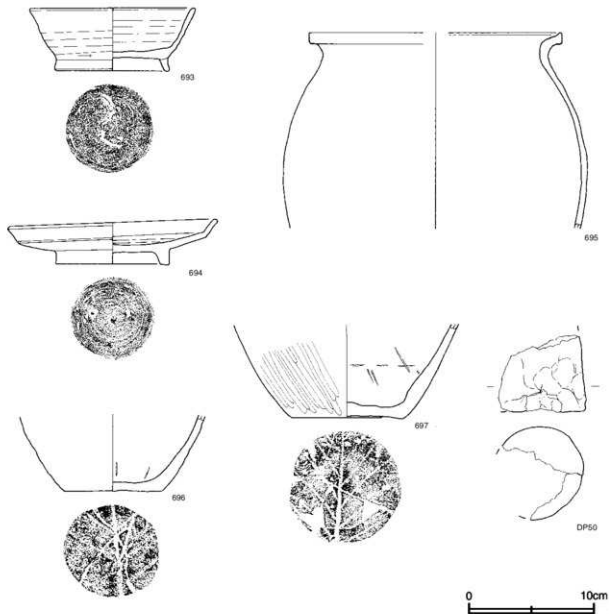


第48図 第127号住居跡実測図

竈 北壁中央部に付設されている。左袖部は第126号住居に掘り込まれている。残存している部分で、焚口部から煙道部まで0.96mで、袖部は床面と同じ高さの地山面の上に、砂質粘土を用いて構築されている。火床部は皿状に掘りくぼめられている。煙道部は壁外に21cm掘り込まれ、火床面から緩やかに立ち上がっている。第8層以下は、竈の掘り方の埋土である。

竈土層解説

- |        |                                     |           |                                  |
|--------|-------------------------------------|-----------|----------------------------------|
| 1 褐 色  | 砂質粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量、<br>焼土粒子微量    | 6 褐 色     | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・鹿沼<br>パミス微量  |
| 2 褐 色  | 砂質粘土ブロック多量、炭化粒子少量、ローム粒<br>子・焼土粒子微量  | 7 明 褐色    | 粘土ブロック多量、ローム粒子・焼土粒子・炭化<br>粒子微量   |
| 3 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、炭化物少量、砂質粘土ブロッ<br>ク・ローム粒子微量 | 8 明 褐色    | 砂質粘土ブロック多量、ローム粒子・焼土粒子・<br>炭化粒子微量 |
| 4 暗 褐色 | ロームブロック・炭化物少量、焼土ブロック・砂<br>質粘土ブロック微量 | 9 明 褐色    | 粘土ブロック多量、ローム粒子・鹿沼パミス微量           |
| 5 暗 褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒<br>子・鹿沼パミス微量  | 10 にぶい赤褐色 | 粘土ブロック多量、焼土粒子中量、ローム粒子・<br>炭化粒子微量 |



第49図 第127号住居跡出土遺物実測図

**ピット** 2か所。ともに竈と向かい合う位置にあり、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

**覆土** 4層に分層される。壁際から土砂が流れ込んだ堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

## 土層解説

- 1 期 色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子微量 3 暗褐色 ロームブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量  
2 期 色 ロームブロック多量、焼土ブロック・炭化粒子微量 4 暗褐色 ローム粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片127点（坏1，甕類126），須恵器片15点（坏類9，蓋1，甕2，甕類3），土製品1点（支脚），流れ込んだ弥生土器片5点が出土している。693・696・697・DP50は竈の支脚として使用されたもので、下から696・693・697・DP50の順でそれぞれ逆位で出土している。694は北東部の床面から出土している。  
**所見** 時期は、出土土器から8世紀後葉と考えられる。

## 第127号住居跡出土遺物観察表（第49図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
693	須恵器	高台付坏	13.0	5.0	9.0	長石・石英	灰	普通	体部下端・底部回転ヘラ削り	竈内	95% PL17
694	須恵器	盤	16.2	3.7	9.1	長石・石英・計状炭物	灰オリーブ	普通	底部回転ヘラ切り	床面	80%
695	土師器	甕	[20.0]	(15.6)	-	長石・石英・小礫	明赤褐	普通	被熱により調整不明	竈内	5%
696	土師器	甕	-	(6.0)	7.7	長石・石英・雲母	橙	普通	内面ヘラナデ	竈内	20%
697	土師器	甕	-	(7.5)	8.9	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	内面ヘラナデ 輪積み痕 外面ヘラ磨き	竈内	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP50	支脚	(6.2)	(7.1)	(7.4)	(162.9)	赤色粒子・砂粒	指頭圧痕の残るナデ	竈内	

## 第128号住居跡（第50図）

**位置** 調査区北部のB 2 d5区で、緩やかな傾斜地に位置している。

**規模と形状** 南部が調査区域外へ延びているため、確認できた範囲は長軸5.52m、短軸5.09mの方形又は長方形と推測され、主軸方向はN-5°-Eである。壁高は最大16cmで、外傾して立ち上がっている。

**床** ほほ平坦で、中央部が踏み固められている。

**竈** 北壁中央部に付設されている。遺構確認の段階で床面が一部露出しており、竈も火床面のみの確認である。

## 土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子微量

**ピット** 5か所。P1～P3は深さ86～94cmで、規模や配置から主柱穴と考えられる。P4・P5は性格不明である。

**覆土** 3層に分層される。大部分が攪乱を受けており、層厚が薄いため、堆積状況は不明である。

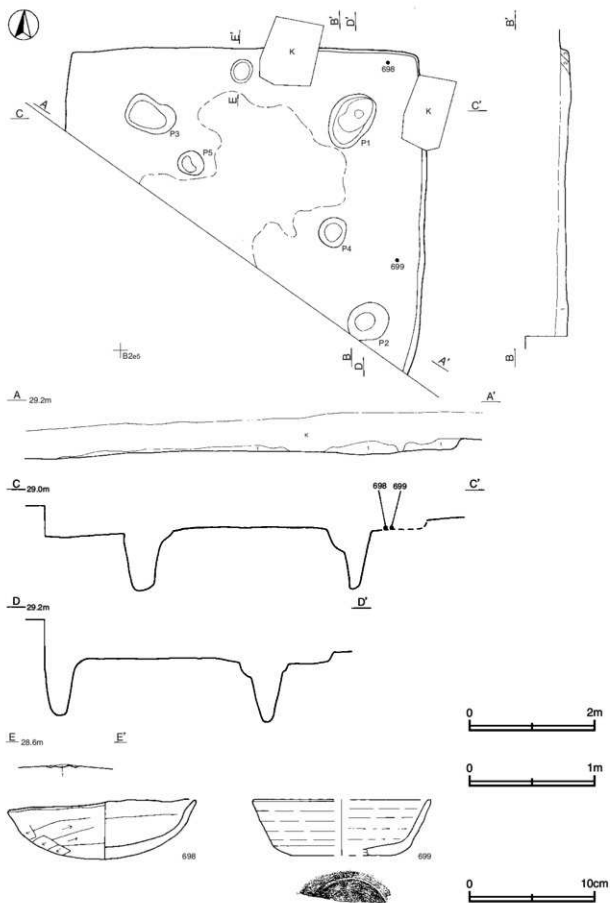
## 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 3 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量  
2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片23点（坏類5，甕類16，甕2），須恵器片11点（坏類10，蓋1），流れ込んだ弥生土器片3点が東部の覆土下層から床面を中心に出土している。698は北東コーナー部の床面，699は東壁際の床面からそれぞれ出土している。

**所見** 時期は、出土土器から8世紀中葉と考えられる。





第50图 第128号住居跡出土遺物実測図

第128号住居跡出土遺物観察表 (第50図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
698	土師器	坏	14.9	4.7	—	長石・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナゲ 内面ナゲ 外面ヘウ削り	床面	70%
699	須恵器	坏	[14.0]	4.4	[8.2]	長石・石英・珪石 炭化物	黄灰	普通	底部回転ヘウ削り	床面直上	30%

## 第129号住居跡 (第51・52図)

**位置** 調査区北部のB 2 f0区で、平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第130号住居跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長軸4.78m、短軸4.72mの方形で、主軸方向はN-14°-Eである。壁高は20~25cmで、外傾して立ち上がっている。

**床** はほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が、南壁下を除いて巡っている。南部のP 5付近は貼り床で、褐色土(覆土土層断面図、第11層)を埋め土してつくられている。

**竈** 北壁中央部に付設されている。笑口部から煙道部まで1.07m、袖部幅は1.38mである。袖部は床面と同じ高さの地山面の上に、粘土と褐色土を混ぜた土で構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さで、火床面は火熱により赤変硬化している。煙道部は壁外へ59cm掘り込まれ、火床面から緩やかに立ち上がっている。第9・10層は、竈の掘り方の埋土である。

## 覆土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量	6 におい黄褐色	粘土粒子多量、焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
2 におい黄褐色	粘土粒子多量、焼土粒子少量、ローム粒子微量	7 黒褐色	炭化物少量、焼土ブロック・ローム粒子・粘土粒子微量
3 暗褐色	焼土ブロック・粘土粒子少量、ロームブロック・炭化物微量	8 におい黄褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量	9 暗赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック少量
5 暗赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック少量、炭化物・粘土粒子微量	10 褐色	ロームブロック中量

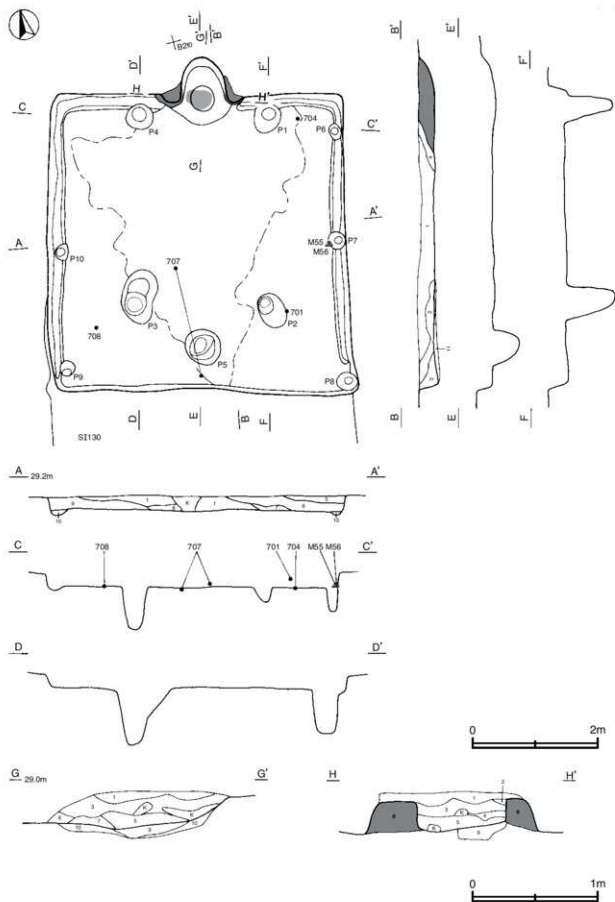
**ピット** 10か所。P 1~P 4は深さ72~90cmで、規模と位置から主柱穴と考えられる。P 5は深さ44cmで、竈と向かい合う位置にあり、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 6~P 10は、位置から壁柱穴と考えられる。

**覆土** 11層に分層される。ロームブロックを多く含み、不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。第11層は貼り床の構築土である。

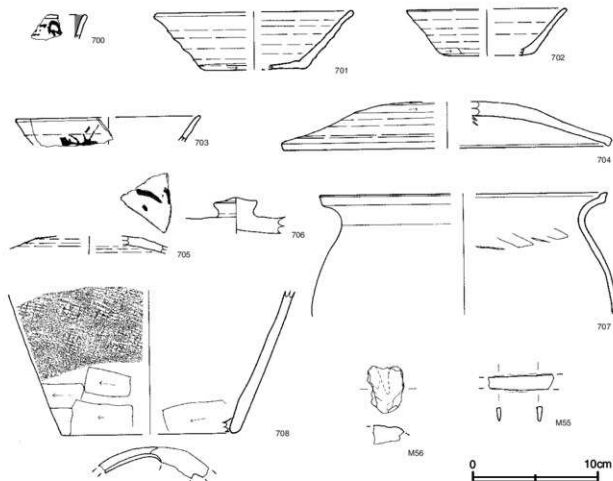
## 土層解説

1 褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量	6 暗褐色	ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子微量
2 褐色	ロームブロック中量、鹿沼パミス少量、焼土粒子・炭化粒子微量	7 褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	8 褐色	ロームブロック中量、鹿沼パミス少量、焼土粒子・炭化粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック・炭化物・焼土粒子少量	9 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	10 褐色	ロームブロック中量、炭化物微量
		11 褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片446点(坏4, 高台付坏4, 甕類438), 須恵器片79点(坏類22, 高台付坏4, 蓋20, 高盤1, 甕類28, 瓶4), 鉄器1点(刀子), 鉄滓3点, 流れ込んだ弥生土器片13点が全域の覆土上層から床面にかけて出土している。702・705・706は竈内からそれぞれ出土している。704は北東コーナー部の床面と竈内から出土した破片が接合したものである。707は中央部の床面と南部中央の覆土下層, P 2の覆土中, 竈内から出土した破片が接合したものである。708は南西部の床面, M55・M56は東壁際の覆土下層からそれぞれ出土している。竈以外から出土した遺物は、接合関係や出土状況から、住居の廃絶に伴い遺棄又は投棄されたものと



第51图 第129号住居跡実測图



第52図 第129号住居跡出土遺物実測図

考えられる。竈内から出土した遺物は、二次焼成を受けておらず、破片で出土している状況から竈内にまともて廃棄されたものと考えられる。

所見 出土土器から比較的長期間の居住が考えられる。廃絶時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。

第129号住居跡出土遺物観察表 (第52図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
700	土師器	坏	—	(2.0)	—	石英・重雲母・針状炭素	橙	普通	内面ヘラ磨き	覆土中	5% 体部重雲母 [□]
701	須恵器	坏	[15.3]	4.6	[8.0]	石英・雲母	黒	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部多方向のヘラ削り	下層	10%
702	須恵器	坏	[12.4]	3.7	[7.5]	長石・石英	灰	普通	体部下端ヘラ削り 底部ナデ	竈内	10%
703	須恵器	坏	[14.6]	(2.1)	—	長石・石英・針状炭素	灰黄	普通	ロクロナデ	覆土中	5% 体部重雲母 [□]
704	須恵器	蓋	[26.0]	(3.6)	—	長石・石英・針状炭素	灰	普通	天井部回転ヘラ削り	床面～竈内	20% 内面ヘラ磨き [□]
705	須恵器	蓋	—	(1.4)	—	長石・石英・針状炭素	暗灰黄	普通	天井部回転ヘラ削り	竈内	5% 内面重雲母 [□]
706	須恵器	蓋	—	(2.9)	—	長石・石英・黒色粘土	灰	普通	天井部回転ヘラ削り	竈内	5%
707	土師器	甕	[22.8]	(9.6)	—	石英・雲母	にぶい黒	普通	口縁部内外面ナデ 内面ヘラナデ	床面～下層	5%
708	須恵器	瓶	—	(11.2)	[13.8]	長石・石英・雲母	にぶい黄緑	普通	内面下層ヘラ削り 外部下層格子目叩き後ヘラ削り	床面	5%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考
M55	刀子	(5.2)	1.2	0.4	(14.6)	鉄	刃先部・茎部欠損			下層	
M56	鉄滓	(3.8)	(2.9)	(1.5)	(22.0)	鉄	錆化している 着磁性は弱い			下層	

第130号住居跡 (第53・54図)

位置 調査区北部のB 2g0区で、平坦な台地上に位置している。

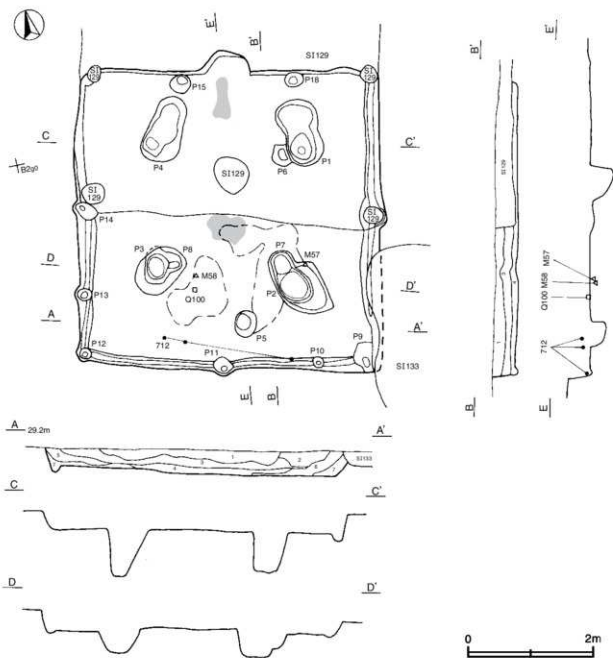
重複関係 第129・133号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.80m、短軸4.71mの方形で、主軸方向はN-6°-Eである。壁高は24~46cmで、外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で、南部の中央が踏み固められている。壁溝が、北壁下を除いて巡っている。中央部は火熱により赤変硬化しており、火を焚いた痕跡が確認された。

竈 北壁中央部に付設されている。第129号住居に掘り込まれているため、遺存状態が悪く、火床面の焼土がわずかに残るのみである。

ピット 16か所。P 1~P 4は深さ32~74cmで、規模と位置から主柱穴と考えられる。P 5は深さ44cmで、竈



第53図 第130号住居跡実測図

と向かい合う位置にあり、出入口施設に伴うピットと考えられる。P6～P8は配置と、P1～P4との重複関係から、P1～P4より古い柱穴と考えられる。その他のピットは位置から、壁柱穴と考えられる。

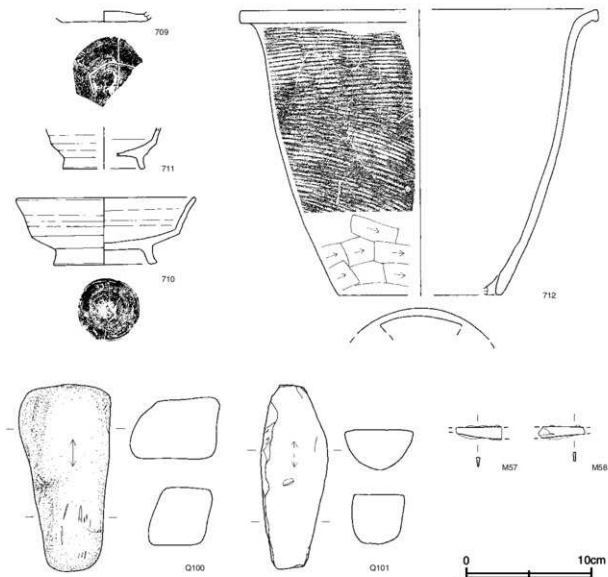
**覆土** 7層に分層される。不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

## 土層解説

- |       |                    |       |                      |
|-------|--------------------|-------|----------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・炭化物・焼土粒子少量 | 5 暗褐色 | 焼土ブロック・炭化物少量、ローム粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量   | 6 褐色  | ロームブロック中量            |
| 3 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック微量   | 7 黒褐色 | 炭化物少量、ローム粒子微量        |
| 4 黒褐色 | ロームブロック少量          |       |                      |

**遺物出土状況** 土師器片145点（坏類32，高台付坏6，甕類107），須恵器片60点（坏類22，高台付坏5，蓋2，甕類26，甕5），焼成粘土塊14点，石器1点（磨石），鉄器2点（刀子），流れ込んだ弥生土器片8点が全域の覆土上層から床面にかけて出土している。709・Q101は覆土中，710・M57はP2内，711はP10の覆土中，712は南壁際の覆土中層から出土した破片が接合したものである。Q100は中央部の覆土下層，M58は中央部の床面からそれぞれ出土している。

**所見** 本跡には7本の柱穴が確認された。柱穴同士の重複関係がみられることから、建て替えが行われた可能性が考えられる。時期は、出土土器と重複関係から8世紀後葉と考えられる。



第54図 第130号住居跡出土遺物実測図

第130号住居跡出土遺物観察表（第54図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
709	須恵器	坏	—	(0.9)	6.6	長石・黒色粒子	黄灰	普通	底部ナデ	覆土中	5% 或更へう書き
710	須恵器	高台付坏	14.1	5.3	[8.2]	長石・石英・針状炭素物	にふい赤褐色	不良	底部回転へう削り 二次焼成	P2内	60%
711	須恵器	高台付坏	—	(3.2)	[6.4]	長石・針状炭素物	にふい黄褐色	普通	底部回転へう削り	P10内	30%
712	須恵器	瓶	[28.2]	22.6	[12.9]	長石・石英・針状炭素物	褐灰	普通	内面へうナデ 外面土層積位の平行叩き 下層削位の平行叩き後へう削り	中層	30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q100	砥石	14.9	7.3	5.0	845	砂岩	砥面1面 筋溝状の研磨痕	下層	PL20
Q101	砥石	14.6	5.3	3.9	389	砂岩	砥面1面	覆土中	PL20

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M57	刀子	(3.7)	(1.0)	0.2	(5.8)	鉄	刃先端・基部欠損	P2上層	
M58	刀子	(3.8)	(0.9)	0.2	(10.4)	鉄	断面方形 基部	床面	

## 第131号住居跡（第55図）

位置 調査区北部のB3f2区で、平坦な台地上に位置している。

重複関係 第132号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸2.57m、短軸2.32mの方形で、主軸方向はN-10°-Eである。壁高は12~22cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで1.10m、袖部幅は1.05mである。袖部は凹凸に掘り込まれた地山面の上に、砂質粘土とローム土を混ぜて構築されている。火床部は皿状に掘りくぼめられ、火床面及び袖の燃焼部側が火熱により赤変硬化している。煙道部は壁外に48cm掘り込まれ、火床面から直立している。

## 土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量	6 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子微量
2 暗褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック微量	7 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量、砂質粘土粒子微量
3 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	8 褐色	ロームブロック中量
4 にふい赤褐色	焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量		
5 褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・砂質粘土粒子微量		

ピット 5か所。P1~P4は深さ12~21cmで、位置から主柱穴と考えられる。P5は深さ23cmで、竈と向かい合う位置にあり、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

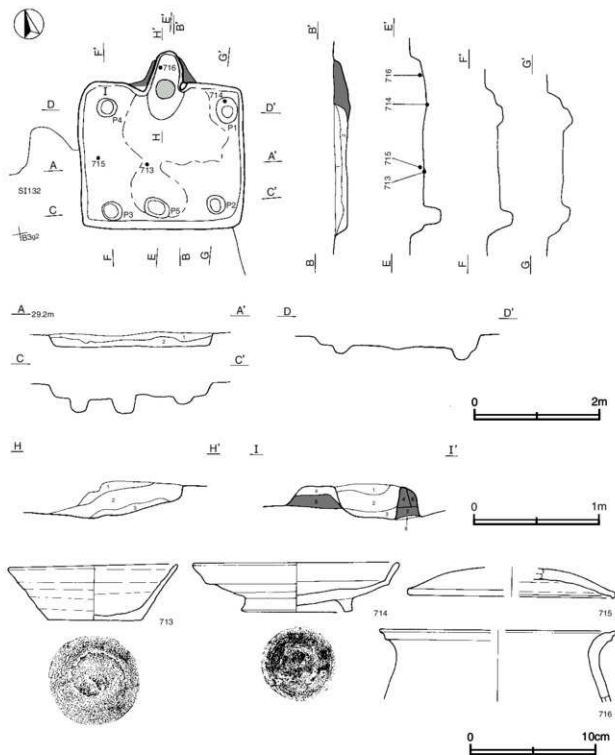
覆土 2層に分層される。レンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

## 土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	2 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
-------	---------------------	-------	-----------------------

遺物出土状況 土師器片75点（坏類3、高台付坏1、甕類71）、須恵器片53点（坏類38、高台付坏1、蓋7、盤1、甕類6）、流れ込んだ弥生土器片8点が全域の覆土上層から床面にかけて出土している。713は中央部の床面、714は北東コーナー部のP1確認面、715は西部中央の覆土下層、716は竈内からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。



第55図 第131号住居跡・出土遺物実測図

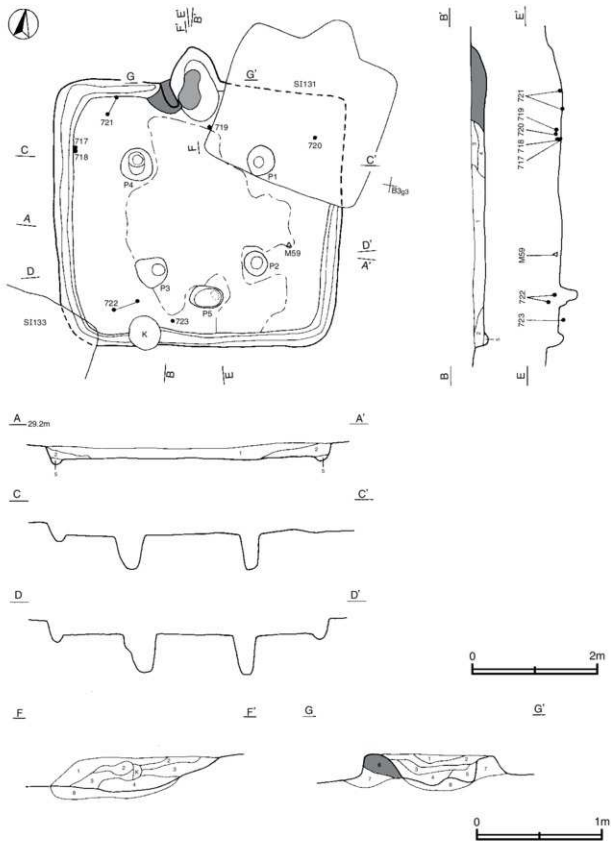
第131号住居跡出土遺物観察表 (第55図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
713	須恵器	坏	13.3	4.7	7.4	長石・針状鉱物	灰	普通	底部回転ヘラ切り	床面	90%
714	須恵器	盤	16.2	4.0	8.8	長石・針状鉱物・繊維	灰	普通	ロケロナデ 底部回転ヘラ削り或高台削り付け	P1確認面	90% PL17
715	須恵器	蓋	[16.2]	(2.3)	—	長石・黒色粒子	灰	普通	天井部自然軸により調整不明	下層	20%
716	土師器	甕	[18.8]	(5.6)	—	長石・雲母	にぶい橙	普通	口縁部内外面横ナデ	甕内	5%



第132号住居跡 (第56～58図)

位置 調査区北部のB 3 g2区で、平坦な台地上に位置している。



第56図 第132号住居跡実測図

**重複関係** 第131・133号住居に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸4.54m、短軸4.24mの方形で、主軸方向はN-11°-Wである。壁高は18~24cmで、外傾して立ち上がっている。

**床** ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が、全周していると推測される。

**竈** 北壁中央部に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで1.18m、袖部幅は1.30mである。袖部は凹凸に掘り込んだ地山面に暗褐色の土を埋め戻し、粘土を用いて構築されている。火床部は皿状に掘りくぼめられ、火床面は火熱により赤変硬化している。煙道部は壁外に61cm掘り込まれ、火床面から緩やかに立ち上がっている。第2層は、天井部の崩落層である。第8層は、竈の掘り方の埋土である。

**竈土層解説**

1 暗褐色	焼土ブロック・炭化物・ローム粒子少量、砂質粘土粒子微量	5 褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量
2 暗褐色	砂質粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	6 褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量、砂質粘土粒子微量	7 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
4 暗赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子微量	8 暗赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子微量

**ピット** 5か所。P1~P4は深さ52~61cmで、規模と位置から主柱穴と考えられる。P5は深さ17cmで、竈と向かい合う位置にあり、出入口施設に伴うピットと考えられる。

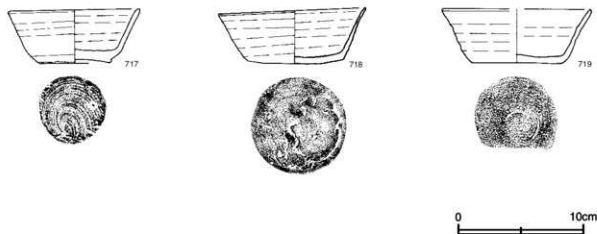
**覆土** 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

**土層解説**

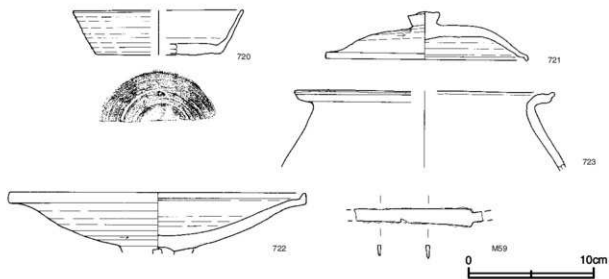
1 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量	3 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量
2 褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	4 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量
		5 褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量

**遺物出土状況** 土師器片139点（高台付坏2、甕類137）、須恵器片42点（坏類21、高台付坏1、蓋12、高盤1、甕類7）、鉄器1点（刀子）のほか、流れ込んだ弥生土器片11点が全域の覆土中層から床面に掛けて出土している。717・718は西壁際の床面から正位で、重なった状態で出土している。719は中央部の覆土下層と竈内から出土した破片が接合しており、竈の天井部崩落と共に竈前に流れたと考えられる。722は南西コーナー部の覆土中層と下層から出土した破片が逆位で、721・723は北西コーナー部、南部の中央壁際の床面、M59は東部中央の覆土下層からそれぞれ出土している。722・M59は住居の廃絶後、早い段階で流れ込んだと考えられる。

**所見** 廃絶時期は、出土土器や重複関係から8世紀後葉と考えられる。



第57図 第132号住居跡出土遺物実測図(1)



第58図 第132号住居跡出土遺物実測図(2)

第132号住居跡出土遺物観察表 (第57・58図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
717	須恵器	坏	10.3	4.3	5.5	長石	灰	良好	底部回転糸切り	床面	100%
718	須恵器	坏	11.6	4.5	7.7	長石・石英	灰黄	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	床面	100%
719	須恵器	坏	[11.6]	4.2	7.1	長石・針状鉱物	灰白	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	下層～壺内	70% PL16
720	須恵器	坏	[13.4]	3.5	[9.7]	長石・針状鉱物	灰	普通	底部回転ヘラ削り	床面	40%
721	須恵器	蓋	16.0	3.8	—	長石・石英・黒色粒子	黄灰	普通	天井部回転ヘラ削り	床面	70% PL17
722	須恵器	高盤	23.3	(4.8)	—	長石・石英	灰	普通	皿部外面下位回転ヘラ削り 透かし有り	中層～下層	80% 皿部内面黒色ヤ
723	土師器	甕	[20.5]	(6.2)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部内外面横ナデ 内面ヘラナデ	床面	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M59	刀子	(10.4)	1.3	0.4	(13.1)	鉄	刃先・茎尻欠損 両側	下層	PL21

### 第133号住居跡 (第59図)

**位置** 調査区北部のB 3 g1区で、平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第130・132号住居跡を掘り込み、第59号掘立柱建物と第12ピット群に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸2.76m、短軸2.63mの方形で、主軸方向はN-12°-Eである。壁高は24cmで、外傾して立ち上がっている。

**床** ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

**竈** 北壁の東寄りに付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで0.50m、袖部幅は1.06mである。袖部は床面と同じ高さの地山面の上に、砂質粘土主体の土で構築されている。火床部は皿状に掘りくぼめられ、燃焼部全体が火熱により赤変硬化している。煙道部は壁外に5cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。第5層は、天井部の崩落層である。

#### 遺土層解説

- |   |   |    |                             |   |   |    |                             |
|---|---|----|-----------------------------|---|---|----|-----------------------------|
| 1 | 褐 | 色  | ローム粒子・砂質粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量 | 3 | 赤 | 褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化物粒子少量        |
| 2 | 黒 | 褐色 | 焼土ブロック・炭化物少量、ローム粒子・砂質粘土粒子微量 | 4 | 暗 | 褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子微量          |
|   |   |    |                             | 5 | 暗 | 褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子・砂質粘土ブロック微量 |

- 6 褐色 砂質粘土ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子微量      8 灰褐色 焼土粒子・砂質粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量  
7 褐色 ローム粒子微量

**ピット** 1か所。深さ11cmで、竈と向かい合う位置にあり、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

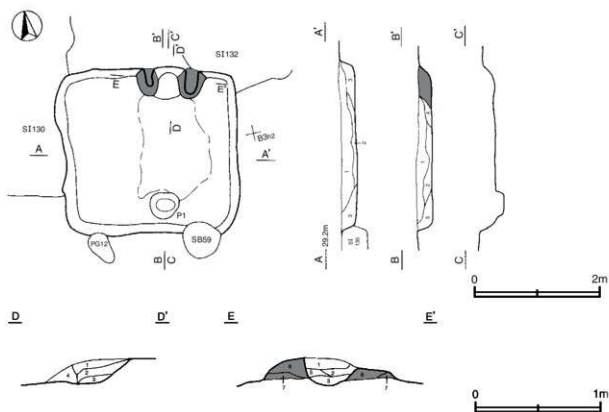
**覆土** 4層に分層される。土砂が壁際から流れ込んだ堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

**土層解説**

- 1 褐色 ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量      4 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子・粘土粒子微量  
2 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量  
3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片32点(甕類), 須恵器片3点(高台付坏2, 甕1), 流れ込んだ弥生土器片9点が出土している。いずれも細片のため、図示できなかった。

**所見** 時期は, 出土土器と重複関係から9世紀前半と考えられる。



第59図 第133号住居跡実測図

**第134号住居跡** (第60・61図)

**位置** 調査区北部のB3I3区で、平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第7ピット群に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸3.68m、短軸3.56mの方形で、主軸方向は $N-5^{\circ}-E$ である。壁高は25~46cmで、外傾して立ち上がっている。

**床** ほぼ平坦で、北東壁際と西部中央を除いて踏み固められている。壁溝が、ほぼ全周している。

**竈** 北壁中央に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで1.19m、袖部幅は1.35mである。袖部は地山面を床面より高く掘り残し、その上に暗褐色土、粘土と細礫を混ぜた土を用いて構築されている。火床部は皿

状に掘りくほめられ、煙道部付近が火熱により赤変硬化している。煙道部は壁外に40cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。第11層は、竈の掘り方の埋土である。

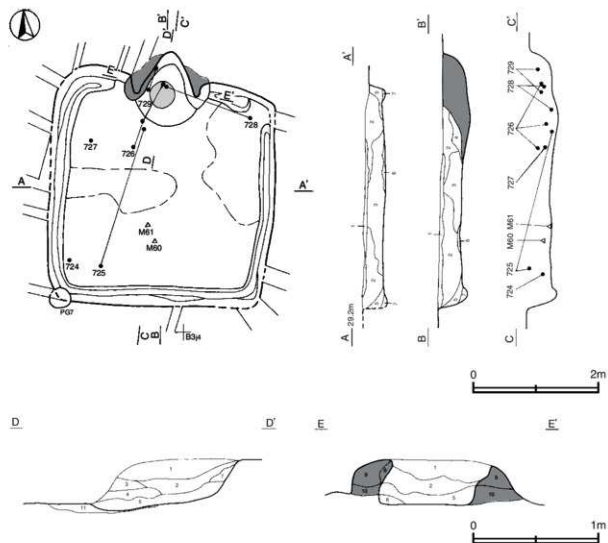
竈土層解説

- |        |                                 |        |                               |
|--------|---------------------------------|--------|-------------------------------|
| 1 暗褐色  | ローム粒子・砂質粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量      | 6 褐色   | ロームブロック中量、炭化粒子微量              |
| 2 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物少量、砂質粘土粒子微量 | 7 褐色   | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量         |
| 3 褐色   | ローム粒子・砂質粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量      | 8 黄褐色  | 粘土ブロック多量、焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量  |
| 4 灰褐色  | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量、砂質粘土粒子微量      | 9 明黄褐色 | 粘土ブロック・繊維多量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 暗褐色  | ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子・砂質粘土粒子微量       | 10 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子微量          |
|        |                                 | 11 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量         |

覆土 7層に分層される。不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

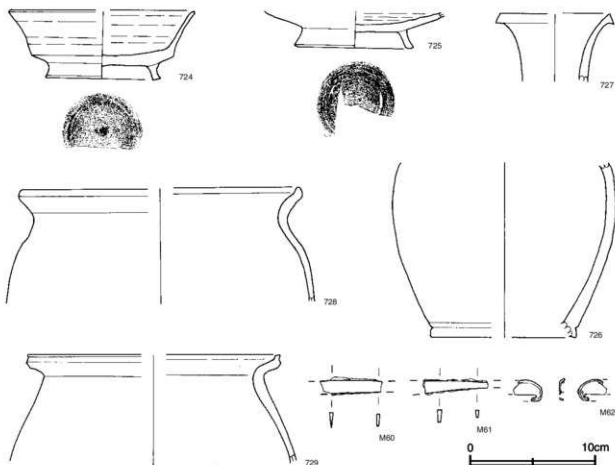
- |       |                              |       |                  |
|-------|------------------------------|-------|------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量                      | 5 黒褐色 | ローム粒子微量          |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量          | 6 褐色  | ロームブロック少量        |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック微量             | 7 褐色  | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 4 褐色  | ロームブロック・砂質粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |       |                  |



第60図 第134号住居跡実測図

**遺物出土状況** 土師器片378点（坏類8，甕類370），須恵器片124点（坏類87，高台付坏7，蓋2，盤11，甕類16，瓶類1），鉄器2点（刀子），銅製品1点（丸軋），鉄滓1点，流れ込んだ弥生土器片12点が全域の覆土上層から床面にかけて出土している。724は南西部の覆土中層，725は甕内の床面と南西部の覆土上層から出土した破片が，728は甕内と北東コーナー部の覆土中層から出土した破片が接合している。726・727は同一個体と考えられ，北西部の覆土中層から甕内にかけて，729は甕内，M60・M61は中央部の覆土下層から床面直上，M62は覆土中から出土している。破片が広範囲に出土している状況から，いずれも住居の廃絶に伴い投棄されたものと考えられる。

**所見** 廃絶時期は，出土土器から9世紀前葉と考えられる。



第61図 第134号住居跡出土遺物実測図

第134号住居跡出土遺物観察表（第61図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
724	須恵器	高台付坏	[14.5]	5.5	9.2	長石・石英	にぶい橙	不良	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	中層	50%
725	須恵器	盤	—	(2.9)	9.4	長石・石英・針状磁物	灰黄	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	床面～上層	5%
726	須恵器	長頸瓶	—	(13.8)	[11.6]	長石・石英・針状磁物	灰	普通	ロクロナデ	中層～甕内	30%
727	須恵器	長頸瓶	[8.8]	(5.4)	—	長石・石英・黒色粘土	暗灰黄	普通	ロクロナデ 自然釉付着	中層～甕内	5%
728	土師器	甕	[22.0]	(9.1)	—	石英・雲母	橙	普通	口縁部内外面横ナデ	中層～甕内	5%
729	土師器	甕	[19.8]	(8.5)	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部内外面横ナデ	甕内	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M60	刀子	(4.9)	1.1	0.2	(7.6)	鉄	刃先・基部欠損 両側	床面直上	
M61	刀子	(5.1)	1.1	0.3	(5.5)	鉄	刃先・基部欠損	下層	
M62	丸鞘	[1.7]	(2.4)	0.5	(2.8)	銅	鋸二か所 長方形の垂孔が開く	覆土中	PL21

### 第135号住居跡 (第62・63図)

**位置** 調査区北部のC 3d8区で、平坦な台地上に位置している。

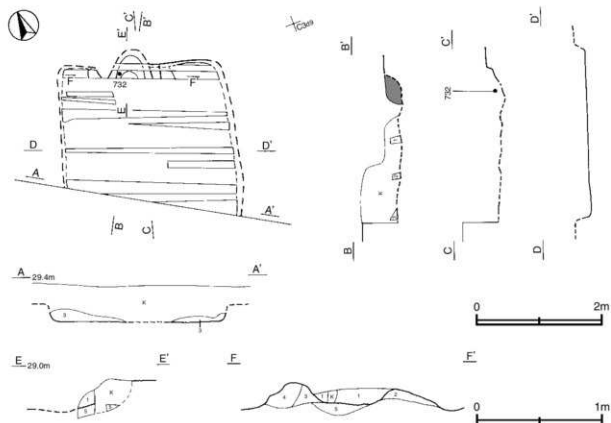
**規模と形状** 南部が調査区域外へ延びているため、確認できた範囲は長軸2.81m、短軸2.42mの方形又は長方形と推測され、主軸方向はN-18°-Eである。壁高は20cmほどで、外傾して立ち上がっている。

**床** は平坦である。

**竈** 北壁中央に付設されている。擾乱により全容は不明である。確認された袖部幅は1.37mである。袖部は凹凸した地山面の上に、砂質粘土を用いて構築されている。火床部は皿状に掘りくぼめられている。第5層は、竈の掘り方の埋土である。

#### 竈土層解説

- |         |                                |         |                                  |
|---------|--------------------------------|---------|----------------------------------|
| 1 暗褐色   | 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土<br>粒子微量 | 4 にい黄褐色 | 砂質粘土ブロック多量、ローム粒子・焼土粒子・<br>炭化粒子微量 |
| 2 にい黄褐色 | 砂質粘土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子微量        | 5 暗赤褐色  | 焼土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量<br>粒子微量    |
| 3 褐色    | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土<br>粒子微量 |         |                                  |



第62図 第135号住居跡実測図

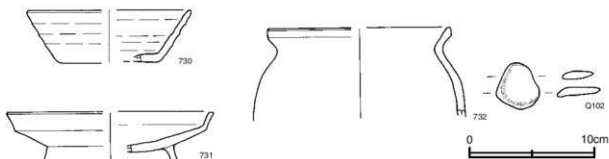
**覆土** 3層に分層される。大部分が攪乱を受けているため、堆積状況は不明である。

## 土層解説

- 1 にぶい黄褐色 ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量、焼土 2 暗褐色 炭化粒子・砂質粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量  
3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片103点（坏1，高台付坏2，甕類99，甌1），須恵器片78点（坏類56，高台付坏2，蓋3，盤4，甕類13），石器1点（砥石），流れ込んだ弥生土器片5点が出土している。730は覆土中，732は竈内からそれぞれ出土している。731は覆土中と竈内から出土した破片が接合したものである。

**所見** 時期は，出土土器から8世紀後葉と考えられる。



第63図 第135号住居跡出土遺物実測図

## 第135号住居跡出土遺物観察表（第63図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
730	須恵器	坏	[12.8]	4.2	[7.6]	長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ切り	覆土中	5%
731	須恵器	盤	[16.2]	3.8	[10.5]	長石・針状鉱物	灰	普通	底部回転ヘラ削り後高台貼り付け	竈内～覆土中	10%
732	土師器	甕	[14.4]	[7.1]	—	石英・雲母	にぶい褐	普通	口縁部内外面横ナデ	竈内	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q02	磨石	3.6	3.5	0.8	12.8	ホルンフェルス	全面使用	中層	

## 第136号住居跡（第64～66図）

**位置** 調査区北部のC3b0区で，平坦な台地上に位置している。

**規模と形状** 東部が調査区域外へ延びているため，確認できた範囲は長軸4.20m，短軸2.90mの方形又は長方形と推測される。主軸方向はN-9°-Eである。壁高は7～18cmである。

**床** ほほ平坦で，中央部の広い範囲が踏み固められている。壁溝が，北壁下を除いて巡っている。

**竈** 北壁に付設されている。規模は，焚口部から煙道部まで1.45m，袖部幅は1.50mである。袖部は砂質粘土を用いて構築されている。火床部は皿状に掘りくぼめられている。火床面は焼土の遺存が少ないが，火床面と煙道部の間は火熱により赤変硬化している。煙道部は壁外に43cm掘り込まれ，火床面から直立している。第10・11層は，竈の掘り方の埋土である。

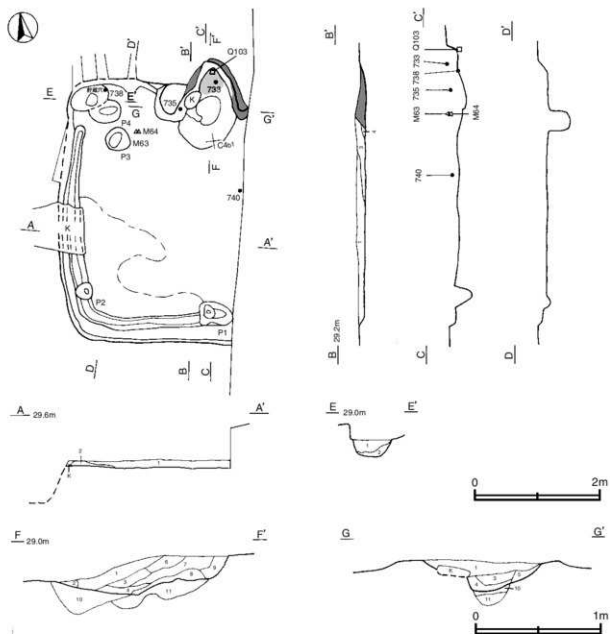


遺土層解説

- |        |                              |        |                                |
|--------|------------------------------|--------|--------------------------------|
| 1 暗褐色  | ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子・砂質粘土粒子微量    | 6 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、炭化粒子少量、ローム粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 2 極暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量   | 7 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック・砂質粘土粒子微量      |
| 3 暗褐色  | 焼土ブロック・炭化物・砂質粘土粒子少量、ローム粒子微量  | 8 暗赤褐色 | 焼土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子微量          |
| 4 黒褐色  | ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量 | 9 暗褐色  | ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量        |
| 5 暗褐色  | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量        | 10 黒色  | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量            |
|        |                              | 11 赤褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック少量、炭化粒子微量      |

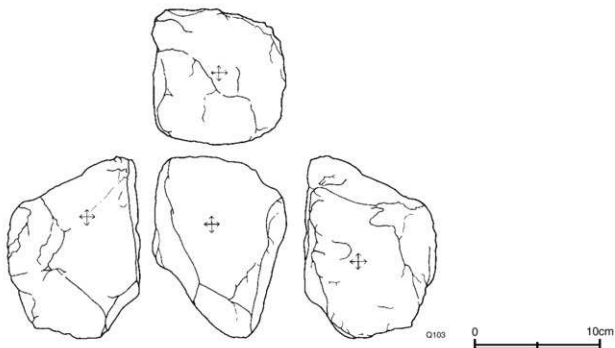
ピット 4か所。P1は深さ22cmで、竈と向かい合う位置にあり、出入り口施設に伴うピットと考えられる。その他のピットは位置が不規則で、性格は不明である。

貯蔵穴 北西コーナー部に位置し、長径59cm、短径38cmの楕円形で、深さ29cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。



第64図 第136号住居跡実測図





第66図 第136号住居跡出土遺物実測図(2)

第136号住居跡出土遺物観察表 (第65・66図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	粘土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
733	土師器	坏	[14.6]	4.3	—	長石・石英・赤鉄粉	にぶい黄橙	普通	内面ヘラ磨き	竈内	10%
734	土師器	坏	[13.8]	4.0	[7.4]	長石・石英・赤鉄粉	橙	普通	内面ヘラ磨き	竈内	5%
735	土師器	坏	[17.2]	(4.5)	—	石英・雲母	橙	普通	内面ヘラ磨き	竈内	5%
736	土師器	坏	[12.0]	4.3	[5.6]	長石・石英・赤鉄粉	橙	普通	内面ヘラ磨き 体部下端回転ヘラ磨り 底部回転ヘラ磨り	竈内	10%
737	灰釉陶器	碗	[14.0]	(2.8)	—	緻密	明オリーブ灰-灰白	良好	口縁部内外面刷毛塗り	覆土中	5% 重政遺集第14号第5式器
738	土師器	甕	[22.9]	(9.5)	—	長石・石英・赤鉄粉	橙	普通	口縁部内外面ナデ 内面ヘラナデ 外面ヘラ磨り	貯蔵穴上層	5%
739	土師器	瓶	—	(11.0)	—	長石・石英・赤鉄粉	にぶい黄橙	普通	口縁部内外面ナデ 内面ヘラナデ 外面ヘラ磨り	竈内	5%
740	土師器	置き籠	[19.0]	(9.9)	—	長石・石英・赤鉄粉	にぶい橙	普通	内外面輪積み痕	下層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q103	砥石	14.5	10.6	10.5	1,820	花崗岩	砥面4面	竈内	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M63	刀子	[11.6]	1.1	0.3	(18.6)	鉄	刃先部欠損	中層	
M64	釘	(6.5)	0.5	0.4	(12.7)	鉄	両端欠損 断面方形	中層	

### 第137号住居跡 (第44・67図)

位置 調査区北部のA2区で、緩やかな傾斜地に位置している。

重複関係 第125号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 西部は調査区域外に延びているため、確認された範囲は長軸4.44m、短軸2.66mで、方形又は長方形と推測される。主軸方向はN-8°-Eである。壁高は22~44cmで、直立している。

床 はほぼ平坦で、鹿沼石層を踏み固めているが、軟弱である。

**竈** 北壁に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで0.55mである。火床面は皿状に掘りくぼめられている。煙道部は壁外に15cm掘り込まれ、緩やかに立ち上がっている。

**竈土層解説**

- |        |                              |          |                             |
|--------|------------------------------|----------|-----------------------------|
| 1 褐色   | 焼土ブロック・粘土粒子少量、ローム粒子微量        | 4 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子・炭沼バミス微量 |
| 2 黒褐色  | 粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量       | 5 褐色     | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量         |
| 3 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 6 明褐色    | 炭沼バミス中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量      |
|        |                              | 7 にぶい赤褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子微量         |

**ピット** 2か所。P1・P2は深さ14cmで、竈と向かい合う位置にあり、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

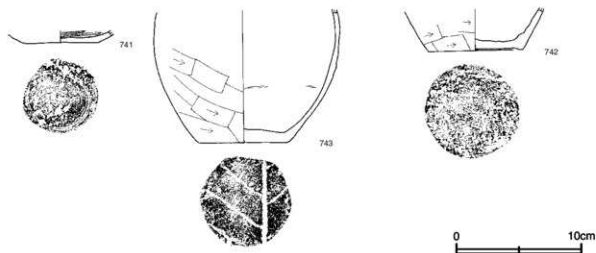
**覆土** 6層に分層される。各層にロームブロックや炭沼粒子を多く含んでいることや不規則な堆積状況から、人為堆積と考えられる。

**土層解説**

- |      |                                |       |                        |
|------|--------------------------------|-------|------------------------|
| 1 褐色 | ロームブロック中量、炭化物・焼土粒子微量           | 4 褐色  | ロームブロック・炭化粒子・炭沼バミス少量   |
| 2 褐色 | ロームブロック多量、炭化物少量                | 5 褐色  | ロームブロック多量、炭化粒子・炭沼バミス微量 |
| 3 褐色 | ロームブロック多量、炭沼バミス少量、焼土ブロック・炭化物微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量  |

**遺物出土状況** 土師器片57点（坏類5、甕類52）、須恵器片11点（坏類6、甕類4、甌1）が竈周辺から出土している。741～743は竈内から出土しており、741と743は逆位で重なった状態で出土しており、竈の支脚として使用されている。742は煮炊き用と考えられる。いずれも竈内に遺棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器と重複関係から9世紀前半と考えられる。



第67図 第137号住居跡出土遺物実測図

第137号住居跡出土遺物観察表（第67図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
741	土師器	坏	—	(1.0)	5.9	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り	竈内	5%
742	土師器	甕	—	(3.3)	7.6	長石・石英	にぶい橙	普通	体部下端ヘラ削り 底部被熱により剥落	竈内	5%
743	土師器	甕	—	(10.5)	6.9	長石・石英	橙	普通	内面ヘラナデ 外面ヘラ削り 底部本業痕	竈内	50%

### 第138号住居跡 (第68～71図)

**位置** 調査区中央部のC4c2区で、緩やかな傾斜地に位置している。

**規模と形状** 西部は調査区域外に延びているため、確認された範囲は長軸5.21m、短軸4.16mで、方形又は長方形と推測される。主軸方向はN-10°-Eである。壁高は33～46cmで、直立している。

**床** はほぼ平坦で、東部のP1とP2の間が硬化している。中央部には粘土と焼土が床面に貼り付いた状態で確認されている。

**竈** 北壁に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで1.69m、火床部は皿状に掘りくぼめられ、燃焼部内が火熱により赤変硬化している。とくに火床面の赤変硬化は顕著である。煙道部は壁外に94cm掘り込まれ、火床面から直立している。第6層以下は、竈の掘り方の埋土である。

#### 覆土層解説

1 褐 色	ロームブロック・砂質粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	9 暗 褐 色	ロームブロック・焼土粒子・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量
2 暗 褐 色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量	10 黒 褐 色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子・鹿沼パミス少量
3 黒 褐 色	炭化物中量、焼土ブロック少量、ローム粒子微量	11 褐 色	砂質粘土ブロック中量、ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
4 にぶい黄褐色	ロームブロック・粘土粒子少量、焼土粒子微量	12 暗 赤 褐 色	焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子・鹿沼パミス微量
5 暗 赤 褐 色	焼土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子微量	13 暗 赤 褐 色	焼土ブロック多量、砂質粘土粒子少量、炭化物微量
6 褐 色	ロームブロック多量、焼土ブロック・炭化粒子少量、鹿沼パミス微量	14 にぶい赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量
7 褐 色	ロームブロック多量、焼土ブロック・炭化物・砂質粘土粒子少量、鹿沼パミス微量		
8 暗 褐 色	ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量		

**ピット** 13か所。P1～P4は深さ61～99cmで、規模や配置から主柱穴と考えられる。P6～P9は深さ79～119cmである。配置と柱穴同士の重複関係から、P1～P4より古い柱穴と考えられる。P5は竈と向かい合う位置にあり、出入口施設に伴うピットと考えられる。その他のピットは性格不明である。

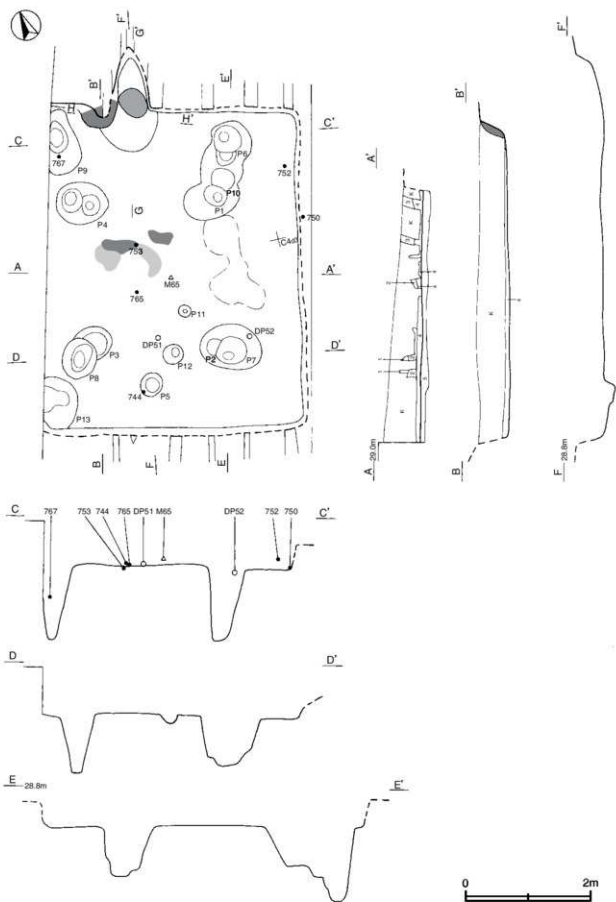
**覆土** 5層に分層される。大部分が攪乱を受けているため、堆積状況は不明である。第5層は貼り床の層である。

#### 土層解説

1 暗 褐 色	ロームブロック少量	4 暗 褐 色	ロームブロック・炭化粒子微量
2 暗 褐 色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	5 褐 色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物微量
3 褐 色	ロームブロック中量		

**遺物出土状況** 土師器片848点(坏類101, 高台付坏18, 高台付皿2, 鉢2, 甕類724, 甌1), 須恵器片489点(坏類112, 高台付坏13, 高台付皿2, 蓋20, 甕1, 高甕1, 甕類333, 甌5, 円面甌1, コップ形土器1), 灰釉陶器片7点(碗・皿類), 土製品2点(支脚, 紡錘車), 鉄製品1点(刀子)のほかに、流れ込んだ鉄滓1点, 縄文土器片1点, 弥生土器片5点が全域の覆土上層から床面にかけて出土している。とくに土師器の坏類は西部に、土師器甕類, 須恵器は北西部を除いて多く出土している。752は北東コーナー部の覆土下層, M65は中央部の覆土下層から出土している。744・750・753・765はそれぞれ南部中央, 東壁際中央, 中央部の粘土塊下, 中央部の床面から出土している。767はP9の覆土中層から斜位で出土しており, 柱を抜き取った後の土中に混入したものと考えられる。DP52はP7の覆土上層から出土しており, 「子」, 「家」, 「新」, 「新」の文字が刻書されている。

**所見** 本跡には8本の柱穴が確認された。柱穴同士の重複関係がみられることから, 建て替えが行われた可能性が考えられる。時期は, 出土土器から9世紀後葉と考えられる。

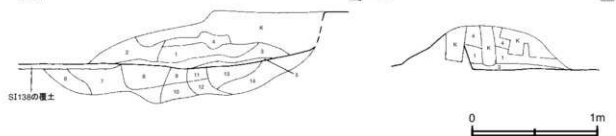


第68図 第138号住居跡実測図(1)

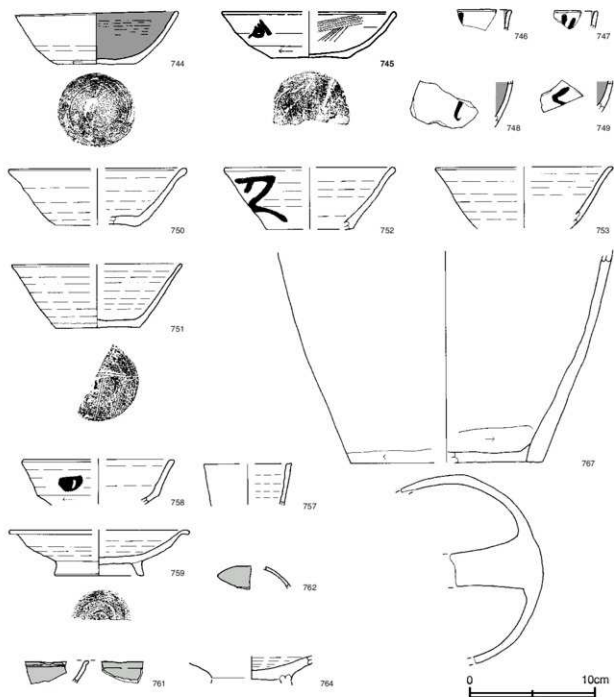
G 28.8m

G' H

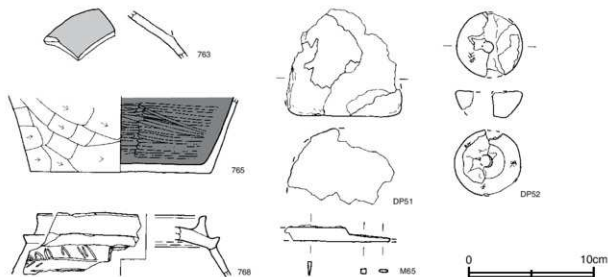
H'



第69図 第138号住居跡実測図(2)



第70図 第138号住居跡出土遺物実測図(1)



第71図 第138号住居跡出土遺物実測図(2)

第138号住居跡出土遺物観察表 (第70・71図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
744	土師器	坏	13.0	4.2	5.9	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	内面磨光 体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	床面	90% PL15
745	土師器	坏	[13.8]	3.7	6.0	長石・石英・雲母・赤色粘土	にぶい黄橙	普通	内面ヘラ磨き 体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	覆土中	30% 体部磨光 [東] P.19
746	土師器	坏	—	(1.6)	—	長石・雲母	にぶい橙	普通	内面ヘラ磨き	覆土中	5% 体部磨光 [口]
747	土師器	坏	—	(1.4)	—	雲母	橙	普通	内面ヘラ磨き	覆土中	5% 体部磨光 [口]
748	土師器	坏	—	(3.7)	—	長石・雲母	にぶい橙	普通	内面ヘラ磨き	覆土中	5% 体部磨光 [口]
749	土師器	坏	—	(2.5)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	内面ヘラ磨き	覆土中	5% 体部磨光 [口]
750	須恵器	坏	[13.9]	4.5	[6.6]	長石・石英・針状炭素	灰	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	床面	20% 底部ヘラ磨き
751	須恵器	坏	[13.4]	5.1	6.6	長石・石英・細礫	灰	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	覆土中	20% 底部ヘラ磨き
752	須恵器	坏	[13.4]	4.9	[7.0]	長石・石英・針状炭素	灰黄	普通	ロクロナデ	下層	10% 体部磨光 [口]
753	須恵器	坏	[14.0]	(4.8)	—	長石・雲母	灰黄	普通	ロクロナデ	床面	5%
757	須恵器	コップ形土器	[6.9]	(3.3)	—	長石・石英	灰	普通	ロクロナデ	覆土中	10%
758	須恵器	高台付坏	[12.0]	(3.6)	—	長石・石英・針状炭素	灰	普通	体部下端回転ヘラ削り	覆土中	10% 体部磨光 [口]
759	須恵器	高台付皿	[13.8]	3.7	7.0	長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	覆土中	40%
761	灰釉陶器	碗	—	(1.8)	—	緻密	灰白・浅黄	良好	口縁部内外面刷毛塗	覆土中	5% 裏面磨光 [東] 95% 裏面磨光
762	灰釉陶器	瓶類	—	(1.7)	—	緻密	灰黄・灰黄	良好	外面施釉	覆土中	5%
763	灰釉陶器	手付瓶	—	(3.8)	—	緻密	灰ナリブ・浅黄	良好	二次的な被熱 把手部欠損	覆土中	5%
764	須恵器	高盤	—	(1.9)	—	長石・石英	黄灰	普通	ロクロ成形	覆土中	5%
765	土師器	鉢	—	(6.0)	14.3	長石・石英・雲母・赤色粘土	にぶい橙	普通	内面ヘラ磨き 外面ヘラ削り	床面	20%
767	須恵器	瓶	—	(16.8)	[15.2]	長石	灰褐	普通	ロクロナデ 内外面下端ヘラ削り	P9中層	10%
768	須恵器	円面碗	[13.4]	(4.8)	—	長石・石英	灰黄褐	普通	ロクロナデ 体部に方形の溝らし 裏面回転ヘラ磨き	覆土中	10% PL18
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴		出土位置	備考	
DP51	支脚	(8.5)	9.1	(6.3)	(285.0)	長石・石英	ヘラ状工具痕の残るナデ		床面		
DP52	紡錘車	最大径 8.3	孔径 0.9	2.1	(47.3)	長石・石英	ナデ 刻書上面「新」 横面右回りに「家」「子」「新」		P7上層	刻書 PL20	
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
M65	刀子	(8.5)	1.2	0.4~0.7	(10.8)	鉄	刃先部・基尻部欠損 基尻部は断面長方形 基部は断面方形		下層	PL21	



第139号住居跡 (第72・73図)

位置 調査区中央部のC4d4区で、緩やかな傾斜地に位置している。

規模と形状 大部分が攪乱を受けており、確認された範囲は長軸4.37m、短軸3.86mで、長方形と推測される。主軸方向はN-18°-Eである。壁高は37~40cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、中央部が硬化している。

竈 北壁に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで1.16m、火床部は床面と同じ高さである。煙道部は壁外に94cm掘り込んでおり、火床面からはほぼ直立している。第3層は、竈の掘り方の埋土である。

竈土層解説

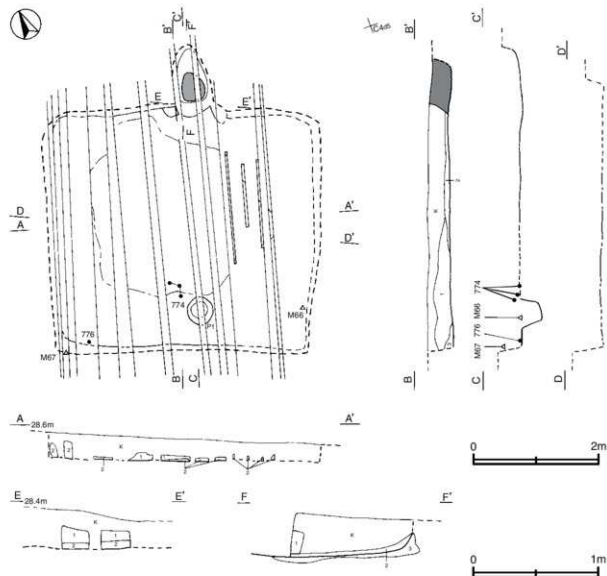
- |       |                     |         |                       |
|-------|---------------------|---------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 濃い赤褐色 | 焼土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒色  | 炭化物中量、ローム粒子・焼土粒子微量  |         |                       |

ピット 1か所。深さ34cmで、竈と向かい合う位置にあり、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 3層に分層される。大部分が攪乱を受けているため、堆積状況は不明である。

土層解説

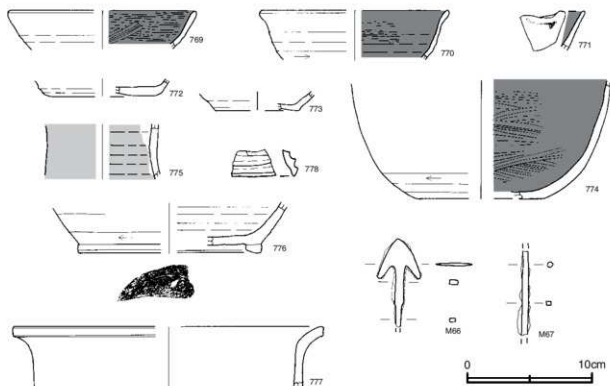
- |       |                      |       |                       |
|-------|----------------------|-------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 | 3 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒色  | 炭化物少量、ローム粒子微量        |       |                       |



第72図 第139号住居跡実測図

**遺物出土状況** 土師器片711点(坏類196, 高台付坏12, 鉢7, 甕類494, 甕2), 須恵器片158点(坏類52, 高台付坏1, 蓋1, 甕類92, 甕3, 短頸壺1, 長頸壺5, 高盤2, 円面硯1), 鉄器・鉄製品4点(鎌, 刀子, 鎌, 釘), 流れ込んだ弥生土師片11点が全域の覆土上層から床面にかけて出土している。772は攪乱による混入と考えられる。769・776・M66は床面, 770・773・777は甕内, 771・775・778は覆土中, M67は南西コーナー部の覆土上層からそれぞれ出土している。774は南部中央の覆土下層と床面から出土した破片が接合したものである。

**所見** 時期は, 出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第73図 第139号住居跡出土遺物実測図

第139号住居跡出土遺物観察表(第73図)

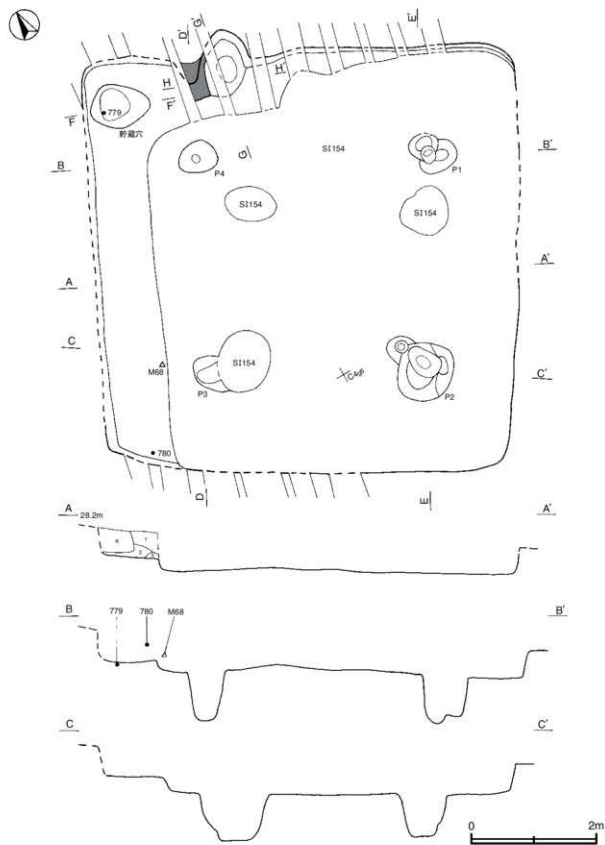
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
769	土師器	坏	[14.9]	(3.1)	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	内面へう磨き	床面	5%
770	土師器	坏	[14.8]	(3.9)	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	内面へう磨き	甕内	5%
771	土師器	坏	—	(3.1)	—	雲母	にぶい橙	普通	内面へう磨き	覆土中	5% 底部調査[□]
772	須恵器	坏	—	(1.4)	[8.0]	長石・石英	灰黄	普通	底部回転へう切り後ナデ	甕内	5% 底部調査[□]
773	須恵器	坏	—	(1.5)	[6.6]	長石・石英	暗灰黄	普通	底部回転へう切り後へうナデ	甕内	5%
774	土師器	鉢	—	(9.4)	[9.8]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	内面へう磨き 外面下端回転へう削り	下層~床面	5%
775	灰釉陶器	長頸瓶	—	(4.4)	—	緻密	淡黄・灰白	良好	内外面施釉	覆土中	5% 壁面調査
776	灰釉陶器	長頸瓶	—	(4.0)	[14.3]	緻密	灰白・灰白	良好	無釉	床面	5%
777	土師器	甕	[25.6]	(4.9)	—	長石・石英・雲母	橙	良好	口縁部内外面横ナデ	甕内	5%
778	須恵器	円面硯	—	(2.1)	—	長石・石英・針状鉄鉱物	黄灰	普通	ロクロナデ 透かし有り	覆土中	5%

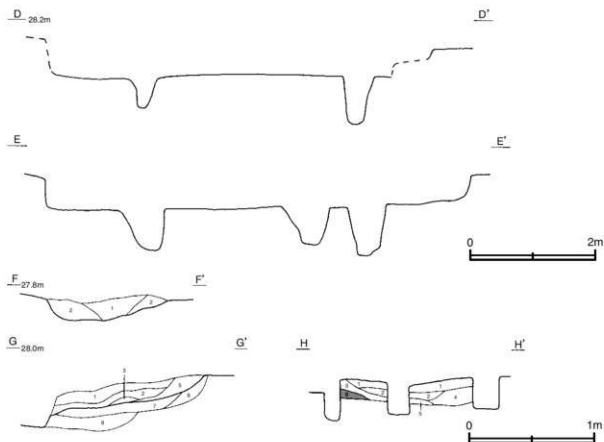
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M66	鎌	(7.0)	3.5	0.4	(26.6)	鉄	鎌身部から基部	床面	PL21
M67	不明	(6.7)	0.5	0.4	(6.2)	鉄	両端欠損 釘又は紡錘車の軸	上層	

第140号住居跡 (第74～76図)

位置 調査区中央部のC 4 f5区で、緩やかな傾斜地に位置している。



第74図 第140号住居跡実測図(1)



第75図 第140号住居跡実測図(2)

**重複関係** 第154号住居に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸6.85m、短軸6.77mの方形で、主軸方向はN-27°-Eである。壁高は46~48cmで、外傾して立ち上がっている。

**床** ほぼ平坦である。

**竈** 北壁の西寄りに付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで1.04mである。袖部は床面とほぼ同じ高さの地山面の上に、粘土を用いて構築されている。火床部は床面と同じ高さで、火床面は火熱により赤変硬化している。第7層以下は竈の掘り方の埋土である。

**竈土層解説**

- |          |                                  |          |                              |
|----------|----------------------------------|----------|------------------------------|
| 1 菊色     | ロームブロック多量、鹿沼バミス少量、炭化粒子微量         | 6 にふい黄褐色 | 粘土ブロック多量、焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒色     | 炭化粒子中量、ローム粒子・焼土粒子微量              | 7 黒褐色    | 炭化物中量、焼土ブロック少量、ロームブロック微量     |
| 3 にふい黄褐色 | 粘土ブロック中量、焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量     | 8 暗褐色    | ロームブロック中量、炭化物少量、焼土粒子微量       |
| 4 黒色     | 炭化物中量、ロームブロック・焼土ブロック微量           | 9 褐色     | ロームブロック・鹿沼バミス少量              |
| 5 菊色     | ロームブロック中量、粘土粒子・繊維少量、焼土ブロック・炭化物微量 |          |                              |

**ピット** 4か所。深さは68~82cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。

**貯蔵穴** 北西コーナー部に位置し、長径94cm、短径70cmの楕円形で、深さは14cmである。底面は皿状で、緩やかに立ち上がっている。

**貯蔵穴土層解説**

- |       |                         |      |                  |
|-------|-------------------------|------|------------------|
| 1 暗褐色 | 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量 | 2 褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子微量 |
|-------|-------------------------|------|------------------|

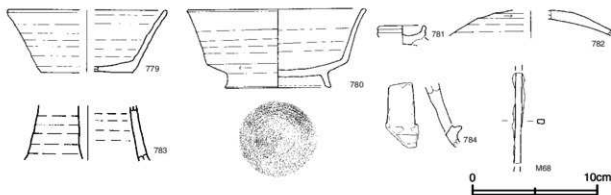
**覆土** 3層に分離される。ロームブロックを多く含み、不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

**土層解説**

- 1 掘 色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・炭屑 3 掘 色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・炭屑  
 バミス微量  
 2 掘 色 ロームブロック多量、炭屑バミス少量、焼土粒子・炭化粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片497点（坏類62、高台付坏18、甕類417）、須恵器片421点（坏類184、高台付坏35、蓋71、甕10、甕類120、長頸瓶1）、鉄製品1点（釘）、流れ込んだ弥生土器片3点が全域の覆土上層から床面にかけて出土している。782・784は覆土中、780は南壁際の覆土中層、M68は南西部の覆土下層、779は貯蔵穴の覆土上層、783はP4の覆土中、781は床の掘り方からそれぞれ出土している。いずれも住居の廃絶に伴い投棄又は遺棄されたものと考えられる。

**所見** 廃絶時期は、出土土器と重複関係から8世紀後葉と考えられる。



第76図 第140号住居跡出土遺物実測図

第140号住居跡出土遺物観察表（第76図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
779	須恵器	坏	[12.5]	5.0	[7.3]	長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ切り後ヘラナデ	貯蔵穴上層	30%
780	須恵器	高台付坏	14.1	6.3	8.4	長石・石英・針状炭屑	灰	普通	体部下層回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り後高台部付付け	中層	100% PL17
781	須恵器	蓋	—	(1.5)	—	長石・石英	灰白	普通	ロクロナデ	掘り方	5%
782	須恵器	蓋	—	(2.2)	—	長石・石英	にぶい濁	普通	天井部回転ヘラ削り 二次焼成	覆土中	40%
783	須恵器	高盤	—	(4.3)	—	長石・石英	灰	普通	ロクロナデ 脚部透かし有り	P4 覆土中	5%
784	須恵器	円面硯	—	(5.1)	—	長石・黒色粒子	黄灰	普通	透かし有り 内面自然軸	覆土中	5%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
M68	釘	(7.1)	0.6	0.4	(8.2)	鉄	両端欠損	断面方形 先端がやや細い	下層		

第141号住居跡（第77図）

**位置** 調査区中央部のC416区で、緩やかな傾斜地に位置している。

**規模と形状** 確認された範囲は長軸3.96m、短軸2.56mで、隅丸長方形と推測され、主軸方向はN-41°-Wと推定される。壁高は12~26cmで、外傾して立ち上がっている。

**床** ほほ平坦である。

ピット 1か所。深さ77cmで、性格は不明である。

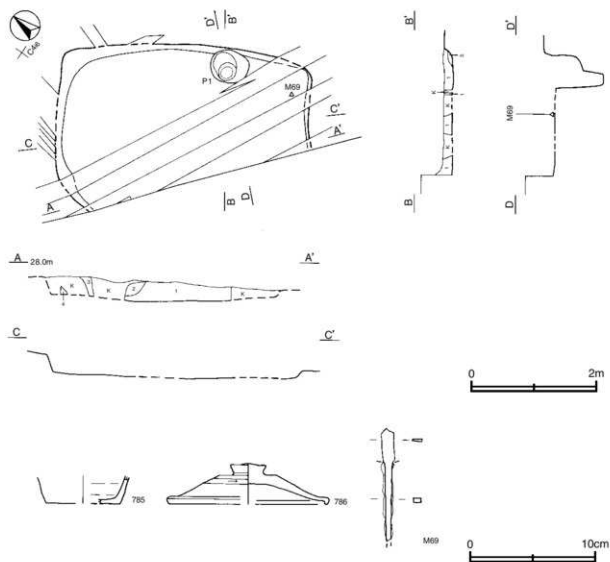
覆土 5層に分層される。不規則な堆積状況を示しているため、人為堆積と考えられる。

## 土層解説

1	黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量	4	褐色	ロームブロック多量
2	暗褐色	ロームブロック少量、炭化物微量	5	褐色	ロームブロック中量、炭化物少量
3	黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量			

遺物出土状況 土師器片107点（坏類10，甕類97），須恵器片106点（坏類39，高台付坏11，蓋8，盤4，甕類40，瓶1，高盤2，コップ形土器1），鉄器1点（鍼），流れ込んだ弥生土器片1点，灰軸陶器片2点（碗・皿類カ）が全域の覆土上層から床面にかけて出土しているが，北西部にはやや少ない。785・786は覆土中，M69は南東コーナー部の覆土下層からそれぞれ出土している。いずれも住居の廃絶に伴い投棄されたものと考えられる。

所見 時期は，出土土器から8世紀後葉と考えられる。



第77図 第141号住居跡・出土遺物実測図

第141号住居跡出土遺物観察表（第77図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
785	須恵器	コップ形土器	—	(2.2)	[6.0]	石英・黒色粒子	黄灰	普通	底部回転ヘラ削り	覆土中	10%
786	須恵器	蓋	[12.6]	3.2	—	長石・石英	灰	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土中	80% PL17

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考
M69	皿	(8.9)	0.9	0.4	(7.0)	鉄	鎌身部	鎌	下層	

## 第142号住居跡（第78～82図）

位置 調査区中央部のC4h0区で、傾斜地に位置している。

重複関係 第201・202号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸4.88m、短軸4.64mの方形で、主軸方向はN-4°-Eである。壁高は34～53cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部から北西部にかけて硬化している。壁溝が、西部と東部の一部に巡っている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで1.47m、袖部幅は1.36mである。袖部は床面と同じ高さの地山面の上に、暗褐色・黒褐色・褐色の土を用いて構築されている。火床部は皿状に掘りくぼめられている。煙道部は壁外に60cm掘り込まれ、煙道部付近は火熱により赤変硬化している。第19層は、竈の掘り方の埋土である。

## 土層解説

1	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量								ム粒子微量
2	黒褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量					10	暗褐色		砂質粘土粒子少量、炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量
3	暗褐色	焼土ブロック・炭化物少量、ロームブロック・粘土粒子微量					11	黒褐色		ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
4	黒色	炭化物中量、焼土ブロック少量、ロームブロック微量					12	褐色		砂質粘土粒子少量、ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量
5	にぶい黄褐色	炭化物・粘土粒子少量、焼土粒子微量					13	黒褐色		ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
6	褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量					14	暗褐色		ロームブロック・砂質粘土粒子少量
7	暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量					15	褐色		ロームブロック中量
8	暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量					16	褐色		ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
9	暗褐色	焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、炭化物・ローム					17	暗褐色		ロームブロック少量、焼土ブロック微量
							18	黒褐色		ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
							19	暗褐色		ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量

棚状施設 竈の西脇に確認された。床面より16cm高く地山面を掘り残し、奥行きは30cmである。壁下には壁溝が巡っており、壁はほぼ直立している。

ピット 1か所。深さは40cmで、北部にオーバーハングしている。竈と向かい合う位置にあり、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 13層に分層される。不規則な堆積状況や砂質粘土・鹿沼バミスが混在していることから、人為堆積と考えられる。

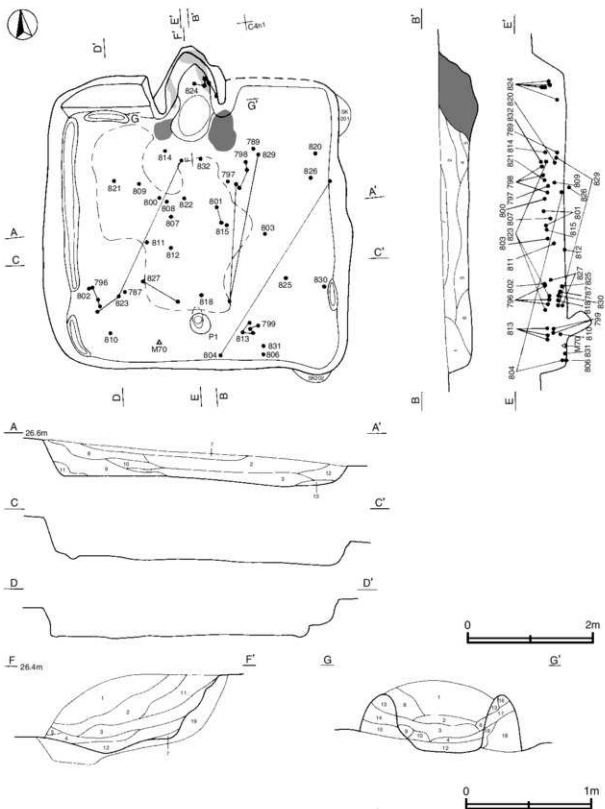
## 土層解説

1	黒褐色	炭化粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量					6	黒褐色		ローム粒子・焼土粒子微量
2	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量					7	暗褐色		ローム粒子・炭化粒子微量
3	灰褐色	砂質粘土ブロック少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量					8	暗褐色		ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子・鹿沼バミス微量
4	暗褐色	炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量					9	暗褐色		ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
5	暗褐色	炭化物・焼土粒子少量、ローム粒子微量					10	黒褐色		ローム粒子・炭化粒子微量

11 黒色 ローム粒子微量

12 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・鹿沼バミス微量

13 黒褐色 焼土粒子・砂質粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量

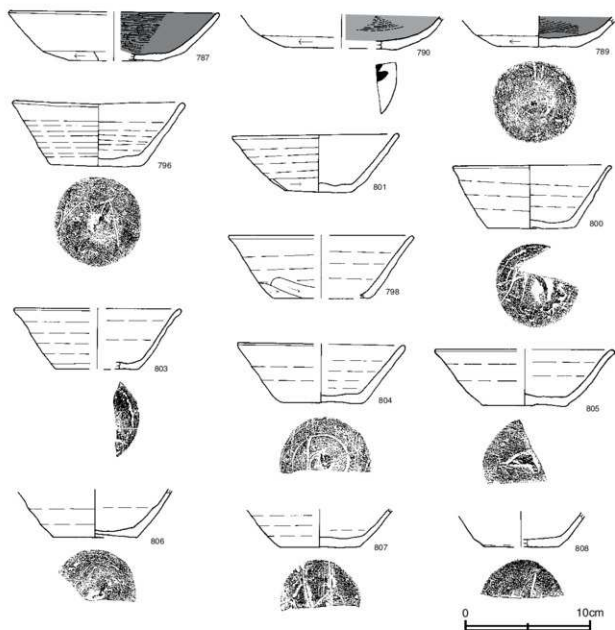


第78図 第142号住居跡実測図

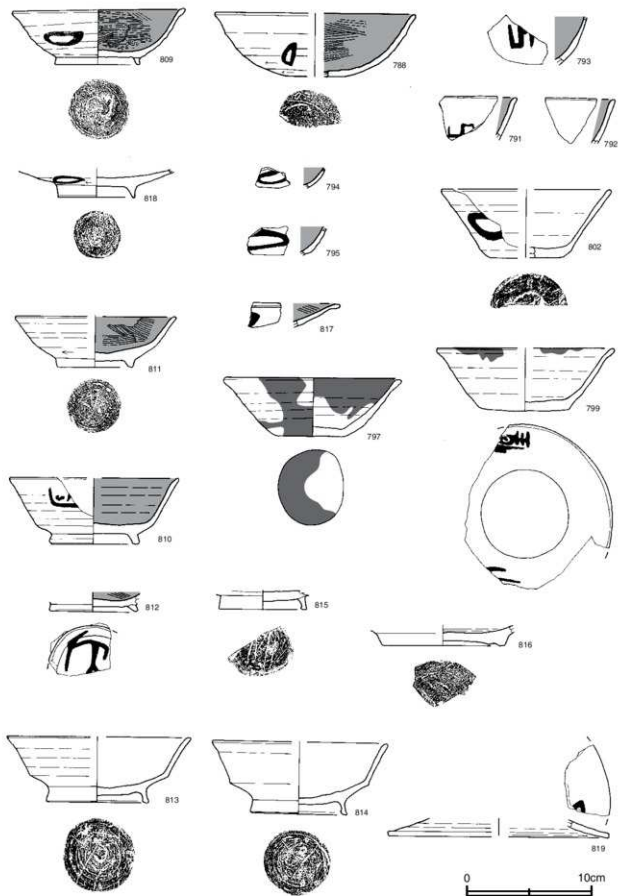


**遺物出土状況** 土師器片548点（坏類169, 高台付坏31, 高台付皿1, 甕類346, 甌1）, 須恵器片308点（坏類148, 高台付坏22, 皿1, 盤2, 蓋13, 甕類117, 甌4, 瓶類1）, 灰釉陶器片5点（碗・皿類2, 長頸瓶3）, 石器1点（磨石）, 鉄製品1点（釘）, 鉄滓1点が全域の覆土上層から床面ににかけて出土している。788・790～795・805・816・817・819・828・Q104・M71は覆土中, 820・830は東部壁際の覆土中層, 826は東部壁際の掘り方からそれぞれ出土している。787・796・802・810・M70は南西部, 799・804・806・813・831は南東部, 789・797・798・800・801・803・807～809・811・812・814・815・818・821・822・825・827・829・832は中央部の覆土上層から床面ににかけて出土している。824は竈内からつぶれた状態で出土している。接合関係が覆土上層から床面に及び、離れた破片が接合している状況もみられることから、住居の廃絶後に投棄されたものと考えられる。

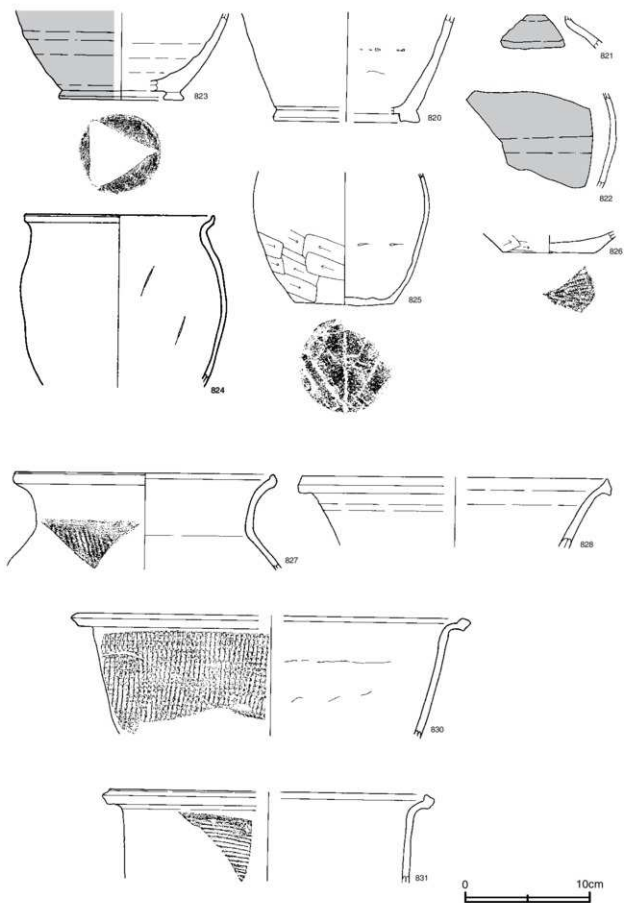
**所見** 廃絶時期は、出土土器から9世紀後葉と考えられる。



第79図 第142号住居跡出土遺物実測図(1)



第80図 第142号住居跡出土遺物実測図(2)



第81图 第142号住居跡出土遺物実測図(3)



番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
800	須臾器	坏	12.5	5.0	6.7	長石・石英・針状炭素物	灰	普通	底部回転ヘラ切り後一方方向のヘラナデ	中層	80% 底部ヘラつき
801	須臾器	坏	13.2	4.7	5.2	長石・石英・雲母	灰黄	普通	体部下端・底部手持ちヘラ削り	上層～中層	60%
802	須臾器	坏	[13.4]	5.5	[6.0]	長石・石英・針状炭素物	灰黄	普通	底部多方向の手持ちヘラ削り	上層	30% 体底層着 [O] P1-12
803	須臾器	坏	[13.2]	4.8	[6.4]	長石・針状炭素物・黒色粒子	灰	普通	底部回転ヘラ切り	上層	10% 底部ヘラつき
804	須臾器	坏	[13.1]	4.7	6.3	長石・黒色粒子	黄灰	普通	底部回転ヘラ削り	下層～床面	20% 底部ヘラつき
805	須臾器	坏	[14.0]	4.5	6.7	長石・石英・針状炭素物	灰黄	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	覆土中	20%
806	須臾器	坏	—	(3.7)	6.6	長石・石英・針状炭素物	灰オリーブ	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	床面	10% 底部ヘラつき
807	須臾器	坏	—	(3.1)	6.4	長石・石英	灰	普通	底部一方方向のヘラ削り	中層	10% 底部ヘラつき
808	須臾器	坏	—	(2.8)	[6.2]	長石・石英・針状炭素物	灰	普通	底部ナデ	床面	5% 底部ヘラつき
809	土師器	高台付坏	13.6	4.4	6.7	長石・石英・金雲母・針状炭素物	橙	普通	内面ヘラつき 体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	中層	90% 体底層着 [O] P1-15
810	土師器	高台付坏	[13.2]	5.3	7.0	長石・石英・白・黒色粒子	浅黄橙	普通	体部下端回転ヘラ削り 内面・底部厚肌により取込木割	下層	30% 体底層着 [O] P1-16
811	土師器	高台付坏	[12.6]	4.0	6.0	長石・石英・針状炭素物	橙	普通	内面ヘラつき 体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ切り後ナデ	中層	30%
812	土師器	高台付坏	—	(1.5)	6.8	長石・石英・針状炭素物	橙	普通	内面ヘラつき 底部回転ヘラ削り	上層	5% 底部層着 [O] P1-17
813	須臾器	高台付坏	[14.6]	5.2	8.0	長石・石英・黒色粒子	灰黄	普通	底部回転ヘラ削り	上層	30% 底部ヘラつき
814	須臾器	高台付坏	[13.6]	5.7	7.5	長石・黒色粒子・針状炭素物	黄灰	普通	底部回転ヘラ削り	上層	20% 底部ヘラつき
815	須臾器	高台付坏	—	(1.5)	7.0	長石・石英・黒色粒子	褐灰	普通	底部ナデ	上層	5% 底部ヘラつき
816	須臾器	高台付坏	—	(1.6)	9.6	長石	黄灰	普通	ロクロナデ	覆土中	5%
817	土師器	皿	—	(1.8)	—	雲母・針状炭素物	橙	普通	内面ヘラつき	覆土中	5%
818	土師器	高台付皿	—	(2.2)	6.0	長石・石英・金雲母・針状炭素物	明赤褐	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ切り後ナデ	中層	10% 体底層着 [O] P1-19
819	須臾器	蓋	[17.4]	(1.4)	—	長石・針状炭素物	黄灰	普通	ロクロナデ	覆土中	5% 天青部層着 [O] P1-20
820	須臾器	長頸瓶	—	(8.7)	[11.5]	長石・石英・黒色粒子	灰	普通	ロクロナデ	中層	5%
821	灰釉陶器	瓶頸	—	(2.7)	—	緻密	オリーブ黄・灰白	良好	外面施釉	上層	5% 酸投痕
822	灰釉陶器	長頸瓶	—	(7.5)	—	緻密	灰白・淡黄	良好	外面刷毛塗り 939と接合	中層	5% 酸投痕 後14分焼成済
823	灰釉陶器	長頸瓶	—	(7.1)	[9.8]	緻密	灰白・灰黄	良好	外面刷毛塗り	上層～中層	5% 酸投痕 後14分焼成済
824	土師器	甕	15.0	(13.5)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部横ナデ 内面ヘラナデ	甕内	50%
825	土師器	甕	—	(10.6)	7.8	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	内面ヘラナデ 外面ヘラ削り	中層	20%
826	土師器	甕	—	(1.4)	7.4	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	内面ヘラナデ 外面ヘラ削り	掘り方	5%
827	須臾器	甕	20.5	(7.6)	—	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	ロクロ成形 口縁部内外面ナデ 外面縦位の平行印き	上層～下層	5%
828	須臾器	甕	[24.4]	(5.5)	—	長石・石英	黄灰	普通	ロクロ成形	覆土中	5%
829	須臾器	甕	[30.2]	(15.6)	—	長石・石英・雲母	オリーブ灰	普通	ロクロ成形 内面輪組み痕 外面縦位の平行印き	中層	30%
830	須臾器	瓶	[30.8]	(9.5)	—	長石・石英・雲母	灰	普通	ロクロ成形 内面輪組み痕 外面格子目印き	中層	5%
831	須臾器	瓶	[25.4]	(7.1)	—	長石・石英・雲母	明褐	普通	ロクロ成形 外面横位の平行印き	床面直上	5%
832	須臾器	瓶	—	(18.9)	[12.6]	長石・白色粒子	灰	普通	ロクロ成形 肥子痕跡 外面斜位の叩き痕ナデ 下層ヘラ削り	上層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q104	磨石	(6.4)	(7.5)	(2.6)	(139.8)	砂岩	一面使用	中層	
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M70	釘	(6.8)	0.6	0.4	(7.0)	鉄	断面長方形	覆土中	
M71	鉄滓	(6.4)	(7.8)	(2.9)	(154.3)	鉄	輪形 着磁性なし	覆土中	

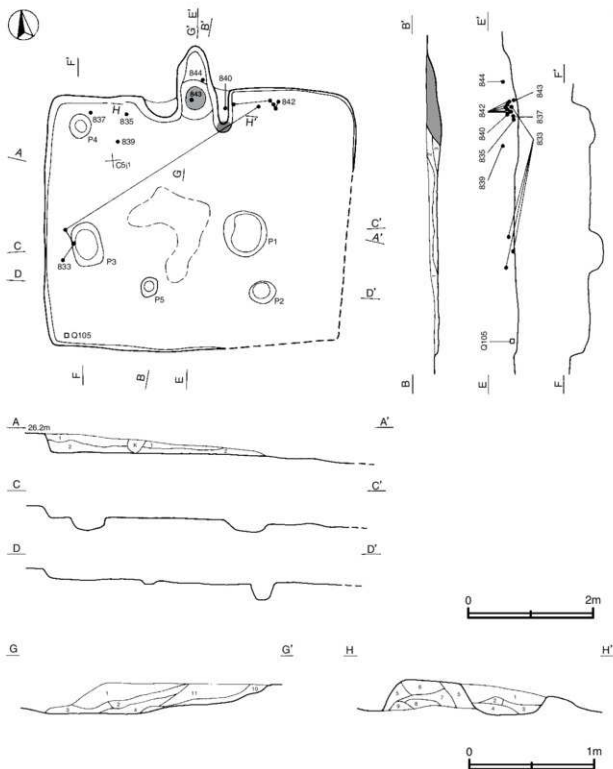
### 第143号住居跡 (第83～85図)

位置 調査区中央部のC5j1区で、傾斜地に位置している。

規模と形状 長軸4.85m、短軸4.02mの長方形で、主軸方向はN-7°-Eである。壁高は最大32cmで、ほぼ直立している。

床 はほぼ平坦で、中央部が硬化している。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで1.19m、袖部幅は1.5mほどである。袖部は床面とほぼ同じ高さの地山面の上に、粘土を混ぜた土を用いて構築されている。火床部は皿状に掘りくぼめられ、火床面は火熱により赤変硬化している。煙道部は壁外に75cm掘り込まれ、火床面から緩やかに立ち上がっている。



第83図 第143号住居跡実測図

覆土層解説

- |         |                            |         |                              |
|---------|----------------------------|---------|------------------------------|
| 1 暗褐色   | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量      | 7 暗褐色   | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・粘土粒子微量    |
| 2 濃い黄褐色 | 粘土粒子少量、焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 | 8 濃い黄褐色 | 粘土粒子多量、ローム粒子少量               |
| 3 暗褐色   | 焼土ブロック少量、ローム粒子微量           | 9 褐色    | ローム粒子多量                      |
| 4 黒色    | 炭化物多量、ローム粒子・焼土粒子微量         | 10 赤褐色  | 焼土ブロック多量、粘土粒子少量、ローム粒子微量      |
| 5 濃い黄褐色 | 粘土粒子中量、焼土ブロック・ローム粒子微量      | 11 褐色   | ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 6 黒褐色   | 炭化物・ローム粒子微量                |         |                              |

ピット 5か所。位置が不規則であるため、性格は不明である。

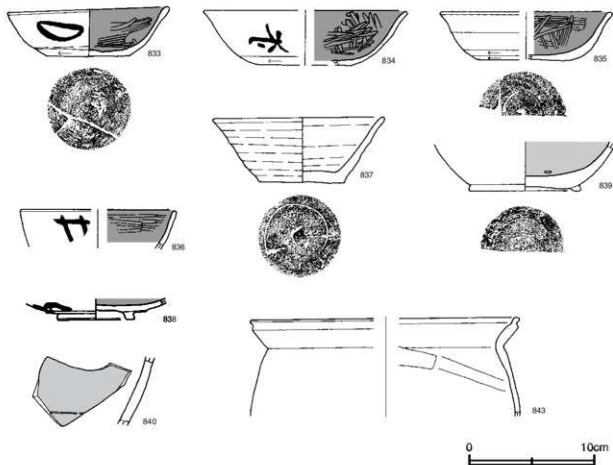
覆土 3層に分層される。ブロック状の含有物が多く含まれている状況から、人為堆積と考えられる。

土層解説

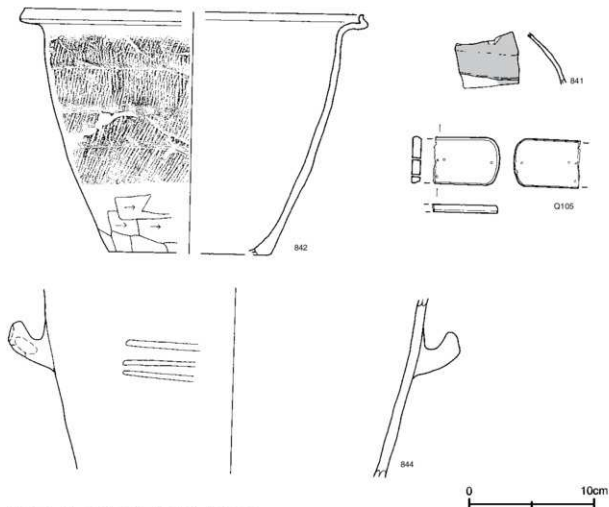
- |       |              |       |                          |
|-------|--------------|-------|--------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量    | 3 暗褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |       |                          |

遺物出土状況 土師器片258点(坏類52, 椀2, 甕類199, 瓶5), 須恵器片108点(坏類44, 蓋4, 甕類46, 瓶14), 灰釉陶器片3点(碗・皿類2, 瓶類1), 石製品1点(鈍尾), 鉄製品1点(不明)が確認面から床面にかけて出土している。とくに土師器・須恵器の甕は北部から多く出土している。835・837・839は北壁西部の覆土上層から床面にかけて, Q105は南西コーナー部の覆土中層から斜位で, 843・844は竈内, 842は竈右袖付近に散らばった状態で出土している。833は西部壁際の覆土上層から床面にかけての破片と北壁東部の覆土上層から出土した破片が接合している。いずれも住居の廃絶に伴い投棄又は遺棄されたものと考えられる。

所見 廃絶時期は, 出土土器から9世紀後葉と考えられる。



第84図 第143号住居跡出土遺物実測図(1)



第85図 第143号住居跡出土遺物実測図(2)

第143号住居跡出土遺物観察表 (第84・85図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
833	土師器	坏	12.6	4.0	6.7	長石・石英・金雲母・針状鉱物	橙	普通	内面へラ磨き 体部下端回転へラ削り 底部回転へラ切	上層～床面	70% 体部黒書「○」
834	土師器	坏	[16.0]	4.3	[7.3]	長石・石英・金雲母・針状鉱物・磁珠	橙	普通	内面へラ磨き 体部下端回転へラ削り 底部回転へラ削り	覆土中	20% 体部黒書「尤」
835	土師器	坏	[13.6]	3.8	[7.2]	長石・石英・金雲母・針状鉱物	にぶい橙	普通	内面へラ磨き 体部下端回転へラ削り 底部回転へラ切	床面	40%
836	土師器	坏	[12.4]	(3.0)	—	長石・石英・金雲母・針状鉱物	橙	普通	内面へラ磨き	覆土中	5% 体部黒書「□」 PL19
837	須恵器	坏	13.3	5.2	6.7	長石・石英・針状鉱物	灰	普通	底部回転へラ切り後ナデ	床面直上	100% PL16
838	土師器	碗	—	(1.6)	6.0	長石・石英・金雲母・針状鉱物	橙	普通	内面へラ磨き 底部回転へラ切り後ヘラナデ	覆土中	10% 体部黒書「□」
839	灰輪陶器	碗	—	(3.9)	8.7	緻密	灰白・灰黄	良好	内面刷毛塗り 三又トラン直 内高台 底部へラ削り 9割と接合	上層	30% 体部黒書「△」 PL19
840	灰輪陶器	瓶類	—	(5.5)	—	緻密	灰白・浅黄	良好	外面刷毛塗り 9割と接合	上層	5%
841	灰輪陶器	瓶類	—	(4.8)	—	緻密	灰黄・灰白	良好	外面刷毛塗り	覆土中	5% 体部黒書「△」 PL19
842	須恵器	鉢	[26.7]	19.1	[12.8]	石英・雲母	にぶい橙	普通	内面ナデ 外面刷毛の跡 一部に縦紋の跡 底へラナデ 体部下端へラ削り	上層～中層	20%
843	土師器	甕	[21.1]	(7.8)	—	長石・石英・金雲母	橙	普通	口縁部ナデ 内面ヘラナデ	壺内	5%
844	須恵器	瓶	—	(14.3)	—	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口ナデ 外面の一部にヘラナデ肌 把手部刷毛肌	壺内	5%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
Q105	鉈尾	(5.2)	3.8	0.7	(29.1)	蛇紋岩	全面研磨	両端からの穿孔	中層	PL21	



第144号住居跡 (第86・87図)

位置 調査区中央部のD50区で、傾斜地に位置している。

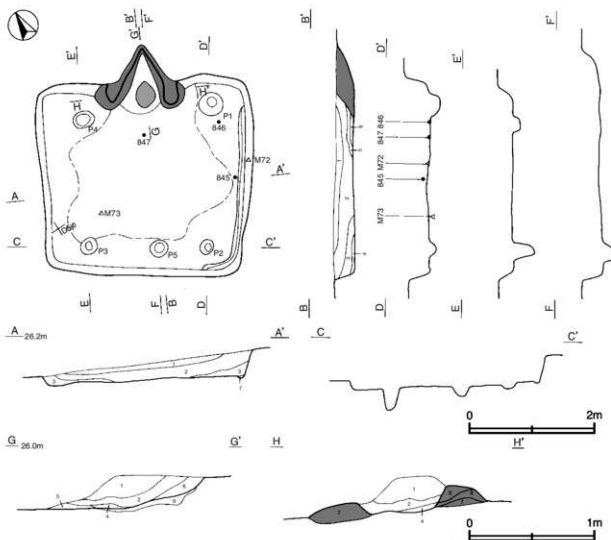
規模と形状 長軸3.40m、短軸3.21mの方形で、主軸方向はN-28°-Eである。壁高は16~42cmで、外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で、中央部が硬化している。壁溝が、南東壁下に巡っている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで1.11m、袖幅は1.43mである。袖部は凹凸に掘り込んだ地山面の上に、粘土を主体とした土を用いて構築されている。火床面は火熱により赤変硬化している。煙道部は壁外に58cm掘り込まれ、火床面から緩やかに立ち上がっている。第9層は、竈の掘り方の埋土である。

竈土層解説

- |         |                          |         |                          |
|---------|--------------------------|---------|--------------------------|
| 1 黒褐色   | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量        | 6 暗褐色   | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量        |
| 2 暗褐色   | 焼土ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量    | 7 明灰褐色  | 粘土粒子多量、ローム粒子少量           |
| 3 にぶい褐色 | 砂質粘土ブロック中量、ローム粒子・焼土粒子微量  | 8 明褐色   | 砂質粘土ブロック多量、ローム粒子・焼土粒子少量  |
| 4 黒褐色   | 焼土粒子・粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 9 にぶい褐色 | 粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 黒色    | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量   |         |                          |



第86図 第144号住居跡実測図

ピット 5か所。P1～P4は深さ10～32cmで、配置から支柱穴と考えられる。P5は深さ19cmで、竈と向かい合う位置にあり、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

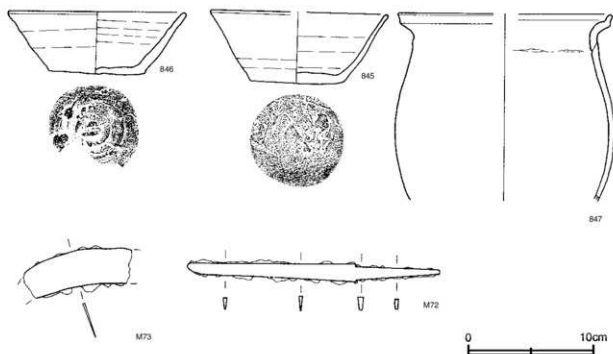
覆土 7層に分層される。壁際から土砂が流れ込んだ堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

## 土層解説

- |       |                           |       |                             |
|-------|---------------------------|-------|-----------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量       | 5 褐色  | 砂質粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量  |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子・粘土粒子微量 | 6 赤褐色 | 焼土ブロック中量、炭化物・ローム粒子・砂質粘土粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子微量        | 7 褐色  | ロームブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量       |
| 4 褐色  | ロームブロック中量、炭化粒子微量          |       |                             |

遺物出土状況 土師器片173点（坏類26，高台付坏2，甕類145），須恵器片77点（坏類67，甕2，高甕1，甕類7），鉄器2点（刀子，鎌），流れ込んだ弥生土器片1点が北東の覆土下層から床面にかけて多く出土している。845は中央部の覆土下層と竈内から出土した破片が接合しており、竈天井部の崩落に伴い流れ込んだ状況を示している。846・847・M72・M73は北東部，東壁際の中央，北西部の床面からそれぞれ出土している。M72は刃部を上にした立位の状態で出土している。いずれも住居の廃絶に伴い遺棄されたものと考えられる。

所見 廃絶時期は，出土土器から9世紀前葉と考えられる。



第87図 第144号住居跡出土遺物実測図

第144号住居跡出土遺物観察表（第87図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
845	須恵器	坏	[14.0]	5.6	7.3	長石・石英・針状炭化物	灰	普通	底部回転ヘラ切り後ヘラナデ	下層～竈内	40%
846	須恵器	坏	14.0	5.0	7.6	長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ切り	床面	60% PL16
847	土師器	甕	[16.9]	[14.8]	—	長石・石英・雲母	橙	普通	内面ヘラナデ 外面ナデ	床面	10%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
M72	刀子	20.0	1.3	0.4	21.6	鉄	切先部から基部 両側		床面	PL21	
M73	鎌	(8.5)	(3.9)	0.1	(32.8)	鉄	両端欠損		床面		

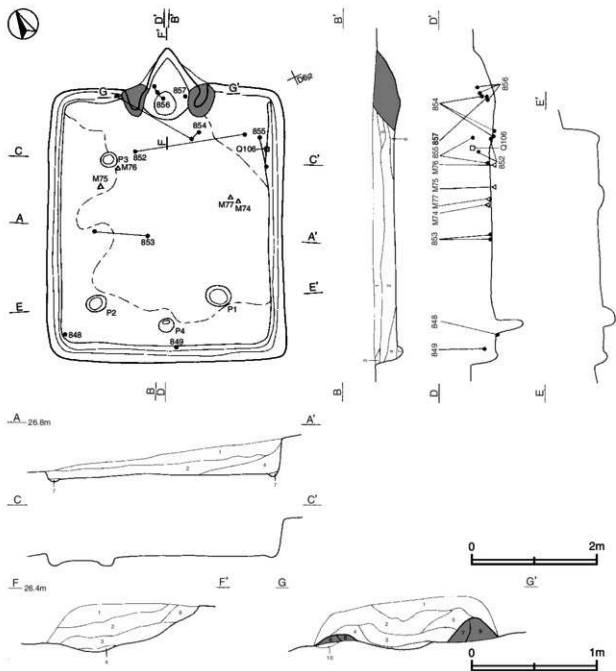
第145号住居跡 (第88～90図)

位置 調査区中央部のD6j1区で、傾斜地に位置している。

規模と形状 長軸4.41m、短軸3.75mの長方形で、主軸方向はN-28°-Eである。壁高は19～52cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部の広い範囲が硬化している。壁溝が、ほぼ全周している。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は、焚き口から煙道部まで1.12m、袖部幅は1.47mである。袖部は床面とはほぼ同じ高さの地山面の上に、砂質粘土を用いて構築されている。火床部は皿状に掘りくぼめられている。煙道部は壁外に60cm掘り込まれ、火床面から緩やかに立ち上がっている。第10層は、竈の掘り方の埋土である。



第88図 第145号住居跡実測図

## 覆土層解説

- |       |                                  |        |                                |
|-------|----------------------------------|--------|--------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量             | 5 褐色   | ローム粒子・砂質粘土粒子中量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | 砂質粘土粒子少量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量      | 6 暗褐色  | ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量, 焼土粒子微量      |
| 3 赤褐色 | 焼土ブロック中量, 炭化粒子少量, ローム粒子・砂質粘土粒子微量 | 7 橙    | 砂質粘土粒子少量, ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量  |
| 4 暗褐色 | 粘土ブロック・ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量      | 8 明褐色  | 砂質粘土ブロック多量                     |
|       |                                  | 9 暗褐色  | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量         |
|       |                                  | 10 黒褐色 | ロームブロック微量                      |

**ピット** 4か所。P1～P3は深さ9～18cmで、配置から主柱穴と考えられる。P4は深さ44cmで、竈と向かい合う位置にあり、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

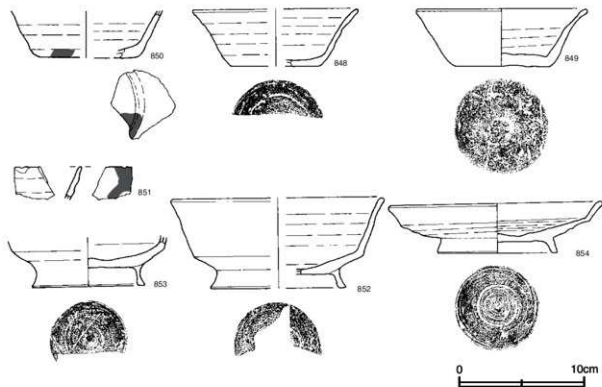
**覆土** 7層に分層される。ロームブロックや粘土粒子が含まれている状況から、人為堆積と考えられる。

## 土層解説

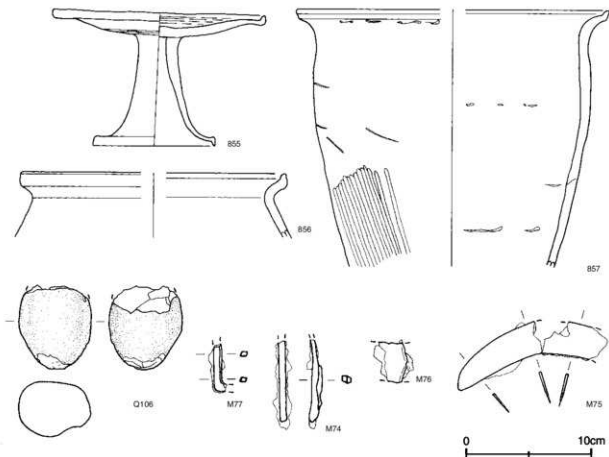
- |      |                           |       |                           |
|------|---------------------------|-------|---------------------------|
| 1 褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量    | 4 褐色  | ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 | 5 褐色  | ローム粒子中量, 粘土粒子少量, 焼土粒子微量   |
| 3 褐色 | ロームブロック中量                 | 6 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量    |
|      |                           | 7 褐色  | ロームブロック中量, 粘土粒子少量, 炭化粒子微量 |

**遺物出土状況** 土師器片99点(高台付坏1, 甕類97, 瓶1), 須恵器片46点(坏類26, 高台付坏12, 盤1, 蓋4, 高盤1, 甕2), 石器1点(磨石), 鉄器・鉄製品4点(鎌2, 鎌か1, 鏡1)が北部の覆土上層から床面にかけて出土している。848は南西コーナー部, M75・M76は北西部, M74・M77は東部中央の床面, Q106は東壁際の覆土上層からそれぞれ出土している。856・857は竈内から, 土圧でつぶれた状態で出土している。852～855は覆土上層から床面にかけて破片が広い範囲で出土し, それぞれ接合関係にあるため, 住居の廃絶後に投棄されたものと考えられる。

**所見** 廃絶時期は, 出土土器から9世紀前葉と考えられる。



第89図 第145号住居跡出土遺物実測図(1)



第90図 第145号住居跡出土遺物実測図(2)

第145号住居跡出土遺物観察表 (第89・90図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
848	須恵器	坏	[13.0]	4.5	[7.2]	長石・石英・針状炭素物	灰	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	床面	30%
849	須恵器	坏	13.3	4.6	7.6	長石・石英・細砂	灰	普通	底部回転ヘラ切り後多方向のヘラ削り	中層	70%
850	須恵器	坏	—	(3.7)	[7.6]	長石	にぶい黄橙	普通	底部摩耗のため調整不明	覆土中	5% 底部下層 油埋付着
851	須恵器	坏	—	(2.6)	—	長石・石英	灰	普通	ロクロナデ	覆土中	5% 底部油埋 付着
852	須恵器	高台付坏	[16.5]	7.1	[10.8]	長石・石英・針状炭素物	灰褐	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	中層～床面	40%
853	須恵器	高台付坏	—	(3.9)	8.8	長石・石英	灰黄	普通	内面研磨 墨痕付着 底部回転ヘラ切り	床面	30% 底部ヘラ 書き
854	須恵器	盤	16.6	4.0	9.5	長石・石英・針状炭素物	灰	普通	底部回転ヘラ削り	下層～床面	80% PL17
855	須恵器	高盤	16.8	10.4	9.5	長石・石英・針状炭素物	黒褐	良好	ロクロナデ	中層～床面	90% PL18
856	土師器	甕	[20.8]	(5.1)	—	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部ナデ	甕内	5%
857	土師器	甕	[24.8]	(20.4)	—	長石・石英・雲母・赤鉄鉱子	にぶい黄橙	普通	内面ナデ 外面ヘラナデ 外面下層ヘラ書き	甕内	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q106	磨石	(6.6)	5.7	4.4	(198.2)	凝灰角礫岩	全面使用 端部敲打痕 被熱痕	土層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M74	鉄 <small>メ</small>	(6.5)	0.7	0.7	(13.5)	鉄	両端欠損 断面不整形	床面	
M75	鎌	(12.0)	(5.5)	0.2	(40.6)	鉄	柄付部欠損	床面	
M76	鎌	(3.3)	(2.6)	1.1	(30.9)	鉄	両端欠損	床面	
M77	鉞	(3.9)	(1.1)	0.4	(3.2)	鉄	両端欠損 一端L字状に湾曲	床面	

## 第146号住居跡 (第91・92図)

**位置** 調査区中央部のD6J3区で、傾斜地に位置している。

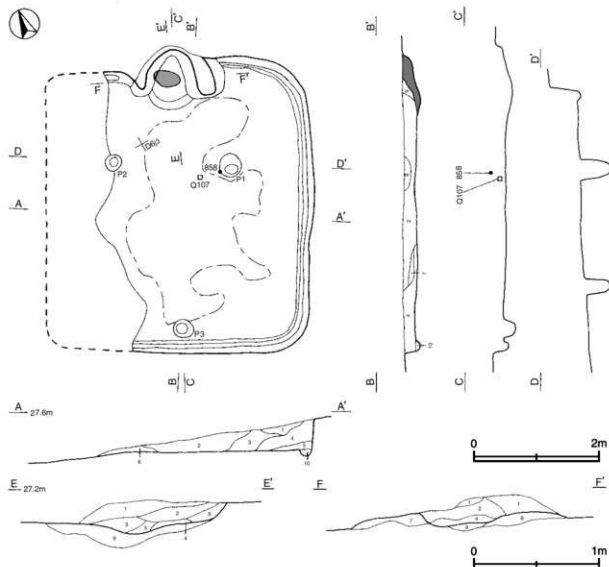
**規模と形状** 西部が削平されているため、確認できた範囲は長軸4.68m、短軸3.42mで、方形又は長方形と推測される。主軸方向はN-27°-Eである。壁高は24~55cmで、壁はほぼ直立している。

**床** ほぼ平坦で、中央部の広い範囲が硬化している。壁溝が、全周していると推測される。

**竈** 北壁に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで1.20m、袖部幅は1.72mである。袖部は地山面を凹凸に掘り込み、その上に砂質粘土と褐色土を混ぜた土を用いて構築されている。火床部は皿状に掘りくぼめられ、火床面は火熱により赤変硬化している。煙道部は壁外に25cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。第2層は、天井部の崩落層である。第8・9層は、竈の掘り方の埋土である。

## 竈土層解説

- |       |                                |         |                                    |
|-------|--------------------------------|---------|------------------------------------|
| 1 褐色  | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量            | 6 暗褐色   | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量                |
| 2 暗褐色 | 砂質粘土粒子中量、ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 暗褐色   | 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量                |
| 3 褐色  | ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量        | 8 にぶい褐色 | 炭屑バミス少量、砂質粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 赤褐色 | 焼土ブロック中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量        | 9 褐色    | ローム粒子中量、砂質粘土粒子少量                   |
| 5 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量          |         |                                    |



第91図 第146号住居跡実測図

ピット 3か所。P1・P2は深さ40～45cmで、位置から主柱穴の可能性が考えられる。P3は深さ12cmで、竈と向かい合う位置にあり、出入口施設に伴うピットと考えられる。

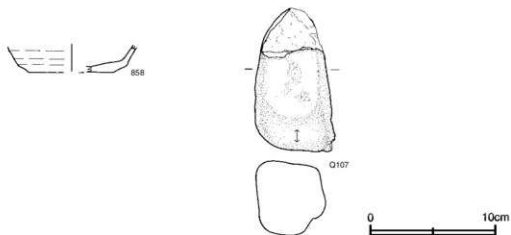
覆土 10層に分层される。不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

1	暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	7	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2	褐色	ローム粒子中量、炭沼ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	8	暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・炭沼パミス微量
3	暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	9	褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・炭沼パミス微量
4	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	10	暗褐色	ロームブロック少量
5	暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量			
6	褐色	ローム粒子中量、炭化粒子・炭沼パミス少量			

遺物出土状況 土師器片18点(甕類)、須臾器片17点(坏類8、蓋1、甕類8)、石器1点(磨石)、流れ込んだ弥生土器片2点が東部の覆土中層から下層にかけて出土している。858は中央部の覆土中層、Q107は覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀前半と考えられる。



第92図 第146号住居跡出土遺物実測図

第146号住居跡出土遺物観察表(第92図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
858	須臾器	坏	-	(2.2)	[6.8]	長石	黄灰	普通	底部一方向の手持ちヘラ削り	中層	30%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
Q107	砥石	(11.4)	6.4	5.9	(480.0)	石英質岩カ	砥面1面		下層		

第147号住居跡(第93～95図)

位置 調査区中央部のE6a2区で、傾斜地に位置している。

規模と形状 長軸3.48m、短軸3.41mの方形で、主軸方向はN-21°-Eである。壁高は34～44cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が硬化している。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで1.12m、袖部幅は0.98mである。袖部は地山面を凹凸に掘り込み、褐色土で床面と同じ高さに埋め戻し、その上に砂質粘土とローム土を混ぜた土を用い

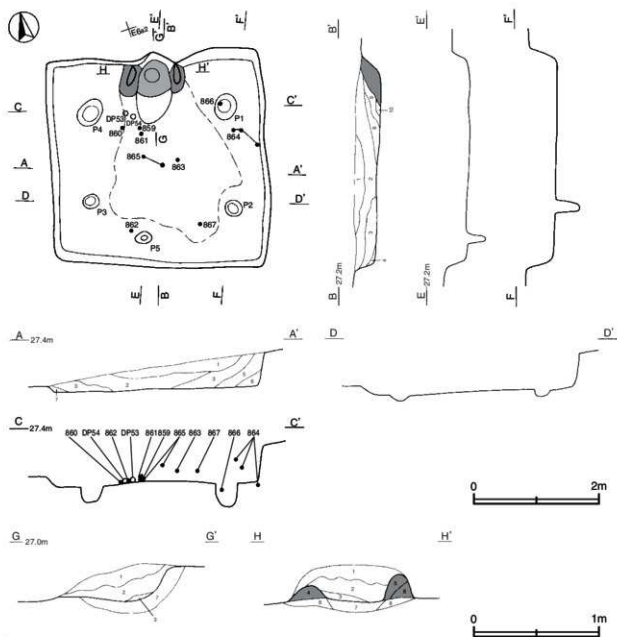
て構築されている。火床部は皿状に掘りくぼめられ、火床面は火熱により赤変硬化している。煙道部は壁外に17cm掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。第7・8層は、竈の掘り方の埋土である。

## 竈土層解説

- |          |                            |       |                              |
|----------|----------------------------|-------|------------------------------|
| 1 暗褐色    | 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量      | 6 褐色  | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量   |
| 2 赤褐色    | 焼土粒子中量、炭化粒子少量、ローム粒子微量      | 7 褐色  | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土ブロック微量 |
| 3 暗褐色    | 炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量           | 8 明褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量 |
| 4 明褐色    | ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量        |       |                              |
| 5 におい赤褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量 |       |                              |

ピット 5か所。P1～P4は深さ9～44cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ20cmで、竈と向かい合う位置にあり、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 10層に分層される。ロームブロックが多く含まれている状況から、人為堆積と考えられる。



第93図 第147号住居跡実測図

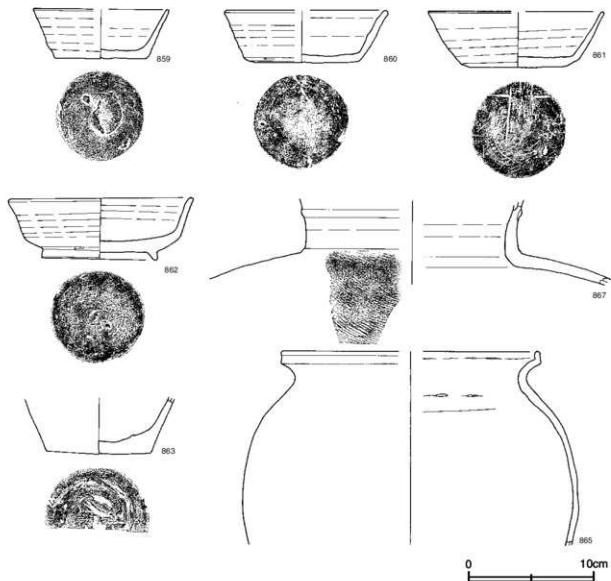


土層解説

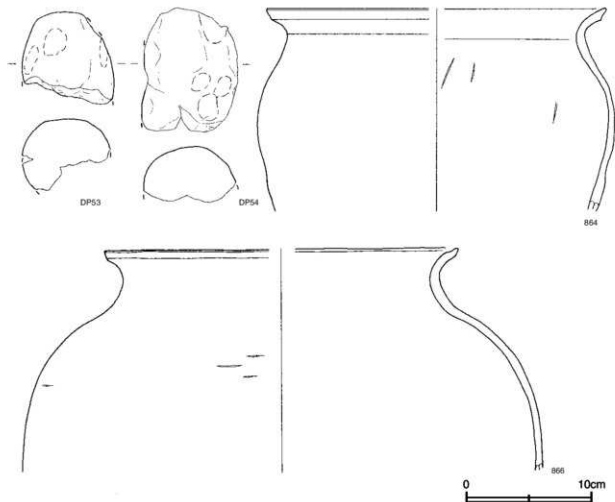
1	暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	6	褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
2	暗褐色	ロームブロック・焼沼パミス少量、炭化粒子微量	7	褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
3	褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	8	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量
4	褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	9	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
5	褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量	10	極暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量

**遺物出土状況** 土師器片97点(坏類3, 甕類94), 須恵器片36点(坏類27, 高台付坏3, 蓋2, 甕類3, 瓶類1), 土製品2点(支脚), 流れ込んだ弥生土器片1点が全域の覆土上層から床面にかけて出土している。859は甕前の覆土下層, 860・861・DP53・DP54はいずれも甕前の床面, 862は南部中央の床面, 863は中央部の覆土中層, 866はP1の覆土上層, 867は南部の覆土中層からそれぞれ出土している。864は東壁際中央の覆土上層から床面にかけて, 865は中央部の覆土中層から床面にかけて出土した破片が接合したものである。いずれも住居の廃絶に伴い投棄又は遺棄されたものと考えられる。

**所見** 廃絶時期は, 出土土器から8世紀中葉と考えられる。



第94図 第147号住居跡出土遺物実測図(1)



第95図 第147号住居跡出土遺物実測図(2)

第147号住居跡出土遺物観察表 (第94・95図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
859	須恵器	坏	[10.6]	3.9	7.1	長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ切り	下層	90% PL16
860	須恵器	坏	[12.8]	4.1	7.4	長石・黒色粒子	灰黄	普通	体部下端・底部回転ヘラ削り	床面	90% PL16
861	須恵器	坏	[13.8]	4.5	7.6	長石	灰	普通	底部回転ヘラ切り後ヘラナデ	床面	80% PL16
862	須恵器	高台付坏	14.4	5.1	9.0	長石・石英・針状磁鉄	灰	普通	体部下端・底部回転ヘラ削り	床面	90% PL17
863	須恵器	鉢	—	(4.6)	8.4	長石・黒色粒子	灰白	普通	底部回転ヘラ削り 焼成時に内面に炭分付着	中層	5% PL18
864	土師器	甕	[27.0]	(16.0)	—	長石・石英・雲母 赤色粒子	にぶい橙	普通	内面ヘラナデ 外面摩耗のため調整不明	上層～床面	5%
865	土師器	甕	[20.4]	(15.3)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	内面ヘラナデ 外面ナデ	中層～床面	30%
866	土師器	甕	[27.8]	(17.6)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	内面ナデ 外面ヘラナデ	P1上層	20%
867	須恵器	甕	—	(6.7)	—	細粒	灰黄	普通	内面ナデ 外面斜位の叩き	中層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP53	支脚	(7.3)	7.4	(5.6)	(212)	長石・石英・雲母・赤色粒子	指頭圧痕を残すナデ	床面	
DP54	支脚	(9.8)	7.4	(4.4)	(274)	長石・石英・雲母・赤色粒子	指頭圧痕を残すナデ	床面	

第148号住居跡 (第96・97図)

位置 調査区中央部のE6b4区で、緩やかな傾斜地に位置している。

**重複関係** 第118号住居跡を掘り込んでいる。

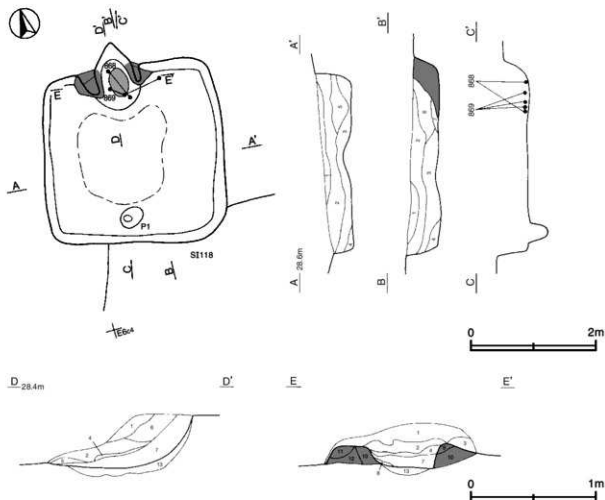
**規模と形状** 長軸2.92m, 短軸2.83mの方形で, 主軸方向はN-9°-Eである。壁高は40~49cmで, ほぼ直立している。

**床** ほぼ平坦で, 中央部が硬化している。

**竈** 北壁の中央部に付設されている。規模は, 焚口部から煙道部まで1.08m, 袖部幅は1.21mである。袖部は地山面を凹凸に掘り込み, その上に砂質粘土主体の土を用いて構築されている。火床部は皿状に掘りくぼめられ, 火床面は火熱により赤変硬化している。煙道部は壁外に17cm掘り込まれ, 火床面からほぼ直立している。第13層は, 竈の掘り方の埋土である。

**竈土層解説**

- |          |                                    |          |                                     |
|----------|------------------------------------|----------|-------------------------------------|
| 1 褐 色    | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量             | 8 黄 褐色   | 砂質粘土ブロック中量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量          |
| 2 にぶい黄褐色 | 砂質粘土粒子中量, ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量   | 9 黒 褐色   | 焼土粒子少量, ロームブロック・炭化粒子微量              |
| 3 暗 褐色   | ロームブロック・砂質粘土粒子少量, 炭化粒子微量           | 10 暗 赤褐色 | 焼土粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量          |
| 4 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック中量, ロームブロック・砂質粘土粒子少量, 炭化粒子微量 | 11 にぶい褐色 | 砂質粘土ブロック中量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量       |
| 5 黒 褐色   | 炭化物中量, ローム粒子・焼土粒子少量                | 12 黄 褐色  | 砂質粘土ブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子少量, ローム粒子・繊維微量 |
| 6 褐 色    | ロームブロック中量, 砂質粘土粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量   | 13 暗 褐色  | 焼土粒子・砂質粘土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子微量         |
| 7 暗 赤褐色  | 焼土ブロック少量, ローム粒子・炭化粒子微量             |          |                                     |



第96図 第148号住居跡実測図

**ピット** 1か所。深さ30cmで、竈と向かい合う位置にあり、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

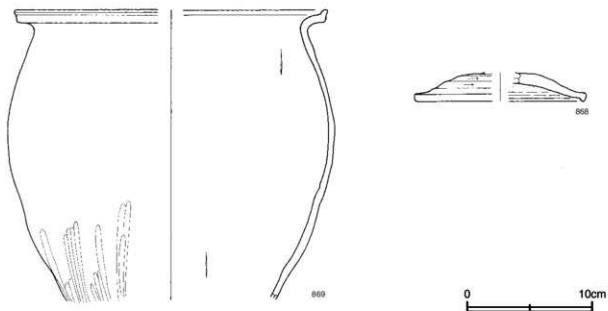
**覆土** 7層に分層される。壁際から土砂が流れ込んだ堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

## 土層解説

1 期	褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	5 期	褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量
2 期	褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	6 期	褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
3 期	褐色	ロームブロック少量	7 期	褐色	ローム粒子・砂質粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
4 期	褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量			

**遺物出土状況** 土師器片44点（坏類2，壳類42），須恵器片23点（坏類6，蓋4，壳類13），混入した磁器片1点，流れ込んだ弥生土器片3点が竈周辺を中心に出土している。868は竈内から出土している。869は竈内と北東壁際の床面から出土した破片が接合したものである。868は二次焼成を受けておらず，869は破片が散在しているため，いずれも竈内に一括して廃棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は，出土土器から8世紀後半と考えられる。



第97図 第148号住居跡出土遺物実測図

第148号住居跡出土遺物観察表（第97図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
868	須恵器	蓋	[13.2]	(2.3)	-	長石・石英・計 区炭質	灰褐色	普通	天井部回転ヘラ削り	竈内	30%
869	土師器	壳	[24.8]	(22.9)	-	長石・石英・葉 鉄	にぶい橙	普通	内面ヘラナデ 体部下端ヘラ磨き	竈内～床面	5%

## 第149号住居跡（第98・99図）

**位置** 調査区南部のE 6 e9区で，平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第13号溝に掘り込まれている。

**規模と形状** 西部が第13号溝に掘り込まれているため，確認された範囲は長軸3.15m，短軸2.50mで，方形又は長方形と推測される。主軸方向はN-16°-Eである。壁高は18～37cmで，ほぼ直立している。

**床** はほぼ平坦で，竈前が硬化している。壁溝が，全周していると推測される。

竈 北壁に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで1.00m、袖部幅は1.45mである。袖部は地山面を凹凸に掘り込み、その上に砂質粘土主体の土を用いて構築されている。火床部は皿状に掘りくぼめられ、燃焼部全体が火熱により赤変硬化している。煙道部は壁外に20cm掘り込まれ、火床面から緩やかに立ち上がっている。

覆土層解説

- |         |                                |       |                              |
|---------|--------------------------------|-------|------------------------------|
| 1 黒褐色   | 炭化粒子多量、砂質粘土粒子中量、ロームブロック・焼土粒子少量 | 5 黄褐色 | 砂質粘土粒子多量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量   |
| 2 黄褐色   | 砂質粘土粒子中量、ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | 焼土粒子・砂質粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量   |
| 3 暗赤褐色  | 焼土ブロック中量、ロームブロック・砂質粘土粒子少量      | 7 黄褐色 | 砂質粘土ブロック少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 にぶい褐色 | 砂質粘土ブロック多量、焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 8 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子・炭化粒子微量     |

ピット 1か所。深さ10cmの楕円形で、中央部に位置している。性格は不明である。

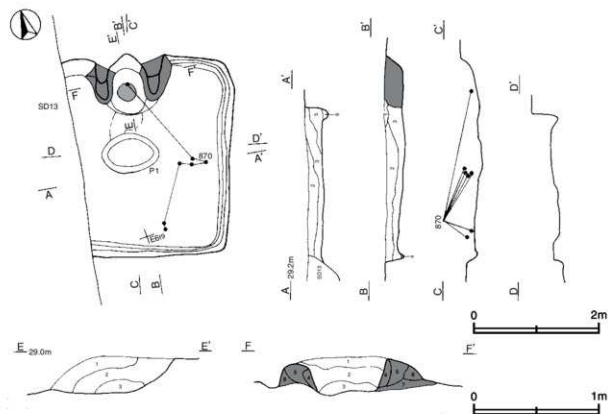
覆土 6層に分層される。土砂が壁際から流れこんだ堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

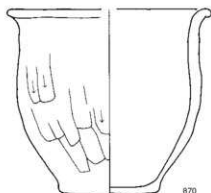
- |       |                       |       |                       |
|-------|-----------------------|-------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量 | 4 褐色  | ロームブロック中量             |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量        | 5 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量   |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 褐色  | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片24点(堿類)、須恵器片2点(坏、高台付坏)が南東部の覆土中層から下層にかけて多く出土している。870は窠内から南部にかけての広い範囲で接合関係にあり、覆土上層から中層にかけて出土していることから、住居の廃絶後ある程度埋没してから投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、投棄された遺物から、9世紀中葉以前と考えられる。



第98図 第149号住居跡実測図



第99図 第149号住居跡出土遺物実測図

第149号住居跡出土遺物観察表 (第99図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
870	土師器	甕	[15.6]	14.8	8.0	石英・繊維	橙	普通	内面ナデ外面ヘウケリ	上層～中層	50%

## 第151号住居跡 (第100・101図)

**位置** 調査区南部のF 7 b7区で、平坦な台地上に位置している。

**規模と形状** 長軸4.24m、短軸4.15mの方形で、主軸方向はN-122°-Eである。壁高は45~48cmで、直立している。

**床** ほぼ平坦で、中央部が硬化している。壁溝が、北壁の一部を除いて巡っている。

**竈** 東壁のやや北寄りに付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで1.13m、袖部幅は0.94mである。袖部は地山面を凹凸に掘り込み、砂質粘土主体の土を用いて構築されている。火床部は皿状に掘りくぼめられ、火床面が火熱により赤変硬化している。煙道部は壁外に41cm掘り込まれ、火床面から緩やかに立ち上がっている。第8層以下は、竈の掘り方の埋土である。

## 竈土層解説

1 暗褐色	焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量、ローム粒子・繊維微量	6 黄褐色	砂質粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗赤褐色	焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量	7 黄褐色	砂質粘土ブロック・繊維中量、焼土ブロック・ローム粒子少量
3 暗赤褐色	焼土粒子中量、炭化粒子少量、ローム粒子微量	8 褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
4 黒褐色	焼土ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量	9 暗赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック・砂質粘土ブロック・炭化物少量、焼土粒子微量	10 褐色	ロームブロック中量

**ピット** 7か所。P 1~P 4は深さ30~54cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P 5は深さ25cmで、位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。その他のピットは、位置から柱を支える補助的な柱穴と考えられる。

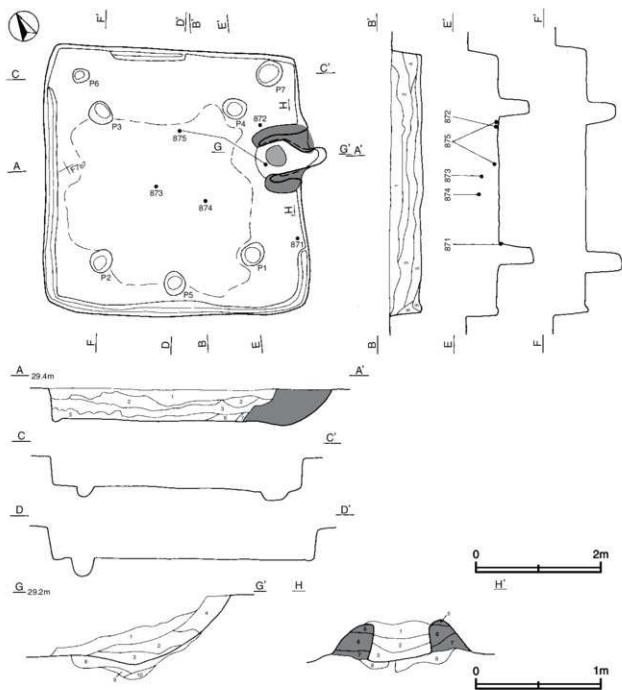
**覆土** 9層に分層される。不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

## 土層解説

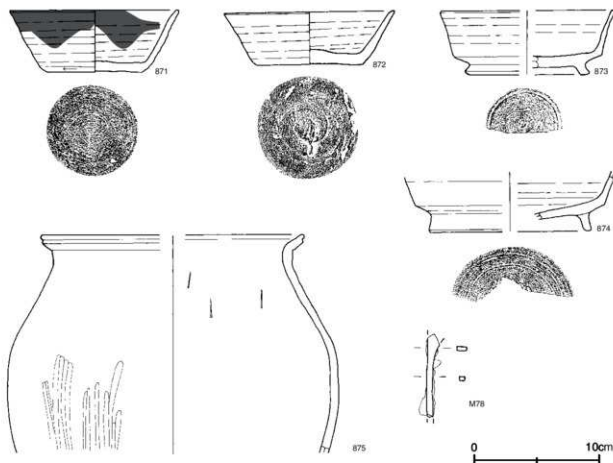
1 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	6 黄褐色	砂質粘土ブロック中量、焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	7 暗赤褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	8 黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
4 褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量	9 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量		

**遺物出土状況** 土師器片106点(甕), 須恵器片13点(坏類11, 高台付坏2), 鉄器1点(鐵), 流れ込んだ弥生土器片12点が全域の覆土上層から床面にかけて出土している。871は南東壁際の床面から出土し, 口縁部に油煙が付着している。872は左袖外側の床面, 873・874は中央部の覆土中層, M78は覆土中からそれぞれ出土している。875は竈内と中央部の床面から出土した破片が接合している。いずれも住居の廃絶に伴い投棄又は遺棄されたものと考えられる。

**所見** 東部に竈を有する住居で, 当遺跡においては他には見られない住居の形態である。油煙が付着した土器も出土しており, 同時期の住居としては特異な様相を示している。廃絶時期は, 出土土器から8世紀後葉から9世紀前葉と考えられる。



第100図 第151号住居跡実測図



第101図 第151号住居跡出土遺物実測図

第151号住居跡出土遺物観察表 (第101図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
871	須恵器	坏	13.2	4.9	7.4	長石・石英	灰白	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	床面	90% 遺行層 PL16
872	須恵器	坏	13.5	4.2	8.4	長石・針状鉱物	灰	普通	底部回転ヘラ削り	床面	90% PL16
873	須恵器	高台付坏	[13.6]	5.1	[9.0]	長石・針状鉱物	灰黄	普通	底部回転ヘラ削り 底部外面墨痕々	中層	30% 底面外 面ヘラ磨き 肥田灰々
874	須恵器	高台付坏	—	(4.8)	[12.9]	長石・石英	にぶい黄	普通	底部回転ヘラ削り	中層	30%
875	土師器	壺	[20.8]	[17.2]	—	長石・石英	にぶい黄	普通	内面ヘラナデ 外面ヘラ磨き	壺内・床面	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M78	簾	(6.6)	0.9	0.4	(9.0)	鉄	上端の断面が長方形で膨らむ	覆土中	

## 第153号住居跡 (第102・103図)

位置 調査区中央部のC4c4区で、緩やかな傾斜地に位置している。

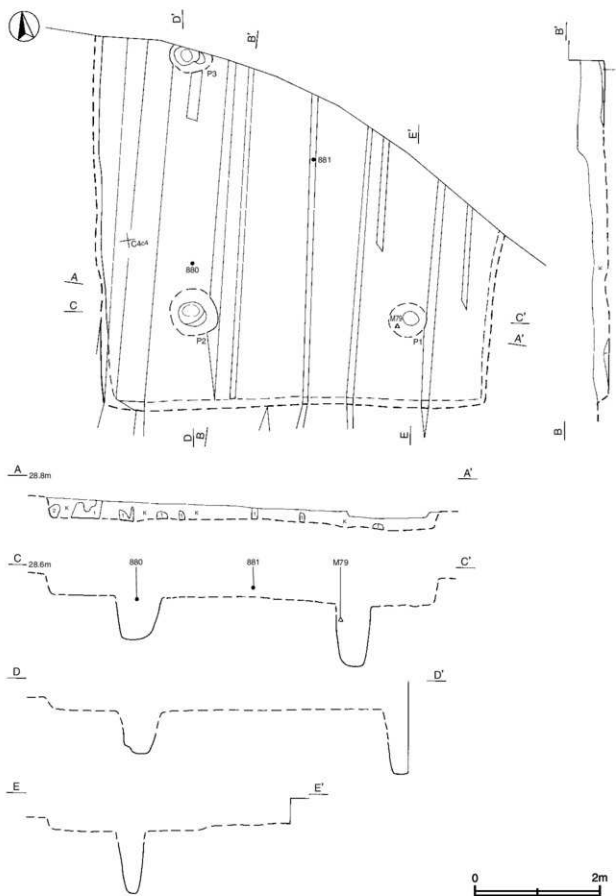
規模と形状 北部が調査区域外へ延びているため、確認できた範囲は長軸6.20m、短軸5.85mの方形又は長方形で、主軸方向はN-13°-Eである。壁高は30~40cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦である。

ピット 3か所。深さ65~102cmで、規模と配置から支柱穴と考えられる。

覆土 2層に分層される。大部分が攪乱を受けており、堆積状況は不明である。





第102图 第153号住居跡実測図

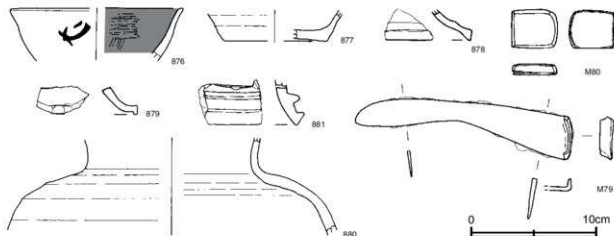
## 土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化物微量

2 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片314点(坏類30, 高台付坏3, 甕類281), 須恵器片217点(坏類125, 高台付坏8, 蓋32, 壺1, 高盤2, 甕類45, 甗3, 円面硯1), 石器1点(砥石), 鉄器・銅製品2点(鎌, 鉞尾), 流れ込んだ弥生土器片3点が全域の覆土上層から床面にかけて出土している。攪乱により混入した遺物が多くみられ, 876の墨書土器「尤」も混入と考えられる。876~879・M80は覆土中, 880はP2の北側の床面, 881は中央部の覆土中層, M79はP1の覆土上層からそれぞれ出土している。

**所見** 時期は, 出土土器から8世紀後葉から9世紀前葉と考えられる。



第103図 第153号住居跡出土遺物実測図

第153号住居跡出土遺物観察表(第103図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
876	土師器	坏	[13.5]	(4.2)	-	長石・石英・黒色粒子	橙	普通	内面へう磨き	覆土中	5% 体部墨書「尤」PL19
877	須恵器	坏	-	(2.6)	[8.0]	長石・石英	灰	普通	底部回転へう削り	覆土中	5%
878	須恵器	高盤*	-	(2.5)	-	長石	灰	良好	ロクロナデ	覆土中	5% 内面白熱焼
879	須恵器	高盤	-	(2.2)	-	長石・石英・黒色粒子	黄灰	普通	ロクロナデ 透かし有り	覆土中	5%
880	須恵器	壺	-	(7.8)	-	長石・黒色粒子	灰	普通	ロクロナデ	床面	5%
881	須恵器	円面硯	-	(3.6)	-	長石・黒色粒子	黄灰	普通	ロクロナデ 透かし有り	床面	5%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考
M79	鎌	17.2	3.4	0.4	47.1	鉄	柄付部を折り返す			P1上層	PL21
M80	鉞尾	3.6	3.0	0.9	19.1	銅	表裏に漆の付着*			覆土中	PL21

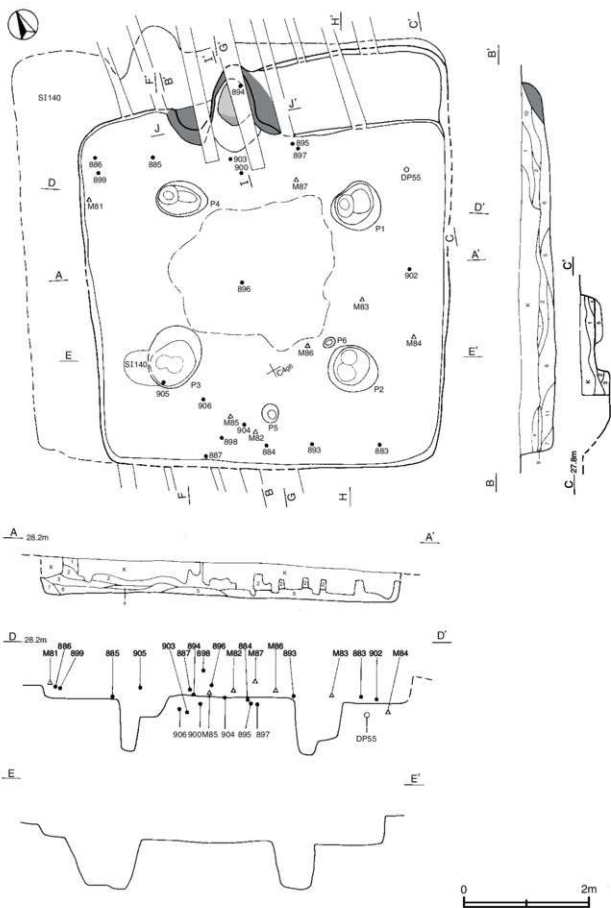
## 第154号住居跡(第104~107図)

**位置** 調査区中央部のC4f6区で, 緩やかな傾斜地に位置している。

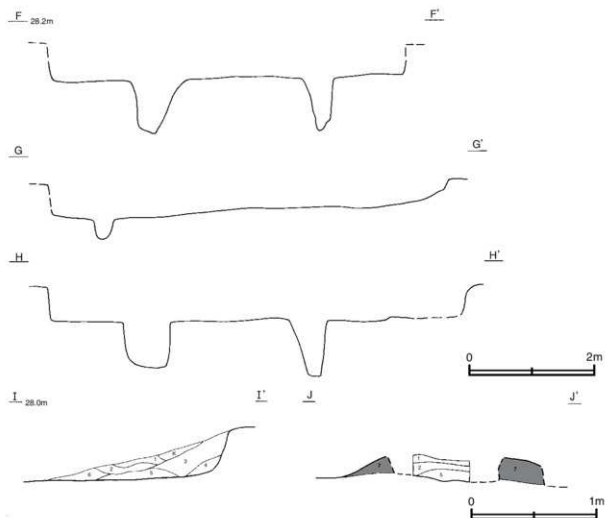
**重複関係** 第140号住居跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長軸6.50m, 短軸5.70mの方形で, 主軸方向はN-27°-Eである。壁高は20~54cmで, 外傾して立ち上がっている。

**床** はほぼ平坦である。中央部が踏み固められている。



第104图 第154号住居跡実測图(1)



第105図 第154号住居跡実測図(2)

**竈** 北壁の西寄りに付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで1.38mである。袖部は床面とほぼ同じ高さの地山面の上に、粘土主体の土を用いて構築されている。火床部は皿状に掘りくぼめられ、火床面から外傾して立ち上がっている。火床面は火熱により赤変硬化している。

**竈土層解説**

- |          |                            |          |                               |
|----------|----------------------------|----------|-------------------------------|
| 1 暗褐色    | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量          | 4 に近い黄褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量 |
| 2 暗褐色    | 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 | 5 暗褐色    | 焼土ブロック・炭化物・灰少量、ローム粒子微量        |
| 3 に近い赤褐色 | 焼土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 | 6 黒色     | 炭化物中量、ローム粒子・焼土粒子微量            |
|          |                            | 7 に近い黄褐色 | 粘土粒子中量、焼土ブロック・ローム粒子微量         |

**棚状施設** 竈の右脇に確認された。床面より6cm高い地山面を凹凸に掘り込み、褐色土で埋め戻している。奥行きは1.1mほどである。第5層は、掘り方の埋土である。

**棚状施設土層解説**

- |       |                              |       |                         |
|-------|------------------------------|-------|-------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物・焼沼バミス微量 | 3 褐色  | ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 2 褐色  | ロームブロック中量、焼沼バミス少量            | 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量     |
|       |                              | 5 褐色  | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量   |

ピット 6か所。P1～P4は深さは73～90cmで、規模や配置から支柱穴と考えられる。P5は竈と向かい合う位置にあり、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は規模が小さく、性格は不明である。

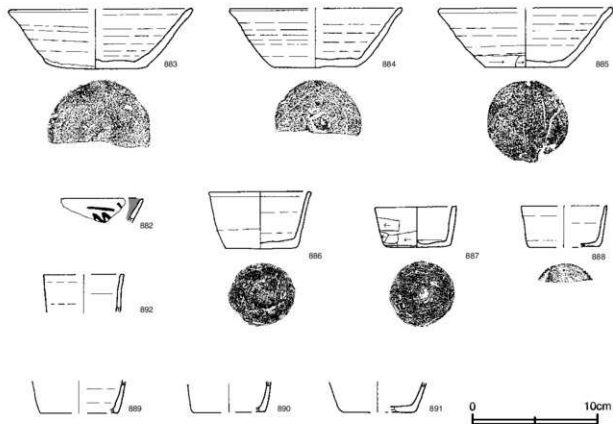
覆土 11層に分層される。各層にブロック状の堆積物を多く含み、不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

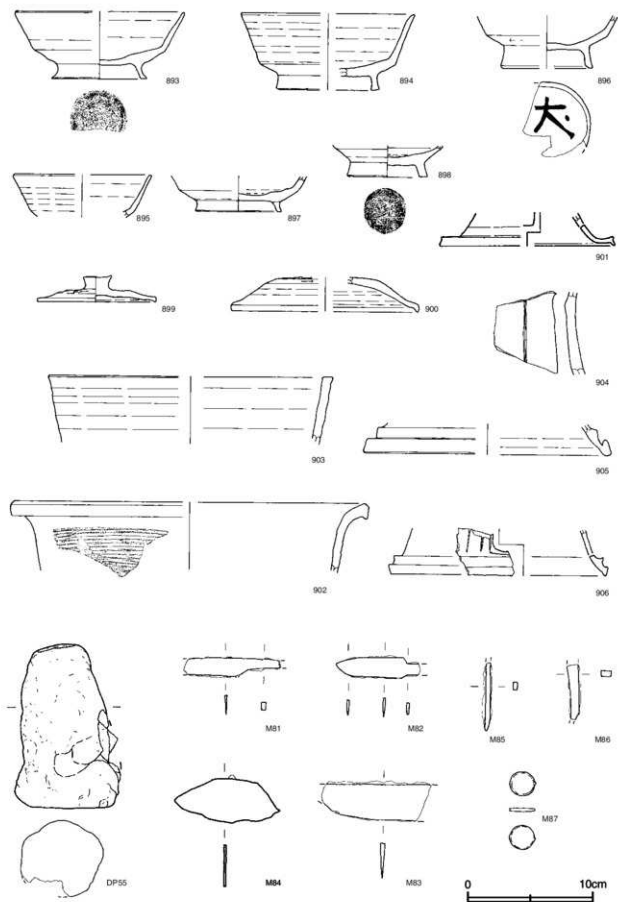
1	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	7	褐色	ローム粒子中量、鹿沼バミス少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2	褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・鹿沼バミス微量	8	褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子少量、砂質粘土粒子微量
3	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化物微量	9	褐色	ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
4	褐色	ロームブロック中量、鹿沼バミス少量、焼土粒子・炭化粒子微量	10	褐色	ロームブロック中量、炭化物・焼土粒子少量、砂質粘土粒子微量
5	褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・鹿沼バミス微量	11	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・砂質粘土粒子少量
6	褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・鹿沼バミス微量			

遺物出土状況 土師器片203点(坏類39, 高台付坏6, 蓋1, 甕類156, 甌1), 須恵器片203点(坏類98, 高台付坏22, 蓋27, 盤3, 甕類38, 甌2, 長頸瓶2, 高盤1, コップ形土器7, 円面甌3), 土製品1点(支脚), 金属製品7点(刀子2, 鎌1, 釘1, 棒状金具1, 不明1, 不明銅製品1), 流れ込んだ弥生土器片1点が全域の覆土上層から床面にかけて出土している。894は竈内, 895・897・900・903・906・DP55・M84は住居の掘り方内, 888はP2の覆土中からそれぞれ出土している。884・887・893・898・904・M82・M85は南部中央の覆土上層から床面にかけて, 885・886・899・M81は北西部の覆土上層から下層にかけて出土している。いずれも住居の廃絶に伴い投棄又は遺棄されたものと考えられる。

所見 廃絶時期は, 出土土器から9世紀前葉と考えられる。



第106図 第154号住居跡出土遺物実測図(1)



第107図 第154号住居跡出土遺物実測図(2)

第154号住居跡出土遺物観察表 (第106・107図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
882	土師器	坏	—	(1.9)	—	長石	橙	普通	内面へう磨き	覆土中	5% 底部磨き [C]
883	須恵器	坏	[14.3]	4.7	8.2	長石・石英・針状炭素物	にぶい橙	普通	底部へうナデ	掘り方	60%
884	須恵器	坏	[13.6]	4.7	6.8	長石・石英	灰	普通	底部回転へう切り	床面	30%
885	須恵器	坏	[13.6]	4.7	6.5	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端・底部手持ちへう削り	下層	30%
886	須恵器	コップ形土器	7.8	4.5	5.6	長石・黒色粒子	黄灰	普通	体部下端・底部へうナデ	中層	100% PL18
887	須恵器	コップ形土器	6.5	3.3	5.2	長石・石英・黒色粒子	灰濁	普通	体部・底部手持ちへう削り	中層	100% PL18
888	須恵器	コップ形土器	[6.8]	3.3	[5.8]	長石・黒色粒子	黄灰	良好	底部回転へう削り	P2 覆土中	30%
889	須恵器	コップ形土器	—	(2.6)	[6.2]	黒色粒子・繊維	灰	普通	外面・底部自然輪により調整不明	覆土中	5%
890	須恵器	コップ形土器	—	(2.2)	[5.7]	長石	暗赤灰	普通	ロクロナデ	覆土中	10%
891	須恵器	コップ形土器	—	(2.4)	[5.8]	長石・黒色粒子	灰	良好	ロクロナデ 底部降灰のため調整不明	覆土中	10% 892と同一形状
892	須恵器	コップ形土器	[6.2]	(3.1)	—	長石・黒色粒子	黄灰	普通	ロクロナデ	覆土中	10% 891と同一形状
893	須恵器	高台付坏	[13.4]	5.4	7.6	長石・石英・針状炭素物	灰	普通	底部回転へう削り	下層	30%
894	須恵器	高台付坏	[13.8]	6.1	[8.2]	長石・石英	灰	普通	底部回転へう切り	竈内	20%
895	須恵器	高台付坏	[11.0]	(3.4)	—	長石	濁灰	普通	ロクロナデ	掘り方	5%
896	須恵器	高台付坏	—	(4.2)	[7.2]	長石・雲母	にぶい黄	普通	体部下端回転へう削り 底部回転へう切り	中層	30% 底部磨き [A]
897	須恵器	高台付坏	—	(2.9)	6.7	長石・石英	黄灰	普通	底部回転へう削り	掘り方	10%
898	須恵器	高台付坏	—	(2.6)	6.3	長石・石英	にぶい赤黒	普通	底部回転へう削り	上層	5% 底部へう磨き
899	須恵器	蓋	[9.4]	2.1	—	長石・石英	黄灰	普通	天井部回転へう削り	中層	90% PL17
900	須恵器	蓋	[14.8]	(2.8)	—	長石・石英	灰	普通	天井部回転へう削り	掘り方	5%
901	須恵器	高盤	—	(2.6)	[13.8]	長石・石英	黒	普通	ロクロナデ 方形の透かし有り	覆土中	5%
902	須恵器	甗	[28.0]	(5.5)	—	長石・石英・雲母	濁灰	普通	ロクロナデ 外面横位の叩き	中層	5%
903	須恵器	甗	[22.6]	(5.3)	—	長石・石英	灰濁	普通	ロクロナデ	掘り方	5%
904	須恵器	円面硯	—	(6.5)	—	長石・黒色粒子	黒濁	普通	ロクロナデ 線刻あり	床面	5%
905	須恵器	円面硯	—	(2.4)	[19.4]	長石・石英	灰黄濁	普通	ロクロナデ	中層	5% PL18
906	須恵器	円面硯	—	(3.4)	[17.2]	長石・石英・黒色粒子	灰	普通	ロクロナデ 透かし有り 線刻有り	掘り方	5% PL18

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP55	支脚	13.0	8.4	6.1	(591)	長石・赤色粒子	指頭圧痕を残すナデ	掘り方	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M81	刀子	(7.7)	1.6	0.2	(13.8)	鉄	両端欠損 刃間	中層	PL21
M82	刀子*	6.7	1.9	0.2	(14.3)	鉄	刃先部から基部 両端	中層	PL21
M83	鎌	(8.7)	2.9	0.4	(61.4)	鉄	両端欠損	中層	PL21
M84	不明	8.4	3.4	0.1	21.7	鉄	両端欠損 鎌*	掘り方	
M85	釘	(5.5)	0.3	0.4	(14.4)	鉄	断面方形 先端部先細り	下層	
M86	棒状金具	(4.5)	0.8	0.5	(13.6)	鉄	断面長方形 両端欠損	中層	
M87	不明	2.1	2.0	0.3	6.7	銅	鍍金	上層	PL21

表5 奈良・平安時代住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	面積(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	内部施設				土層	主な出土遺物	備考 重複関係 (旧→新)	
							燃溝	土柱穴	出入口	ピット				
121	B3e2	N-12°-E	方形	5.02×4.80	28~30	平坦	全周	4	1	—	—	甕	人為	土師器 須恵器 磁石
122	B3f4	N-27°-W	長方形	3.41×2.87	26~30	平坦	全周	—	1	2	—	甕	人為	須恵器

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	内 部 施 設						覆土	主な出土遺物	備考 重複関係 (旧→新)
							壁溝	主柱穴	出入口	ピット	貯蔵穴	竈			
123	B3h5	N-12°-E	方形	4.06×3.2	25~38	平坦	全周	—	1	2	—	竈	人為	土師器 須恵器 土製品 石器	本跡→S260
124	B2a2	N-22°-W	[不定方形]	5.70×(5.0)	44~50	平坦	一部	3	—	2	—	竈	人為	土師器 須恵器 石製品 鉄製品	
125	A2β	N-4°-E	[亦長方形]	3.00×(2.8)	14	平坦	一部	—	1	—	—	竈	自然	土師器	本跡→S137
126	A2γ	N-8°-E	方形	4.80×4.7	4~21	平坦	一部	—	2	4	1	竈	不明	土師器 須恵器	S127→本跡→SK181
127	A2γ	N-6°-E	方形	3.78×3.67	14~30	平坦	一部	—	2	—	—	竈	自然	土師器 須恵器 土製品	本跡→S126
128	B245	N-5°-E	[亦長方形]	5.52×(5.0)	0~16	平坦	—	3	—	2	—	竈	不明	土師器 須恵器	
129	B2f0	N-14°-E	方形	4.78×4.2	20~25	平坦	一部	4	1	5	—	竈	人為	土師器 須恵器 鉄製品 鉄洋	S130→本跡
130	B2g0	N-6°-E	方形	4.80×4.7	24~46	平坦	一部	7	1	8	—	竈	人為	土師器 須恵器 石器 鉄製品	本跡→S128→S133
131	B3f2	N-10°-E	方形	2.57×2.2	12~22	平坦	—	4	1	—	—	竈	自然	土師器 須恵器	S132→本跡
132	B3g2	N-11°-W	方形	4.54×4.3	18~24	平坦	[全周]	4	1	—	—	竈	自然	土師器 須恵器 鉄製品	本跡→S131→S132
133	B3g1	N-12°-E	方形	2.76×2.6	24	平坦	—	—	1	—	—	竈	自然	—	S132→本跡→PG12
134	B3i3	N-5°-E	方形	3.68×3.56	35~36	平坦	全周	—	—	—	—	竈	人為	土師器 須恵器 鉄製品 銅製品	
135	C3d8	N-18°-E	[亦長方形]	2.81×(2.4)	[20]	平坦	—	—	—	—	—	竈	不明	須恵器 土師器 石器	
136	C3b0	N-9°-E	[亦長方形]	4.20×(2.9)	7~18	平坦	一部	—	1	3	1	竈	自然	土師器 須恵器 灰輪陶器 石器	
137	A2j2	N-8°-E	[亦長方形]	4.44×(2.6)	22~44	平坦	—	—	2	—	—	竈	人為	土師器	S125→本跡
138	C4c2	N-10°-E	[亦長方形]	5.21×(4.3)	[33~46]	平坦	—	4	1	8	—	竈	不明	土師器 須恵器 灰輪陶器 土製品 鉄製品	
139	C4d4	N-18°-E	[長方形]	4.37×(3.8)	[37~40]	平坦	—	—	1	—	—	竈	不明	土師器 須恵器 灰輪陶器 鉄製品	
140	C4f5	N-27°-E	[方形]	〔3.8〕×〔3.7〕	46~48	平坦	—	4	—	—	1	竈	人為	須恵器 鉄製品	本跡→S151
141	C4f6	N-41°-W	[長方形]	3.96×(2.5)	12~26	平坦	—	—	—	1	—	竈	人為	須恵器 鉄製品	
142	C4b0	N-4°-E	方形	4.88×4.64	34~53	平坦	一部	—	1	—	—	竈	人為	土師器 須恵器 灰輪陶器 石器 鉄製品	SK200→本跡
143	C5j1	N-7°-E	長方形	4.85×4.0	0~32	平坦	—	—	—	5	—	竈	人為	土師器 須恵器 灰輪陶器 石製品	
144	D5i0	N-28°-E	方形	3.40×3.21	16~42	平坦	一部	4	1	—	—	竈	自然	土師器 須恵器 鉄製品	
145	D6j1	N-28°-E	長方形	4.41×3.75	19~52	平坦	全周	4	—	—	—	竈	人為	土師器 須恵器 石器 鉄製品	
146	D6j3	N-27°-E	[亦長方形]	4.68×(3.4)	24~55	平坦	[全周]	2	1	—	—	竈	人為	須恵器 石器	
147	E6a2	N-21°-E	方形	3.48×3.41	34~44	平坦	—	4	1	—	—	竈	人為	土師器 須恵器 土製品	
148	E6b4	N-9°-E	方形	2.92×2.83	40~49	平坦	—	—	1	—	—	竈	自然	須恵器 土師器	S118→本跡
149	E6e9	N-16°-E	[亦長方形]	3.15×(2.3)	18~37	平坦	[全周]	—	—	1	—	竈	自然	土師器	本跡→SD13
151	F7b7	N-122°-E	方形	4.24×4.5	45~48	平坦	一部	4	1	2	—	竈	人為	土師器 須恵器 鉄器	
153	C4c4	N-13°-E	[亦長方形]	〔6.20〕×〔5.85〕	30~40	平坦	—	3	—	—	—	竈	不明	土師器 須恵器 鉄器 鉄製品 銅製品	
154	C4f6	N-27°-E	方形	6.50×5.70	20~54	平坦	—	4	1	1	—	竈	人為	土師器 須恵器 鉄器 鉄製品	S140→本跡

## (2) 掘立柱建物跡

## 第55号掘立柱建物跡 (第108図)

位置 調査区北部のB2b0区で、平坦な台地上に位置している。

重複関係 第108号住居跡を掘り込み、第6ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 北部が調査区域外へ延びている。桁行3間、梁行2間の圓柱建物で、桁行方向N-8°-Eの南北棟である。規模は、桁行6.15m、梁行4.18mで、柱間寸法は桁行が1.8m~2.2m、梁行は2.1mを基調としている。面積は25.71㎡である。

柱穴 7か所。平面形は円形又は楕円形で、深さは15~40cmである。土層は、いずれも柱抜き取り後の覆土である。

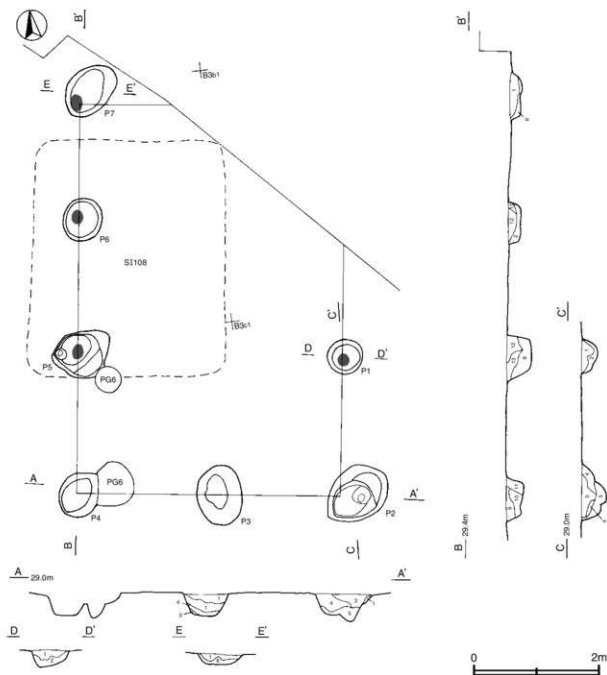


土層解説

1 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	8 褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	9 褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 明褐色	ロームブロック多量	10 褐色	ロームブロック多量、炭化粒子微量
4 褐色	ロームブロック多量、炭化粒子微量	11 明褐色	ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量
5 褐色	ロームブロック多量	12 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量
6 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量	13 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
7 暗褐色	ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子微量		

遺物出土状況 土師器片 6 点 (壳) が出土している。いずれも細片のため、図示できなかった。

所見 本跡は、南東に10mほど離れた第121号住居跡、南に15mほど離れた第129・131号住居跡などの9世紀に比定される住居跡と軸方向を同じくしているため、同時期の集落に伴う「屋」と想定される。



第108図 第55号掘立柱建物跡実測図

## 第56号掘立柱建物跡 (第109図)

位置 調査区北部のB3c1区で、平坦な台地上に位置している。

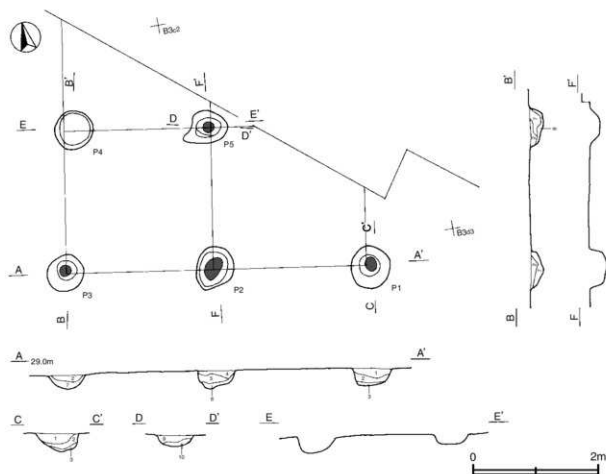
規模と形状 北部が調査区域外へ延びているため、詳細は不明である。桁行方向をN-11°-Eとする竈柱建物で、規模は、確認できた範囲で、桁行3.60m、梁行4.73mで、柱間寸法は桁行が2.3mを基調とし、梁行は2.3m~2.4mである。

柱穴 5か所。平面形は円形が主であるが、P5は不整形である。深さは17~27cmである。土層は、いずれも柱抜き取り後の覆土である。

## 土層解説

1 無暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	6 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
2 褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量	7 褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
3 褐色	ロームブロック中量	8 褐色	ロームブロック多量、炭化粒子微量
4 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	9 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	10 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量

所見 時期は、出土遺物がないため明確ではないが、隣接する第55号掘立柱建物跡と桁行方向がほぼ同じであるため、時期は第55号掘立柱建物跡に前後する時期と考えられる。集落に伴う「倉」と想定される。



第109図 第56号掘立柱建物跡実測図

## 第57号掘立柱建物跡 (第110図)

位置 調査区北部のB3g6区で、平坦な台地上に位置している。

**規模と形状** 北部が調査区域外へ延びているため、確認できた範囲で、桁行2間、梁行3間の側柱建物で、桁行方向をN-17°-Eとする南北棟と推測される。規模は、確認できた範囲で、桁行3.72m、梁行4.10mで、柱間寸法は桁行が1.7m、梁行は1.3mを基調としている。

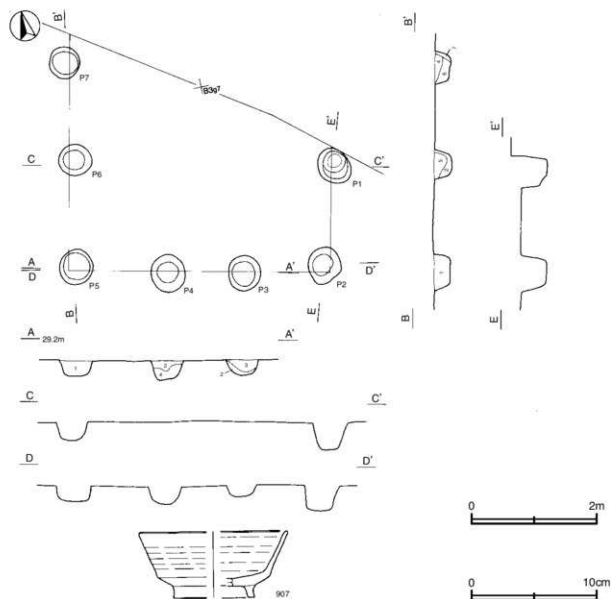
**柱穴** 7か所。平面形は円形で、深さ21~40cmである。土層は、いずれも柱抜き取り後の覆土である。

**土層解説**

- |       |                       |       |                  |
|-------|-----------------------|-------|------------------|
| 1 褐色  | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量   | 5 褐色  | ロームブロック中量        |
| 2 褐色  | ロームブロック中量、炭化粒子微量      | 6 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量   |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量      | 7 褐色  | ロームブロック多量、炭化粒子微量 |
| 4 褐色  | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |       |                  |

**遺物出土状況** 土師器片3点(甕)、須恵器片5点(坏2、高台付坏1、蓋1、甕類1)が出土している。907はP5の覆土から出土している。

**所見** 本跡は、第55・56・58・59号掘立柱建物跡とともに北部に展開する建物群で、同時期の集落に付随する「屋」と想定される。時期は、出土土器や建物群との関係から、9世紀前葉と考えられる。



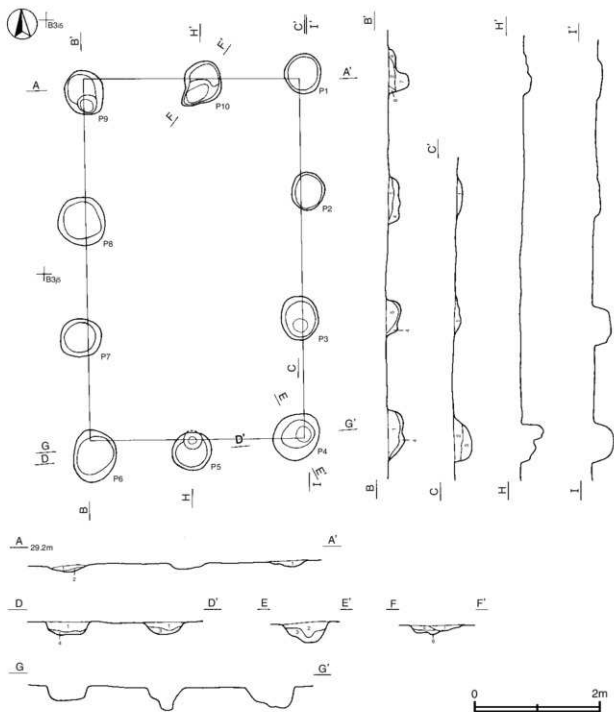
第110図 第57号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第57号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第110図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
907	須恵器	高台台杯	[11.6]	5.3	[6.4]	長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ削り	覆土中	20%

第58号掘立柱建物跡 (第111図)

位置 調査区北部のB3区5区で、平坦な台地上に位置している。



第111図 第58号掘立柱建物跡実測図

**規模と形状** 桁行3間、梁行2間の側柱建物で、桁行方向をN-1°-Wとする南北棟である。規模は、桁行5.72m、梁行3.42mで、柱間寸法は桁行が1.8m~2.0m、梁行は1.7mを基調としている。面積は19.56㎡である。

**柱穴** 10か所。平面形は円形又は楕円形で、深さは8~34cmである。土層は、いずれも柱抜き取り後の覆土である。

**土層解説**

1 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	6 褐色	ロームブロック少量
2 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量	7 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 褐色	ロームブロック多量	8 褐色	ロームブロック中量
4 褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	9 褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量		

**遺物出土状況** 土師器片5点(坏2, 甕3)、須恵器片2点(坏)が出土している。いずれも細片のため図示できなかった。

**所見** 本跡は、第55~57・59号掘立柱建物跡とともに北部に展開する建物群で、同時期の集落に付随する「屋」と想定される。時期は、出土土器や建物群との関係から、9世紀前葉と考えられる。

**第59号掘立柱建物跡 (第112図)**

**位置** 調査区北部のB3h2区で、平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第133号住居跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 南部が調査区域外へ延びているため、確認できた範囲で、桁行2間、梁行2間の側柱建物で、桁行方向をN-9°-Eとする南北棟と推測される。規模は、確認できた範囲で、桁行4.10m、梁行3.84mで、柱間寸法は桁行が1.5~1.7mで、梁行は1.9mを基調としている。

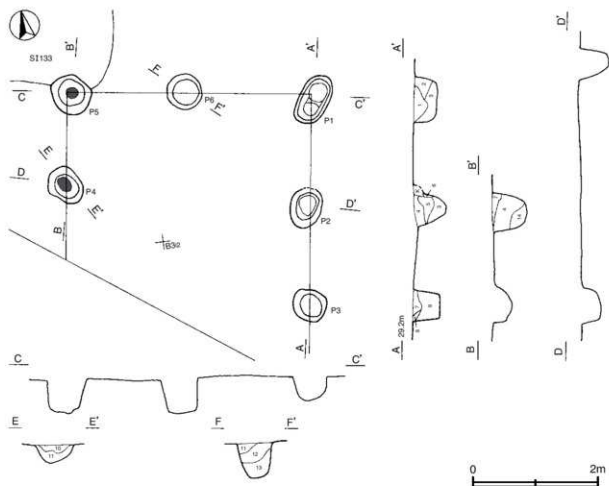
**柱穴** 6か所。平面形は円形又は楕円形で、深さ28~55cmである。土層は、いずれも柱抜き取り後の覆土である。

**土層解説**

1 褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量	8 褐色	ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 にぶい褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量	9 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	10 暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
4 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	11 褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
5 褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	12 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
6 褐色	ロームブロック多量	13 褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
7 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	14 暗褐色	ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片9点(坏類1, 甕類8)、須恵器片17点(坏類3, 高台付坏2, 盤1, 大甕11)、流れ込んだ弥生土器片2点が出土している。いずれも細片のため図示できなかった。大甕の須恵器片はすべてP1から出土しており、廃絶後に一括して柱穴に投棄したものと考えられる。

**所見** 須恵器の大甕は本跡において使用された可能性が考えられるが、据え付けの痕跡などは確認できなかった。廃絶時期は、出土土器や建物群との関係から、9世紀後半と考えられる。



第112図 第59号掘立柱建物跡実測図

## 第60号掘立柱建物跡 (第113図)

**位置** 調査区北部のB3h4区で、平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第123号住居跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 桁行3間、梁行2間の側柱建物で、桁行方向をN-88°-Wとする東西棟である。規模は、桁行5.84m、梁行4.40mで、柱間寸法は桁行が1.8m~2.2mで、梁行は2.2mを基調としている。面積は25.70㎡である。

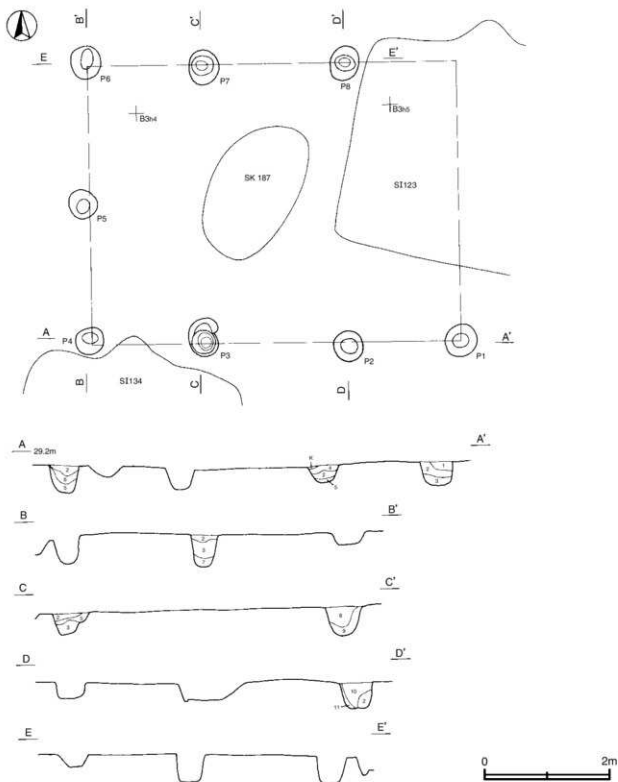
**柱穴** 8か所。平面形は円形又は楕円形で、深さは19~47cmである。土層は、いずれも柱抜き取り後の覆土である。

## 土層解説

- |       |                       |        |                 |
|-------|-----------------------|--------|-----------------|
| 1 褐色  | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 暗褐色  | ロームブロック中量       |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量      | 8 褐色   | ロームブロック少量、炭化物微量 |
| 3 褐色  | ロームブロック中量、炭化粒子微量      | 9 褐色   | ロームブロック中量       |
| 4 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量      | 10 黒褐色 | ロームブロック・鹿沼バミス微量 |
| 5 褐色  | ロームブロック多量、炭化粒子微量      | 11 暗褐色 | ロームブロック微量       |
| 6 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量      |        |                 |

**遺物出土状況** 流れ込んだ弥生土器片2点が出土している。

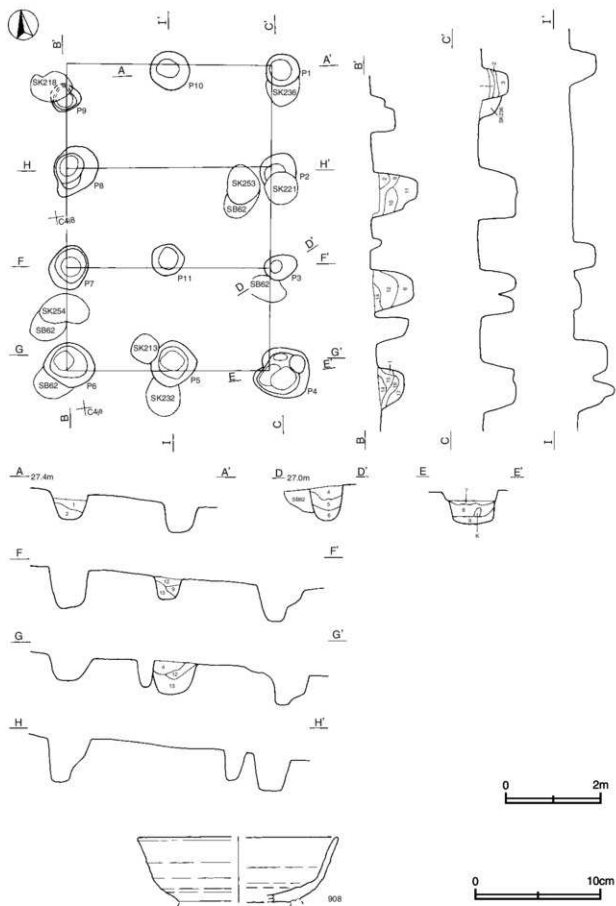
**所見** 時期は、重複関係や周囲の遺構との関係から9世紀後半と考えられる。



第113図 第60号掘立柱建物跡実測図

第61号掘立柱建物跡（第114図）

位置 調査区中央部のC4h8区で、東部に下がる緩やかな傾斜地に位置している。



第114图 第61号掘立柱建物跡・出土遺物実測図



**重複関係** 第62号掘立柱建物跡と第236号土坑を掘り込み、第213・218・221号土坑に掘り込まれている。第232号土坑とも重複関係にあるが、切り合いは不明である。

**規模と形状** 桁行3間、梁行2間の総柱建物で、桁行方向をN-8°-Eとする南北棟である。規模は、桁行6.30m、梁行4.21mで、柱間寸法は桁行、梁行ともに2.1mを基調としている。面積は26.52㎡である。

**柱穴** 11か所。平面形は円形や楕円形及び不定形で、深さは27～94cmである。土層は、いずれも柱抜き取り後の覆土である。

**土層解説**

1 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	10 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
2 褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	11 褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
3 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	12 褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
4 褐色	ロームブロック中量	13 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
5 褐色	ロームブロック多量、炭化粒子微量	14 褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量
6 褐色	ロームブロック多量	15 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
7 暗褐色	ロームブロック、炭化物微量	16 褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
8 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	17 暗褐色	ローム粒子少量
9 暗褐色	ロームブロック少量		

**遺物出土状況** 土師器片19点（坏類8、高台付坏2、甕類9）、須惠器片14点（坏類8、高台付坏1、蓋2、盤1、甕類2）、鉄滓1点が出土している。土師器の坏は内面黒色処理が施されている。908はP7の覆土中から出土している。

**所見** 本跡は、第142・143号住居跡の9世紀後葉に比定される住居跡と軸方向がほぼ同じで、集落との関係から同時期の集落と付随する「倉」と想定される。時期は、9世紀後葉と考えられる。

**第61号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第114図）**

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
908	須惠器	高台付坏	[15.6]	(5.1)	-	長石・針状炭物	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ削り	覆土中	30% 底面ヘラ削り

**第62号掘立柱建物跡（第115図）**

**位置** 調査区中央部のC4区8区で、東部に下がる緩やかな傾斜地に位置している。

**重複関係** 第61号掘立柱建物と第233・253・254号土坑に掘り込まれている。第234号土坑とも重複関係にあるが、切り合いは不明である。

**規模と形状** 桁行3間、梁行1間の脚柱建物で、桁行方向をN-0°とする南北棟である。規模は、桁行5.40m、梁行4.35mで、桁行の柱間寸法は1.8mを基調としている。面積は23.49㎡である。

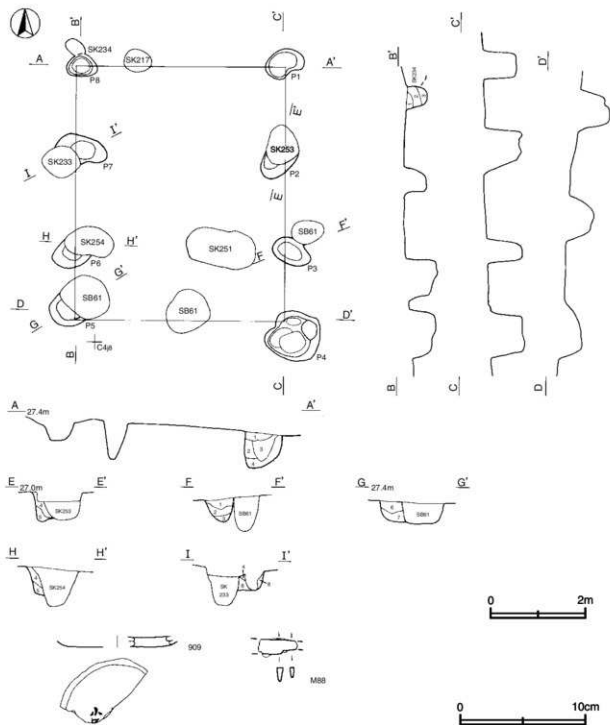
**柱穴** 8か所。平面形は円形や楕円形及び不定形で、深さは45～80cmである。土層は、いずれも柱抜き取り後の覆土である。

**土層解説**

1 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子・炭化粒子微量	5 褐色	ロームブロック多量、炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック、炭化粒子少量	6 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
3 明褐色	炭化粒子中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量	7 暗褐色	ロームブロック少量
4 褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量	8 褐色	ロームブロック多量、炭化粒子・炭化粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片29点（坏類5、高台付坏1、甕類23）、須惠器片35点（坏類22、蓋6、盤1、甕類6）、鉄器1点（刀子）が出土している。909・M88はP6の覆土中から出土している。909には「小□」と墨書されている。

**所見** 本跡は、第142・143号住居跡の9世紀前半に比定される住居跡と軸方向がほぼ同じで、集落との関係や重複関係から、時期は、9世紀後葉と考えられる。



第115図 第62号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第62号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第115図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
909	須臾器	坏	-	(0.9)	[9.0]	長石・石英	灰白	普通	底部多方向の手持ちヘラ削り	覆土中	大塚遺跡 [本口] P4.19
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
M88	刀子	(3.2)	1.1	0.5	(6.1)	鉄	両端欠損		覆土中		

第63掘立柱建物跡 (第116図)

位置 調査区中央部のD5e0区で、西部に下がる傾斜地に位置している。

規模と形状 桁行3間、梁行2間の側柱建物で、桁行方向をN-21°-Eとする南北棟である。規模は、桁行5.42m、梁行3.65mで、柱間寸法は桁行、梁行ともに1.8mを基調としている。面積は19.78㎡である。

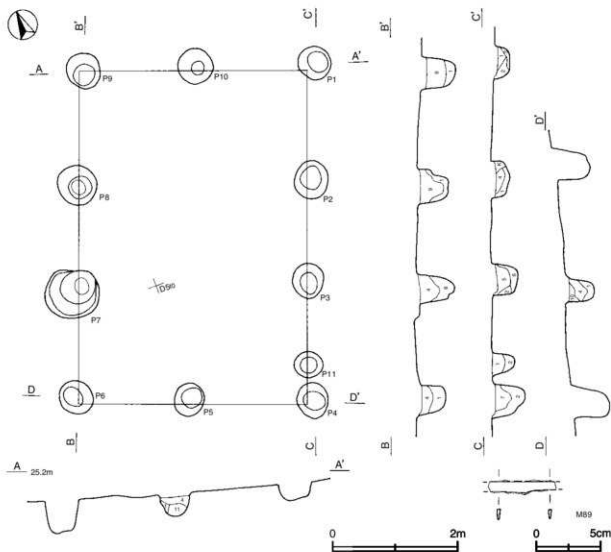
柱穴 11か所。平面形は円形で、深さは27~66cmである。土層は、いずれも柱抜き取り後の覆土である。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量	7 暗褐色	炭化物・ローム粒子少量、焼土粒子・砂質粘土粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	8 褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
3 褐色	ローム粒子・砂質粘土粒子少量	9 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量
4 暗褐色	ローム粒子・砂質粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	10 褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
5 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	11 褐色	砂質粘土粒子中量、ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
6 褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量		

遺物出土状況 土師器片18点(坏類1, 甕類17), 須恵器片11点(坏類8, 蓋3), 鉄器1点(刀子)が出土している。M89はP3の覆土中から出土している。

所見 本跡は、南に10mほど離れた第144・145号住居跡と軸方向を同じくし、出土土器からも9世紀前葉の集落に伴う「屋」と想定される。



第116図 第63号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第63号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第116図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M89	刀子	(5.5)	1.0	0.3	(4.8)	鉄	両端欠損 刃側	覆土中	

## 第64号掘立柱建物跡（第117図）

**位置** 調査区北部のB 2e9区で、平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第116号住居跡を掘り込んでいる。

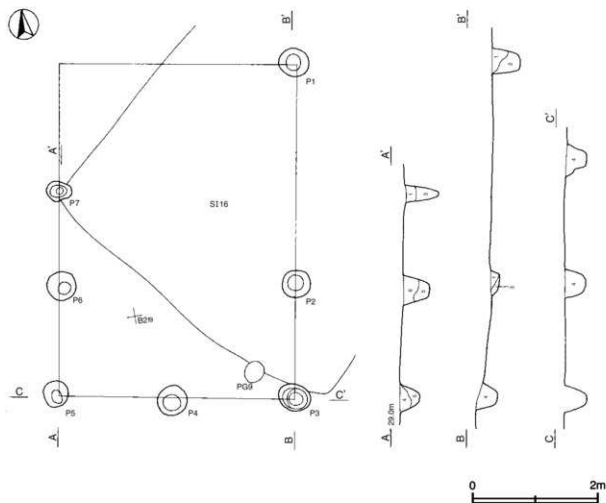
**規模と形状** 桁行3間、梁行2間の掘立柱建物で、桁行方向N-10°-Eの南北棟である。規模は、桁行5.24m、梁行3.73mで、柱間寸法は桁行が1.6m～2.1mで、梁行は1.9mを基調としている。面積は19.55㎡である。

**柱穴** 7か所。平面形は円形又は楕円形で、深さは14～51cmである。土層は、いずれも柱抜き取り後の覆土である。

## 土層解説

- |       |                  |       |                  |
|-------|------------------|-------|------------------|
| 1 黒褐色 | 炭化粒子少量、ロームブロック微量 | 4 褐色  | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |
| 2 黒色  | ローム粒子・炭化粒子微量     | 5 暗褐色 | ロームブロック少量        |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 6 褐色  | ロームブロック多量        |

**所見** 本跡は、第55・56・58・59号掘立柱建物跡とともに北部に展開する建物群である。時期は、重複関係や建物群との関係から、9世紀前葉と考えられる。



第117図 第64号掘立柱建物跡実測図

表6 掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	掘行方向	北側敷面×長さ	規模 (m)	面積 (㎡)	構造	掘行柱間(m)	影行柱間(m)	柱穴平面形	深さ(cm)	主な出土遺物	備考(重複関係)
55	B2 b0	N-8°-E	3×2	6.15×4.18	25.71	銅柱	1.8-2.2	2.1	円形 楕円形	15-40	土師器	SI108→本跡→PG6
56	B3 c1	N-11°-E	(1)×2	(3.60)×4.73	-	総柱	2.3	2.3-2.4	円形 不整形	17-27	-	-
57	B3 g6	N-17°-E	(2)×3	(3.72)×4.10	-	銅柱	1.7	1.3	円形	21-40	土師器 須恵器	-
58	B3 i5	N-1°-W	3×2	5.72×3.42	19.56	銅柱	1.8-2.0	1.7	円形 楕円形	8-34	土師器 須恵器	-
59	B3 h2	N-9°-E	(2)×2	(4.10)×3.84	-	銅柱	1.5-1.7	1.9	円形	28-55	土師器 須恵器	SI133→本跡
60	B3 h4	N-88°-W	3×2	5.84×4.40	25.70	銅柱	1.8-2.2	2.2	円形 楕円形	19-47	-	SI123→本跡
61	C4 h8	N-8°-E	3×2	6.30×4.21	26.52	総柱	2.1	2.1	円形 楕円形 不定形	27-94	土師器 鉄片	須恵器 Sb62 SK236→本跡 →SK213・218・221 SK232は新旧不明
62	C4 i8	N-0°	3×1	5.40×4.35	23.49	銅柱	1.8	4.35	円形 楕円形 不定形	45-80	土師器 刀子	須恵器 本跡→SB61 SK233・253・254 SK234は新旧不明
63	D5 e0	N-21°-E	3×2	5.42×3.65	19.78	銅柱	1.8	1.8	円形	27-66	土師器 刀子	須恵器
64	B2 e9	N-10°-E	3×2	5.24×3.73	19.55	銅柱	1.6-2.1	1.9	円形 楕円形	14-51	-	SI116→本跡

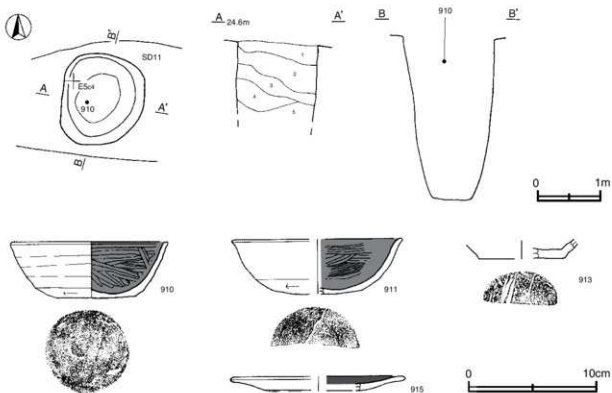
(3) 井戸跡

第3号井戸跡 (第118・119図)

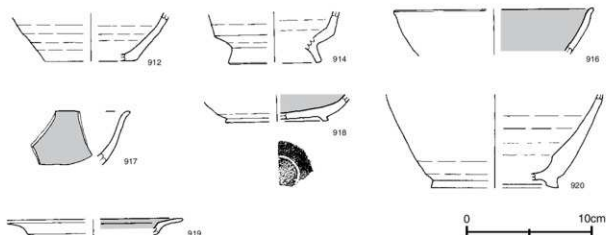
位置 調査区中央部のE5c4区で、東に下がる傾斜地に位置している。

重複関係 第11号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長径1.50m、短径1.35mの楕円形で、長径方向はN-32°-Eである。確認面からの深さは2.48mで、断面形は円筒状である。



第118図 第3号井戸跡・出土遺物実測図



第119図 第3号井戸跡出土遺物実測図

**覆土** 5層に分層される。ブロック状の含有物が多く含まれている状況から、人為堆積と考えられる。

## 土層解説

- |       |                      |       |                          |
|-------|----------------------|-------|--------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 | 4 暗褐色 | 焼土ブロック・炭化物・ローム粒子・粘土粒子・微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 | 5 黒褐色 | 炭化物・ローム粒子少量              |
| 3 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 |       |                          |

**遺物出土状況** 土師器片133点（坏類56，高台付坏4，高台付皿4，甕類69），須恵器片67点（坏類36，高台付坏3，蓋2，高盤1，瓶類4，甕類21），灰軸陶器4点（段皿1，碗3）が覆土上層から底面にかけて出土している。910は中央部の覆土上層，911・912・917・919は覆土下層から底面，913・914・918・920は覆土中層，915・916は覆土上層と中層から出土した破片が接合している。いずれも廃絶時に投棄されたものと考えられる。

**所見** 廃絶時期は，出土土器から9世紀後葉と考えられる。本跡は，旧谷津が埋没した後掘削されている。同様に旧谷津の上に掘られた遺構として，第142号住居跡があり，9世紀前半には谷津は埋没していたと考えられる。

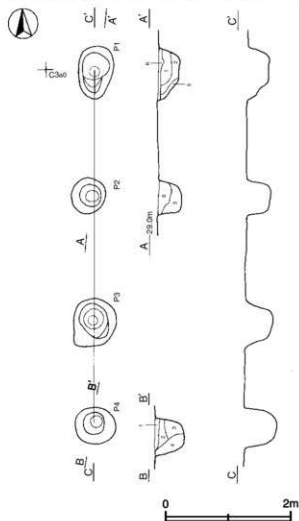
## 第3号井戸跡出土遺物観察表（第118・119図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
910	土師器	坏	12.2	4.4	7.0	長石・石英・雲母・金剛砂・黒色炭化物	橙	普通	内面へう磨き 体部下端・底部回転へう磨り	上層	90% PL15
911	土師器	坏	[13.2]	4.3	[6.8]	長石・石英・雲母・金剛砂・黒色炭化物	にぶい橙	普通	内面へう磨き 体部下端・底部回転へう磨り	下層～底面	50%
912	須恵器	坏	—	[3.8]	[7.2]	長石	灰	普通	底部回転へう磨り	下層～底面	5%
913	須恵器	坏	—	(1.5)	[6.6]	長石・針状炭化物・黒色粒子	灰	普通	底部へうナデ	中層	5% 底部へう磨き
914	須恵器	高台付坏	—	(4.1)	[7.1]	長石・石英	灰	普通	ロクロナデ	中層	10%
915	土師器	皿	[13.4]	(1.1)	—	長石・石英・金剛砂・針状炭化物	にぶい橙	普通	内面へう磨き 体部下端回転へう磨り	上層～中層	10%
916	灰軸陶器	碗	[15.8]	(3.6)	—	緻密	浅黄・浅黄	良好	内面刷毛塗り 918と同一個体	上層～中層	5% 裏投遺物 第14号式器
917	灰軸陶器	碗	—	(4.3)	—	緻密	灰白・灰黄	良好	内面刷毛塗り 830と接合	下層～底面	5% 裏投遺物 第14号式器
918	灰軸陶器	碗	—	(2.1)	[8.2]	緻密	浅黄・浅黄	良好	内面刷毛塗り 三叉トナン裏 角高台 916と同一個体	中層	5% 裏投遺物 第14号式器
919	灰軸陶器	段皿	[14.0]	(1.3)	—	緻密	灰白・灰黄	良好	内面刷毛塗り	下層～底面	5% 裏投遺物 第14号式器
920	須恵器	長頸瓶	—	(7.4)	[10.1]	長石・黒色粒子	灰	普通	ロクロナデ	中層	5%

(4) 柵跡

第3号柵跡 (第120図)

位置 調査区北部のC3a0区で、平坦な台地上に位置している。



**規模と形状** 南北方向(N-2°-E)に、直線状に並んでいる。柱間寸法は1.6~2.0mである。

**柱穴** 4か所。径54~80cmで、円形又は不整楕円形を呈し、深さは36~52cmである。土層は、いずれも柱抜き取り後の覆土で、人為的に埋め戻されている。

**土層解説**

- 1 褐 色 ロームブロック中量
- 2 黒 褐 色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 極 暗 褐 色 ローム粒子微量
- 4 暗 褐 色 ロームブロック少量
- 5 明 褐 色 ローム粒子多量
- 6 暗 褐 色 ローム粒子・焼土粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片2点(甕)、須恵器片5点(坏3, 蓋1, 甕1)が出土しているが、細片のため、図示できなかった。

**所見** 廃絶時期は、出土土器や周囲との関係から9世紀前葉と考えられる。第138号住居跡は片面碗や灰軸陶器、コップ形土器などが出土しており、本跡との関係が考えられる。また、柵跡より東部に位置する第139~143・153・154号住居跡も同様な遺物が見られ、柵跡を境に、集落の様相が異なる可能性が考えられる。

第120図 第3号柵跡実測図

(5) 土坑

第201号土坑 (第121図)

位置 調査中央部のC5h1区で、傾斜地に位置している。



**重複関係** 第142号住居に掘り込まれている。

**規模と形状** 径0.7mの円形で、深さは68cmである。底面は皿状で、ほぼ直立している。

**覆土** 3層に分層される。不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

第121図 第201号土坑実測図

## 土層解説

- |       |                |       |                |
|-------|----------------|-------|----------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 | 3 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量   |       |                |

所見 時期は、重複関係から9世紀中葉以前と考えられる。

## 第202号土坑 (第122図)

位置 調査中央部のC511区で、傾斜地に位置している。

重複関係 第142号住居に掘り込まれている。

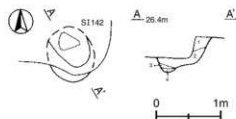
規模と形状 長径0.9m、短径0.7mの楕円形で、長径方向は $N-31^{\circ}-W$ である。深さは68cmで、底面は凹凸しており、南側は緩やかに立ち上がっている。

覆土 4層に分層される。炭化物が多く含まれている状況から、人為堆積と考えられる。

## 土層解説

- |       |                     |
|-------|---------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック微量           |
| 2 暗褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | 炭化物多量、ローム粒子微量       |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量      |

所見 時期は、重複関係から9世紀中葉以前と考えられる。



第122図 第202号土坑実測図

## 第204号土坑 (第123図)

位置 調査南部のE7f3区で、平坦地に位置している。

規模と形状 長径0.9m、短径0.7mの楕円形で、長径方向は $N-30^{\circ}-W$ である。深さは16cmで、底面は皿状で、緩やかに立ち上がっている。

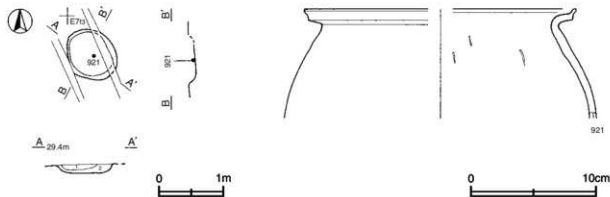
覆土 2層に分層される。レンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

## 土層解説

- |       |              |       |              |
|-------|--------------|-------|--------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 2 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 |
|-------|--------------|-------|--------------|

遺物出土状況 土師器片1点(亮)が底面から出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀から9世紀と考えられる。



第123図 第204号土坑・出土遺物実測図



第204号土坑出土遺物観察表（第123図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
921	土師器	甕	[21.4]	(8.6)	—	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	内面ヘラナデ 外面ナデ	底面	5%

第222号土坑（第124図）

**位置** 調査中央部のC 4 h9区で、傾斜地に位置している。

**規模と形状** 径0.3mの円形で、深さは54cmである。底面はU字状で、ほぼ直立している。

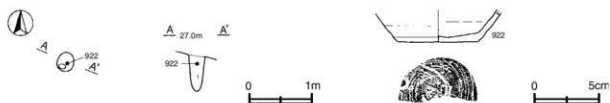
**覆土** 単一層である。ロームブロックが多い状況から、人為堆積と考えられる。

土層解説

1 掘 色 ロームブロック多量、炭化物微量

**遺物出土状況** 須恵器片1点（坏）が覆土上層から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から9世紀以前と考えられる。



第124図 第222号土坑・出土遺物実測図

第222号土坑出土遺物観察表（第124図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
922	須恵器	坏	—	(2.6)	6.3	長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ削り	上層	20%

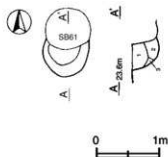
第236号土坑（第125図）

**位置** 調査中央部のC 4 h9区で、傾斜地に位置している。

**重複関係** 第61号掘立柱建物に掘り込まれている。

**規模と形状** 径0.7mの円形で、深さは41cmである。底面は皿状で、緩やかに立ち上がっている。

**覆土** 3層に分層される。ロームブロックを多く含み、不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。



土層解説

- 1 掘 色 ローム粒子多量、炭沼バミス微量
- 2 掘 色 ロームブロック多量、炭沼バミス少量
- 3 掘 色 ロームブロック多量

第125図 第236号土坑実測図

**所見** 時期は、重複関係から9世紀前半以前と考えられる。

表7 奈良・平安時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 重複関係 (旧→新)
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(m)					
201	C 5 h1	—	円形	0.70	68	垂直	皿状	人為	—	本跡→SI142
202	C 5 i1	N-31°-W	楕円形	0.90×0.70	68	緩斜	凹凸	人為	—	本跡→SI142
204	E 7 f3	N-30°-W	楕円形	0.90×0.70	16	緩斜	皿状	自然	土師器	
222	C 4 h9	—	円形	0.30	54	垂直	U字状	人為	須恵器	
236	C 4 h9	—	円形	0.70	41	緩斜	皿状	人為	—	本跡→SB61

## 6 その他の遺構と遺物

住居跡1軒、溝跡5条、井戸跡1基、土坑64基、ピット群9か所が確認された。

## (1) 住居跡

## 第152号住居跡 (第126図)

位置 調査区北部のA 2 36区で、平坦な台地上に位置している。

規模と形状 削平により、竈のみが確認された。主軸方向は特定できない。

竈 北壁に位置し、規模は、焚き口から煙道部まで0.6mほどである。火床部は皿状に掘りくぼめられ、煙道部付近が火熱により赤変硬化している。煙道部は壁外に32cm掘り込まれ、火床面から緩やかに立ち上がっている。

## 覆土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック少量、炭化物・ローム粒子微量      2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片1点(甕)が出土している。細片のため、図示できなかった。

所見 時期は、古墳時代後期以降と考えられる。



第126図 第152号住居跡実測図

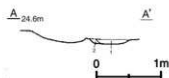
## (2) 溝跡

## 第11A号溝跡 (第127・付図)

位置 調査区中央部のD 5 e2区で、傾斜地に位置している。

**重複関係** 第11B号溝跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** D5e2区から北東方向(N-22'-E)に直線的に伸びている。南西部は調査区域外へ伸びており、確認された長さは5.5mである。上幅0.50~0.60m、下幅0.10~0.28m、深さ約8cmである。断面形はU字状を呈し、緩やかに立ち上がっている。



第127図 第11A号溝跡実測図

**覆土** 2層に分層される。第1層に粘土粒子が多量に見られるため、人為堆積と考えられる。

**土層解説**

- 1 濃い黄褐色 砂質粘土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量

**所見** 時期及び性格は不明である。

**第11B号溝跡 (第128・付図)**

**位置** 調査区中央部のD5e2~D5e5区で、傾斜地に位置している。

**重複関係** 第3号井戸跡を掘り込み、第11A号溝に掘り込まれている。

**規模と形状** 北東方向(N-25'-E)に直線的に伸び、D5e3区から東西方向(N-100'-E)に屈曲するL字状である。南部は調査区域外へ、東部は低湿地に向かって伸びているため、全体の長さは不明であるが、確認された長さは21mである。上幅0.72~1.84m、下幅0.22~0.78m、深さ20~47cmである。断面形はU字状を呈しており、緩やかに立ち上がっている。

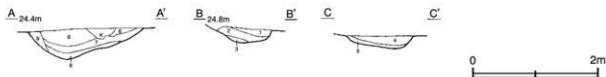
**覆土** 9層に分層される。炭化物や砂質粘土などの含有物が多く含まれている状況から、人為堆積と考えられる。

**土層解説**

- |       |                            |       |                                |
|-------|----------------------------|-------|--------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量        | 6 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量              |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量          | 7 暗褐色 | 炭化物・ローム粒子・砂質粘土粒子少量、焼土粒子微量      |
| 3 暗褐色 | 砂質粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 褐色  | ロームブロック中量、砂質粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量        | 9 暗褐色 | ローム粒子・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量          |
| 5 暗褐色 | ローム粒子・砂質粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |       |                                |

**遺物出土状況** 土師器片6点(坏類2, 高台付坏1, 甕類3), 須恵器片10点(坏類4, 甕1, 甕類5)が出土している。いずれも摩耗をうけており本跡に伴わないものと考えられる。

**所見** 時期は、重複関係により9世紀後半以降である。傾斜地に直交していることから、排水の機能を有していたと考えられない。東部は低湿地へと傾斜が伸びており、区画とも考えにくい。性格については不明である。



第128図 第11B号溝跡実測図

**第12号溝跡 (第129・付図)**

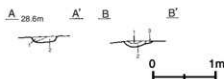
**位置** 調査区中央部のE6b5区で、緩やかな傾斜地に位置している。

**規模と形状** E 6 b5区から北東方向(N-31°-E)に直線的に延びている。長さ6.43mで、上幅0.30~0.65m、下幅0.15~0.49mで、深さは10~12cmである。断面形はU字状を呈しており、緩やかに立ち上がっている。

**覆土** 3層に分層される。ロームブロックを多く含んでいる状況から、人為堆積と考えられる。

## 土層解説

- |     |   |                  |
|-----|---|------------------|
| 1 期 | 色 | ロームブロック多量、炭化粒子微量 |
| 2 期 | 色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量   |
| 3 期 | 色 | ロームブロック多量        |



**遺物出土状況** 礎6点が出土している。

**所見** 時期及び性格は不明である。

第129図 第12号溝跡実測図

## 第13A号溝跡 (第130・付図)

**位置** 調査区南部のE 6 f8~D 6 j8区で、平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第149号住居跡、第13B号溝跡、第2号井戸跡、第252号土坑を掘り込んでいる。

**規模と形状** E 6 f8区から南北方向(N-7°-E)に直線的に延びている。確認された長さは25.68mで、上幅1.10~1.25m、下幅0.08~0.18m、深さ48cmである。断面形はU字状又は逆台形状を呈している。

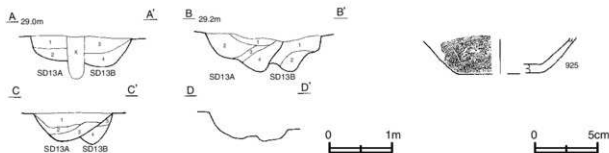
**覆土** 4層に分層される。不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

## 土層解説

- |       |                  |       |                  |
|-------|------------------|-------|------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック微量        | 3 黒褐色 | ローム粒子微量          |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 4 褐色  | ロームブロック多量、炭化粒子微量 |

**遺物出土状況** 弥生土器2点、土師器片8点(堿類)、須恵器片14点(坏類3、高台付坏1、蓋3、堿類7)、土師質土器1点(内耳鍋)が出土している。925など多くの土器片は流れ込みである。

**所見** 時期は、出土土器及び重複関係から中世以降と考えられる。性格については不明である。



第130図 第13A・B号溝跡、第13A号溝跡出土遺物実測図

## 第13A号溝跡出土遺物観察表 (第130図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
925	須恵器	坏	-	(2.7)	[7.0]	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	底部ヘラナデ	覆土中	10% 体部外面へラナデ

## 第13B号溝跡 (第130・付図)

**位置** 調査区南部のE 6 f8~D 6 j8区で、平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第149号住居跡、第2号井戸跡、第252号土坑を掘り込み、第13A号溝に掘り込まれている。

**規模と形状** E 6 f8区から南北方向(N-3°-E)に直線的に伸びている。確認された長さは24.12mで、上幅0.58~0.72m、下幅0.12~0.18m、深さは38~50cmである。断面形は、U字状又は凸凹を呈している。

**覆土** 4層に分層される。壁際から土砂が流れ込んだ堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

**土層解説**

- |       |                  |       |                |
|-------|------------------|-------|----------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 3 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量   | 4 暗褐色 | ロームブロック少量      |

**所見** 時期及び性格は不明である。

表8 溝跡一覧表

番号	位置	方向	形状	規模				覆土	主な出土遺物	備考 重複関係 (旧→新)
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)			
11A	D5e2	北東	直線	(5.5)	0.5~0.6	0.1~0.3	8	人為	土師器 須恵器	SD11B→本跡
11B	D5e2~D5c5	北東~東西	L字状	(21.0)	0.7~1.8	0.2~0.8	20~47	人為	土師器 須恵器	SE3→本跡→SD11A
12	E6b5	北東	直線	6.4	0.3~0.7	0.2~0.5	10~12	人為	礎	
13A	E6f8~D6j8	南北	直線	(25.7)	1.1~1.3	0.1~0.2	48	人為	土師器 須恵器 土師瓦 土器	SH49, SD13B, S E7, SK205→本跡
13B	E6f8~D6j8	南北	直線	(24.1)	0.6~0.7	0.1~0.2	38~50	自然	-	SH49, SE2, SK202 →本跡→SD13A

(3) 井戸跡

**第2号井戸跡** (第131図)

**位置** 調査区南部のE 6 f8区で、平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第13A・B号溝に掘り込まれている。

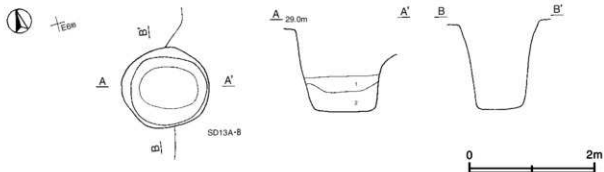
**規模と形状** 長径1.39m、短径1.27mの円形である。確認面からの深さは1.42mで、断面形は円筒状である。

**覆土** 2層に分層される。ブロック状の含有物が多く含まれている状況から、人為堆積と考えられる。

**土層解説**

- |       |                  |      |                  |
|-------|------------------|------|------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 2 褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |
|-------|------------------|------|------------------|

**所見** 時期は、出土土器がないため不明である。



第131図 第2号井戸跡実測図

## (4) 土坑 (第132~138図)

1基の土坑について記述し、その他については実測図と土層解説を記載する。

## 第252号土坑 (第132図)

**位置** 調査区南部のE 6 a8区で、平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第13A・B号溝に掘り込まれている。

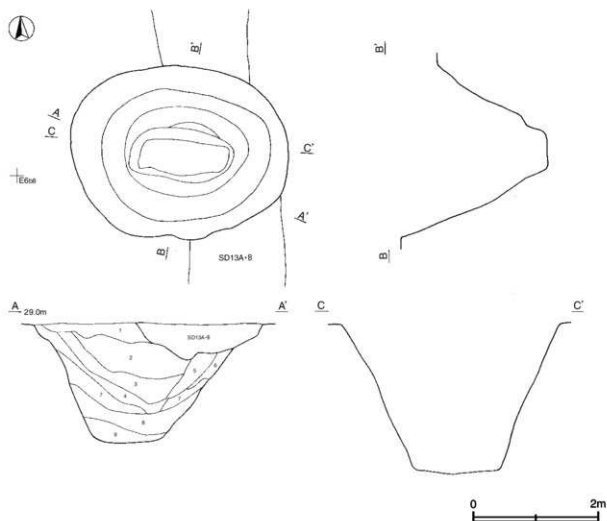
**規模と形状** 長径3.44m、短径2.72mの楕円形で、長径方向は $N-86^{\circ}-W$ である。深さは238cmで、底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

**覆土** 9層に分層される。各層にロームブロックが多く含まれていることから、人為堆積と考えられる。

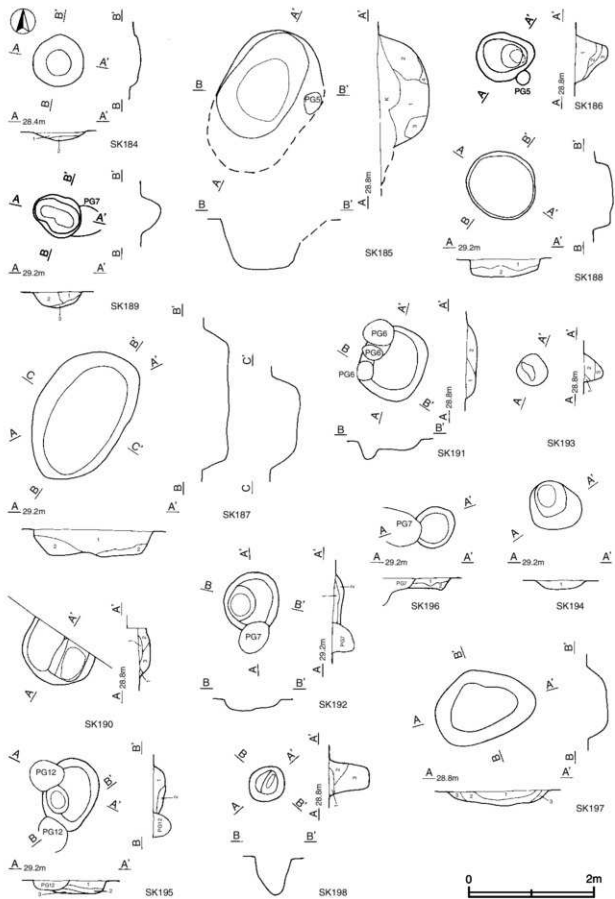
## 土層解説

1 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	6 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
2 黒褐色	ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子微量	7 褐色	ロームブロック多量、炭化粒子微量
3 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	8 褐色	ロームブロック多量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量	9 褐色	ロームブロック中量
5 黒褐色	炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量		

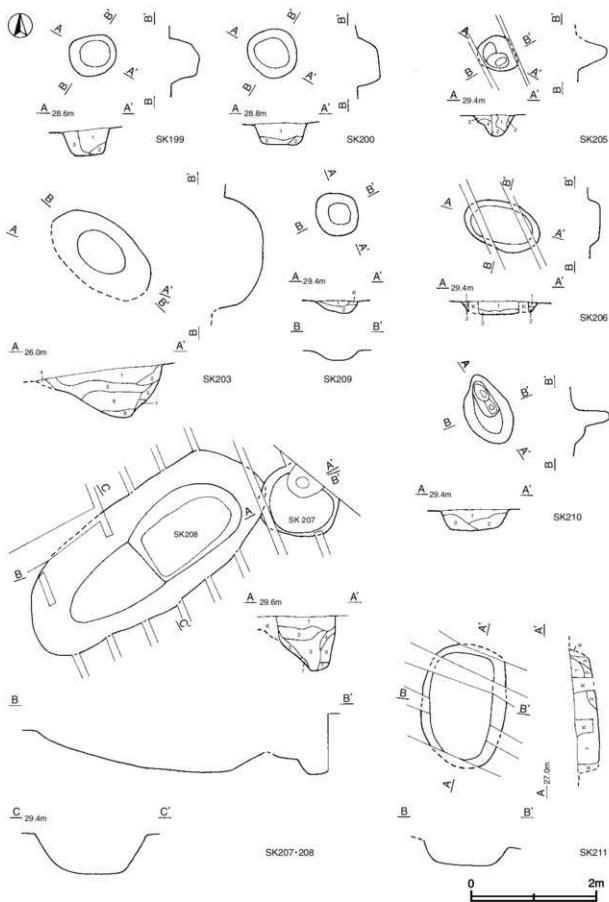
**所見** 規模と形状から陥し穴または井戸の可能性が考えられる。時期は、不明である。



第132図 第252号土坑実測図

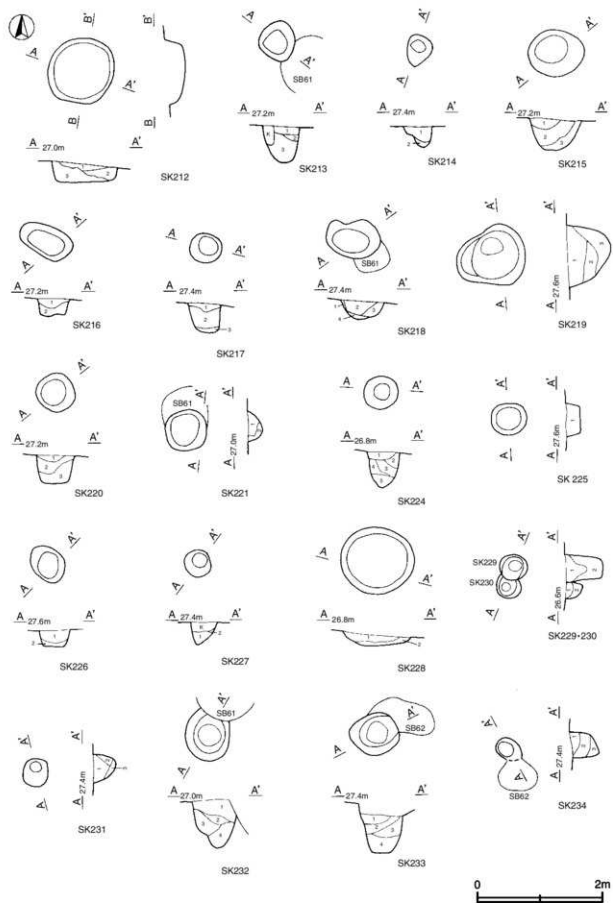


第133図 その他の土坑実測図(1)

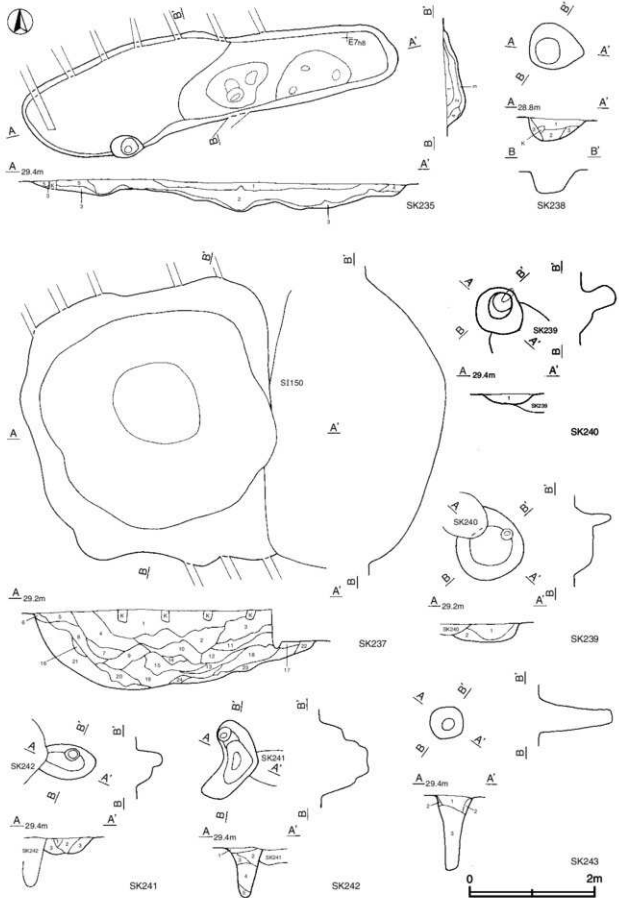


第134図 その他の土坑実測図(2)

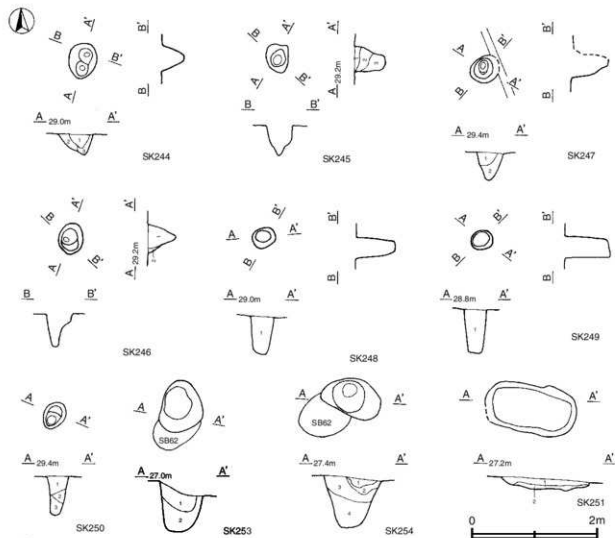




第135図 その他の土坑実測図(3)



第136図 その他の土坑実測図(4)



第137図 その他の土坑実測図(5)

第184号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック多量, 炭化粒子・鹿沼バミス微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量, 鹿沼バミス微量

第185号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック多量
- 2 にぶい褐色 ロームブロック多量, 鹿沼バミス微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量

第186号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量, 鹿沼バミス微量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 明褐色 ロームブロック少量

第187号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック多量, 炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子微量

第188号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子・小礫微量

第189号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック多量

第190号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック中量

第191号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量
- 2 褐色 ロームブロック多量, 炭化物微量

第192号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量

第193号土坑土層解説

- 1 明褐色 ロームブロック多量
- 2 褐色 ローム粒子中量
- 3 にぶい褐色 ロームブロック中量

## 第194号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量

## 第195号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック中量
- 3 褐色 ロームブロック少量

## 第196号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量

## 第197号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 3 明褐色 ロームブロック少量

## 第198号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

## 第199号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック中量

## 第200号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

## 第203号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 3 黒褐色 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量
- 4 褐色 ロームブロック少量
- 5 褐色 ローム粒子少量、砂質粘土粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 7 褐色 ローム粒子・砂質粘土粒子微量
- 8 明褐色 ロームブロック・砂・炭化物少量

## 第205号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量
- 4 褐色 ロームブロック中量

## 第206号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子中量

## 第207号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 5 褐色 ロームブロック中量
- 6 褐色 ローム粒子中量
- 7 暗褐色 ローム粒子・炭化物少量

## 第209号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量

## 第210号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 明褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

## 第211号土坑土層解説

- 1 黒褐色 炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

## 第212号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

## 第213号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック中量、炭化物少量
- 3 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

## 第214号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック中量、炭化物少量

## 第215号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック少量、炭化物微量

## 第216号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

## 第217号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック少量、炭化物微量
- 2 褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック中量

## 第218号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化物少量、炭化物少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 4 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量

## 第219号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子・炭化物少量
- 2 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、炭化物少量

## 第220号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化物粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、炭化物微量

## 第221号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、炭化物微量

## 第224号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、炭化物微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量
- 5 暗褐色 ロームブロック微量

## 第225号土坑土層解説

- 1 黒褐色 炭化物少量、ロームブロック微量

## 第226号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子・炭化物少量
- 2 褐色 ロームブロック中量、炭化物少量

## 第227号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量、炭化物少量
- 2 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・炭化物少量

**第228号土壌土層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

**第229号土壌土層解説**

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量

**第230号土壌土層解説**

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

**第231号土壌土層解説**

- 1 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック中量

**第232号土壌土層解説**

- 1 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ロームブロック微量

**第233号土壌土層解説**

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化物微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

**第234号土壌土層解説**

- 1 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック多量、鹿沼パミス微量
- 3 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子・鹿沼パミス微量

**第235号土壌土層解説**

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

**第237号土壌土層解説**

- 1 褐色 ロームブロック多量
- 2 明褐色 ロームブロック中量
- 3 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 明褐色 ローム粒子少量、鹿沼パミス微量
- 7 暗褐色 炭化粒子少量、ローム粒子微量
- 8 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 9 褐色 ロームブロック中量、鹿沼パミス少量
- 10 明褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 11 褐色 鹿沼パミス多量、ロームブロック少量
- 12 暗褐色 鹿沼パミス少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 13 黄褐色 鹿沼パミス中量、ロームブロック少量
- 14 極暗褐色 焼土粒子少量、ロームブロック・鹿沼パミス微量
- 15 褐色 ロームブロック・鹿沼パミス中量
- 16 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 17 明褐色 ロームブロック・鹿沼パミス少量
- 18 黒褐色 炭化粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量
- 19 明褐色 ロームブロック少量、炭化粒子・鹿沼パミス微量
- 20 暗褐色 ロームブロック微量
- 21 褐色 ロームブロック多量、焼土粒子微量
- 22 暗褐色 ロームブロック少量、鹿沼パミス微量
- 23 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 24 褐色 ロームブロック・鹿沼パミス中量

**第238号土壌土層解説**

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・炭化物微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量

**第239号土壌土層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック中量

**第240号土壌土層解説**

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

**第241号土壌土層解説**

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子少量

**第242号土壌土層解説**

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ロームブロック少量
- 4 明褐色 ロームブロック中量
- 5 明褐色 ロームブロック少量

**第243号土壌土層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子微量

**第244号土壌土層解説**

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

**第245号土壌土層解説**

- 1 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

**第246号土壌土層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

**第247号土壌土層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

**第248号土壌土層解説**

- 1 黒褐色 焼土粒子少量、ロームブロック微量

**第249号土壌土層解説**

- 1 黒褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子微量

**第250号土壌土層解説**

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック多量

**第251号土壌土層解説**

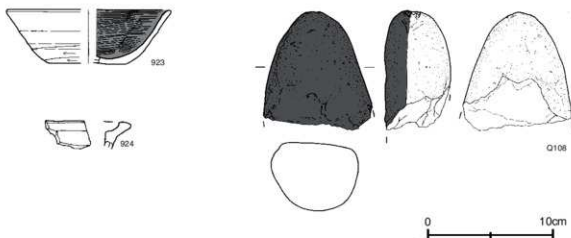
- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック・鹿沼パミス微量

**第253号土壌土層解説**

- 1 褐色 ロームブロック中量、鹿沼パミス少量
- 2 褐色 ロームブロック多量

**第254号土壌土層解説**

- 1 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 明褐色 ロームブロック中量
- 4 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量



第138図 第190・211・235号土坑出土遺物実測図

第190号土坑出土遺物観察表 (第138図)

番号	器種	長さ	幅	高さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q108	磨石	(9.5)	(8.6)	5.3	(499)	石英・赤色霞石	全面研磨 被熱痕	覆土中	PL20

第211号土坑出土遺物観察表 (第138図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
923	土師器	坏	[12.8]	4.3	[6.0]	石英・赤色霞石	にぶい橙	普通	体部下端回転ヘタ削り 底部回転ヘタ削り	覆土中	30%

第235号土坑出土遺物観察表 (第138図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
924	須臾器	瓶類*	-	(2.2)	-	緻密	黄橙	普通	ロクロナデ 内外面自然輪	覆土中	5%

表9 その他の土坑一覧表

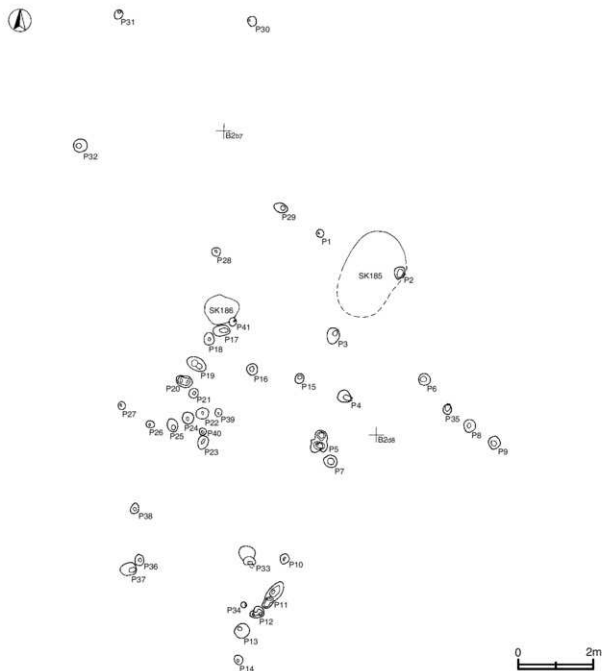
番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	主な出土遺物	備考 (関係 出-新)
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(m)				
184	A 2 i3	-	円形	0.80	15	緩斜	平坦	-	
185	B 2 b8	N-32°-E	[楕円形]	[2.40×1.54]	81	外傾	平坦	須臾器 馬骨	本跡→PG5
186	B 2 c6	N-85°-E	楕円形	0.93×0.78	53	外傾	圓状	-	本跡→PG5
187	B 3 h4	N-33°-E	楕円形	2.24×1.45	45	緩斜	平坦	-	
188	B 3 i2	-	円形	1.14×1.05	25	垂直	平坦	土師器 須臾器	
189	B 3 g7	N-61°-W	不整楕円形	0.78×0.66	32	緩斜	圓状	-	PG7→本跡
190	B 2 a9	N-55°-W	[円形・楕円形]	1.14×(0.80)	16	外傾	圓状	-	
191	B 2 b9	N-18°-E	[不整楕円形]	1.18×(0.80)	18	緩斜	圓状	-	本跡→PG6
192	C 3 a6	N-15°-E	[楕円形]	0.96×0.88	17	緩斜	圓状	-	本跡→PG7
193	A 2 i6	-	円形	0.50	31	外傾	圓状	-	
194	B 3 f3	-	円形	0.80	14	緩斜	平坦	-	
195	B 3 h2	N-23°-E	[楕円形]	(1.05×0.65)	20	外傾	圓状	-	本跡→PG12
196	B 3 j4	N-40°-E	[楕円形]	[0.71]×0.59	21	緩斜	平坦	-	本跡→PG7
197	C 3 a7	N-73°-E	不整楕円形	1.60×1.15	32	緩斜	平坦	-	
198	C 3 b6	-	円形	0.65×0.58	58	外傾	圓状	-	
199	E 6 a4	-	円形	0.74	47	外傾	圓状	土師器 磁器	
200	E 6 b5	-	円形	0.83×0.76	36	外傾	平坦	土師器	

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁面	底面	主な出土遺物	備考 系統関係 (旧→新)
				長径(幅)×短径(幅)(m)	深さ(m)				
203	D 5 j0	N-50°-W	[楕円形]	1.80×1.00	70	緩斜	皿状	-	
205	E 7 i3	N-43°-W	[不整楕円形]	0.62×[0.50]	46	外傾	皿状	-	
206	E 7 e4	N-75°-W	楕円形	1.24×0.73	20	外傾	平坦	-	
207	E 7 e4	N-53°-W	[楕円形]	1.26×(1.04)	42~85	緩斜	皿状	-	SK208→本跡
208	E 7 e4	N-51°-E	楕円形	4.35×1.84	50	外傾	平坦	土師器 須恵器	本跡→SK207
209	E 7 f1	-	円形	0.75×0.69	19	緩斜	平坦	-	
210	E 7 g2	N-20°-W	不整楕円形	1.16×0.71	63	外傾	皿状	-	
211	D 4 a8	N-2°-E	[楕円形]	[1.98]×1.33	35	緩斜	平坦	土師器 須恵器	
212	C 4 j8	-	円形	1.15×1.06	30	外傾	平坦	土師器 須恵器	
213	C 4 i8	-	円形	0.64×0.56	56	外傾	皿状	土師器 須恵器	SB61→本跡
214	C 4 i8	N-13°-E	不定形	0.50×0.40	33	外傾	皿状	-	
215	C 4 h8	N-82°-E	楕円形	0.88×0.78	50	緩斜	皿状	須恵器	
216	C 4 h8	N-60°-W	楕円形	0.86×0.52	28	外傾	凹凸	土師器	
217	C 4 h8	-	円形	0.52×0.48	47	外傾	平坦	土師器 須恵器	
218	C 4 h8	N-78°-W	不整楕円形	0.86×0.64	32	緩斜	皿状	土師器	SB61→本跡
219	C 4 g7	N-73°-E	不整楕円形	1.14×0.98	68	緩斜	皿状	土師器 須恵器	
220	C 4 h8	-	円形	0.62×0.61	45	外傾	平坦	土師器	
221	C 4 i9	-	円形	0.68	25	緩斜	皿状	土師器 須恵器	SB61→本跡
224	C 4 h9	-	円形	0.52	59	外傾	皿状	土師器 須恵器	
225	C 4 g7	-	円形	0.54	22	外傾	平坦	土師器 須恵器	
226	C 4 g7	N-45°-W	楕円形	0.64×0.47	25	外傾	平坦	須恵器	
227	C 4 g8	N-27°-W	円形	0.44×0.42	36	外傾	皿状	-	
228	C 4 g0	-	円形	1.15×1.07	19	緩斜	平坦	土師器	
229	C 4 h9	N-90°-E	円形	0.47×0.41	60	垂直	平坦	須恵器	SK230→本跡
230	C 4 h9	N-66°-W	[楕円形]	0.41×(0.30)	27	緩斜	皿状	-	本跡→SK229
231	C 4 h7	-	円形	0.42×0.39	35	外傾	皿状	-	
232	C 4 j8	N-22°-W	楕円形	0.86×0.75	78	外傾	皿状	土師器 須恵器	SB61 新旧不明
233	C 4 i7	-	円形	0.70×0.67	78	外傾	平坦	-	SB62→本跡
234	C 4 h7	N-58°-W	[楕円形]	(0.44)×0.27	41	垂直	平坦	-	SB62 新旧不明
235	E 7 h7	N-81°-E	不定形	6.05×1.72	48	緩斜	凹凸	土師器 須恵器	
237	E 6 e9	N-31°-E	不定形	4.96×4.66	124	緩斜	皿状	-	本跡→S1150
238	F 8 e3	N-76°-W	不整楕円形	0.87×0.70	34	外傾	平坦	-	
239	F 7 a9	-	[円形]	[1.14]×1.06	32	緩斜	凹凸	土師器	本跡→SK240
240	F 7 a9	N-39°-W	円形	0.79×0.71	53	緩斜	凹凸	-	SK239→本跡
241	E 7 j7	N-83°-W	[楕円形]	[0.91]×0.57	25	外傾	凹凸	-	本跡→SK242
242	E 7 j7	N-7°-E	不定形	1.29×0.58	78	緩斜	凹凸	-	SK241→本跡
243	E 7 i6	-	円形	0.66×0.54	116	垂直	皿状	-	
244	F 8 b2	N-12°-E	楕円形	0.56×0.44	40	外傾	凹凸	弥生土器	
245	F 8 b1	N-16°-W	楕円形	0.46×0.35	48	外傾	皿状	-	
246	F 8 a1	N-0°	楕円形	0.49×0.39	52	外傾	皿状	-	
247	E 7 h5	N-41°-E	楕円形	[0.48]×0.40	58	外傾	皿状	弥生土器 土師器 須恵器	
248	F 8 h3	-	円形	0.35	62	垂直	皿状	-	
249	F 8 b4	-	円形	0.34	70	垂直	皿状	-	
250	E 7 h4	N-21°-E	楕円形	0.45×0.35	60	外傾	皿状	-	
251	C 4 i8	N-75°-W	隅丸長方形	1.47×0.80	17	緩斜	凹凸	-	
253	C 4 h8	N-0°	楕円形	0.82×0.69	80	外傾	皿状	-	SB62→本跡
254	C 4 i7	N-80°-W	不整楕円形	0.96×0.61	73	外傾	皿状	-	SB62→本跡

#### (5) ビット群

調査区北部から中央部にビット群9か所が確認された。これらのビットからは遺物がほとんど出土していないため、時期を判断することができなかった。また、ビットの配列に規則性が認められないことから、性格を明らかにすることもできなかった。以下、ビット群5～13の平面図及び規模などを計測表にまとめて記載する。

第5ピット群 (第139図)



第139図 第5ピット群実測図

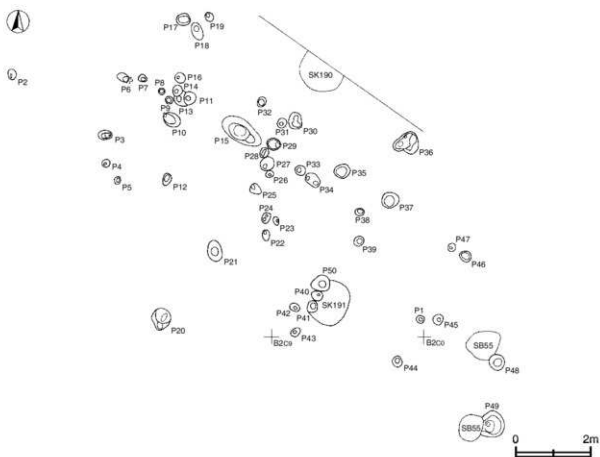
第5ピット群計測表 (第139図)

番号	規 模 (cm)			番号	規 模 (cm)			番号	規 模 (cm)		
	長径	× 短径	深さ		長径	× 短径	深さ		長径	× 短径	深さ
1	21	× 20	22	9	34	× 32	40	17	60	× 28	22
2	36	× 27	22	10	28	× 24	26	18	29	× 22	51
3	43	× 34	32	11	82	× 33	29	19	52	× 34	13
4	36	× 33	43	12	38	× 31	20	20	43	× 30	9
5	60	× 46	42	13	41	× 36	20	21	27	× 25	15
6	31	× 30	16	14	25	× 22	31	22	36	× 30	21
7	36	× 32	27	15	26	× 23	30	23	37	× 28	16
8	33	× 31	28	16	31	× 30	21	24	32	× 32	19



番号	規 模 (cm)			番号	規 模 (cm)			番号	規 模 (cm)		
	長径 × 短径	深さ	深さ		長径 × 短径	深さ	深さ		長径 × 短径	深さ	
25	36 × 28	26	31	25 × 23	43	37	43 × 33	48			
26	24 × 20	15	32	35 × 34	42	38	28 × 22	14			
27	21 × 21	20	33	50 × 42	22	39	20 × 18	16			
28	24 × 24	14	34	15 × 14	26	40	18 × 17	17			
29	37 × 27	48	35	25 × 23	15	41	22 × 19	36			
30	26 × 23	32	36	29 × 24	42						

第6ピット群 (第140図)



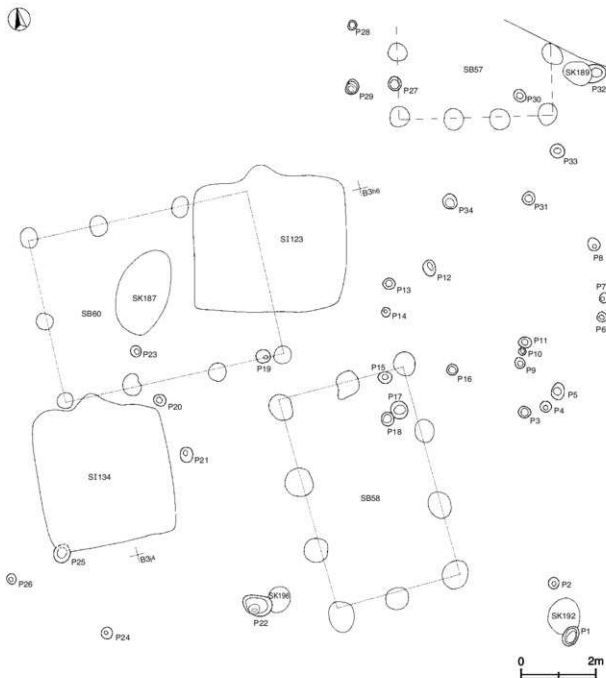
第140図 第6ピット群実測図

第6ピット群計測表 (第140図)

番号	規 模 (cm)			番号	規 模 (cm)			番号	規 模 (cm)		
	長径 × 短径	深さ	深さ		長径 × 短径	深さ	深さ		長径 × 短径	深さ	
1	21 × 20	17	11	36 × 33	26	21	56 × 38	64			
2	28 × 22	43	12	34 × 23	21	22	30 × 20	37			
3	38 × 25	47	13	40 × 39	29	23	24 × 16	18			
4	22 × 20	29	14	29 × 27	33	24	30 × 22	13			
5	20 × 16	15	15	119 × 59	65	25	34 × 26	43			
6	34 × 21	36	16	29 × 26	34	26	20 × 19	34			
7	25 × 20	12	17	36 × 31	32	27	40 × 36	52			
8	18 × 17	13	18	48 × 27	60	28	28 × 22	19			
9	20 × 19	12	19	28 × 22	28	29	35 × 30	41			
10	49 × 36	52	20	60 × 50	66	30	46 × 34	25			

番号	規 模 (cm)			番号	規 模 (cm)			番号	規 模 (cm)		
	長径 × 短径	深さ	深さ		長径 × 短径	深さ	深さ		長径 × 短径	深さ	深さ
31	27 × 26	26		38	25 × 20	11		45	28 × 27	27	
32	28 × 23	16		39	30 × 26	36		46	32 × 30	6	
33	30 × 27	44		40	34 × 24	28		47	24 × 20	34	
34	42 × 28	61		41	34 × 28	32		48	43 × 40	21	
35	44 × 36	40		42	26 × 22	11		49	70 × (59)	30	
36	66 × 46	18		43	28 × 20	34		50	52 × 43	23	
37	46 × 42	23		44	28 × 26	10					

第7ピット群 (第141図)

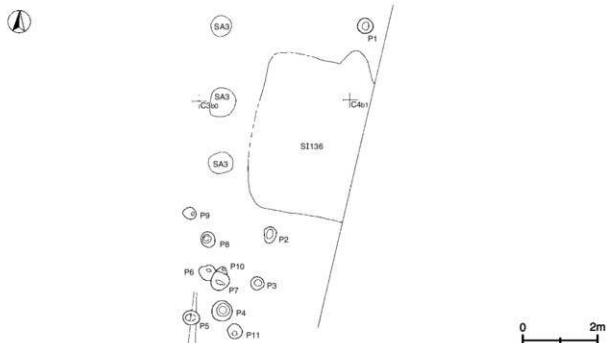


第141図 第7ピット群実測図

第7ピット群計測表 (第141図)

番号	規 模 (cm)			番号	規 模 (cm)			番号	規 模 (cm)		
	長径 × 短径	深さ			長径 × 短径	深さ			長径 × 短径	深さ	
1	56 × 41	43		13	31 × 26	18		25	43 × 36	37	
2	31 × 28	17		14	25 × 22	15		26	28 × 27	10	
3	32 × 29	12		15	34 × 29	21		27	37 × 34	6	
4	29 × 24	35		16	28 × 26	12		28	24 × 23	4	
5	44 × 38	31		17	48 × 40	24		29	40 × 33	16	
6	28 × 24	44		18	36 × 33	12		30	34 × 31	13	
7	26 × 23	53		19	36 × 36	35		31	33 × 30	8	
8	35 × 31	54		20	32 × 31	12		32	48 × (38)	9	
9	26 × 25	11		21	38 × 33	23		33	41 × 36	19	
10	20 × 18	23		22	81 × 55	45		34	40 × 36	30	
11	32 × 29	13		23	29 × 27	29					
12	44 × 32	58		24	32 × 26	15					

第8ピット群 (第142図)

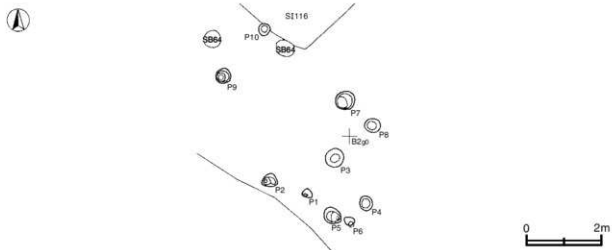


第142図 第8ピット群実測図

第8ピット群計測表 (第142図)

番号	規 模 (cm)			番号	規 模 (cm)			番号	規 模 (cm)		
	長径 × 短径	深さ			長径 × 短径	深さ			長径 × 短径	深さ	
1	40 × 40	26		5	44 × 39	14		9	36 × 32	20	
2	44 × 34	18		6	46 × (38)	14		10	28 × (16)	18	
3	37 × 36	16		7	52 × 50	44		11	40 × 38	15	
4	58 × 54	56		8	44 × 38	36					

第9ピット群 (第143図)

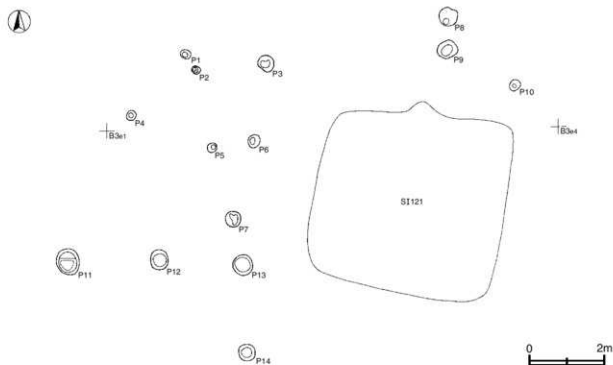


第143図 第9ピット群実測図

第9ピット群計測表 (第143図)

番号	規 模 (cm)			番号	規 模 (cm)			番号	規 模 (cm)		
	長径	× 短径	深さ		長径	× 短径	深さ		長径	× 短径	深さ
1	27	× 23	51	5	52	× 42	45	9	41	× 38	27
2	42	× 36	32	6	28	× 23	28	10	35	× 30	18
3	52	× 49	19	7	52	× 49	26				
4	41	× 35	24	8	42	× 36	47				

第10ピット群 (第144図)

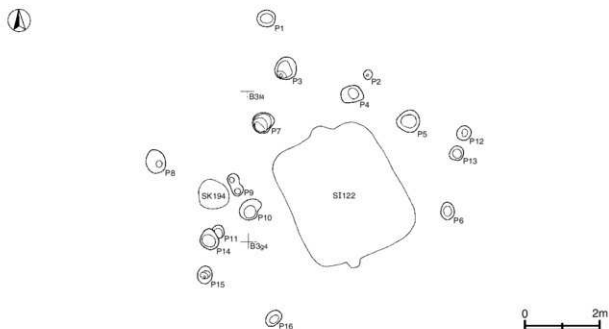


第144図 第10ピット群実測図

第10ビット群計測表 (第144図)

番号	規 模 (cm)			番号	規 模 (cm)			番号	規 模 (cm)		
	長径 × 短径	深さ			長径 × 短径	深さ			長径 × 短径	深さ	
1	29 × 24	6		6	36 × 32	11		11	70 × 62	52	
2	25 × 21	42		7	42 × 40	19		12	53 × 45	28	
3	44 × 44	11		8	50 × 47	24		13	55 × 52	57	
4	29 × 23	14		9	56 × 50	21		14	45 × 42	29	
5	26 × 23	12		10	30 × 25	29					

第11ビット群 (第145図)



第145図 第11ビット群実測図

第11ビット群計測表 (第145図)

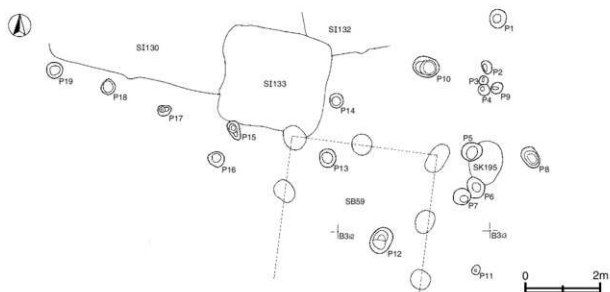
番号	規 模 (cm)			番号	規 模 (cm)			番号	規 模 (cm)		
	長径 × 短径	深さ			長径 × 短径	深さ			長径 × 短径	深さ	
1	47 × 46	11		7	58 × 50	21		13	40 × 35	13	
2	24 × 22	18		8	63 × 51	43		14	53 × 45	54	
3	61 × 59	24		9	57 × 31	26		15	45 × 38	34	
4	60 × 56	32		10	63 × 48	48		16	48 × 35	29	
5	62 × 57	14		11	35 × (23)	35					
6	46 × 37	12		12	40 × 35	20					

第12ビット群 (第146図)

第12ビット群計測表 (第146図)

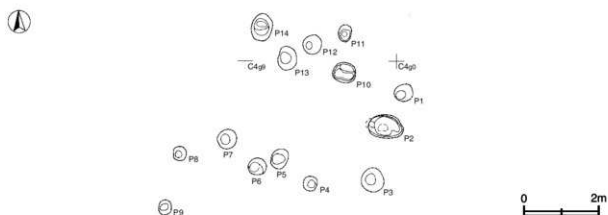
番号	規 模 (cm)			番号	規 模 (cm)			番号	規 模 (cm)		
	長径 × 短径	深さ			長径 × 短径	深さ			長径 × 短径	深さ	
1	48 × 43	32		3	23 × 22	26		5	55 × 50	18	
2	36 × 24	22		4	31 × 30	27		6	58 × (43)	29	

番号	規 模 (cm)			番号	規 模 (cm)			番号	規 模 (cm)		
	長径	× 短径	深さ		長径	× 短径	深さ		長径	× 短径	深さ
7	47	× 44	26	12	72	× 53	34	17	37	× 26	23
8	59	× 41	20	13	52	× 43	21	18	40	× 38	15
9	34	× 28	37	14	40	× 38	13	19	42	× 42	34
10	68	× 53	53	15	54	× 32	39				
11	26	× 21	25	16	43	× 42	38				



第146図 第12ピット群実測図

第13ピット群 (第147図)

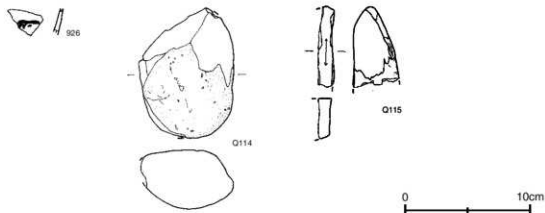


第147図 第13ピット群実測図

第13ピット群計測表 (第147図)

番号	規 模 (cm)			番号	規 模 (cm)			番号	規 模 (cm)		
	長径	× 短径	深さ		長径	× 短径	深さ		長径	× 短径	深さ
1	48	× 40	68	4	42	× 37	20	7	55	× 50	58
2	92	× 61	48	5	54	× 42	36	8	39	× 35	48
3	65	× 59	36	6	48	× 47	42	9	40	× 36	35

番号	規 横 (cm)			番号	規 横 (cm)			番号	規 横 (cm)		
	長径 × 短径	深さ	深さ		長径 × 短径	深さ	長径 × 短径		深さ		
10	59 × 52	16	12	53 × 53	77	14	71 × 56	32			
11	45 × 34	17	13	63 × 52	38						



第148図 第6・7・8ピット群出土遺物実測図

第6ピット群出土遺物観察表 (第148図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q114	磨石	(10.4)	(7.5)	(4.7)	(482)	花崗岩	全面使用	覆土中	

第7ピット群出土遺物観察表 (第148図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
926	土師器	坏	—	(2.2)	—	石英・赤色砂子	橙	普通	摩耗により調整不明	覆土中	5% 体部遺棄 [ ]

第8ピット群出土遺物観察表 (第148図)

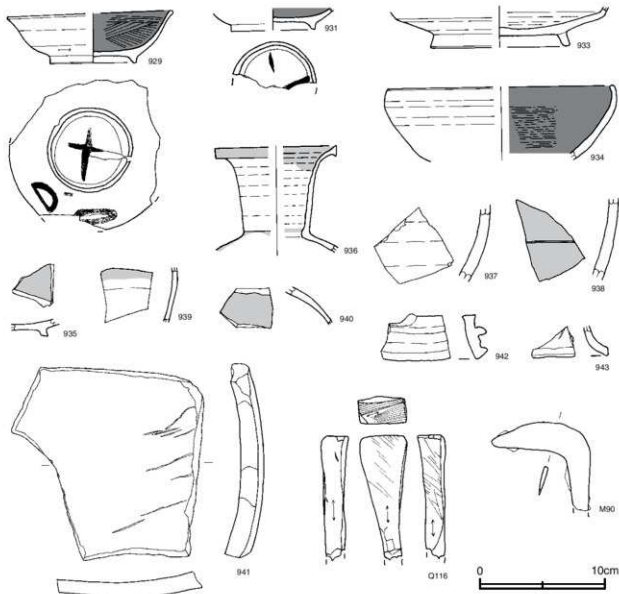
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q115	砥石	(6.2)	1.3	3.6	(29.9)	酸性凝灰岩	砥面1面	覆土中	

(6) 遺構外出土遺物 (第149・150図)

今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物について、実測図及び出土遺物観察表で掲載する。



第149図 遺構外出土遺物実測図(1)



第150図 遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物観察表(第149・150図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
927	土師器	坏類	—	(2.3)	—	長石・石英・金雲母・針状鉱物	橙	普通	内面へう磨き	C5区	5% 体部黒青 10% 底部黒青
928	須恵器	坏	[13.1]	4.7	[4.6]	長石・石英・針状鉱物	黄灰	普通	ロクロナデ	C5区	10% 体部黒青 15% 底部黒青
929	土師器	高台付坏	[13.2]	4.1	6.8	長石・石英・針状鉱物	明黄褐	普通	内面へう磨き 体部下端・底部回転へう削り	C5区	20% 体部黒青 10% 底部黒青 15% 底部黒青 15% 底部黒青
930	土師器	高台付皿	—	(1.7)	[6.6]	長石・金雲母・針状鉱物	橙	普通	内面へう磨き 体部下端・底部回転へう削り	C5区	10% 底部黒青 15% 底部黒青 15% 底部黒青
931	土師器	高台付坏	—	(1.7)	[6.6]	長石・石英・金雲母・針状鉱物	橙	普通	内面へう磨き 底部回転へう削り	C5区	5% 底部黒青 15% 底部黒青
932	土師器	高台付坏	—	(2.3)	—	石英・金雲母・針状鉱物	橙	普通	内面へう磨き 底部回転へう切り後ナデ	C4区	10% 底部黒青
933	須恵器	盤	—	(3.1)	[11.0]	長石・針状鉱物	黄灰	普通	底部回転へう切り後ナデ 内面黒灰付着	SI17置土中	10% 転用灰
934	土師器	鉢	[18.0]	(5.8)	—	石英・小礫	にぶい橙	普通	内面へう磨き 外面ナデ	C4区	5%
935	灰釉陶器	皿	—	(1.4)	—	緻密	灰黄・灰白	良好	内外面輪軸 角高台	C4区	5% 黒投黒黒茶 14% 黒投黒茶
936	灰釉陶器	長頸瓶	[9.6]	(8.4)	—	緻密	灰白・灰白	良好	頸部外面無軸 体部外面輪軸	D5区	5% 黒投黒黒茶 14% 黒投黒茶 5% 黒投黒茶 14% 黒投黒茶
937	灰釉陶器	長頸瓶	—	(6.0)	—	緻密	灰白・灰白 灰白・灰白 にぶい黄	良好	無軸	D6区	5% 黒投黒茶 14% 黒投黒茶
938	灰釉陶器	瓶類	—	(6.5)	—	緻密	灰白・浅黄	良好	外面刷毛毛塗り 840と接合	C5区	5%



番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
939	灰釉陶器	瓶類	—	(4.4)	—	緻密	灰白・淡黄	良好	外面刷毛塗り 822と接合	SI142覆土中	5% 釦付蓋黒磁 14号蓋式通
940	灰釉陶器	瓶類	—	(3.1)	—	緻密	にふい黄・ 淡黄	良好	外面施釉	SI148覆土中	5%
941	須恵器	甕	—	(15.3)	—	長石・石英・小 骨	灰	普通	内外面磨りによる摩耗 外面縦位の叩き	SI138覆土中	5% 転用砥石*
942	須恵器	円面硯	—	(3.5)	—	長石・黒色粒子	オリーブ黒	普通	ロクロナデ 方形透かし有り 外面自然釉	C4区	5%
943	須恵器	円面硯	—	(2.4)	—	長石・雲母	黄灰	普通	ロクロナデ 体部に縦割有り	SI124覆土中	5%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
Q116	砥石	(9.8)	3.8	2.1	(91.5)	頁岩	縦面4面 端部欠損		D5区	PL20	
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
M90	鎌	7.8	2.3	0.4	(27.5)	鉄	端部わずかに細くなる		表探	PL21	

## 第4章 木戸遺跡

### 第1節 遺跡の概要

木戸遺跡は、弥生時代と奈良・平安時代を中心とした複合遺跡であることが確認できた。

検出された遺構は、弥生時代の堅穴住居跡2軒、奈良・平安時代の堅穴住居跡3軒、溝跡1条、土坑7基のほか、時期不明の道路跡1条、溝跡5条、土坑10基、ピット群1か所である。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に11箱出土している。主な出土遺物は、弥生土器（壺）、土師器（坏・碗・高台付坏・壺・甕・甗）、須恵器（坏・高台付坏・蓋・盤・壺・甕）、陶器片（碗カ）、土製品（支脚・紡錘車・球状土錘）、石器（砥石）、鉄器・鉄製品（鎌・刀子・紡錘車・釘）などである。

### 第2節 基本層序

調査区北西部のA18区にテストピットを設定し、基本土層の観察を行った。テストピットの地表面の標高は29.4mで、地表から約2.8m掘り下げた。土層は13層に分層された。土層の観察結果は、以下のとおりである。

第1層は、ローム粒子を少量含む黒褐色の現表土で、粘性・締まりともに普通である。層厚は30～40cmである。

第2層は、ロームブロック・黒色粒子を少量含む褐色のローム層で、粘性・締まりともに普通である。層厚は5～15cmである。

第3層は、ローム粒子を中量、黒色粒子を微量含む褐色のローム層で、粘性・締まりともに普通である。層厚は5～20cmである。

第4層は、ローム粒子を多量含む褐色のローム層で、粘性・締まりともに普通である。層厚は5～35cmである。

第5層は、ローム粒子を多量、赤色粒子を微量含む褐色のローム層で、粘性は普通で締まりは強い。層厚は10～40cmである。

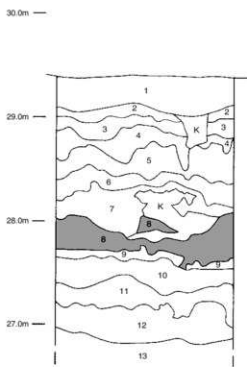
第6層は、ローム粒子を多量、鹿沼バミスを少量、黒色粒子を微量含む褐色のローム層で、粘性は普通で締まりは強い。層厚は5～70cmである。

第7層は、ローム粒子・鹿沼バミスを中量含むにぶい黄褐色のローム層で、鹿沼層純層への漸移層である。粘性・締まりともに強い。層厚は5～50cmである。

第8層は、黄褐色の鹿沼層純層で、粘性は弱く締まりは強い。層厚は10～45cmである。

第9層は、ローム粒子中量、鹿沼バミスを少量を含む暗褐色のローム層で、粘性・締まりともに強い。層厚は10cm前後である。

第10層は、黒色粒子を微量含む褐色のローム層で、粘性・



第151図 基本土層図



**規模と形状** 東側は調査区域外に延びているため、長軸5.30m、短軸2.95mが確認され、方形又は長方形と推測される。主軸方向はN-3°-Eである。壁高は26~36cmで、ほぼ直立している。

**床** ほぼ平坦である。

**炉** 中央部からやや北寄りに位置し、径65cmの円形を呈し、床面を15cm掘りくぼめた地床炉である。炉床は、中央部が火熱を受け赤変硬化している。

**炉土層解説**

1 ぶい 赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック少量、炭化物微量

**ピット** 1か所。深さ33cmで、炉と向かい合う位置にあることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。

**覆土** 3層に分層される。不自然な堆積状況を示していることから人為堆積と考えられる。

**土層解説**

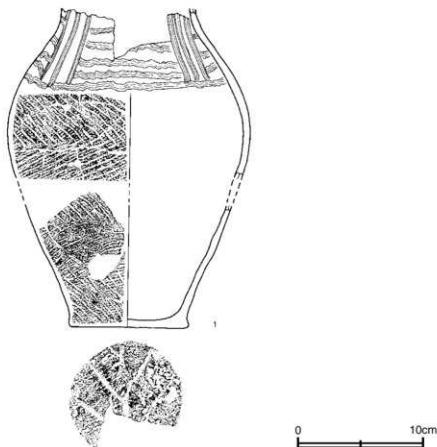
1 黒色 ローム粒子少量

3 暗褐色 ロームブロック微量

2 黒褐色 ローム粒子中量

**遺物出土状況** 弥生土器片71点(壺)のほか、混入と考えられる土師器片16点(甕類13, 埴3), 須恵器片2点(坏類1, 甕類1)が出土している。遺物は、南西コーナー部から多く出土している。1は覆土下層から床面にかけて出土した破片が接合したものである。

**所見** 時期は、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第153図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表 (第153図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	壺	—	[25.2]	9.5	長石・石英	ぶい 黒	普通	器部、陶土状工具(4本)による幅区画(4分目)内に充てられ、新部附加後二種織文による施文、底面木葉状	下層~床面	60%

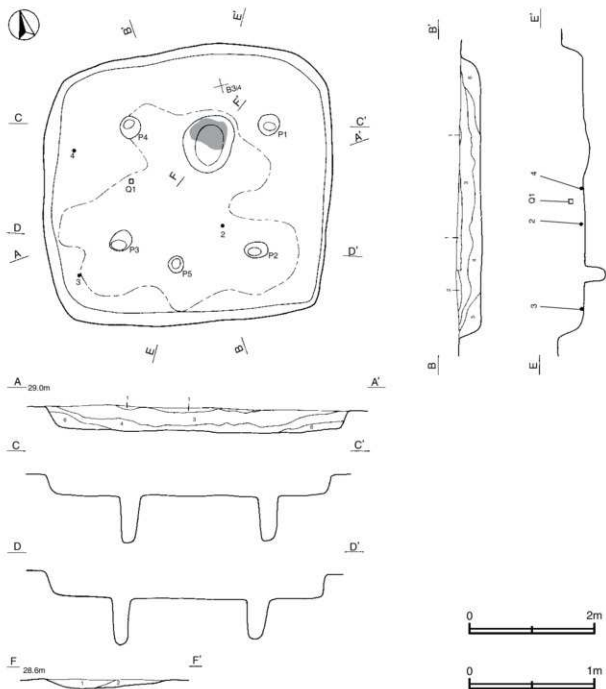
第2号住居跡 (第154・155図)

位置 調査区中央部のB3i3区で、平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長軸4.51m、短軸4.41mの方形で、主軸方向はN-17°-Eである。壁高は30~40cmで、外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦である。炉から南部は踏み固められている。

炉 中央部からやや北寄りに位置している。長径92cm、短径77cmの楕円形を呈し、床面を10cm掘りくぼめた地床炉である。火床は、中央部から北側にかけて火熱を受け赤変硬化している。



第154図 第2号住居跡実測図

## 炉土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量 2 黒褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量

ピット 5か所。P1～P4は深さ66～82cmで、位置と形状から主柱穴と考えられる。P5は深さ33cmで、炉と向かい合う位置にあることから、出入り口施設に伴う柱穴と考えられる。

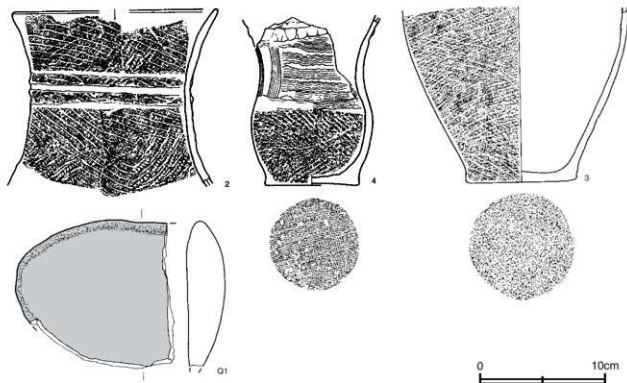
覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を示していることから自然堆積と考えられる。

## 土層解説

- 1 黒褐色 炭化物中量、ロームブロック少量、焼土ブロック 4 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量  
 2 黒褐色 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量 5 暗褐色 ローム粒子微量  
 3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量 6 褐色 ローム粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片92点(壺)のほか、混入と考えられる土師器片11点(甕頸)、須恵器片4点(坏2, 蓋1, 甕1)が出土している。2は中央部, 3は南西コーナ部, 4は西部の床面から出土した破片が接合したものである。Q1は、覆土中層からの出土であることから、埋設の途中に投棄されたと考えられる。

所見 時期は、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第155図 第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表(第155図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2	弥生土器	壺	[16.2]	(13.8)	—	長石・石英・黒色粒子	にぶい黄緑	普通	断面上位に軽い押圧のある隆帯(口縁部から体部にかけて附加条一種縄文による縄文)	床面	30% PL25
3	弥生土器	壺	—	(13.8)	8.8	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	断面、附加条二種縄文による縄文 底面押し直	床面	40% PL25
4	弥生土器	壺	—	(13.5)	7.4	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰褐色	普通	断面上位に軽い押圧のある隆帯 隆帯状工具(6本)による縦区画(3分節)内に光塊状状況 断面、附加条二種縄文による縄文 底面押し直	床面	60% PL25

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	炉石	(11.9)	(12.4)	3.0	(659.0)	砂岩	上面火熱による赤変	中層	

表10 弥生時代住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	内 部 施 設						覆土	主な出土遺物	備 考 重複関係 (旧→新)
							壁溝	主柱穴	出入口	ピット	貯蔵穴	炉			
1	C3d	N-3°E	[長方形]	5.30×2.90	26~36	平坦	—	—	1	—	—	炉	人為	弥生土器	
2	B3d	N-17°E	方形	4.51×4.4	19~40	平坦	—	4	1	—	—	炉	自然	弥生土器	

## 2 奈良・平安時代の遺構と遺物

竪穴住居跡3軒、溝跡1条、土坑7基が確認された。以下、確認された遺構と遺物について記述する。

### (1) 竪穴住居跡

#### 第3号住居跡 (第156・157図)

**位置** 調査区南部のC3d0区で、平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第1・2号溝及び第12号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸5.20m、短軸5.02mの方形で、主軸方向はN-5°Eである。壁高は61~68cmで、外傾して立ち上がっている。

**床** ほほ平坦で、北部から南部にかけて踏み固められている。壁溝が、西壁と南壁の一部を除き巡っている。

**竈** 北壁中央部に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで1.43m、袖部幅は1.50mである。袖部は、床面の高まりを基部として、砂質粘土で構築されている。火床部は床面を皿状に掘りくぼめており、火床面の中央部から西側は火熱を受け赤変硬化している。煙道部は壁外に60cmほど三角形に掘り込まれ、火床面から緩やかに立ち上がっている。第4・5・7層は、天井部の崩落層である。

#### 覆土層解説

1 濃い褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物微量	5 褐 色	焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物微量
2 明 褐色	粘土ブロック・焼土粒子少量、ロームブロック・炭化物微量	6 黒 褐色	焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化物微量
3 褐 色	粘土ブロック多量、焼土ブロック・ローム粒子・炭化物微量	7 赤 褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック微量
4 暗 褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化物微量	8 暗 赤 褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック微量
		9 黄 褐色	粘土ブロック多量

**ピット** 5か所。P1~P4は深さ66~87cmで、位置と形状から主柱穴と考えられる。P5は深さ58cmで、竈と向かい合う位置にあることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

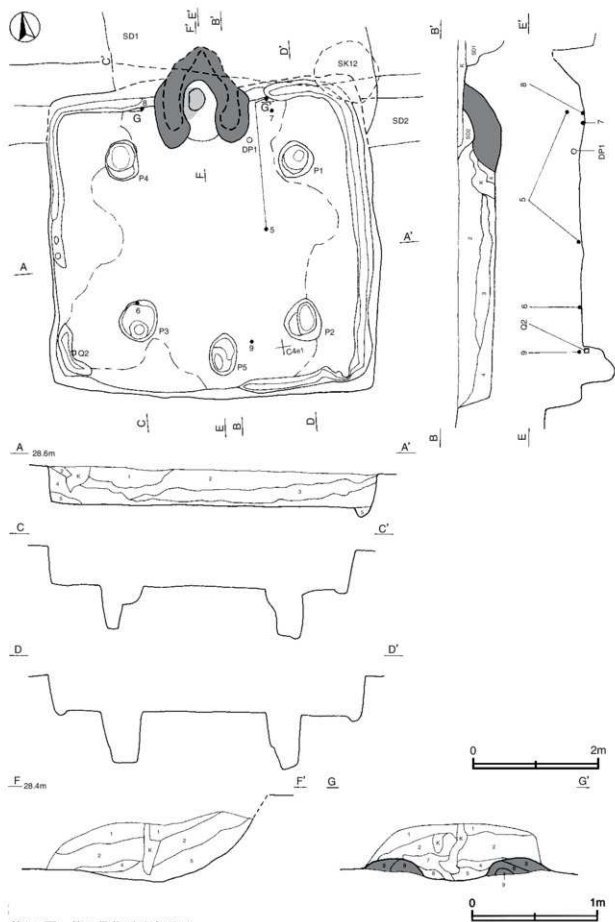
**覆土** 5層に分層される。ロームブロックを含む層が不自然に堆積している状況から、人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

1 暗 褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量	4 暗 褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化物微量
2 暗 褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化物微量	5 褐 色	ローム粒子中量、炭化物微量
3 褐 色	ロームブロック中量		

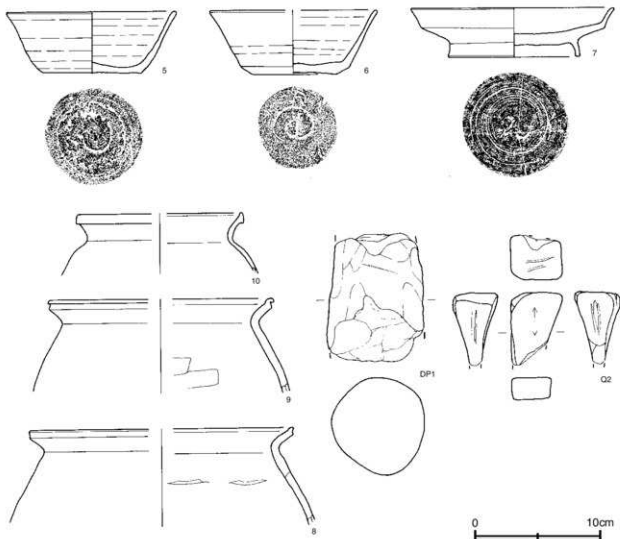
**遺物出土状況** 土師器片727点(坏類70, 甕類657), 須恵器片88点(坏類71, 高台付坏1, 蓋4, 皿・盤5, 甕類5, 壺2), 土製品6点(支脚片), 石器1点(不明), 鉄製品1点(釘)のほか、流れ込みと考えられる弥生土器片3点も出土している。5は中央部の床面から竈の右袖部, 6は覆土中層からP3の上層, 7は竈の右袖脇から覆土中層にかけて出土した破片が接合したものである。8・9は覆土中層から床面にかけて出土した破片が接合したものである。10は覆土中層, DP1は覆土下層, Q2は南西コーナー部の壁溝からそれぞれ出土している。多くの遺物が破片で広く散らばっている状況から、廃絶に伴い投棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から9世紀前半葉と考えられる。



第156図 第3号住居跡実測図





第157図 第3号住居跡出土遺物実測図

第3号住居跡出土遺物観察表 (第157図)

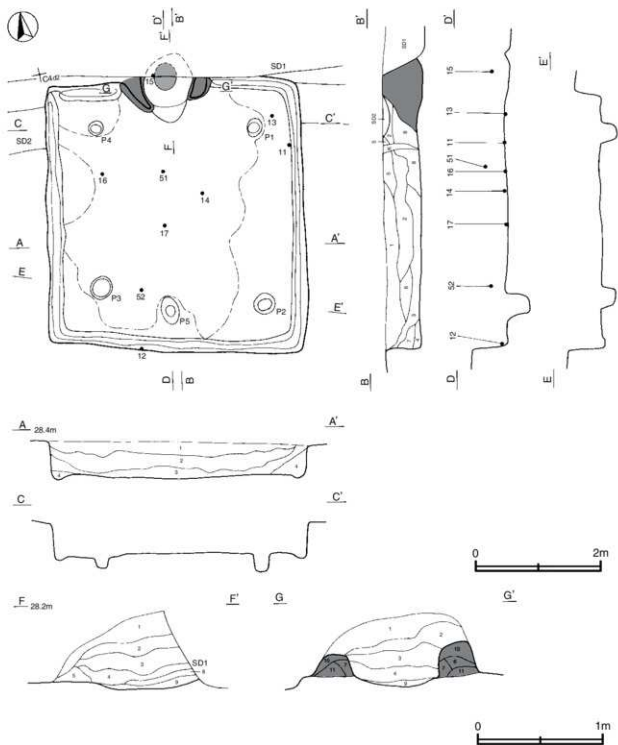
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5	須恵器	坏	13.2	4.9	7.8	長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ切り	蓮置土中～ 床面	70% PL26
6	須恵器	坏	[13.0]	5.1	6.4	長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ切り	中層～P3上 層	40%
7	須恵器	盤	16.1	3.9	10.2	長石・石英・黒 色砂子	灰	普通	底部回転ヘラ削り後高台貼り付け	中層～床面	80% PL26
8	土師器	甕	[20.7]	(7.7)	—	長石・石英・雲 母	にぶい赤褐色	普通	口辺部横ナデ 体部内面輪横痕	中層～床面	5%
9	土師器	甕	[17.4]	(7.5)	—	長石・石英・雲 母	橙	普通	体部内面ヘラナデ	中層～床面	5%
10	土師器	甕	[13.0]	(4.8)	—	長石・赤色砂子	にぶい橙	普通	口縁部内外面横ナデ	中層	5%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴		出土位置	備考	
DP1	支脚	(10.3)	7.7	(8.3)	(527.0)	長石・石英	指頭圧痕を残すナデ		下層		
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
Q2	砥石	(5.7)	4.1	3.6	(68.5)	酸性凝灰岩	砥面1面 側面に線状痕		壁溝	PL27	

## 第4号住居跡 (第158・159図)

位置 調査区南部のC4d2区で、平坦な台地上に位置している。

重複関係 北部を第1・2号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.38m、短軸4.08mの方形で、主軸方向は $N-10^{\circ}-E$ である。壁高は55~62cmで、外傾して立ち上がっている。



第158図 第4号住居跡実測図

床 はほぼ平坦で、北部から南部にかけて踏み固められている。壁溝は、北西コーナー部を除いて全周している。  
 竈 北壁中央部に付設されている。規模は、焚口部から残存している煙道部まで1.12m、袖部幅は1.42mである。袖部は床面の高まりを基部として、ローム土と砂質粘土を用いて構築されている。火床部は床面を皿状に掘りくぼめており、火床面の中央部は火熱を受け赤変硬化している。煙道部は壁外に40cm以上掘り込んでいたと推測される。第3層は、天井部の崩落層である。

土層解説

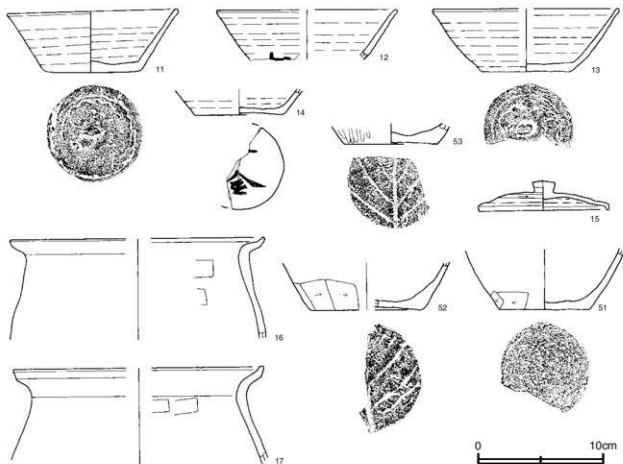
- |         |                                  |         |                               |
|---------|----------------------------------|---------|-------------------------------|
| 1 暗褐色   | 焼土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量            | 7 褐色    | 粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック少量     |
| 2 褐色    | ロームブロック・炭化粒子少量、焼土ブロック微量          | 8 暗赤褐色  | 焼土ブロック多量、炭化粒子少量、ローム粒子微量       |
| 3 に近い褐色 | 粘土ブロック多量、ロームブロック少量・焼土粒子・炭化粒子微量   | 9 黄褐色   | 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物・粘土ブロック少量 |
| 4 暗赤褐色  | 焼土ブロック中量、炭化粒子少量、ロームブロック・粘土ブロック微量 | 10 明黄褐色 | 粘土ブロック多量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量    |
| 5 暗褐色   | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量              | 11 明黄褐色 | 粘土ブロック中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量     |
| 6 に近い褐色 | 粘土ブロック多量、焼土ブロック・炭化粒子微量           |         |                               |

ピット 5か所。P1～P4は深さ15～29cmで、位置と形状から支柱穴と考えられる。P5は深さ37cmで、竈と向かい合う位置にあることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 8層に分層される。ロームブロックを含む不規則な堆積状況から、人為堆積と考えられる。

土層解説

- |         |                         |       |                              |
|---------|-------------------------|-------|------------------------------|
| 1 褐色    | ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量  | 6 褐色  | ロームブロック少量                    |
| 2 暗褐色   | ロームブロック中量、焼土ブロック微量      | 7 黒褐色 | ロームブロック微量                    |
| 3 に近い褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 | 8 暗褐色 | 炭化粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量 |
| 4 褐色    | ロームブロック少量、焼土粒子微量        |       |                              |
| 5 褐色    | ロームブロック多量               |       |                              |



第159図 第4号住居跡出土遺物実測図

**遺物出土状況** 土師器片311点（坏類3，堿類308），須恵器片45点（坏類27，蓋7，堿11），土製品1（支脚），鉄製品1（釘）が出土している。11・13は北東コーナー部，14・17は中央部，16は西部の床面からそれぞれ出土している。15は竈の覆土中層から出土している。12は南部の覆土下層からの出土で，埋没時に混入したと考えられる。51・52は覆土中層，53は覆土中からそれぞれ出土している。

**所見** 時期は，出土土器から9世紀中葉と考えられる。

#### 第4号住居跡出土遺物観察表（第159図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
11	須恵器	坏	13.3	5.0	7.7	長石	灰	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	床面	65% PL26
12	須恵器	坏	[14.2]	(3.9)	—	長石	にぶい褐	普通	体部内外面ロクロナデ	下層	黒削□ 20%
13	須恵器	坏	[14.6]	5.0	7.0	長石・石英・雲母	灰	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	床面	25%
14	須恵器	坏	—	(2.0)	7.0	長石	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	床面	黒書□金1 底部ヘラ書き 10% PL27
15	須恵器	蓋	10.2	2.4	—	長石	灰黄	普通	天井部回転ヘラ削り	竈中層	50%
16	土師器	堿	[20.2]	(8.0)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口辺部横ナデ 体部内面ヘラナデ	床面	5%
17	土師器	堿	[19.5]	(7.7)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口辺部横ナデ 体部内面ヘラナデ	床面	5%
51	土師器	堿	—	(4.8)	7.2	長石・石英	にぶい赤褐	普通	体部外面下端・底部ヘラ削り	中層	5%
52	土師器	堿	—	(3.8)	[8.7]	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	体部外面下端ヘラ削り 底部木葉痕	中層	5%
53	土師器	堿	—	(1.7)	7.4	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部外面ヘラ削き 底部木葉痕	覆土中	5%

#### 第5号住居跡（第160～164図）

**位置** 調査区南部のC4b2区で，平坦な台地上に位置している。

**規模と形状** 長軸5.25m，短軸4.64mの長方形で，主軸方向はN-11°-Eである。壁高は70～80cmで，外傾して立ち上がっている。竈の両側に棚状施設が付設されている。

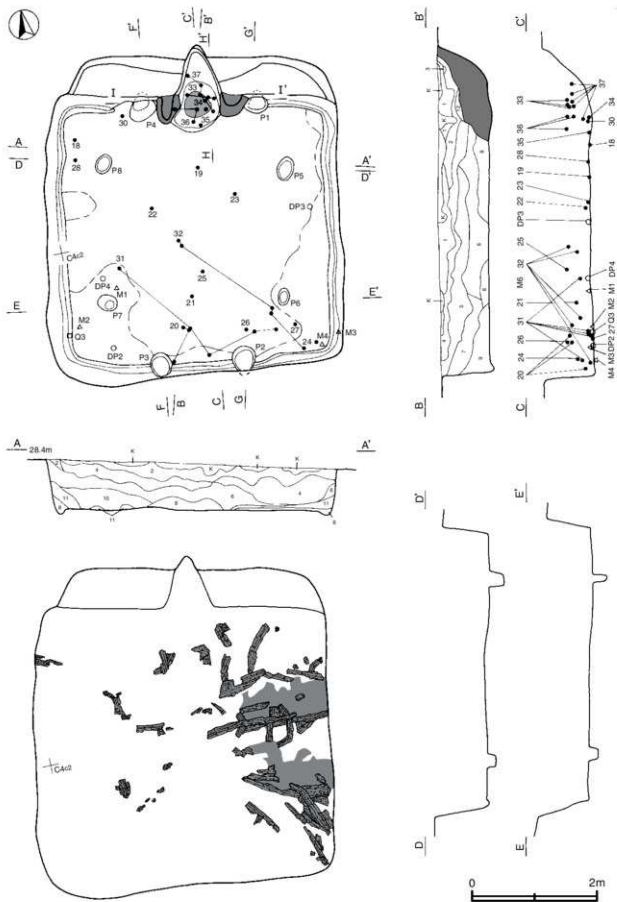
**床** 平坦で，ほぼ全面が踏み固められている。壁溝が全周している。

**竈** 北壁中央部に付設されている。規模は，焚口部から煙道部まで1.34m，袖部幅は1.54mである。袖部は床面の高まりを基部として，ローム土と砂質粘土を用いて構築されている。火床部は床面をわずかに皿状に掘りくぼめており，火床面の中央部は火熱を受け赤変硬化している。煙道部は壁外に80cmほど三角形に掘り込まれ，火床面から外傾して立ち上がっている。第3層は，天井部の崩落層である。両袖の外側の形状はP1・P4に沿った形を呈しており，竈の修復などで袖部が主柱穴付近まで広がったためと推測される。

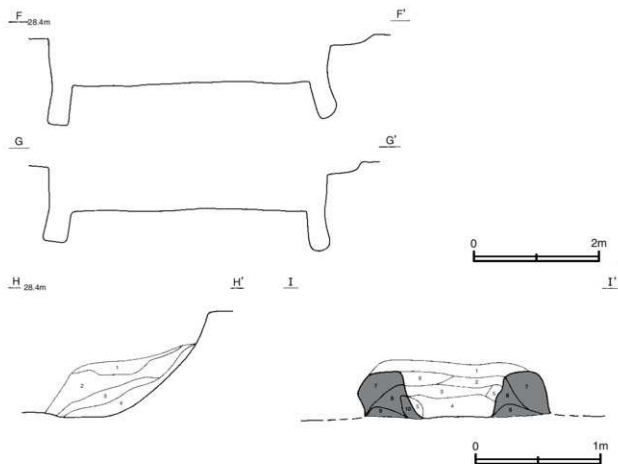
#### 竈土層解説

1 褐色	炭化物中量，ロームブロック・焼土ブロック少量，粘土粒子微量	6 褐色	粘土粒子中量，炭化物少量，ローム粒子微量
2 褐色	ローム粒子少量，炭化物・焼土粒子・粘土粒子微量	7 にぶい黄褐色	粘土ブロック多量，ローム粒子中量，焼土ブロック・炭化物微量
3 黒褐色	焼土ブロック・炭化材中量，粘土ブロック・ローム粒子少量	8 暗褐色	粘土ブロック多量，炭化粒子少量，ロームブロック・焼土粒子微量
4 黒褐色	ローム粒子少量，粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	9 褐色	粘土ブロック・ローム粒子少量，炭化物微量
5 にぶい赤褐色	焼土ブロック中量，炭化粒子微量	10 にぶい赤褐色	ロームブロック中量，粘土ブロック・焼土粒子少量

**棚状施設** 幅160cm，奥行き60cmで，底面は平坦である。竈を中心として，左右にはほぼ同じ規模で地山を18cm掘り込んで構築され，粘土などを貼り付けた痕跡は確認されなかった。床面から底面までの高さは60cmである。



第160图 第5号住居跡実測图(1)



第161図 第5号住居跡実測図(2)

**ピット** 8か所。P1～P4は深さ45～66cmで内傾しており、規模と形状から主柱穴と考えられる。P5～P8は深さが15～27cmで、位置と形状から補助的なピットと考えられる。

**覆土** 12層に分層される。ロームブロックを含み、不規則な堆積状況から人為堆積と考えられる。

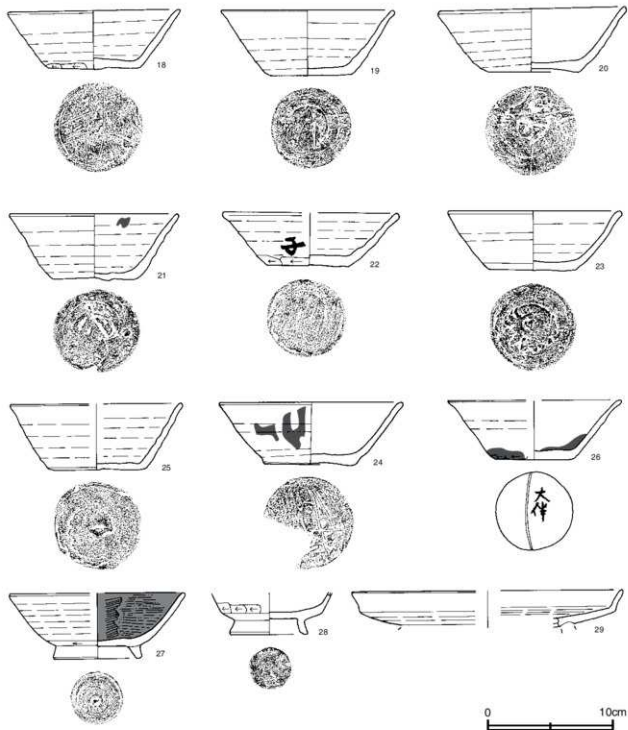
## 土層解説

- |        |                          |          |                          |
|--------|--------------------------|----------|--------------------------|
| 1 暗褐色  | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量      | 8 明褐色    | ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物微量   |
| 2 褐色   | ロームブロック・焼土ブロック微量         | 9 黒褐色    | ロームブロック・粘土ブロック・炭化物微量     |
| 3 赤褐色  | 焼土粒子微量                   | 10 暗褐色   | 炭化物中量、ロームブロック少量、焼土ブロック微量 |
| 4 褐色   | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量   | 11 黒褐色   | 炭化材多量、ロームブロック少量、焼土粒子微量   |
| 5 暗褐色  | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化物微量     | 12 にぶい褐色 | 砂質粘土ブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 6 無暗褐色 | 炭化材中量、焼土ブロック少量、ロームブロック微量 |          |                          |
| 7 褐色   | 炭化粒子中量、ロームブロック・焼土粒子微量    |          |                          |

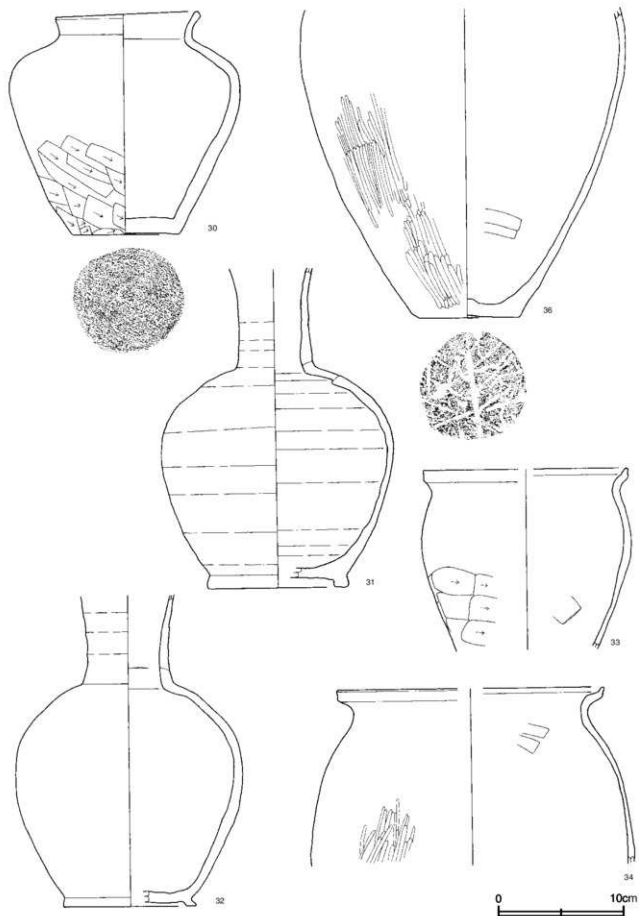
**遺物出土状況** 土師器片1,004点(坏類61, 甕類943), 須恵器片321点(坏類168, 蓋1, 甕類7, 甕類73, 壺類72), 土製品3点(紡錘車), 石器1点(砥石), 鉄器・鉄製品10点(紡錘車2, 鎌1, 鉄斧1, 刀子2, 釘3, 不明1)が出土している。また、東部の床面から覆土下層にかけて、住居の建築材と考えられる炭化材が出土している。18・30は正位で北西コーナー部、19・22は正位で中央部、DP3は東部、M3・M4は南東部、DP2・DP4・Q3・M1・M2は南西部の床面からそれぞれ出土している。特に、22・DP3・M4は炭化材の下から確認されている。34・35は竈の火床面、37は竈の覆土中層から覆土下層にかけて出土した破片が接合したものである。26は南部の覆土中層、31・32は中央部から南部の覆土中層から覆土下層にかけて出土した破片が接合したものであり、焼後に投棄されたと考えられる。炭化材は、中央部から東壁に向かって放射状に

確認されていることから、垂木と考えられる。また、梁と考えられる南北方向の炭化材も重なって確認されている。材の形状は、丸太材と推測される。

**所見** 時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。炭化材の出土状況から焼失住居と推測される。炭化材、炭化物を多く含む層（第6・10・11層）の下層に、炭化物を少量しか含まない層（第8層）があることや、P1～P4の覆土中に炭化物がほとんど含まれていないことから、廃絶時に解体された後、焼失した可能性が考えられる。

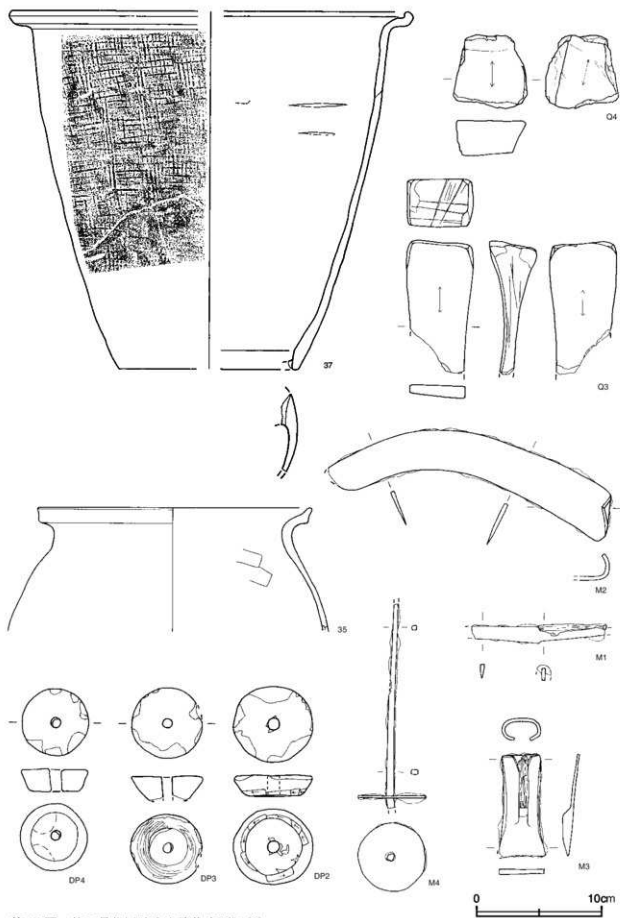


第162図 第5号住居跡出土遺物実測図(1)



第163図 第5号住居跡出土遺物実測図(2)





第164图 第5号住居跡出土遺物実測図(3)

第5号住居跡出土土物観察表(第162~164図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
18	須臾器	坏	13.6	4.6	7.2	長石・石英	灰	普通	体部外面下端へラ削り後ナデ 底部回転へラ切り後ナデ	床面	底部へラ書き 100% PL.26
19	須臾器	坏	13.6	5.2	6.5	長石・石英	灰	普通	底部回転へラ切り後ナデ	床面	底部へラ書き 100% PL.26
20	須臾器	坏	14.6	5.1	7.1	長石・石英	褐灰	普通	底部回転へラ切り後ナデ	下層	底部へラ書き 88% PL.26
21	須臾器	坏	13.4	5.3	6.5	長石	灰	普通	底部回転へラ切り後ナデ	中層	口縁部内面油 煙付着 95% PL.26
22	須臾器	坏	[13.7]	4.2	6.3	長石・石英・雲母	にぶい黄	普通	体部外面下端へラ削り 底部回転へラ切り後一方削りナデ	床面	墨書「口」 90% PL.26
23	須臾器	坏	13.5	4.7	6.8	長石・石英	灰	普通	底部回転へラ切り	床面	80% PL.26
24	須臾器	坏	14.4	5.1	7.4	長石・石英	灰黄	良好	底部回転へラ切り後ナデ	中層	底部へラ書き 体部外面油煙 付着 60%
25	須臾器	坏	[13.5]	5.3	7.4	長石・石英	灰	普通	体部外面下端回転へラ削り 底部回転へラ切り	中層	40%
26	須臾器	坏	[13.8]	4.7	6.1	長石・石英	灰	普通	体部外面下位へラ削り 底部回転へラ切り後一方削りナデ	中層	底部へラ書き 40%
27	土師器	高台付坏	[13.8]	5.2	6.8	長石・雲母	にぶい橙	普通	底部回転へラ切り後高台貼り付け	床面	50% PL.26
28	須臾器	高台付坏	-	(3.3)	6.0	長石・石英・雲母	灰	普通	体部外面下端へラ削り 底部回転へラ削り後高台貼り付け	床面	40%
29	須臾器	盤	[21.5]	(3.0)	-	雲母・黒色粒子	灰黄	普通	底部ナデ調整後高台貼り付け	覆土中	5%
30	須臾器	短頸壺	11.0	17.5	8.5	長石・黒色粒子・赤色粒子	灰白	普通	体部下位へラ削り 底部ナデ	床面	95% PL.25
31	須臾器	長頸瓶	-	(25.5)	11.2	長石・黒色粒子	電サリープ 灰	良好	頸部三段構成による接合	中層~下層	外面自然焼 75% PL.25
32	須臾器	長頸瓶	-	(24.8)	10.5	長石	オリーブ黒	良好	頸部二段構成による接合	中層~下層	外面自然焼 85% PL.25
33	土師器	甕	[16.2]	(14.3)	-	長石・石英	明赤褐	普通	体部外面へラ削り 内面へラナデ	竈中層	20% PL.25
34	土師器	甕	[21.1]	(13.9)	-	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面へラ磨き 内面へラナデ	竈火床面	10%
35	土師器	甕	21.5	(9.8)	-	長石・石英	明赤褐	普通	口辺部横ナデ 体部内面へラナデ	竈火床面	15%
36	土師器	甕	-	(24.6)	8.0	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面へラ磨き 内面へラナデ 底部木重痕	竈中層	20%
37	須臾器	瓶	[31.2]	28.4	[14.2]	長石・石英・雲母・赤色粒子	黄灰	普通	体部外面格子状の叩き	竈中層~下層	70%

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP2	紡錘車	6.3	1.0	1.7	(59.1)	長石・石英・雲母	下面へラ削り	床面	PL.27
DP3	紡錘車	5.6	0.8	(1.9)	(58.4)	石英・雲母	下面へラ磨き	床面	PL.27
DP4	紡錘車	5.3	0.8	1.8	(47.3)	石英・雲母	下面指頭圧痕のあるナデ	床面	PL.27

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q3	砥石	(10.5)	5.3	3.8	(160.6)	酸性凝灰岩	砥面2面 側面に線状痕	床面	PL.27
Q4	砥石	5.8	5.9	2.8	144.6	砂岩	砥面2面	覆土中	PL.27

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M1	刀	(10.8)	1.3	0.3	(14.8)	鉄	切先・基部欠損 茎に柄の木材が残存 両側	床面	PL.27
M2	鎌	(22.4)	3.8	0.3	(111.2)	鉄	切先一部欠損 基部は上部を折り曲げる	床面	PL.27
M3	鉄斧	8.2	(3.7)	0.2~0.8	(87.2)	鉄	刃部一部欠損 基部に柄の木材が残存	床面	PL.27
M4	紡錘車	(16.3)	5.3	0.2	(41.0)	鉄	軸は方形	床面	PL.27

表11 奈良・平安時代住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	内部施設					覆土	主な出土遺物	備考 重複関係 (旧→新)	
							壁溝	主柱穴	出入口	ピット	貯蔵穴				竈
3	C3d0	N-5°E	方形	5.2×(5.0)	61~68	平坦	一部	4	1	-	-	竈	人為	土師器 須臾器 支脚 砥石	本跡→SD 1,2,3,5,9
4	C4d2	N-10°E	方形	4.4×4.1	55~62	平坦	全周	4	1	-	-	竈	人為	土師器 須臾器	本跡→SD 1,2
5	C4b2	N-11°E	長方形	5.3×4.7	70~80	平坦	全周	4	-	4	-	竈	人為	土師器 須臾器 粘面車 砥石 炭灰・炭製品	

(2) 溝跡

第5号溝跡 (第165・166・付図)

位置 調査区北部のA1c6～A2h6区で、平坦な台地上に位置している。

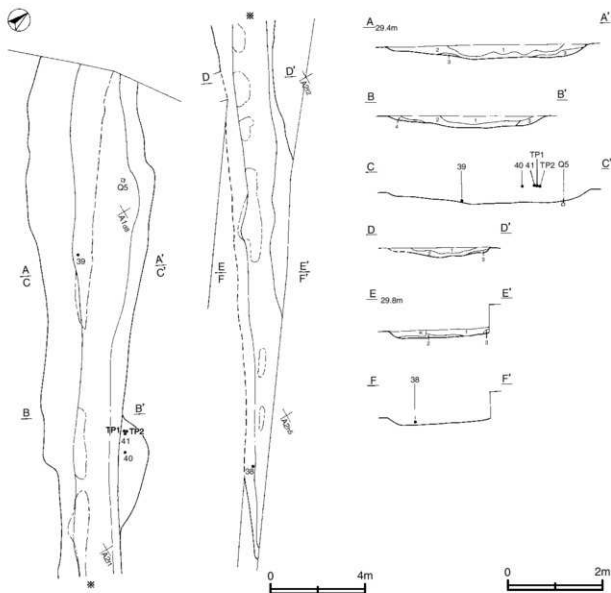
規模と形状 上幅2.26～5.42m、下幅0.94～2.64m、深さ6～30cmで、長さ37.2mが確認された。北西から南東方向(N-59°-W)へ、直線状に調査区域外へ延びている。北側の壁は外傾して、南側の壁は緩やかに立ち上がっている。断面形は緩やかな弧状を呈している。北側の壁の中央部には棚状に広がっている部分が、底面の一部には硬化している部分が確認された。底面の標高は東部が29.0m、西部が28.7mで、西部がわずかに低くなっている。

覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況から、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子微量  
2 暗褐色 ローム粒子少量

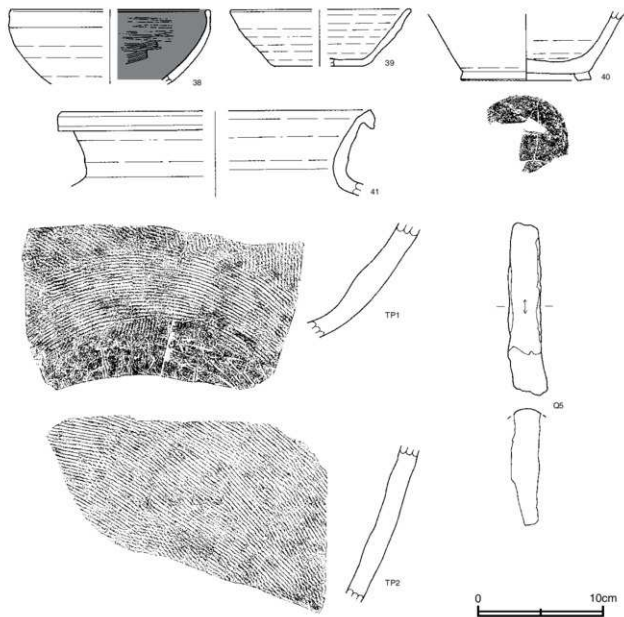
- 3 黒褐色 ローム粒子少量  
4 明褐色 ローム粒子中量



第165図 第5号溝跡実測図

**遺物出土状況** 土師器片29点（坏類21、甕類7、手捏土器カ1）、須恵器片195点（坏類18、盤類10、甕類152、壺類15）、灰軸陶器片2点（壺類）、土師質土器片1点（内耳鍋カ）、石器6点（炉石カ2、不明4）、鉄製品1点（不明）が出土している。38は南東部、39・Q5は北西部の底面から出土している。40・41・TP1・TP2は、中央部の棚状の広がり部分からまとまって出土していることから、投棄されたと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から9世紀中葉以前と考えられる。硬化面が確認されたことから、道路跡の可能性も考えられる。



第166図 第5号溝跡出土遺物実測図

第5号溝跡出土遺物観察表（第166図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
38	土師器	坏	[15.6]	(5.9)	—	長石・石英・赤色粘土	橙	普通	体部外面ロクロナデ 内面ヘラ磨き	底面	5%
39	須恵器	坏	[14.1]	4.5	[7.0]	長石・小礫	灰黄	普通	体部内外面ロクロナデ	底面	30%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
40	須恵器	長頸瓶	—	(5.3)	10.4	長石・石英・黒色粘土	暗灰黄	普通	体部外面ロクロナデ 底部ナデ調整後高台貼り付け	底面	外面自然釉 底部へラつき 15%
41	須恵器	甕	[24.5]	(6.9)	—	長石	黄灰	良好	口縁部内外面ロクロナデ	底面	口縁部内面自然釉 5%
TP1	須恵器	甕	—	(9.0)	—	長石・石英・針状炭素	灰	普通	体部内面ナデ 横位の平行叩き	底面	5%
TP2	須恵器	甕	—	(12.6)	—	長石・石英	黄灰	普通	体部内面ナデ 斜位の平行叩き	底面	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q5	磁石	(13.8)	3.1	(9.3)	(402.0)	砂岩	縦面1面	底面	

### (3) 土坑

#### 第1号土坑 (第167図)

**位置** 調査区南部のC 4 e2区で、平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第2号土坑を掘り込み、第3号溝に掘り込まれている。

**規模と形状** 径1.0mほどの円形で、深さは34cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

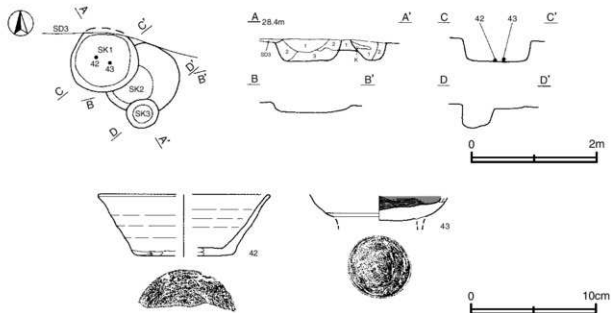
**覆土** 3層に分層される。ブロック状の不自然な堆積状況から、人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量 3 暗赤褐色 粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量  
 2 濃い赤褐色 ロームブロック中量

**遺物出土状況** 土師器片10点 (坏類2, 甕類8), 須恵器片4点 (坏類)のほか、流れ込んだ弥生土器片1点が出土している。42・43は、中央部の底面から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第167図 第1・2・3号土坑，第1号土坑出土遺物実測図

#### 第1号土坑出土遺物観察表 (第167図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
42	須恵器	坏	[13.5]	4.9	[7.7]	長石・雲母・赤色粘土	黄灰	普通	体部外面下端へラ削り 底部回転へラ切り後ナデ	底面	20%
43	土師器	高台付碗	—	(1.9)	—	長石・石英・雲母・炭化粒子	橙	普通	底部回転へラ切り後高台貼り付け	底面	20%

## 第2号土坑 (第167図)

**位置** 調査区南部のC4e2区で、平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第3号溝跡及び第1・3号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長径1.21m、短径1.07mが確認され、楕円形と推測され、長径方向はN-58°-Eである。深さは16cmで、底面は平坦であり、壁は緩やかに立ち上がっている。

**覆土** 単一層である。ロームブロック・焼土ブロックを含んでいることから、人為堆積と考えられる。

## 土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片1点(亮)、須恵器片2点(坏類)が覆土中から出土している。

**所見** 時期は、出土土器及び第1号土坑に掘り込まれていることから、9世紀中葉以前と考えられる。

## 第3号土坑 (第167図)

**位置** 調査区南部のC4e2区で、平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第2号土坑を掘り込んでいる。

**規模と形状** 径0.5mの円形で、深さは35cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

**覆土** 2層に分層される。不規則な堆積状況から、人為堆積と考えられる。

## 土層解説

- 1 暗赤褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

- 2 明褐色 ローム粒子微量

**所見** 時期は、土器は出土していないが第2号土坑を掘り込んでいることから、9世紀中葉以降と考えられる。

## 第12号土坑 (第168図)

**位置** 調査区南部のC4c1区で、平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第3号住居跡を掘り込み、第1・2号溝に掘り込まれている。

**規模と形状** 溝と攪乱によって上部を掘り込まれているため、径1.0mほどの円形又は楕円形と推測され、長径方向はN-27°-W、深さは52cmが確認された。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

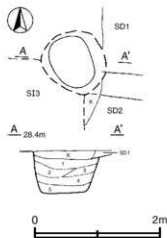
**覆土** 5層に分層される。水平な堆積層であるが、ブロック状の層があることから、人為堆積と考えられる。

## 土層解説

- 1 灰褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量  
 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量  
 3 暗褐色 ローム粒子少量  
 4 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量  
 5 極暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、焼土ブロック微量

**遺物出土状況** 土師器片6点(坏1、亮類5)、須恵器片2点(坏類)が覆土中から出土している。

**所見** 時期は、出土土器及び9世紀前葉に比定される第3号住居跡を掘り込んでいることから、9世紀前葉以降と考えられる。



第168図 第12号土坑実測図

第13号土坑 (第169図)

位置 調査区南部のC 4 a1区で、平坦な台地上に位置している。

重複関係 第14号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.21m、短径1.01mの楕円形で、長径方向はN-64°-Wである。深さは86cm、底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 3層に分層される。不規則な堆積状況から、人為堆積と考えられる。

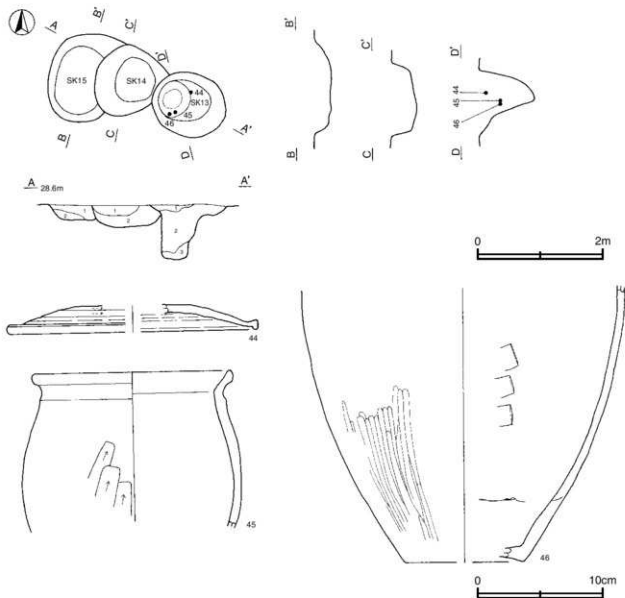
土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量  
2 暗褐色 ロームブロック少量

- 3 褐色 ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片31点(莖類)、須恵器片41点(坏類5、蓋2、甕類33、壺1)が出土している。44は覆土上層、45・46は覆土中層から出土している。3点とも破片で出土していることから、廃絶時に投棄されたと考えられる。

所見 時期は、出土土器から8世紀後葉と考えられる。



第169図 第13・14・15号土坑、第13号土坑出土遺物実測図

第13号土坑出土遺物観察表 (第169図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
44	須恵器	蓋	[19.6]	(2.1)	—	長石・石英・黒色粒子	灰	普通	天井部回転ヘラ削り	上層	10%
45	土師器	甕	15.5	(12.5)	—	長石・石英・茶母	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り	中層	40%
46	土師器	甕	—	(21.9)	[9.3]	長石・石英	にぶい赤褐	普通	体部外面ヘラ磨き 内面ヘラナデ	中層	20%

## 第14号土坑 (第169図)

位置 調査区南部のC 4 a1区で、平坦な台地上に位置している。

重複関係 第15号土坑を掘り込み、第13号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長径1.14m、短径1.01mの不整楕円形で、長径方向はN-35°-Eである。深さは39cm、底面は皿状で、壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 2層に分層される。レンズ状の堆積状況から、自然堆積と考えられる。

## 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

- 2 暗褐色 ロームブロック微量

所見 時期は、土器は出土していないが第13号土坑に掘り込まれていることから、8世紀後葉以前と考えられる。

## 第15号土坑 (第169図)

位置 調査区南部のC 4 a1区で、平坦な台地上に位置している。

重複関係 第14号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 東部を掘り込まれているため、長径1.45m、短径0.84mが確認された。楕円形と推測され、長径方向はN-21°-Eである。深さは26cmで、底面は皿状であり、壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 2層に分層される。ブロック状の堆積状況から、人為堆積と考えられる。

## 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

- 2 暗褐色 ローム粒子少量

所見 時期は、土器は出土していないが第14号土坑に掘り込まれていることから、8世紀後葉以前と考えられる。

表12 奈良・平安時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 重複関係 (旧→新)
				長径(m)	短径(m)					
1	C 4 e2	—	円形	1.06 × 1.00	34	外傾	平坦	人為	土師器 須恵器	SK 2 → 本跡 → SD 3
2	C 4 e2	N-58°-E	[楕円形]	1.21 × [1.07]	16	縦斜	平坦	人為	—	本跡 → SK 1・3 → SD 3
3	C 4 e2	—	円形	0.50 × 0.47	35	外傾	皿状	人為	—	SK 2 → 本跡
12	C 4 c1	N-27°-W	[楕円形]	[1.02] × [0.94]	52	外傾	平坦	人為	—	SK 3 → 本跡 → SD 1・2
13	C 4 a1	N-64°-W	楕円形	1.21 × 1.01	86	外傾	平坦	人為	土師器 須恵器	SK 14 → 本跡
14	C 4 a1	N-35°-E	[不規則円形]	1.14 × (1.01)	39	外傾	皿状	自然	—	SK 15 → 本跡 → SK 13
15	C 4 a1	N-21°-E	[楕円形]	1.45 × (0.84)	26	縦斜	皿状	人為	—	本跡 → SK 14



### 3 その他の遺構と遺物

道路跡1条、溝跡5条、土坑10基及びピット群1か所が確認された。

#### (1) 道路跡

時期及び性格が不明な道路跡1条について概要を記述し、土層断面を掲載する。なお、平面図は遺構全体図に示すこととする。

##### 第1号道路跡 (第170・付図)

**位置** 調査区中央部のB3f2～B3il区で、平坦な台地上に位置している。

**規模と形状** 南西側の調査区境から北東方向に、長さ13.3mの範囲内で、硬化面6か所を確認した。硬化面は、長さ0.5～5.6m、幅0.3～0.6m、厚さ6～13cmであり、直線状に断続的に続いている。

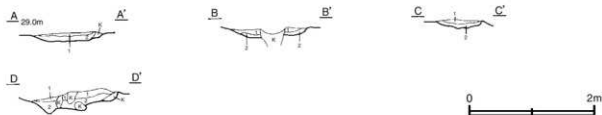
**覆土** 含有物と締まりの差異から2層に分層された。層厚が薄く、堆積状況は不明である。

##### 土層解説

1 黒褐色 ローム粒子微量

2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

**所見** 断続的に続く硬化面は、帯状に続いていたと推測できることから、道路跡と判断した。時期は、土器が出土していないため不明である。



第170図 第1号道路跡実測図

#### (2) 溝跡

時期及び性格が不明な溝跡5条について記述し、土層断面図を掲載する。なお、平面図は遺構全体図に示すこととする。

##### 第1号溝跡 (第171・付図)

**位置** 調査区南部のC3c7～C4d3区で、平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第3・4号住居跡、第12号土坑を掘り込んでいる。

**規模と形状** 上幅1.08～2.10m、下幅0.54～0.78m、深さ71～92cmで、長さ23.5mが確認された。北西から南東方向(N-79°-W)に直線状で、西部は調査区域外へ延びている。東部は擾乱のため不明である。壁は下位は外傾して、上部は緩やかに立ち上がっている。断面形は台形状を呈している。底面の標高は西部が27.8m、東部が27.5mで、東部がわずかに低くなっている。また、第2号溝跡の北側を並行するように延びている。

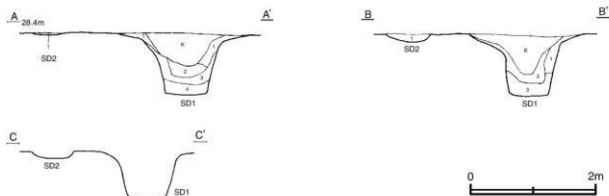
**覆土** 4層に分層される。ロームブロックを含み全体的に締まりがなく不自然な堆積状況のため、人為堆積と考えられる。

## 土層解説

- |       |                 |       |           |
|-------|-----------------|-------|-----------|
| 1 褐色  | ロームブロック少量       | 3 褐色  | ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量 | 4 黒褐色 | ロームブロック少量 |

**遺物出土状況** 土師器片95点（坏類2，甕類93），須恵器片43点（坏類13，甕類3，甕類27），鉄製品7点（不明）が出土している。いずれも、覆土上層からの出土であり、混入又は流れ込みと考えられる。

**所見** 時期は、第3・4号住居跡を掘り込んでいることから、9世紀中葉以降と考えられるが明確な時期は分からない。性格は不明である。



第171図 第1・2号溝跡実測図

## 第2号溝跡（第171・付図）

**位置** 調査区南部のC3c8～C4d3区で、標高28mほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第3・4号住居跡，第9・12号土坑を掘り込んでいる。

**規模と形状** 上幅0.66～0.81m，下幅0.18～0.41m，深さ3～11cmで、長さ21.3mが確認された。北西から南東方向（N-84°-W）に直線状で、西部は調査区域外へ延びている。東部は攪乱のため不明である。壁は外傾して立ち上がっている。断面形は西部は緩やかな弧状で、東部は台形状を呈している。底面の標高は西部が28.6m，東部が28.2mで、東部がわずかに低くなっている。また、第1号溝跡の南側，第3号溝跡の北側を並行するように延びている。

**覆土** 単一層である。ロームブロックを含む締まりのない層であり、人為堆積と考えられる。

## 土層解説

- |      |                    |
|------|--------------------|
| 1 褐色 | ロームブロック少量，焼土ブロック微量 |
|------|--------------------|

**遺物出土状況** 土師器片51点（坏1，甕類50），須恵器片12点（坏類6，甕類6）が確認面や覆土中から出土している。いずれも混入又は流れ込みと考えられる。

**所見** 時期は、第3・4号住居跡を掘り込んでいることから、時期は9世紀中葉以降と考えられるが明確な時期は分からない。性格は不明である。

## 第3号溝跡（第172・付図）

**位置** 調査区南部のC3e9～C4e2区で、標高28mほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第1・2・10号土坑を掘り込んでいる。

**規模と形状** 上幅0.51～1.61m, 下幅0.18～0.85m, 深さ2～4cmで, 長さ14.4mが確認された。北西から南東方向(N-6°-W)に直線状で, 西部は調査区域外へ延びている。東部は浅くなり, 確認できなかった。壁は外傾して立ち上がっている。断面形は台形状を呈している。底面の標高は西部が28.5m, 東部が28.2mで, 東部がわずかに低くなっている。また, 第2号溝跡の南側, 第4号溝跡の北側を並行するように延びている。

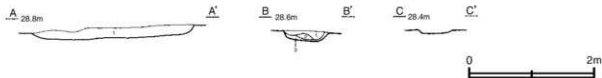
**覆土** 3層に分層される。不自然な堆積状況から, 人為堆積と考えられる。

**土層解説**

- |       |         |      |                      |
|-------|---------|------|----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量 | 3 褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 褐色  | ローム粒子中量 |      |                      |

**遺物出土状況** 土師器片1点(甕類), 須恵器片1点(蓋)が確認面から出土している。いずれも, 混入又は流れ込みと考えられる。

**所見** 時期は, 9世紀中葉に比定される第1号土坑を掘り込んでいることから, 9世紀中葉以降と考えられるが明確な時期は分からない。性格は不明である。



第172図 第3号溝跡実測図

**第4号溝跡 (第173・付図)**

**位置** 調査区南部のC4f1～C4f2区で, 標高28mほどの平坦な台地上に位置している。

**規模と形状** 上幅0.45～0.69m, 下幅0.16～0.45m, 深さ12～15cmで, 長さ6.7mが確認された。北西から南東方向(N-82°-W)に直線状で, 西部は調査区域外へ延びている。東部は浅くなり, その先は確認できなかった。壁は外傾して立ち上がっている。断面形は西部が台形状で, 東部が緩やかな弧状を呈している。底面の標高は西部が28.3m, 東部が28.1mで, 東部がわずかに低くなっている。また, 第3号溝跡の南側を並行するように延びている。

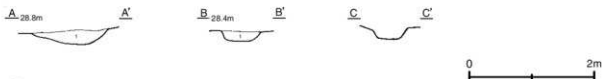
**覆土** 単一層である。広範囲が一度に埋没したと推測できることから, 人為堆積と考えられる。

**土層解説**

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片3点(甕類), 須恵器片1点(坏)が確認面から出土している。いずれも, 混入又は流れ込みと考えられる。

**所見** 時期は, 伴う出土土器がなく不明である。



第173図 第4号溝跡実測図

## 第6号溝跡(第174・付図)

位置 調査区北部のB2a1~B2a0区で、平坦な台地上に位置している。

規模と形状 上幅1.54~2.16m, 下幅0.32~0.88m, 深さ40~52cmで、長さ39.0mが確認された。東から西方向(N-87°-E)に直線状に延び、東部・西部ともに調査区域外へ延びている。壁は、緩やかに立ち上がっている。断面形は東部及び西部がU字状で、中央部は台形状を呈している。底面の標高は西部が28.6m, 東部が28.4mで、東部がわずかに低くなっている。

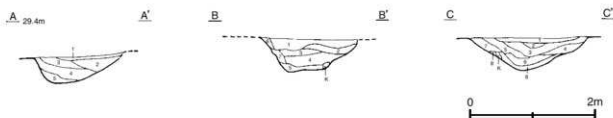
覆土 8層に分層される。ブロック状の不自然な堆積状況から、人為堆積と考えられる。

## 土層解説

1 暗褐色	ロームブロック微量	5 黒褐色	ロームブロック微量
2 暗褐色	ロームブロック少量	6 黒褐色	ローム粒子微量
3 黒褐色	ロームブロック微量	7 褐色	ロームブロック微量
4 粗暗褐色	ローム粒子微量	8 明褐色	ローム粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片3点, 土師器片47点(坏類19, 甕類28), 須恵器片48点(坏類20, 甕類15, 壺13), 陶器片2点, 石器3点(砥石1, 不明2)が確認面から覆土中層にかけて出土している。いずれも混入又は流れ込みと考えられる。

所見 時期は、伴う出土土器がなく不明である。



第174図 第6号溝跡実測図

表13 その他の溝跡一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模				断面形	底面	覆土	主な出土遺物	時期	備考 重複関係 (旧→新)
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)						
1	C3c7~C4d3	N-79°-W	直線	(23.5)	1.08~2.10	0.54~0.78	71~92	台形	平坦	人為	—	不明	SI3・4, SK12→本跡
2	C3d8~C4d3	N-84°-W	直線	(21.3)	0.66~0.81	0.18~0.41	3~11	U字状	平坦	人為	—	不明	SI3・4, SK9・12 →本跡
3	C3d9~C4d2	N-86°-W	直線	(14.4)	0.51~1.61	0.18~0.85	2~4	台形	平坦	人為	—	不明	SK1・2・10→本跡
4	C4f1~C4f2	N-82°-W	直線	(6.7)	0.45~0.69	0.16~0.45	12~15	U字状	平坦	人為	—	不明	
6	B2a1~B2a0	N-87°-E	直線	(39.0)	1.54~2.16	0.32~0.88	40~52	U字状	平坦 平層状	人為	—	不明	

## (3) 土坑(第175・176図)

時期及び性格が不明な10基について一覧表で紹介し、あわせて実測図と土層解説を記載する。

## 第4号土坑土層解説

1 黒褐色	炭化物・ローム粒子少量, 焼土粒子微量
2 黒褐色	ローム粒子・炭化物少量, 炭化粒子微量
3 褐色	ローム粒子中量, 炭化物・焼土粒子微量

## 第6号土坑土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・炭化物少量, 焼土粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量

## 第5号土坑土層解説

1 暗褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
3 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

## 第7号土坑土層解説

1 褐色	ロームブロック中量, 焼土粒子少量
2 暗褐色	ロームブロック少量

第8号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 褐色 ロームブロック少量
- 3 極暗褐色 ロームブロック微量
- 4 黒褐色 ロームブロック微量

第9号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量

第10号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 明褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

第11号土坑土層解説

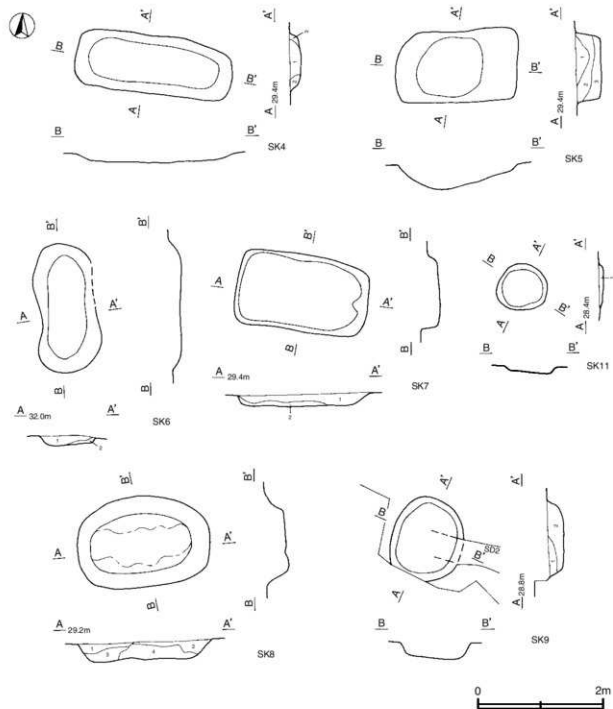
- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

第16号土坑土層解説

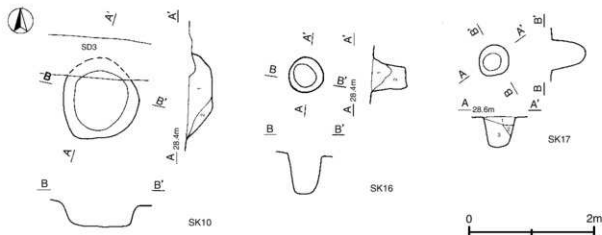
- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 褐色 ロームブロック少量

第17号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量
- 2 褐色 ローム粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック微量



第175図 その他の土坑実測図(1)



第176図 その他の土坑実測図(2)

表14 その他の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 家 椀四係 (旧→新)
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(cm)					
4	A 2 g1	N-80°-W	隅丸長方形	2.48×0.94	15	縦斜	皿状	人為	-	
5	A 2 h1	N-60°-E	隅丸長方形	2.11×1.35	40	縦斜	皿状	自然	-	
6	B 3 β	N-8°-W	不正楕円形	2.06×1.00	17	外傾	平坦	自然	-	
7	A 1 f9	N-83°-W	隅丸長方形	2.08×1.21	25	外傾	平坦	人為	-	
8	A 1 g8	N-85°-E	楕円形	2.12×1.45	31	外傾	凹凸	人為	-	
9	C 3 c7	N-4°-W	[楕円形]	(1.32)×1.16	26	外傾	平坦	自然	-	本跡→SD 2
10	C 4 e1	-	[円形]	(1.32)×1.30	38	外傾	平坦	人為	-	本跡→SD 3
11	C 4 f1	-	円形	0.78×0.76	8	外傾	凹凸	人為	-	
16	C 4 f2	-	円形	0.54×0.52	64	外傾	平坦	人為	-	
17	B 3 β	-	円形	0.48×0.48	53	外傾	平坦	人為	-	PG 1

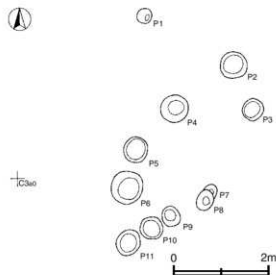
## (4) ビット群

調査区南部からビット群1か所が確認されている。遺物が出土していないため、時期を判断することができなかった。また、ビットの配列に規則性が認められないことから、性格を明らかにすることもできなかった。以下、ビット群の平面図及び規模などを一覧表にまとめて記載する。

## 第1ビット群(第177図)

第1ビット群計測表

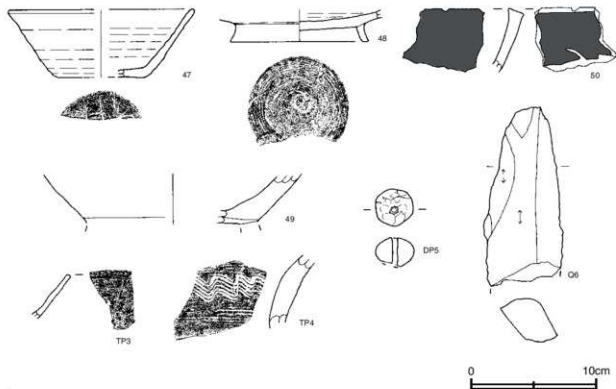
番号	位置	平面形	規模	
			長径×短径(cm)	深さ(cm)
1	B 3 β	円形	32×30	12
2	B 4 β	円形	56×55	30
3	B 4 β	円形	46×44	42
4	B 3 β	円形	58×58	36
5	B 3 β	円形	54×50	21
6	C 3 a0	円形	70×66	21
7	C 4 a1	[円形]	[28]×28	19
8	C 4 a1	楕円形	44×35	19
9	C 3 a0	楕円形	44×39	19
10	C 3 a0	円形	48×47	16
11	C 3 a0	楕円形	58×50	34



第177図 第1ビット群実測図

## (5) 遺構外出土遺物 (第178図)

今回の調査で出土した遺物のうち、遺構に伴わない遺物について、実測図及び出土遺物観察表で記載する。



第178図 遺構外出土遺物実測図

## 遺構外出土遺物観察表 (第178図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
47	須恵器	坏	[14.6]	5.4	[6.8]	長石・石英	灰白	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	PG確認面	底部ヘラ書き 30%
48	須恵器	盤	—	(2.5)	10.9	長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	B1区確認面	30%
49	須恵器	長頸瓶	—	(4.0)	—	長石・石英・黒 鉄粒子	オリーブ褐	良好	体部内外面ナデ	C4区確認面	外面自然釉 5%
50	土師器土器	内耳鍋	—	(5.0)	—	長石・雲母・赤 鉄粒子	黒	普通	体部内外面ナデ	C4区確認面	内外面保存層 5%
TP3	須恵器	坏	—	(3.6)	—	長石・雲母	暗灰黄	普通	体部内外面クロコナデ	B2区確認面	体部内面ヘラ 書き 5%
TP4	須恵器	甕	—	(5.9)	—	長石・石英	黄灰	普通	口縁部内外面横ナデ 外面磨面状工具 (5本) による波状文	SD5叢土中	5%
番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	胎土	特 徴		出土位置	備考	
DP5	球状土師	3.0	0.4	2.3	(18.3)	長石・雲母	指頭圧痕のあるナデ		C4区確認面	PL27	
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴		出土位置	備考	
Q6	砥石	(14.2)	6.4	3.5	(287.0)	頁岩	砥面2面		C4区確認面		

## 第5章 ま と め

今回の調査で、大塚遺跡2では、縄文時代の陥し穴2基、弥生時代の竪穴住居跡1軒、弥生時代後期後半から古墳時代前期前葉の竪穴住居跡5軒、古墳時代の竪穴住居跡8軒、奈良・平安時代の竪穴住居跡32軒、掘立柱建物跡10棟、井戸跡1基、櫓跡1列、土坑5基、木戸遺跡では、弥生時代の竪穴住居跡2軒、奈良・平安時代の竪穴住居跡3軒、溝跡1条、土坑7基が確認された。また、両遺跡から時期不明の住居跡1軒、溝跡10条、道路跡1条、井戸跡1基、土坑74基、ピット群10か所も検出されている。確認された遺構から、大塚遺跡2は縄文時代から奈良・平安時代にかけて、木戸遺跡は弥生時代と奈良・平安時代の複合遺跡であることが分かった。

ここでは、今回調査した大塚遺跡2・木戸遺跡の時代ごとの概要と若干の考察を記述するとともに、当遺跡が属している「桜の郷遺跡群」の遺構や遺物との比較による当遺跡の様相や特徴を述べ、まとめとした。

### 1 大塚遺跡2・木戸遺跡の遺構について

#### (1) 縄文時代

陥し穴と考えられる遺構が、大塚遺跡2の北部と南部からそれぞれ1基ずつ確認されている。どちらも標高29mほどの平坦な場所に構築されている。単独での確認であるため明確ではないが、当時、当遺跡周辺は狩猟の場になっていたと考えられる。詳細な時期や、陥し穴の形状の違いと獲物との関連については不明である。

#### (2) 弥生時代

大塚遺跡2の南部から1軒、木戸遺跡の中央部から2軒の住居跡が確認されている。どの住居跡も出土土器から十王台式期と考えられ、標高29mほどの台地中央の平坦部で、南東側に谷津を望む場所に位置している。確認された住居跡が少ないため集落全体の様相について明確でないが、木戸遺跡の2軒の住居跡は近接しており、小集落が形成されていた可能性がある。

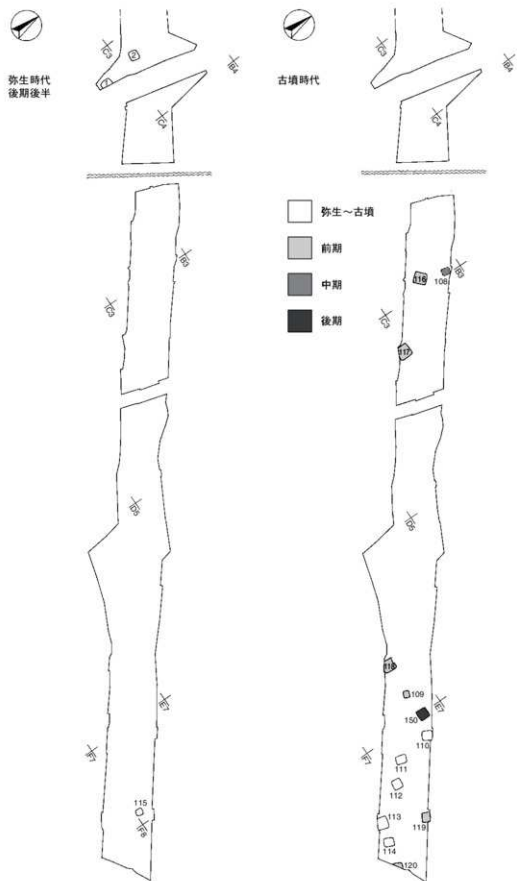
#### (3) 弥生時代後期後半から古墳時代前期前葉

大塚遺跡2の南部から住居跡5軒が確認されており、弥生時代の住居跡とほぼ同じ条件の場所に位置している。出土土器は十王台式土器と五領式土器が共存している。各住居跡は間隔が10～19mで、円弧状に配置されているように捉えられることから、中央部に広場を持つ小集落の可能性が考えられる。ここで、出土土器片の数に注目してみると、第111号住居跡では弥生土器片が土師器片より数が多く、逆に第110号住居跡では土師器片が弥生土器片を上回っている。土器の個体数ではないため単純な比較はできないが、各住居跡から出土した弥生土器片と土師器片の比率の違いは、微妙な時期差を持ちながら住居が建てられ、徐々に集落が構成されたためと考えている。

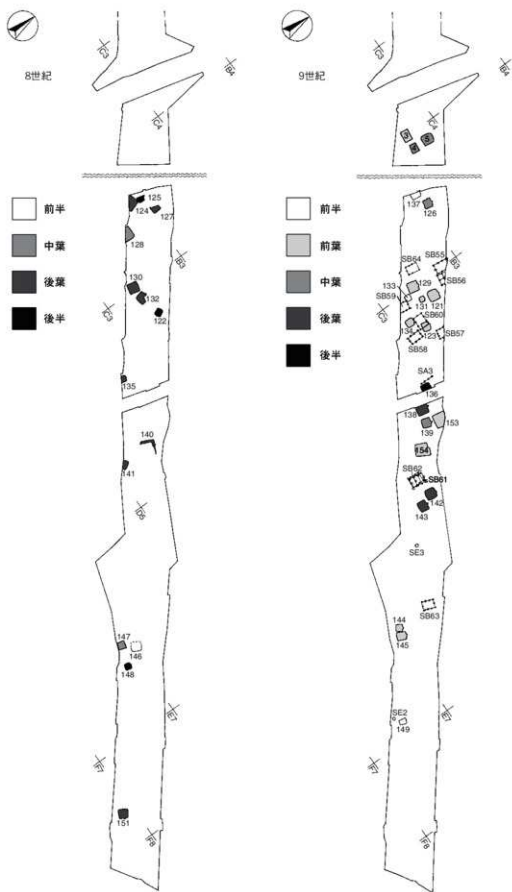
#### (4) 古墳時代

大塚遺跡2の北部から3軒、南部から5軒の住居跡が確認されている。標高27～29mの平坦な台地上に位置し、弥生時代より標高の低い場所にも住居が構築されるようになる。8軒の住居跡のうち、前期の住居跡が6軒、中期と後期の住居跡がそれぞれ1軒ずつであることから、前期を中心に集落が構成されたと考えられる。南部の5軒の住居跡のうち、第120号住居跡は弥生時代後期後半から古墳時代前期前葉の円弧状に配置された住居跡と同じ円弧上、第119号住居跡は円弧の中央付近に位置している。このことから、南部の住居は弥生時代後期後半から古墳時代前期の住居との関連が推測され、この場所では弥生時代の後期後半から継続して集落が形成されていた可能性が考えられる。北部にある中期の1軒と、南部にある後





第179圖 大塚遺跡2・木戸遺跡集落變遷圖(1)



第180圖 大塚遺跡2・木戸遺跡集落変遷図(2)

期の1軒の住居跡はそれぞれ点在しており、この時期には大きな集落は形成されなかったと考えられる。

#### (5) 奈良・平安時代

大塚遺跡2の南部から7軒、中央部から8軒、北部から17軒、木戸遺跡の南部から3軒が確認されている。このうち、8世紀の住居跡は14軒確認され、そのうち中葉が2軒、後葉が8軒、前半が1軒、後半が3軒である。8世紀の住居跡は、大塚遺跡2の北部に集中し、そのほとんどが後葉に比定されている。9世紀の住居跡は21軒で、前葉が10軒、中葉が4軒、後葉が3軒、前半が3軒、後半が1軒である。これまでの時期の住居跡に比べ、標高25mほどの低い場所にも住居が構築されるようになる。また、掘立柱建物跡が大塚遺跡の北部から7棟、中央部から3棟確認され、9世紀代に比定されている。9世紀代の住居跡が集中している場所と掘立柱建物跡が集中している場所がほぼ一致していることから、集落と掘立柱建物跡は、居住域と「倉」あるいは「屋」などの密接な関係が推測される。これらのことから、8世紀後葉から9世紀前葉にかけて、大塚遺跡2の北部と木戸遺跡の南部にはやや規模の大きい集落が形成され、9世紀中葉以降は集落が衰退していったと推測される。

また、大塚遺跡2の第121号住居跡と第129号住居跡は、出土した土器や竈の使用痕跡から長期間にわたり生活の場として利用されていたと考えられる。また、第129号住居跡や第130号住居跡、第138号住居跡は、確認状況から建て替えが行われた可能性が考えられる。これら5軒の住居跡は、大塚遺跡2中央部の小谷津より北部の台地縁辺部から平坦な台地上に位置していることから、この場所に形成された集落は、比較的長期間にわたり継続していたと推測される。

木戸遺跡の南部で確認された住居跡3軒のうち、9世紀中葉の第4号住居跡と第5号住居跡は、間隔が最大で2mほどで、南北に並んで位置している。この2軒の上屋構造や竈の煙道部を想定した場合に、同時に存在していたとは考えにくい。出土土器から、第4号住居跡の方がやや古い時期と考えられる。また、第5号住居跡は、棚状施設を持ち主柱穴の位置が他の2軒と違うことや、「大伴」と書かれた墨書土器や複数の須恵器の長頸瓶、鉄製の紡錘車など特徴的な遺物が多いことなどから、集落の中心的人物の居宅、あるいは祭祀に関わる施設などの特別な建物であった可能性が考えられる。

## 2 文字資料について

大塚遺跡2から出土した文字資料は76点（墨書48点、刻書4点、ヘラ書き24点）、木戸遺跡から出土した文字資料は13点（墨書4点、ヘラ書き9点）にのぼる<sup>1)</sup>。以下、墨書と刻書を中心に述べていく。

文字は、判読可能なものは15点で、他は記号的なもの、字形の一部を残すもの、墨痕が薄いため判読できないものである。文字が記された器種は土師器、須恵器ともに坏や皿などの供膳具が多く、全体の93%を占めており、日常的に利用頻度が高い土器に文字が記載されていたことが明らかである。文字が記された部位は、須恵器の坏や皿などは、底部が12点、体部が7点と底部が多いのに対して、土師器の坏や皿などは、底部が8点、体部が27点と体部が多い。このことは、桜の郷遺跡群を通していえることであり、いずれの遺跡においても同様な傾向が確認できた。以下、時期ごとにその様相を見ていく。

8世紀後葉は8軒のうち1軒（大塚遺跡2の第132号住居跡）から墨書1点が出土している。須恵器高盤の坏部内面に書かれ、墨痕が薄いため、文字は判読できなかった。

9世紀前葉は10軒のうち5軒（大塚遺跡2の第121・123・129・153・154号住居跡）から墨書10点（うち第153号住居跡の墨書1点は混入）、刻書2点が出土している。材質は須恵器が8点、土師器が3点である。文字は「高穴公」、「八田口」、「尤」などがみられる。「高穴公」は「公」の文字が敬称を表す文字と理解で

きるならば、人名の表記であると考えられる。その指し示す人物については、「公」の文字から、ある程度の身分を推測させるが、人名の呼称については、「多分に私的、身内的な意識と結びついた敬称の表記」<sup>10</sup>である可能性もあるため、ここでは人物の特定についてはふれない。「八田□」の字義として、①那賀郡にもその存在が確認できる氏部や部民としての八田部の可能性、②当遺跡周辺の古代の地名（八部郷<sup>ヤツタ</sup>）の略字（八）+田+□の可能性、③八と田と□の文字間隔が狭いことから合わせ文字の可能性、など様々な解釈が可能であろうが、現時点では周辺遺跡での類例を待つより他はない。「尤」は9世紀中葉には見られないが、後葉に1点確認され、住居跡の分布や「尤」の墨書を持つ住居跡の出土遺物に共通性がみられることから、「尤」を共通の標識文字とする集団の存在が想定される。

9世紀中葉は4軒のうち4軒（大塚遺跡2の第126・139号住居跡と木戸遺跡の第4・5号住居跡）から墨書6点、刻書1点が出土している。材質は須恵器が5点、土師器が2点である。文字は「志万」、「□金」、「□子」、「大伴」などがみられる。「志万」是那賀郡志万郷の「志万」と同字であることから、当遺跡が志万郷と何らかのかかわりを持っていた可能性が指摘できよう。「大伴」は氏族であると考えられる。「類聚国史」巻第28、弘仁14年（823）4月壬子条によると、「改・大伴宿禰。触・諱也」とあり、淳和天皇は「大伴」の呼称を避けて「伴」に改姓させたことが記されていることから、「大伴」の墨書が出土した第5号住居跡は9世紀中葉でも早い段階に住居が廃絶されたものと考えられ、他の出土遺物との整合性も確認できる。また、大伴部は「膳大伴部とも呼ばれ、漁撈・製塩・航海に従事した海人集団と似た性格があった。津や入り江・河口などでの活躍が考えられる。」<sup>11</sup> ことや綱山遺跡から出土した「矢川郡志得」の人物名墨書の「川部」が「重要な河川におかれ、渡し船による物資輸送に従事した部民」<sup>12</sup>を示していることから、当遺跡が網沼前川と密接に結びついた集落であることを予想させる。

9世紀後葉は3軒のうち3軒（第138・142・143号住居跡）から墨書27点、刻書1点が出土している。材質は須恵器が6点、土師器が21点、土製品が1点である。文字は「東カ」、「子/家/新/新」、「儻」、「尤」、「○」、「ㄱ」などがみられる。「子/家/新/新」は土製紡錘車に刻書されている。刻書紡錘車について、黒澤秀雄氏は県内の刻書紡錘車の集成と検討から「刻書紡錘車の出土している遺跡の出土遺物を検討してみると、施軸陶器や円面硯、墨書土器、皇朝十二銭、帯金具などの出土が見られ、一般集落ではあまり出土しない遺物である。遺構の形態とあわせて見てみると、郷長集落や官衙関連集落である可能性が高いように思われる。」<sup>13</sup>と指摘している。当遺跡も灰軸陶器、円面硯、墨書土器、帯金具などが出土しており、これまでの桜の郷遺跡群の検討<sup>14</sup>からも上記のような性格を持つことが想定されている。ほかに「○」は9点、「ㄱ」は2点が確認されており、「○」の6点と「ㄱ」の2点は第142号住居跡からの出土である。第142号住居跡からは他にも8点の文字資料が出土しており、1軒からの出土量としては多い。また、本跡からは油煙付着土器2点、灰軸陶器の長頸瓶3点のほか、多量の土器が住居廃絶後に投棄されていることも注目される。

その他、遺構外出土遺物として、第142・143号住居跡、第3号井戸跡の周辺（C4・5区）から7点の墨書土器が出土している。材質は須恵器が1点、土師器が6点である。文字は「十」、「真」、「○」などがみられる。この区域からは墨書土器以外にも、円面硯、灰軸陶器、鉄鉢形土器が出土している。この区域は埋没谷になっており、谷が埋没した後に第142・143号住居跡、第3号井戸跡に掘り込まれている。また、谷が埋没した後も最低部はぬかるんだ状態であったと推測される。このような状況から、上記の出土遺物は谷に廃棄された遺物と考えられる。また、出土遺物の様相からは祭祀や儀礼的な行為が推測されよう。「○」や「ㄱ」は、そういった祭祀や儀礼的な行為に関わる、一種の符号あるいは記号のような用いられた可能性が考えられるが、祭祀の具体的な内容や行為については今後の類例の増加を待ち検討を加えたい。

表15 大塚遺跡出土文字資料一覧表

番号	遺物番号	积文	種別	材質	器種	部位	方向	遺構	遺構の時期	備考
1	659	高穴六/□	墨書/へう書き	須恵器	坏	底部外面/底部外面	-	SI-121	9世紀前葉	
2	660	-	刻書	須恵器	坏	底部外面	-	SI-121	9世紀前葉	
3	662	□	墨書	須恵器	高台付坏	底部外面	-	SI-121	9世紀前葉	
4	663	八田□/×	墨書/へう書き	須恵器	高台付坏	底部外面/底部外面	-	SI-121	9世紀前葉	
5	674	□	墨書	土師器	坏類	体部外面	-	SI-123	9世紀前葉	
6	688	志万	墨書	土師器	坏	体部外面	左横位	SI-126	9世紀中葉	
7	700	□□	墨書	土師器	坏	体部外面	左横位	SI-129	9世紀前葉	
8	703	□	墨書	須恵器	坏	体部外面	左横位*	SI-129	9世紀前葉	
9	705	□□	墨書	須恵器	蓋	天井部外面	正位	SI-129	9世紀前葉	
10	722	□□	墨書*	須恵器	高盤	皿部内面	-	SI-132	8世紀後葉	
11	745	車*	墨書	土師器	坏	体部外面	右横位	SI-138	9世紀後葉	
12	746	□	墨書	土師器	坏	体部外面	-	SI-138	9世紀後葉	
13	747	□	墨書	土師器	坏	体部外面	左横位	SI-138	9世紀後葉	
14	748	□	墨書	土師器	坏	体部外面	右横位*	SI-138	9世紀後葉	
15	749	□	墨書	土師器	坏	体部外面	-	SI-138	9世紀後葉	
16	752	□	墨書	須恵器	坏	体部外面	正位*	SI-138	9世紀後葉	
17	758	□	墨書	須恵器	高台付坏	体部外面	正位*	SI-138	9世紀後葉	
18	DP52	子/家/着/新	刻書	土製品	紡錘車	上面横面	-	SI-138	9世紀後葉	
19	771	□	墨書	土師器	皿	体部外面	-	SI-139	9世紀中葉	
20	772	□	刻書	須恵器	坏	底部外面	-	SI-139	9世紀中葉	
21	788	□	墨書	土師器	坏	体部外面	-	SI-142	9世紀後葉	
22	790	□	墨書	土師器	坏	底部外面	-	SI-142	9世紀後葉	
23	791	5	墨書	土師器	坏	体部外面	横位*	SI-142	9世紀後葉	
24	793	5	墨書	土師器	坏	体部外面	横位*	SI-142	9世紀後葉	
25	794	◇	墨書	土師器	坏	体部外面	正位	SI-142	9世紀後葉	
26	795	□	墨書	土師器	坏	体部外面	逆位	SI-142	9世紀後葉	
27	796	□□/□	墨書/へう書き	須恵器	坏	底部外面/底部外面	-	SI-142	9世紀後葉	
28	799	像、□	墨書	須恵器	坏	体部外面	左横位	SI-142	9世紀後葉	
29	802	◇	墨書	須恵器	坏	体部外面	正位	SI-142	9世紀後葉	
30	809	◇	墨書	土師器	高台付坏	体部外面	正位	SI-142	9世紀後葉	
31	810	□	墨書	土師器	高台付坏	体部外面	-	SI-142	9世紀後葉	
32	812	□	墨書	土師器	高台付坏	底部外面	-	SI-142	9世紀後葉	
33	817	□	墨書	土師器	皿	体部外面	-	SI-142	9世紀後葉	
34	818	◇	墨書	土師器	高台付皿	体部外面	逆位	SI-142	9世紀後葉	
35	819	□	墨書	須恵器	蓋	天井部外面	-	SI-142	9世紀後葉	
36	-	□	墨書	土師器	坏	体部外面	-	SI-142	9世紀後葉	
37	833	□	墨書	土師器	坏	体部外面	正位	SI-143	9世紀後葉	
38	834	无	墨書	土師器	坏	底部外面	右横位	SI-143	9世紀後葉	
39	836	□	墨書	土師器	坏	体部外面	正位	SI-143	9世紀後葉	
40	838	□	墨書	土師器	碗	体部外面	-	SI-143	9世紀後葉	
41	876	无	墨書	土師器	坏	底部外面	左横位	SI-153	9世紀前葉	
42	882	□	墨書	土師器	坏	体部外面	右横位	SI-154	9世紀前葉	
43	896	无	墨書	須恵器	高台付坏	底部外面	-	SI-154	9世紀前葉	
44	-	□	刻書	須恵器	坏	体部外面	-	SI-154	9世紀前葉	
45	909	小□	墨書	須恵器	坏	底部外面	-	SB-62	9世紀前葉	
46	926	□	墨書	土師器	坏	体部外面	-	C5区	-	
47	927	◇	墨書	土師器	坏	体部外面	正位	C5区	-	
48	928	◇	墨書	須恵器	坏	体部外面	正位	C5区	-	
49	929	□○/十	墨書/墨書	土師器	高台付坏	体部外面/底部外面	正位/-	C5区	-	
50	930	真	墨書	土師器	高台付皿	底部外面	-	C5区	-	
51	931	十*	墨書	土師器	高台付坏	底部外面	-	C5区	-	
52	932	十	墨書	土師器	高台付坏	底部外面	-	C4区	-	

表16 木戸遺跡出土文字資料一覧表

番号	遺物番号	积文	種別	材質	器種	部位	方向	遺構	遺構の時期	備考
1	12	□	墨書	須恵器	坏	体部外面	-	SI-4	9世紀中葉	
2	14	□金/-	墨書/へう書き	須恵器	坏	底部外面/底部外面	-	SI-4	9世紀中葉	
3	22	□子	墨書	須恵器	坏	体部外面	正位	SI-5	9世紀中葉	
4	26	大伴/-	墨書/へう書き	須恵器	坏	底部外面/底部外面	-	SI-5	9世紀中葉	内外面遺蹟付

以上、各時期の様相を述べてきた。8世紀後葉から確認された墨書土器は9世紀に入り、当遺跡の最盛期を迎える前葉に増加し、中葉には遺構数の減少とともに、墨書土器にも減少が見られた。後葉には、確認された住居跡3軒に対して27点もの墨書土器が出土していることは、出土量、墨書の内容とも特筆すべきである。また、文字資料の数は時期によって多少の増減はあるものの、概ね集落の盛衰と合致している。このことは、桜の郷遺跡群を通してみた場合にもあてはまり、時期別の遺構数（住居跡と掘立柱建物跡）と墨書土器の出土点数の増減がほぼ一致することが確認できた。各遺跡が限定された調査範囲であるため、全体の状況を示しているとは言い難いが、現段階の状況では、墨書土器の出土数と遺構数との関係は、桜の郷遺跡群の中で同じ文字が複数見られる文字ともあわせて検討してみると、大塚遺跡1と宮後遺跡、大塚遺跡2・木戸遺跡と綱山遺跡、石原遺跡に大きく分けて考えることができよう。つまり、9世紀代における桜の郷遺跡群の中心的な役割を持った遺跡、それに付随する遺跡、それを取り巻く一般的な集落の様相を示している遺跡、と捉えることも可能ではないだろうか。

当遺跡において確認された文字資料は、人名と考えられる高穴公、大伴のほか、 $\square$ や $\square$ のような集落内における祭祀や儀礼行為に際して、一種の符号あるいは記号のような用いられた方が推測できるもの、あるいはその意味を解することができない語句が大部分で、文字資料からは当遺跡の性格を直接示唆するような文字・語句は見ることができなかった。今回、紙数の都合上、桜の郷遺跡群全体を通しての墨書土器の在り方にまで触れることができなかったが、遺跡間に共通して見られる文字、さらに遺跡内でも分布が限定される文字なども確認できることから、桜の郷遺跡群全体を通して詳細な検討が必要である。

### 3 施軸陶器について

桜の郷遺跡群からは灰軸陶器131点、緑軸陶器1点が確認されている。各遺跡の施軸陶器の出土数は以下の通りである。

- |                |                      |
|----------------|----------------------|
| ・大塚遺跡2 灰軸陶器44点 | ・木戸遺跡 灰軸陶器1点         |
| ・大塚遺跡1 灰軸陶器11点 | ・宮後遺跡 灰軸陶器56点 緑軸陶器1点 |
| ・綱山遺跡 灰軸陶器17点  | ・石原遺跡 灰軸陶器2点         |

大塚遺跡2・木戸遺跡から出土した灰軸陶器の産地は猿投産が50.8%で、他は産地が特定できなかったものである。窯が特定できたのは、折戸10号窯式が1点、井ヶ谷78号窯式が2点、黒笹14号窯式が12点、黒笹14-90号窯式が4点、黒笹90号窯式が1点である。器種構成は、長頸瓶が32%、碗が16%、皿が5%、以下段皿・短頸壺・手付き瓶が各2%と続く。

以上、大塚遺跡2・木戸遺跡における灰軸陶器の産地や器種構成の在り方は、黒笹14号窯式の出土量が黒笹90号窯式に比べて多い状況を除けば、概ね県内の出土状況<sup>1)</sup>と同様である。黒笹14号窯式の出土量が多いことは、桜の郷遺跡群の中でも豊富な灰軸陶器が出土している宮後遺跡においても黒笹14号窯式期が21点、黒笹14-90号窯式期が6点、黒笹90号窯式期が17点と、黒笹14号窯式期の出土量が多くみられる状況から、桜の郷遺跡群全体の特徴として捉えることが可能であるかもしれない。

大塚遺跡2から出土した灰軸陶器の分布は、全時期を通して中央部に集中していることがいえる。出土点数は、8世紀代には3軒から3点（うち第148号住居跡からは2点出土しているが、同一個体であるため、1点とした）が出土しており、いずれも住居跡1軒につき灰軸陶器1点の出土であるが、9世紀代には住居跡1軒につき灰軸陶器2点以上が出土するものが多くなることが確認できた。

大塚遺跡2・木戸遺跡を含む桜の郷遺跡群が施軸陶器を手に入れた背景には、灰軸陶器を獲得できるだけ

の経済力があつたことのほかに灰軸陶器が搬入されやすい立地条件の優位性があげられよう。灰軸陶器の流通についてはすでに河川港と想定される平津駅家、茨城郡嶋田郷の奥谷遺跡から、各遺跡への拡散<sup>91</sup>が想定されており、桜の郷遺跡群はこのルートを結んだ延長線上にあることから、当遺跡が流通の結節点としての機能を持つ遺跡であつたことも十分に考えられよう。

#### 4 硯について

桜の郷遺跡群からは円面硯47点、転用硯13点が出土しており、そのうち大塚遺跡2からは円面硯9点、転用硯3点が出土している。桜の郷遺跡群から出土した円面硯と転用硯の時期別出土数は表17の通りである。大塚遺跡1と石原遺跡では転用硯が円面硯に先行して使用され、大塚遺跡2と綱山遺跡では円面硯と転用硯が同じ時期から使用されている。宮後遺跡では8世紀前葉に円面硯が3点出土しており、8世紀中葉には確認できないが、円面硯の点数だけでなく、2～6点の点数を保有している。そして、9世紀後葉に転用硯が1点出土していることなど、桜の郷遺跡群のほかの遺跡とは異なる様相を見せている。

全体的にみると、8世紀後葉に円面硯と転用硯が14点出土していることから、8世紀後葉に硯を大量に必要とする理由があつたことがあげられる。以後は時期が下るごとに出土点数は減少していき、増減の幅は小さく比較的安定的である。墨書土器との関係では、墨書土器の出土が増え始める8世紀後葉に硯の点数が飛躍的に増加すること、墨書土器の最盛期が9世紀中葉から後葉に最盛期を迎えることに対し、硯は逆に出土点数が減少していることなどがあげられるが、硯の量と墨書土器の量は比例関係であるとは言い難く、墨書土器と硯の関連性は明らかにすることはできなかった。

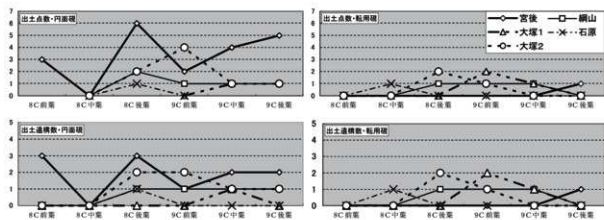
硯の出土点数と出土遺構数の比較では、転用硯は1遺構につき複数個の出土は確認できなかったのに対し、円面硯は宮後遺跡や大塚遺跡2、綱山遺跡でみられるように1遺構から複数個出土する場合も多いことが確認できた。転用硯は円面硯の機能面を抽出したもので、より実用的であるため、比較的硯の資料が多く出土している島名熊の山遺跡や辰海道遺跡などでは円面硯より転用硯の出土量が多く確認されている。しかし、円面硯が転用硯の3倍近く出土している桜の郷遺跡群では、単に本来の機能を求めることより、保有していることの優位性を誇示できる奢侈品としての側面も十分に考えられるだろう。

#### 5 集落の推移について

ここでは、大塚遺跡1及び2・木戸遺跡・石原遺跡・綱山遺跡・宮後遺跡の6つの遺跡で確認された617軒の住居跡について、居住域の推移を住居跡の分布と住居跡数からまとめ、今回調査した大塚遺跡2及び木戸遺跡の様相と比較検討してみたい。なお、比定される時期幅が広すぎる住居跡や時期不明の住居跡については割愛した。

全住居跡の18%にあたる112軒が縄文時代の住居跡である。縄文時代の前期前葉の住居跡は宮後遺跡で1軒確認されているのみであり、時期が比定されたほとんどの住居跡は中期である。住居軒数のピークが中期にあることは、茨城町の縄文時代遺跡数の推移に比例している<sup>92</sup>。確認された住居跡は、宮後遺跡の中央部から北部にかけて集中している。他の遺跡では大塚遺跡1から1軒が確認されている以外、縄文時代の住居跡は確認されていない。宮後遺跡では「墓域を中心とした環状集落が形成」<sup>93</sup>されていたと考えられ、中期には台地北部の小橋川を東に望む縁辺部に、比較的大きな集落が形成されていた可能性がある。また、縄文時代の陥し穴と推測される土坑が大塚遺跡1・綱山遺跡で確認されている。大塚遺跡2でも陥し穴が2基確認されており、住居跡と陥し穴の分布を考え合わせると、台地の北部が居住域、台地の中央部から南部は狩

表17 「桜の郷遺跡群」における円面視・転用視の出土数・出土遺構数



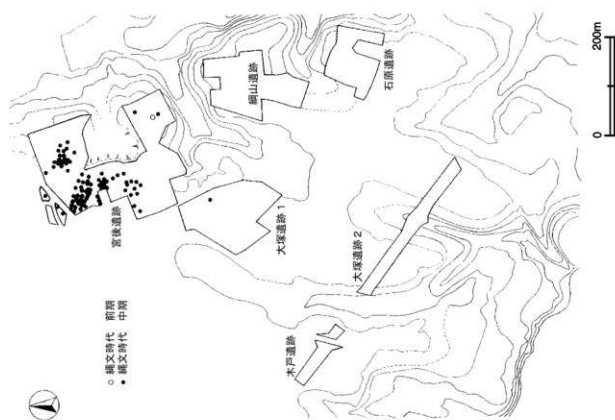
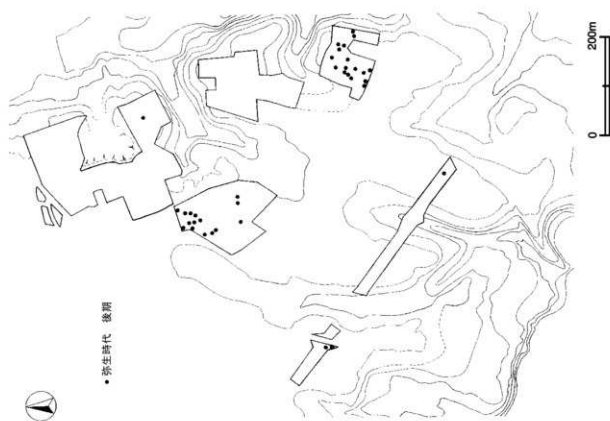
氣の場であった可能性が推測される。

全住居跡の6%にあたる36軒が弥生時代の住居跡で、すべて後期後半の十王台式期に比定されている。縄文時代と比べて住居の数が減少し、台地の中央部から南東部にかけて構築されていることが分かる。ほぼ半数にあたる17軒が確認されている石原遺跡では、「中央部に広場を持つ4、5軒の小グループに分けられる」<sup>1)</sup>としている。大塚遺跡1で確認された15軒の住居跡についても、「第69～74号住居跡等で構成される集落」<sup>2)</sup>とあることから、いくつかのグループに分けられる可能性が考えられる。これらのことから、「桜の郷遺跡群」においては、弥生時代後期後半は、数軒の住居が比較的まとまりをもって集落を形成<sup>3)</sup>していたと推測されている。ただし、グループを構成する住居跡や、グループが確立されていた時期などについては更なる検討が必要である。この時期の住居跡は、大塚遺跡2から1軒、木戸遺跡から2軒が確認されている。住居跡が少ないため明確ではないが、数軒でグループを構成していた可能性は否定できない。

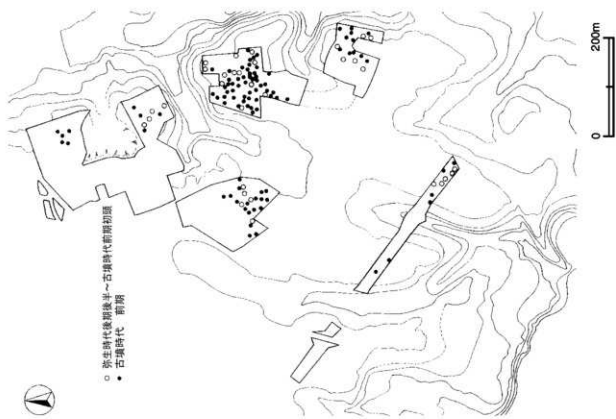
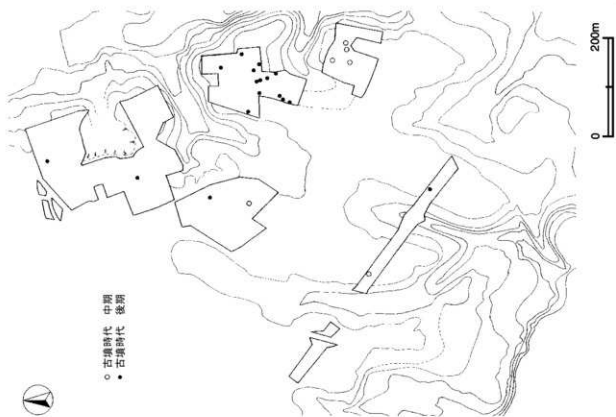
弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭までの、弥生土器と土師器が共存する時期に比定された住居跡を含め、古墳時代前期に該当する住居跡は全住居跡の22%にあたる133軒である。住居跡の分布は、綱山遺跡に集中しており、宮後遺跡東部、石原遺跡東部及び大塚遺跡1の南部にもまとまって確認されている。集落の単位や構成については不明であるが、台地縁辺部の小橋川を東に望む場所に、大規模な集落が形成されたと推測される。弥生時代後期後半の住居跡の分布と比較すると、弥生時代に集落が形成されなかった空白の場所に、この時期の住居が多く確認されている。これは、弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけて住居を構築あるいは集落を形成した時には、まだ弥生時代の住居や集落は機能しており、あえて集落や住居のない場所が選ばれたことが推測される。このことから、台地上では弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけて、集落が継続して形成されていた可能性が考えられる。大塚遺跡2では南部に集中して住居跡が分布している。弥生時代後期後半から古墳時代前期の住居跡同士の重複関係は認められないこと、出土した土器の種類の比率に違いが認められても、同一の円弧上に住居が配置されていることなどから、「桜の郷遺跡群」の他の遺跡と同様に、弥生時代後期後半の住居のないところに新しく住居が構築され、弥生時代から古墳時代前期まで継続して集落が形成されていたと考えられる。

古墳時代中期の住居跡は6軒、後期の住居跡は17軒であり、古墳時代前期に比べ住居数がかなり少なくなる。まとまって確認されているのは、石原遺跡で中期の4軒、綱山遺跡で後期の13軒である。この時期は、台地の縁辺部を中心に小単位の集落が形成されていたと推測される。大塚遺跡2では、中期と後期の住居跡がそれぞれ1軒ずつ確認されているのみであり、「桜の郷遺跡群」の他の遺跡と同様の傾向がみられる。小集

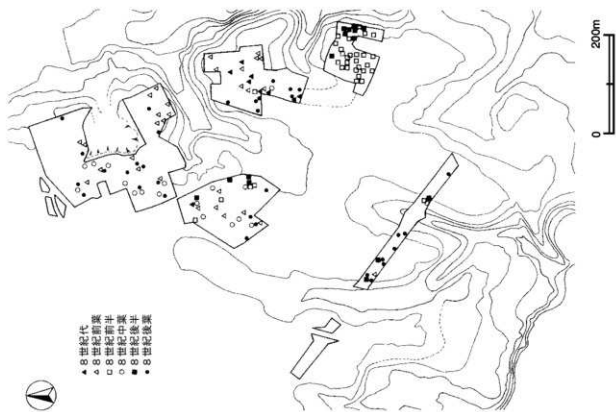
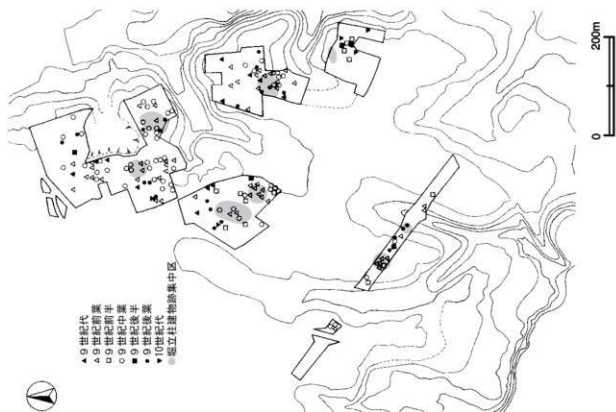




第181図 「桜の郷遺跡群」住居跡分布図(1)

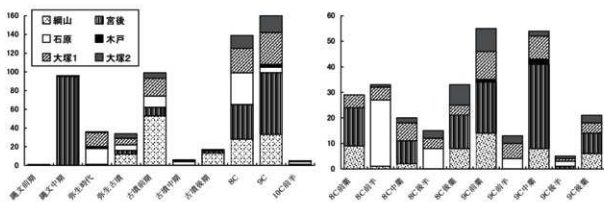


第182図 「桜の郷遺跡群」住居跡分布図(2)



第183図 「桜の郷道跡群」住居跡分布図(3)

表18 「桜の郷遺跡群」の住居跡数の推移



落が形成されていたかについては不明である。

8世紀になると住居数は増加し、全住居跡の23%にあたる139軒が確認されている。そのうち、8世紀前葉に比定される住居跡は29軒である。網山遺跡・大塚遺跡1・宮後遺跡では、数軒のまとまりが一つの単位を成すようにして分布している。8世紀中葉になると、住居数はやや減少し20軒になる。そのほとんどが、宮後遺跡西部から大塚遺跡1にかけて南北方向に帯状に分布している。この分布状況から、道路や溝などに沿うように住居が構築された可能性が考えられる。8世紀後葉の住居跡は33軒で、網山遺跡南西部に集まっている。大塚遺跡2でも、調査区の北部から8世紀後葉の住居跡が6軒とまとまって確認されている。この時期には、台地の縁辺部に拠点的な集落が形成されたと考えられる。石原遺跡では、前半の住居跡26軒が遺跡全域から、後半の住居跡8軒が遺跡西部からそれぞれ確認されており、8世紀前半には、大規模な集落が営まれていたと考えられる。これらのことから、「桜の郷遺跡群」の8世紀の集落の推移について、前葉～中葉には台地南東部の大規模な集落を中心とし、そこから北部にかけて小規模な集落が、特に中葉には中央部から北部にかけて帯状に集落が形成されたと考えられる。その後、後葉にかけては、台地の中央部から南部の縁辺部に拠点的な集落が形成されたと推測される。大塚遺跡2に前葉から中葉にかけての住居跡が少ないのは、この頃の台地上では、中央部から北部にかけて集落が形成されていたためと考えられる。

9世紀には住居跡数が最大になり、全住居跡の26%にあたる160軒が9世紀に比定されている。そのうち、9世紀前葉の住居跡は55軒で、台地上の全域から確認されている。9世紀中葉は54軒である。前葉の頃と比較すると、台地の中央部から北部にかけて多く分布するようになる。住居跡は、前葉、中葉ともに4～5軒程が一つの単位を成すように集まっている。9世紀後葉は21軒で、半減している。住居跡数の推移から、9世紀前葉から中葉にかけては4～5軒程の小集落が集まって、台地の全域に広がるように大規模な集落が形成されたが、後葉になると徐々に衰退していったことがうかがえる。9世紀代の大塚遺跡2でも同様の傾向があり、住居跡は9世紀前葉が最も多く、中葉と後葉は少ない。木戸遺跡では、9世紀代の住居跡が3軒と少ないものの、数軒で構成される小集落が形成されていたことが推測される。

また、9世紀の住居跡の分布と掘立柱建物跡の集中している場所を比較すると、掘立柱建物跡の近くに住居跡が集中している傾向がみられる。この理由として、「竪穴住居跡1に対して数棟の掘立柱建物跡(屋)の組み合わせ<sup>10)</sup>と考えられ、住居跡と掘立柱建物跡との密接な関連が想定される。9世紀代の「桜の郷遺跡群」の集落は、掘立柱建物と住居の組み合わせによって形成されていた可能性が高い。大塚遺跡2の北部でも、住居跡と掘立柱建物跡が同じ場所に集中している。

10世紀の住居跡は、5軒確認されており、前葉から前半に比定されている。石原遺跡で3軒がまとまってい

る以外は、台地の北部にあたる大塚遺跡1の西部と宮後遺跡南西部にそれぞれ1軒ずつ点在している。10世紀後半以降の住居跡は、これまでの調査では確認されていない。大塚遺跡2と木戸遺跡でも、10世紀以降の住居跡は確認されていない。9世紀後葉から始まる集落の衰退が進んでいったと考えられる。

以上、「桜の郷遺跡群」としての各時代や時期の集落の推移について述べてきたが、あくまでも住居の分布状況からの検討であり、今後、個々の住居跡の規模や形状などについても考え合わせていくことにより、集落の形態・様相についてさらに明確になると考える。

## 6 おわりに

澗沼前川とその支流である小橋川に挟まれた台地上にある大塚遺跡1・石原遺跡・綱山遺跡・宮後遺跡の4遺跡は、これまでの調査結果から互いに深い関連が認められ、「桜の郷遺跡群」と呼称することが可能な遺跡密集地帯<sup>15)</sup>を構成している。

大塚遺跡2及び木戸遺跡の出土物や住居跡の分布状況から若干の考察を進めた結果、先の4遺跡と深い関わりを持っていることは明らかであり、「桜の郷遺跡群」を構成する遺跡であると言える。今回は、文字資料や住居跡の分布といった視点での考察であり、今後、様々な視点からの考察を加えることにより、大塚遺跡2・木戸遺跡のみでなく、「桜の郷遺跡群」全体の様相も明らかになると考える。

### 註

- 1) 「桜の郷遺跡群」(大塚遺跡2・木戸遺跡を含む)からは総数286点の文字資料(墨書土器278点、朱書1点、刻書7点)が出土している。
- 2) 平川南「墨書土器の研究」吉川弘文館 2000年11月
- 3) 志田謙一「道と駅家」[那珂・久慈・多賀の歴史] 郷土出版社 2004年11月
- 4) 茨城町史編さん委員会「茨城町史 通史編」茨城町 1995年2月
- 5) 黒澤秀雄「水戸市二の沢B遺跡(古墳群)出土刻書紡錘車について」『優良岐考古』25号 2003年5月
- 6) A 長谷川聡・田中幸夫・小野克敏「大塚遺跡1 やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書V」『茨城県教育財団文化財調査報告』第242集 2005年3月  
B 村上和彦「やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書I 石原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第163集 2000年3月  
C 茨城県立歴史館「よみがえる古代の茨城」2003年7月  
D 川又清明「宮後遺跡」『古代地方官衙周辺における集落の様相—常陸国河内郡を中心として—』茨城県考古学協会 2005年2月
- 7) 奈良・平安時代研究班「茨城県内における輪軸陶器の検討(1)~(5)」『研究ノート4号~8号』茨城県教育財団 1995年6月~1999年6月
- 8) 前掲 註7)に同じ
- 9) 前掲 註4)に同じ
- 10) 和田清典・吹野富美夫・浅野和久・荒崎克一郎・駒澤悦郎「宮後遺跡2 やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第240集 2005年3月
- 11) 前掲 註6) B)に同じ
- 12) 前掲 註6) A)に同じ
- 13) 田中幸夫・荒崎克一郎「やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 綱山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第243集 2005年3月
- 14) 前掲 註6) A)に同じ
- 15) 前掲 註6) A)に同じ

### 参考文献

- ・奈良・平安時代研究班「茨城県内における文字資料集成1~3」『研究ノート』9~11号 茨城県教育財団 2000~2002年6月
- ・川井正一・白田正子・青木仁昌「茨城県内における文字資料集成4」『研究ノート』12号 茨城県教育財団 2003年6月
- ・川井正一・青木仁昌「茨城県内における文字資料集成5・6」『年報』23・24 茨城県教育財団 2004年10月・2005年8月

写 真 图 版

大 塚 遺 跡  
木 戸 遺 跡



第60号掘立柱建物跡 完掘状況



大塚遺跡北部 完掘状況



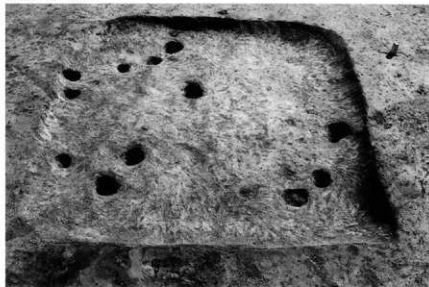
第 110 号住居跡  
完 掘 状 况



第 111 号住居跡  
遺 物 出 土 状 况



第 111 号住居跡  
遺 物 出 土 状 况



第 112 号住居跡  
完 掘 状 況



第 113 号住居跡  
完 掘 状 況



第 113 号住居跡  
遺 物 出 土 状 況





第 113 号住居跡  
遺物出土状況



第 113 号住居跡  
遺物出土状況



第 113 号住居跡  
遺物出土状況



第 114 号住居跡  
遺物出土状況



第 114 号住居跡  
遺物出土状況



第 114 号住居跡  
遺物出土状況

第 119 号住居跡  
遺物出土状況



第 119 号住居跡  
遺物出土状況



第 119 号住居跡  
遺物出土状況





第 121 号住居跡  
遺物出土状況



第 121 号住居跡  
遺物出土状況



第 126 号住居跡  
遺物出土状況

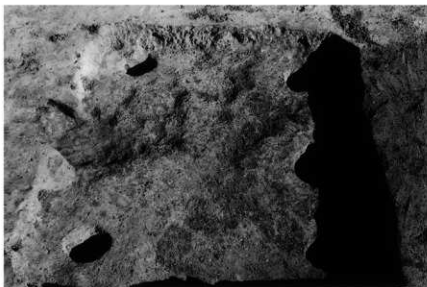
第 127 号住居跡  
竈遺物出土状況



第129・130号住居跡  
完掘状況



第 131 号住居跡  
完掘状況





第 132 号住居跡  
遺物出土状況



第 132 号住居跡  
遺物出土状況



第 132 号住居跡  
遺物出土状況



第 142 号住居跡  
完 掘 状 况



第 142 号住居跡  
遺物出土状況



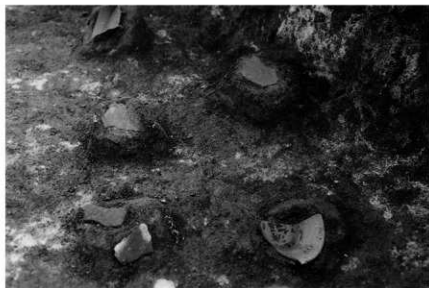
第 143 号住居跡  
遺物出土状況



第 153 号住居跡  
完 掘 状 況



第154・140号住居跡  
完 掘 状 況



第 154 号住居跡  
遺 物 出 土 状 況





第 154 号住居跡  
遺物出土状況



第 154 号住居跡  
遺物出土状況



第 154 号住居跡  
遺物出土状況

大塚遺跡 PL12



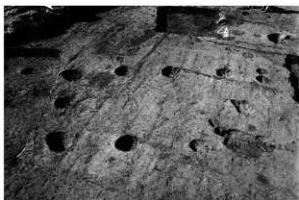
第55号掘立柱建物跡 完掘状況



第56号掘立柱建物跡 完掘状況



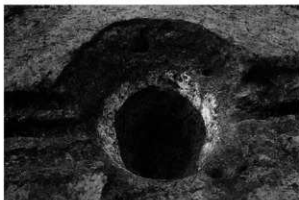
第57号掘立柱建物跡 完掘状況



第58号掘立柱建物跡 完掘状況



第14号陥し穴 完掘状況



第2号井戸跡 完掘状況



第200号土坑 完掘状況



第206号土坑 完掘状況







第121・123・124・126・138・142号住居跡，第3号井戸跡出土土器

大塚遺跡 PL16

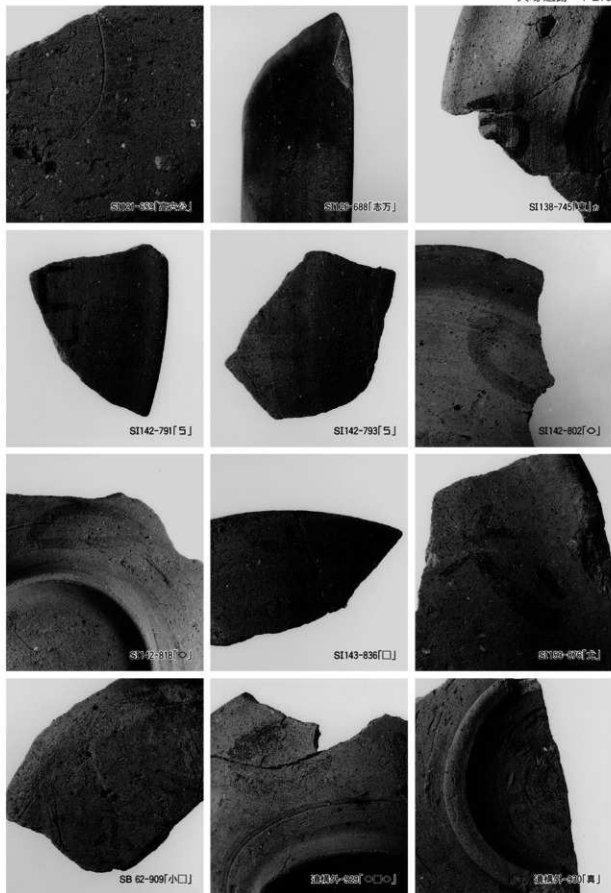




大塚遺跡 PL18

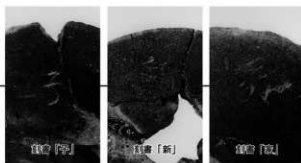
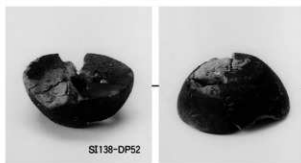




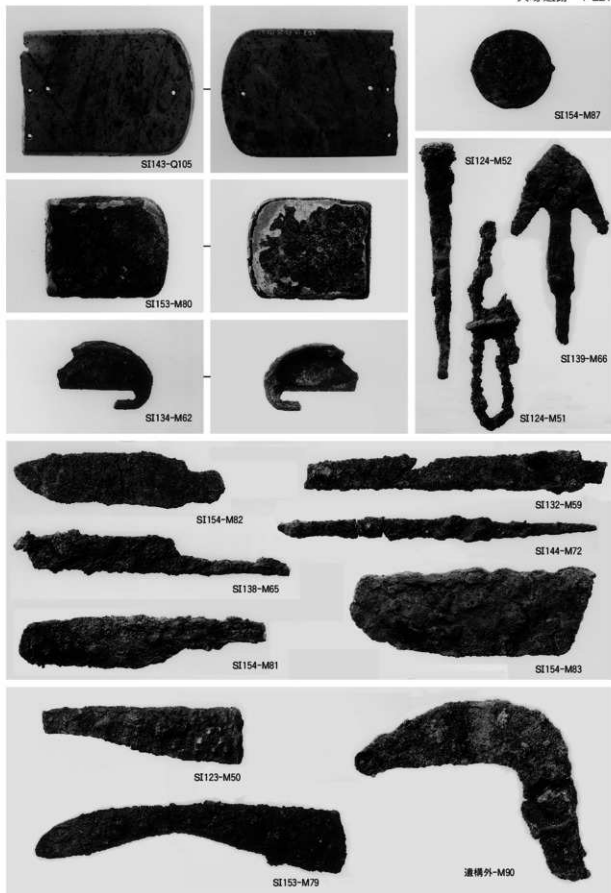


第121・126・138・142・143・153号住居跡，第62号掘立柱建物跡，遺構外出土墨書土器

大塚遺跡 PL20



出土土製品（紡錘車，球状土錘），石器（磨石，敲石，砥石）



出土石製品（鉈尾）、金属製品（刀子、鎌、鎌、釘、鉈尾、丸柄、不明鉄製品）



第 2 号住居跡  
完 掘 状 況



第 3 号住居跡  
完 掘 状 況



第 4 号住居跡  
完 掘 状 況

第 5 号住居跡  
完 掘 状 况



第 5 号住居跡  
遺物出土状 况



第 5 号住居跡  
遺物出土状 况





第 5 号住居跡  
遺物出土状況



第 5 号住居跡  
竈遺物出土状況



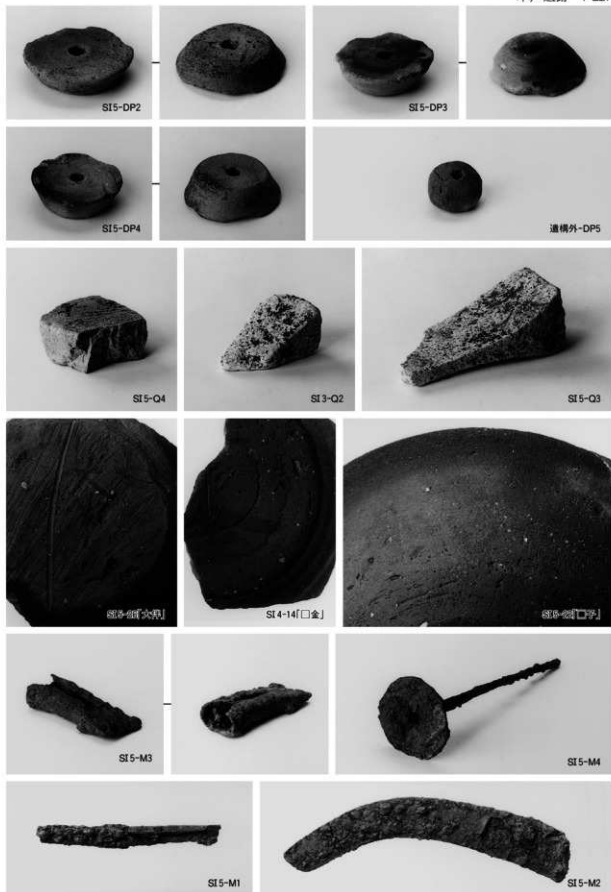
第 1 号土坑  
遺物出土状況



第2・5号住居跡出土土器







第4・5号住居跡出土土器、土製品(紡錘車、球状土錘)、石器(砾石)、金属製品(刀子、鎌、鉄斧、紡錘車)

茨城県教育財団文化財調査報告第258集

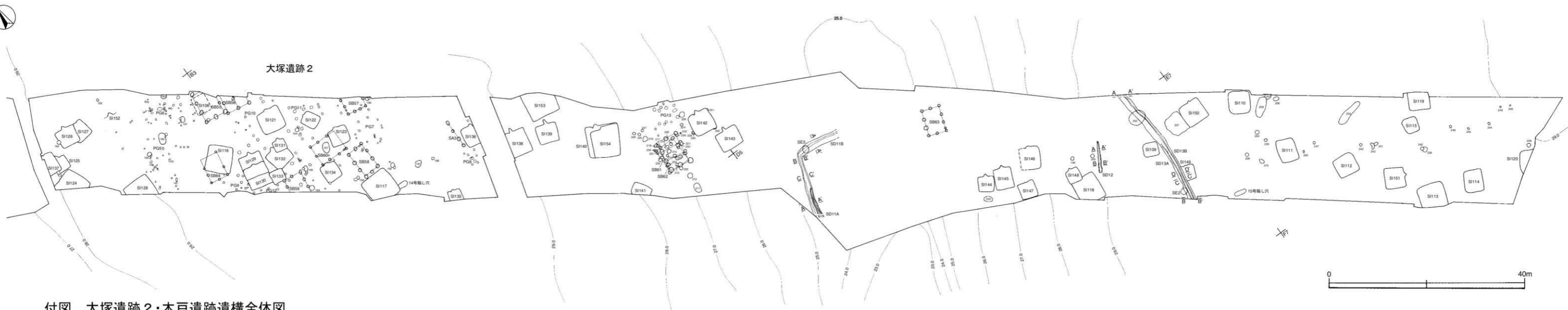
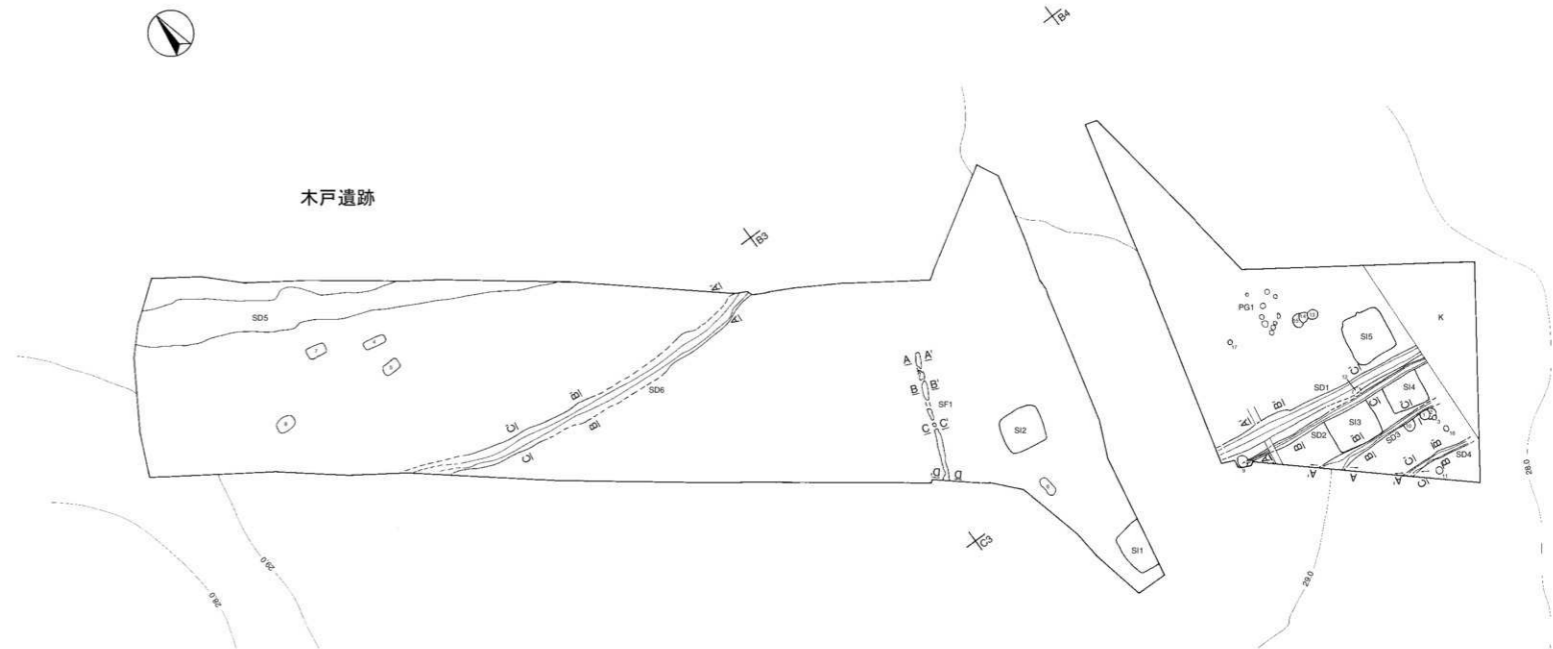
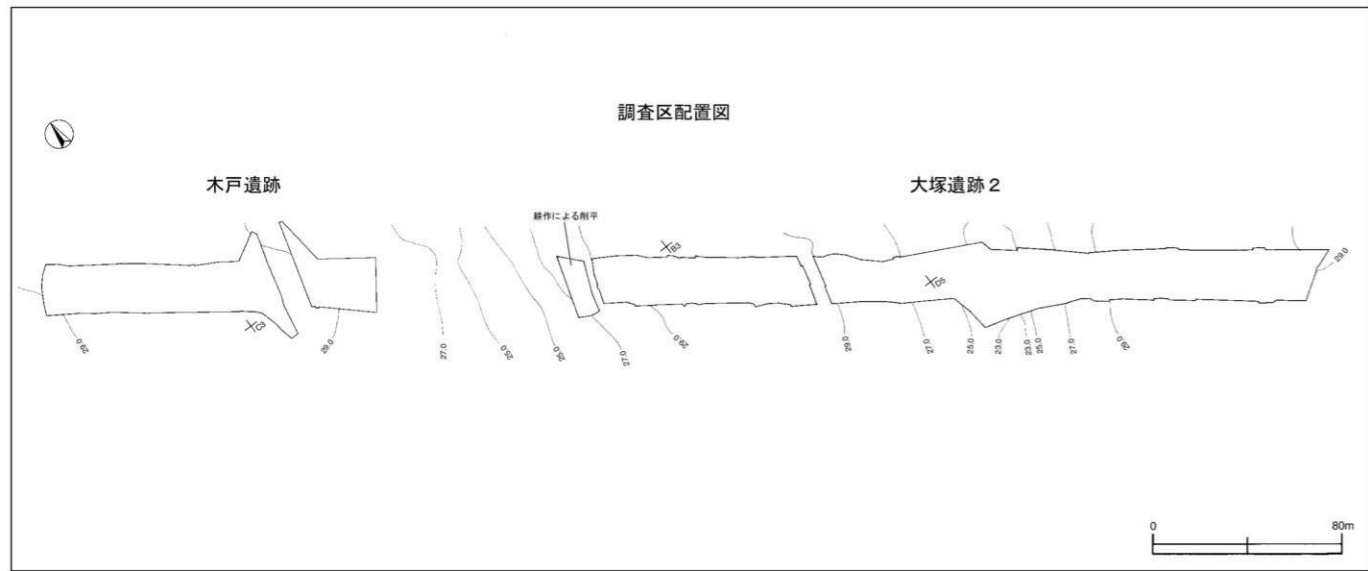
大塚遺跡 2  
木戸遺跡

主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内  
埋蔵文化財調査報告書Ⅴ

平成18(2006)年 3月20日 印刷  
平成18(2006)年 3月24日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団  
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2  
茨城県水戸生涯学習センター分館内  
T E L 029-225-6587

印刷 いばらき印刷株式会社  
〒319-1112 茨城県那珂郡東海村村松字平原3115-3  
T E L 029-282-0370



付図 大塚遺跡 2・木戸遺跡遺構全体図  
「茨城県教育財団文化財調査報告第285集」